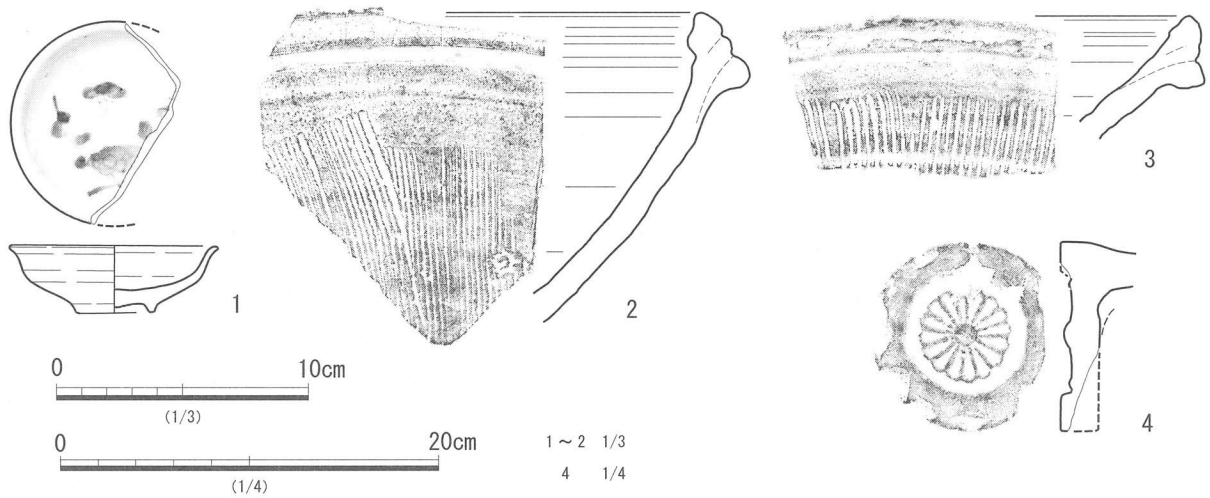
内法の直径約90cmを測り、掘方に直接設置されており、基礎構造はない。井戸内の底には３～15cm大の円礫が敷き詰められている。石組みはこの木製井戸枠に直接乗せられている。石組みは20～50cm大の花崗岩割石石材を標高0.1mから2.6mまで、約2.4mの高さに積んでいる。本来は当時の生活面の高さまで積まれていたものとみられるが、廃棄時に上部の石材ははずされているようである。土層断面では、作業面を確保ながら３～５段の石材が背後に3～5cm大の円礫を充填しつつ積まれているようすが観察できる。なお、標高 1.0m付近を境に、下は20～30cm程度の石材、上は40～50cm程度のやや大振りな石材が多い。また、掘方上にはSP271、SP272を検出している。SP271は底に柱の礎板とみられる平たい花崗岩石材を伴う柱痕跡で、検出面から約80cm、標高2.1m付近まで掘り込まれている。掘方はかなり広く、SE255の掘方と同時に埋められているように思われる。SP272は深さ30cm程度の小さな柱痕跡で掘方は認められない。この２基以外には同様の柱痕跡は検出できなかったが、SP271とSE255の掘方埋土との関係などからSE255に伴う上屋構造などの柱穴である可能性がある。

写真 11　SE255 木製井戸枠取り上げ時の状況

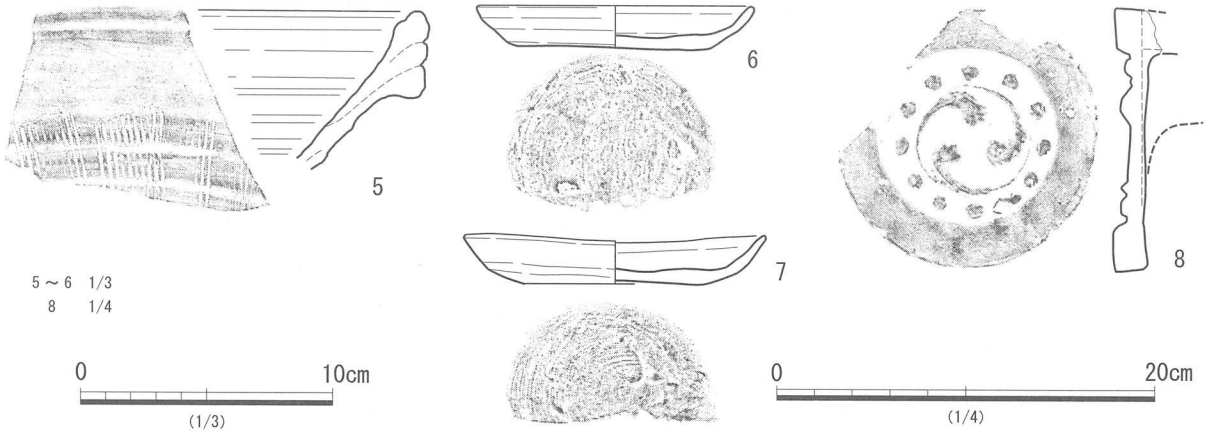
出土遺物は多くない。ただし、井戸内の下層には木質遺物、特に箸が多量に廃棄されていた。掘方内からの出土遺物は、近世遺構面３の遺構などから出土している炉壁や滓、肥前陶器を含んでおり、大半は井戸掘削時に下層の遺構から混入したものと考えられる。第111図に掘方出土のものをあげている。備前焼擂鉢(2･3)は体部外面がナデ(ロクロ目)でありヘラケズリはなく、口縁部にはゴマがかかる。4は菊丸瓦で、色調は灰白色、文様は菊文である。また、図示していないが、関西系の炮烙の破片が含まれる。以上のように、掘方出土の遺物は、明らかに下層から混入したものを除くと、十七世紀後半頃の様相が強いように思われる。

第112図～第114図に井戸内出土のものをあげている。5は非常に赤みの強い胎土の擂鉢で関西系のも



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	肥前染付磁器	小坏	口径　8.0 高さ　2.7	高台部釉剥ぎ。内面に花弁文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)青磁釉・明緑灰(10GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
2	備前	擂鉢 口縁部	口径　(38.6)	1/10周程度の破片。内面に幅2.7cm程の櫛状工具によるおろし目。口縁部外面に自然釉。	(胎土)8mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内面)赤褐(10R4/3)/(外面)暗赤褐～暗赤灰(10R3/3～7.5R4/1)/(断面)赤褐(10R5/4)
3	備前	擂鉢 口縁部	口径　(43.3)	1/10周程度の破片。内面に幅2.5cm程の櫛状工具によるおろし目。口縁部外面に自然釉。	(胎土)8mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内面・断面)にぶい褐～灰褐(7.5YR5/3～4/2)/(外面)灰(N4/0)
4	瓦	菊丸瓦 瓦当	外径　10.0 文様区径 6.5	菊文。瓦当内面ナデ。	(胎土)0.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)灰白～灰(7.5Y7/1～N5/0) (断面)灰白(7.5Y 7/1)

第 111 図　SE255 出土遺物 1（井戸掘方）(1/3･1/4)



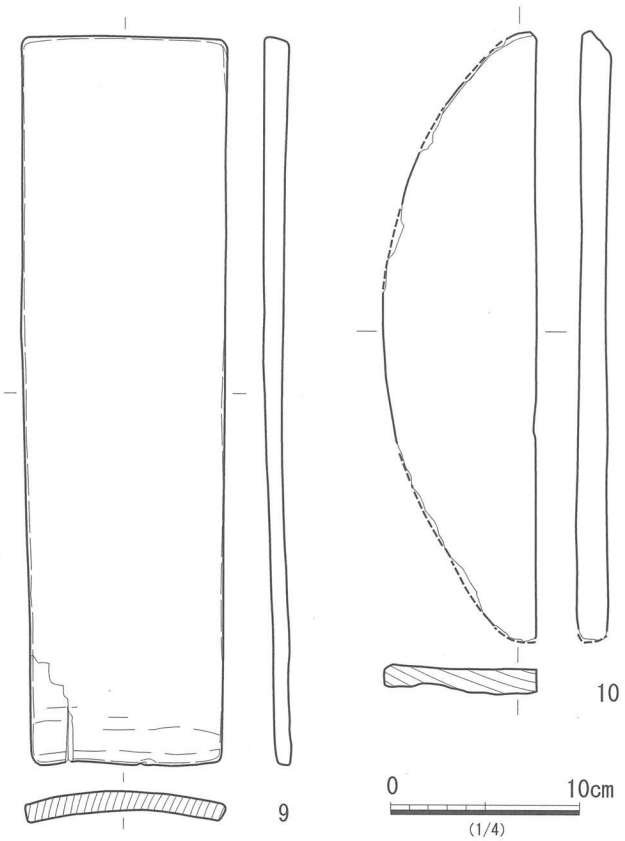
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
5	関西系？	擂鉢 口縁部	口径　(10.4)	1/10周程度の破片。内外面ともヨコナデ。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む。 (焼成)良好	(内外面)赤褐(10R4/4) (断面)赤(10R5/6)
6	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径　(10.8) 高さ　1.8	1/3周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底面に板目。口縁部周辺に煤付着。	(胎土)2.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面・断面)灰白(10YR8/2～2.58/1)
7	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径　(11.8) 高さ　2.0	1/4周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底面に糸切り痕。内面の広い範囲に煤付着。	(胎土)0.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(外面)灰白～明褐灰(7.5YR8/2～7/2) (内面)灰白～灰黄(2.5Y8/1～7/2) (断面)灰白(7.5YR8/1)
8	瓦	軒丸瓦 瓦当	外径　14.0 文様区径 9.8	左巻き三巴文、珠文数12。瓦当内面ナデ。	(胎土)1mm以下の砂粒まばらに含む。 (焼成)良好	(内外面)灰白～暗灰(5Y7/1～N3/0) (断面)灰白(5Y7/1)

第 112 図　SE255 出土遺物 2 (井戸内) (1/3･1/4)

のと思われる。木質遺物には木札、曲物の部材、箸などがある。9、10は桶の部材である。直径が40cmほどとなる桶で、同一個体の部材である可能性が高い。11は厚さ5mm程度のかなりしっかりした木札で、表面に「古田源兵衛」の名前と年齢かと思われる「十七」、裏面に「か」と墨書されている。岡山藩藩学では、出欠の確認や修学の意思表示に名札を使用していたといい、SP250 出土のもの(第103図52･53)を含めこうした名札である可能性がある。12は薄手の木札で、表面に「真弘カ村」、裏面に「三文」の墨書がある。付け札の類であろう。13、14は曲物の底板である。13には「正〃□□目」と内容量を示すとみられる墨書がある。

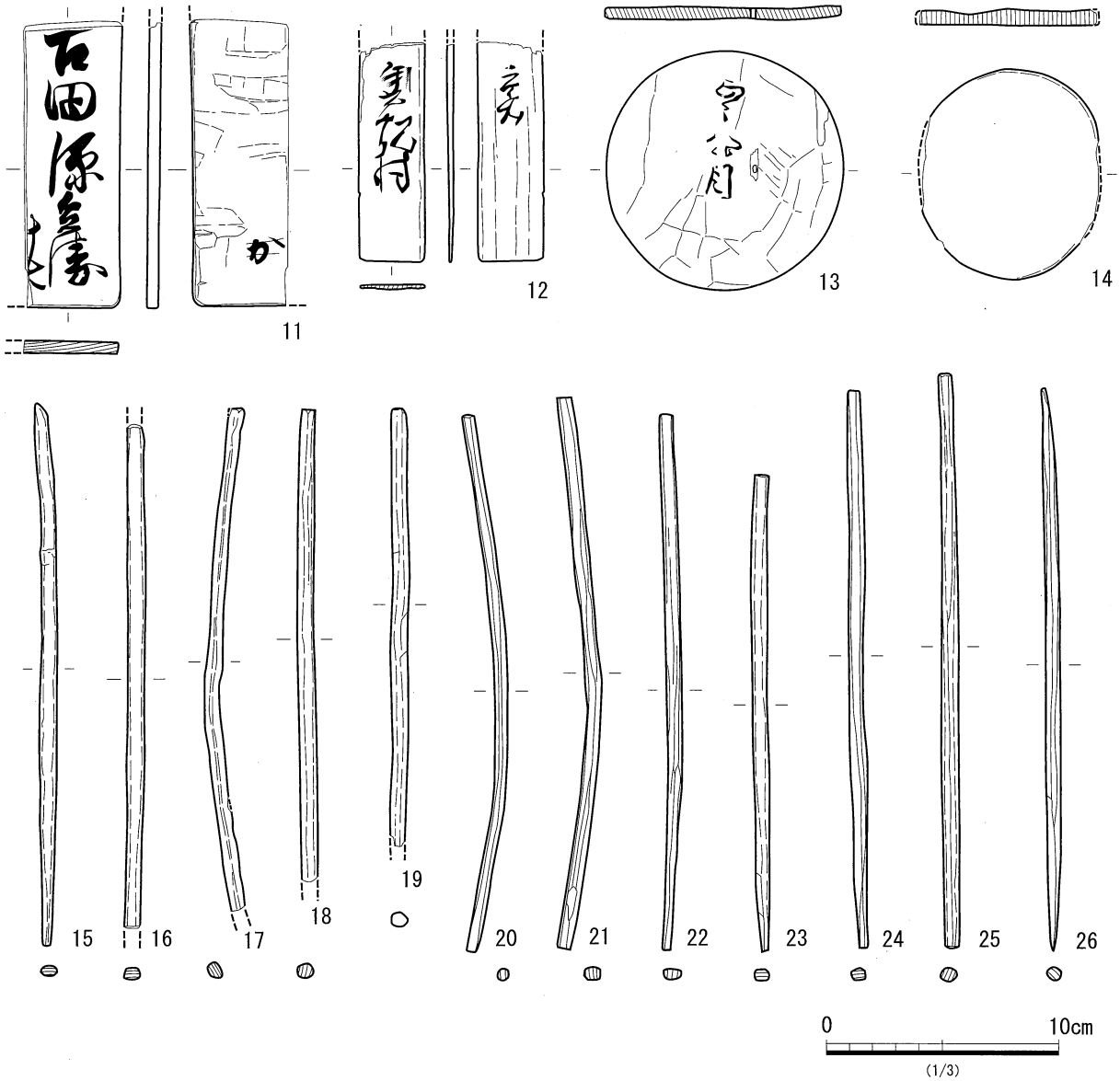
15～26は白木の箸である。図示したもの以外にも多量に出土している。完形のものは少ないが、太さはおおむね0.6～0.8cmで、長さは20cm前後の短いものと、24～25cmほどの長いものがあるようである。端部の加工も、基部から先端までほぼ同じ太さのもの(20･21･24･25)、先端を細くするもの(15･22･23)、両端を細くするもの(26)がある。

なお、出土遺物には時期を判断しうるものがほとんどないが、掘方出土遺物の年代観や十八世紀初頭以前は通路となっている部分であること、十八世紀後半以降に位置づけられるSP251に切られていることから、十八世紀前半～中頃に掘削されたものとみられる。廃絶



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
9	木製品	桶部材(側板)	長さ　38.8 幅　10.9 厚さ　1.3	わずかに湾曲する板材。下端付近に結束痕。	
10	木製品	桶部材(底板)	長さ　(32.5) 幅　8.1 厚さ　1.4	直径10cm程度の桶か。	

第 113 図　SE255 出土遺物 3 (井戸内) (1/4)



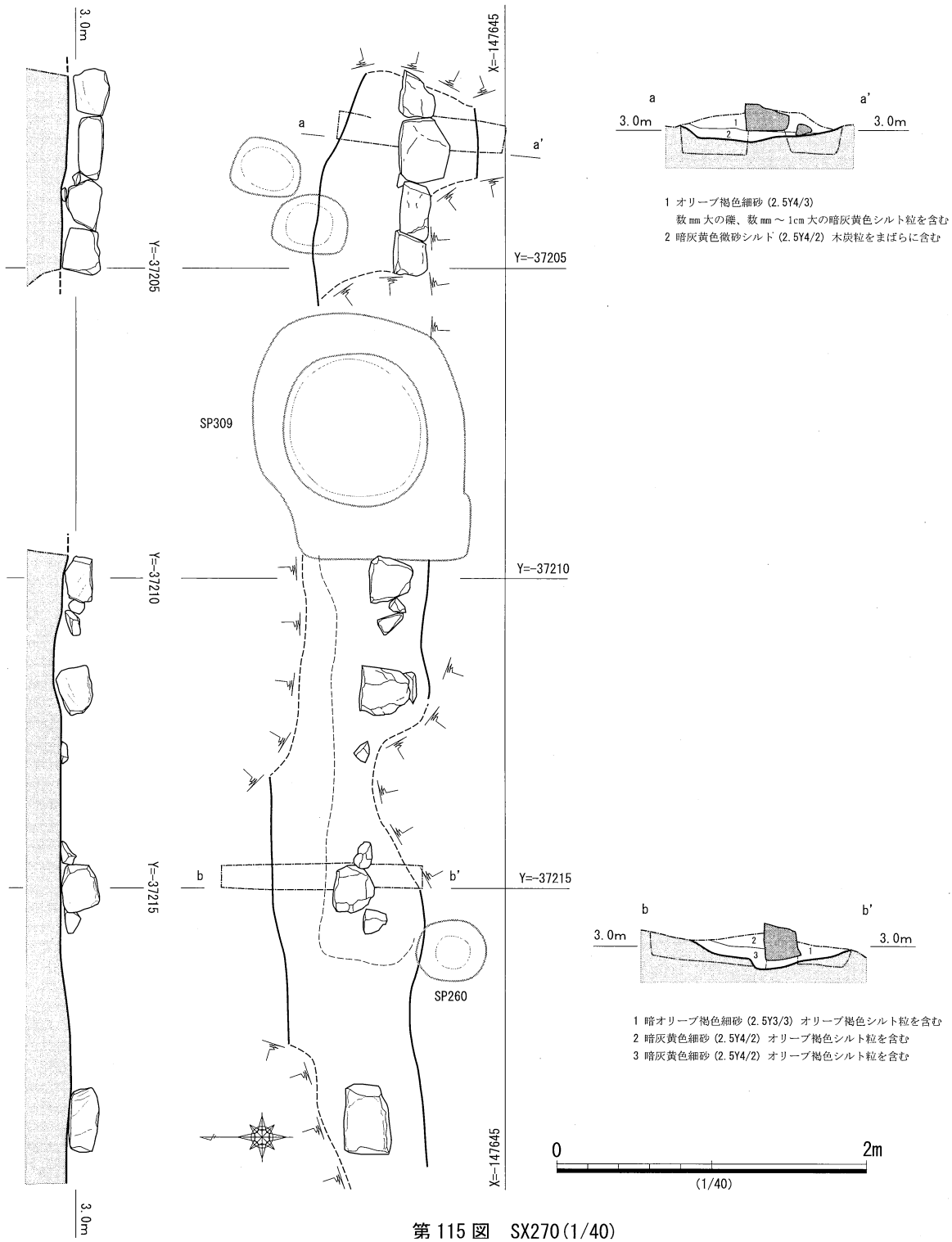
No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	備 考
11	木製品	木札	残存長 12.4 / 残存幅 4.3 / 厚さ 0.5	加工痕のある板材。表面に「古田源兵衛」「十七」、裏に「か」の墨書。	藩学生徒の名札か
12	木製品	木札	残存長 7.5 / 幅 2.8 / 厚さ 0.3	表面に「真弘〃村」、裏に「三文」の墨書。	
13	木製品	曲物部材(底板)	直径 10.3 / 厚さ 0.6	ほぼ円形の曲げ物底板。外面に「正々八〃□日」の墨書。	
14	木製品	曲物部材(底板)	長径 9.0 / 短径 7.7 / 厚さ 0.7	楕円形の曲げ物底板。	
15	木製品	白木箸	長さ 23.5 / 太さ 0.7	先端を細くする白木箸。	
16	木製品	白木箸	残存長 21.8 / 太さ 0.7	先端、基部欠損。	
17	木製品	白木箸	残存長 21.8 / 太さ 0.7	先端欠損。	
18	木製品	白木箸	残存長 20.5 / 太さ 0.7	先端欠損。	
19	木製品	白木箸	残存長 19.0 / 太さ 0.8	先端欠損。	
20	木製品	白木箸	長さ 23.3 / 太さ 0.6	両端ともほぼ同じ太さの白木箸。	
21	木製品	白木箸	長さ 24.0 / 太さ 0.7	両端ともほぼ同じ太さの白木箸。	
22	木製品	白木箸	長さ 23.8 / 太さ 0.7	先端を細くする白木箸。	
23	木製品	白木箸	長さ 20.7 / 太さ 0.7	先端を細くする白木箸。	
24	木製品	白木箸	長さ 24.2 / 太さ 0.7	両端ともほぼ同じ太さの白木箸。	
25	木製品	白木箸	長さ 24.9 / 太さ 0.8	両端ともほぼ同じ太さの白木箸。	
26	木製品	白木箸	長さ 24.4 / 太さ 0.6	両端とも細くする白木箸。	

第 114 図　SE255 出土遺物 4（井戸内）(1/3)

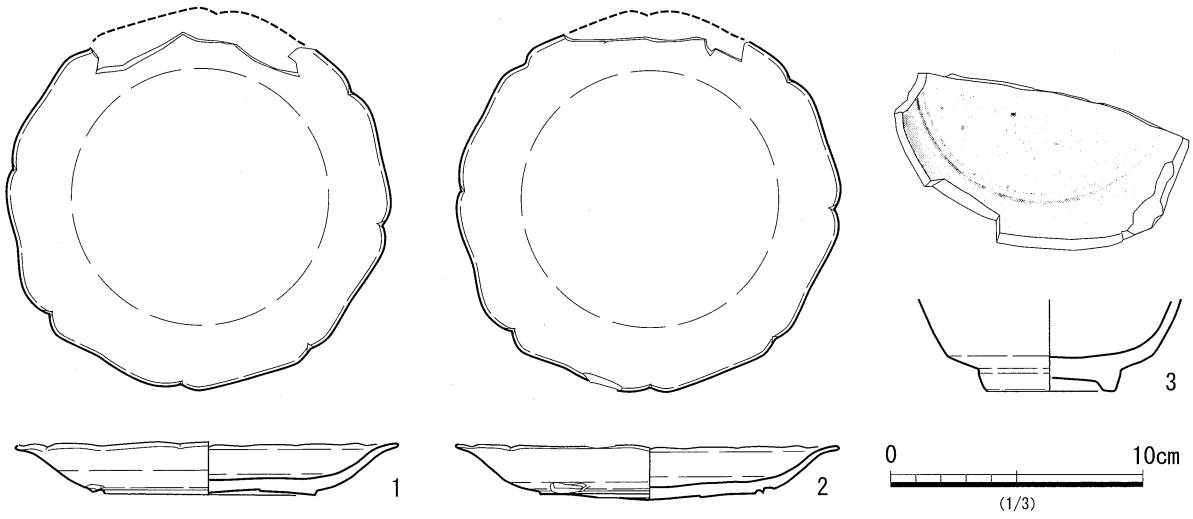
時期を限定するのはさらに難しいが、井戸内出土遺物のうち関西系の擂鉢は十八世紀末以降に増加するといわれており、廃絶時期の一端を示す可能性が高い。

SX270

SX270はX=-147645ライン付近、Y=-37207付近から-37214付近にわたり検出した石列である。石材の残りは悪く、特に西半部は石材が点在している状況だが、30～40cm大の花崗岩割石石材が北側に面をそろえて並べられている。溝状の掘方に設置されているようで、底面は標高2.85mから2.95m、石材の上面で標高 3.1mから3.15mを測る。当時の生活面が標高3.2mから3.3m程度とすると、これらの石材はすべて地表下に隠れてしまうため、もとはもう何段か積まれ、土塀などの基礎部分となっていたものとみられる。



第115図　SX270(1/40)

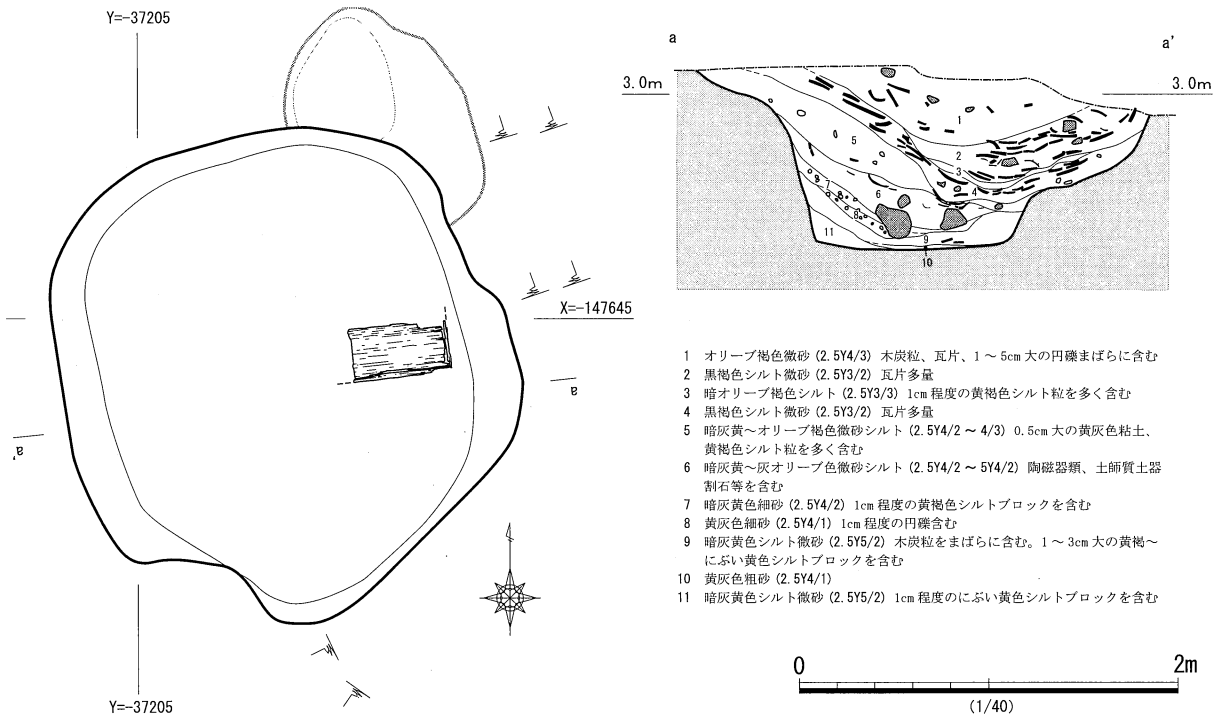


No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	肥前?磁器	皿	口径　15.1 高さ　2.1	蛇の目高台の粗製花形皿。高台畳付部分を釉剥ぎ。外面高台脇３カ所に大きなハリ支え痕。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(N8/0) (断面)灰白(N8/0)
2	肥前?磁器	皿	口径　15.5 高さ　2.3	蛇の目高台の粗製花形皿。高台畳付部分を釉剥ぎ。外面高台脇３カ所に大きなハリ支え痕。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(N8/0) (断面)灰白(N8/0)
3	肥前染付磁器	碗	高台径　5.1	体部下部に錆のある碗。高台畳付部分釉剥ぎ。高台に砂付着。見込に圏線２条。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(10Y7/2～7.5Y7/2) (断面)灰白(N8/0)

第116図 SX270出土遺物(1/3)

出土遺物は少ないが、掘方内、特に破却時の埋土と思われる部分から出土したものが多い。1、2は肥前磁器の花形皿で、蛇の目高台をもつ。高台畳付（たたみつけ）部分を釉剥ぎしているにもかかわらず、外面高台脇の三カ所に大きなハリ?支え痕を持つ。3は肥前染付磁器の碗で、天目形もしくは筒形碗と思われる。高台に砂が付着しており、砂目積みであることがわかる。蛇の目高台や砂目積みなど十七世紀中頃までの製品にみられる特徴を備えている。

SX270は出土物の特徴から藩学が縮小する以前、十七世紀後半代の遺構とみられる。寛文期とされる藩学絵図ではこの付近に東西に長い建物が記載されており、北側の屋敷地との間に塀とみられる線が描かれている。位置からみてこの塀に相当するものである可能性が高い。

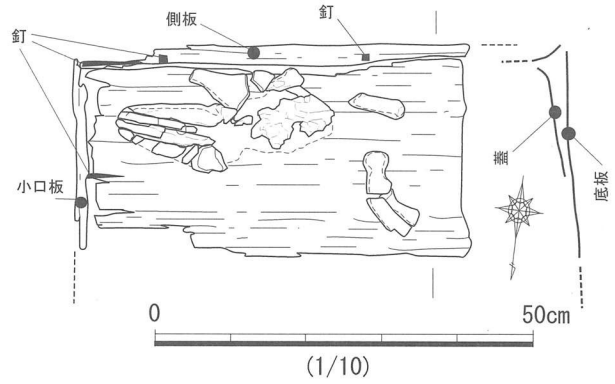


第 117 図　SP283(1/40)

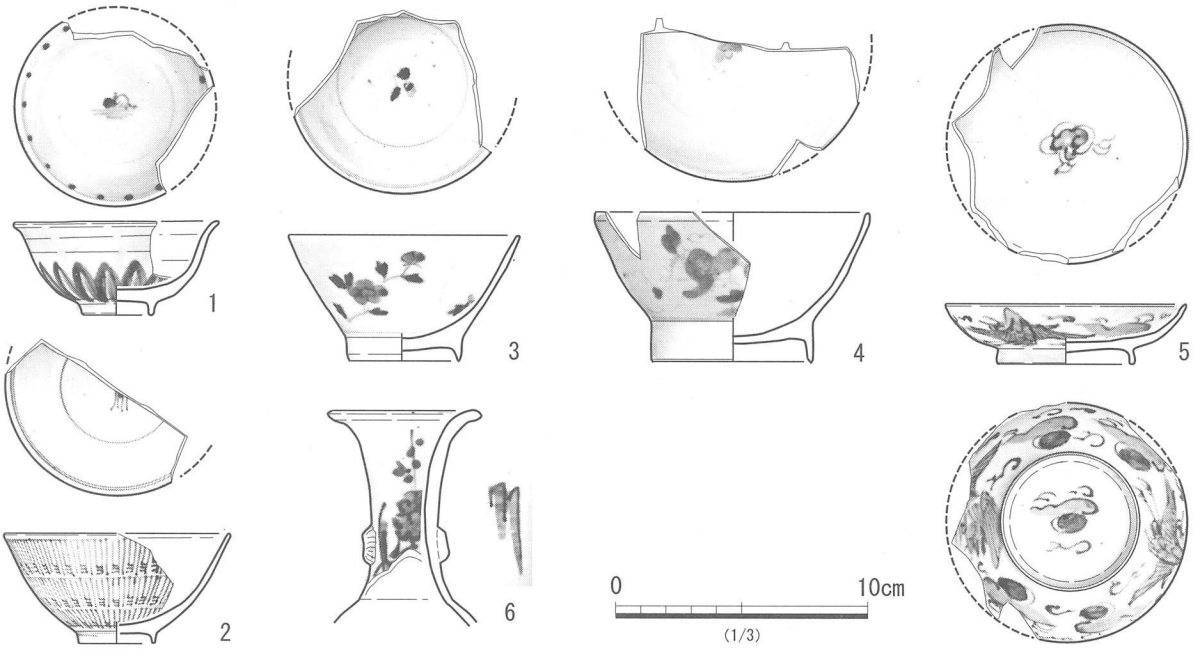
SP283

SP283はX=-147645.0、Y=-37204.0付近で検出した大型の土坑である。直径約2.4m、深さ約0.95mを測る。埋土には多量の瓦片、花崗岩石材、陶磁器類が含まれ、ゴミの廃棄土坑とみられる。埋土の中程(第117図5層)からは木箱に納められた状態で獣骨が出土している(第118図)。木箱は旧西校舎基礎で壊されているため大きさなどはわからないが、幅約30cm、長さ約50cmが残る。木材の残存状況は悪いが、底板の上に側板を立て、小口板で挟む構造のようで、側板部分には先端を上に向け、小口板部分には先端を箱の内側に向けて釘が残存している。木質が二重に残る部分があり、蓋の痕跡と考えられる。獣骨も残りは良くないがスナメリと同定されており、標本などとして藩学に持ち込まれたものである可能性がある。

出土遺物は第117図の2層、4層、6層を中心に、含まれており、大部分は瓦片であった。第119図1～6は肥前染付磁器で、端反形碗(1)、直線的

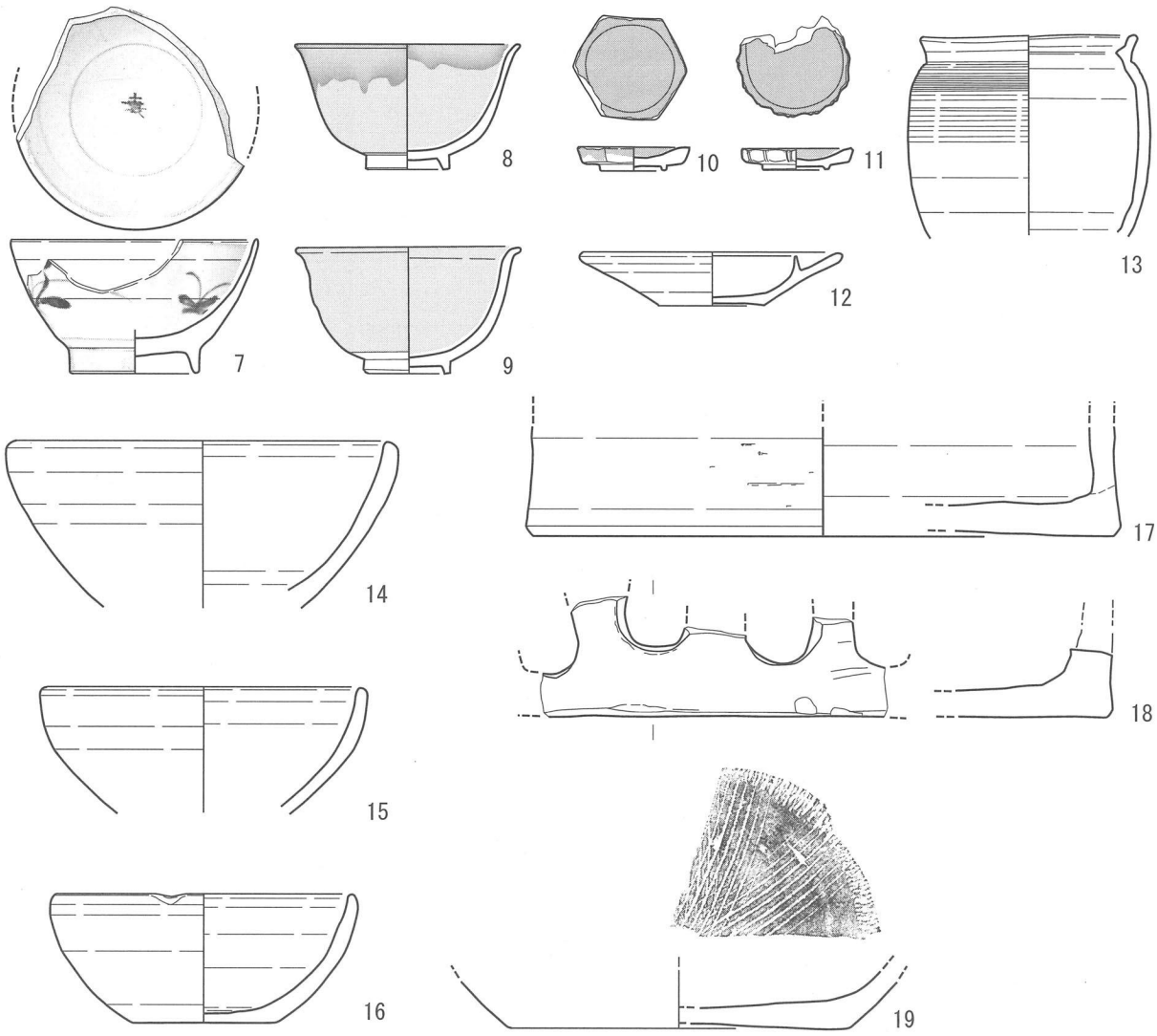


第 118 図　SP283 獣骨出土状況 (1/10)



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
1	肥前染付磁器	碗	口径 8.0 高さ 3.8	端反碗。高台部釉剥ぎ。外面は花弁風の連続文。内面は口縁内面に圏線と列点、見込に野菜か。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5Y8/1～5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
2	肥前染付磁器	碗	口径 8.9 高さ 4.4	直線的に開く碗。1/2周程度の破片。高台部釉剥ぎ。外面は４条の圏線内に放射状の直線などを描く。内面は口縁内面と見込に圏線、見込に草花文？。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(N8/0) (断面)灰白(N8/0)
3	肥前染付磁器	碗	口径 9.2 高さ 5.0	広東形碗。高台部釉剥ぎ。外面は花文。内面は口縁内面と見込に圏線、見込に不明文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(N8/0) (断面)灰白(N8/0)
4	肥前染付磁器	碗	口径 10.9 高さ 6.0	広東形碗。1/3周程度の破片。高台部釉剥ぎ。外面は蔓草。内面は見込に蔓草。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
5	肥前染付磁器	皿	口径 9.6 高さ 2.1	高台部釉剥ぎ。体部外面に雲、鶴。高台内に雲。見込に雲。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
6	肥前染付磁器	耳付花入 口縁部～頸部	口径 5.7	頸部内面以下は無釉。頸部に一対の耳を貼付。頸部に花弁文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1) (内面・断面)灰白(N8/0)

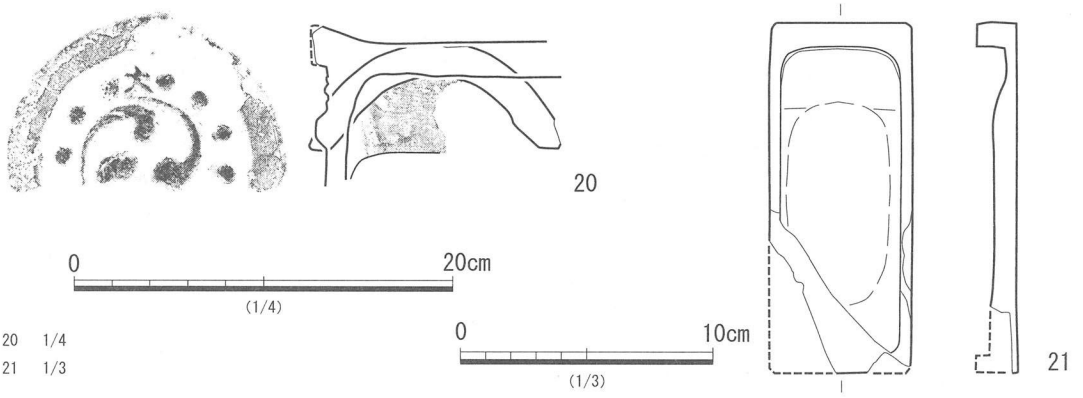
第119図　SP283出土遺物1(1/3)



7～13、19　1/3
14～18　1/4

No.	種類	器種・部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調
7	美濃・瀬戸系? 染付磁器	碗	口径　10.2 高さ　5.9	広東形碗。高台部釉剥ぎ。外面は草、蝶?。内面は口縁内面と見込に圏線、見込に文字。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5Y7/1～5Y8/1) (断面)灰白(2.5Y8/1)
8	関西系陶器	碗	口径　9.2 高さ　5.2	端反碗。高台部無釉。口縁部周辺に緑釉。ほぼ同型の破片が数個体分あり。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5Y8/1)/(外面)灰白(2.5Y8/2) (断面)灰白(2.5Y8/1)
9	関西系陶器	碗	口径　9.0 高さ　5.3	外反碗。高台部無釉。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・明オリーブ灰(2.5GY7/1) (外面)灰白(2.5Y8/2)/(断面)灰白(2.5Y8/1)
10	関西系陶器	ミニチュア(皿)	口径　4.6 高さ　1.5	平面六角形の皿。体部外面～内面に緑釉。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(外面)浅黄橙(10YR8/3) (断面)浅黄橙(10YR8/3)
11	関西系陶器	ミニチュア(皿)	口径　4.5 高さ　1.4	花形の皿。口縁端部～内面に緑釉。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(外面)浅黄橙(10YR8/3) (断面)浅黄橙～橙(10YR8/3～2.5YR6/6)
12	信楽	灯明皿	口径　10.7 高さ　2.2	口縁端部より下の外面無釉。外面工具ナデ。口縁端部に煤付着。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰黄(2.5Y7/2)/(外面)灰白(2.5Y7/1) (断面)灰白(2.5Y8/1)
13	備前	塩壺? 口縁部～体部	口径　8.7	口縁部内面～外面に塗土。肩部にカキメ22条。	(胎土)0.2mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内面)にぶい赤褐(7.5R4/3) (外面)赤褐(10R4/3)・(断面)灰(N5/0)
14	備前	捏鉢 口縁部～体部	口径　(20.6)	口縁部1/3周程度の破片。外面に「緋襷」。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)にぶい赤褐(2.5YR4/3)・(内面)赤褐(10R4/4)/(断面)赤～灰赤(10R5/6～5/2)
15	備前	捏鉢 口縁部～体部	口径　(17.3)	口縁部1/3周程度の破片。内外面に塗土。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)にぶい赤～暗赤(7.5R4/4～10R3/4) (断面)橙(2.5YR6/6)
16	備前	捏鉢	口径　(16.4) 高さ　7.2	1/6周程度の破片。内外面に塗土。外面に「緋襷」。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)赤(7.5R4/6) (断面)赤橙(10R6/6)
17	備前	火鉢? 底部	底径　(32.2)	1/8周程度の破片。外面は左方向のヘラケズリののちナデ。底面ナデ	(胎土)8mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)赤(10R5/6) (断面)赤(10R5/6)
18	備前	火鉢? 底部	残存高　6.6	隅丸方形か。底部側面に楕円形(?)の透かし孔が並ぶ。内面底面に「牡丹餅」。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)赤褐～赤(10R4/3～5/6) (内面)赤褐～にぶい橙(10R4/3～2.5YR6/3) (断面)にぶい橙(2.5YR6/4)
19	関西系 (明石産)	擂鉢・底部	底径　(13.8)	底部1/4周程度の破片。見込に櫛状工具による放射状のスリメ(幅3cm、9本)、見込端から密なスリメ。	(胎土)3mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)明赤褐(2.5YR5/6)/(内面)赤(10R5/6) (断面)明赤褐(2.5YR5/6)

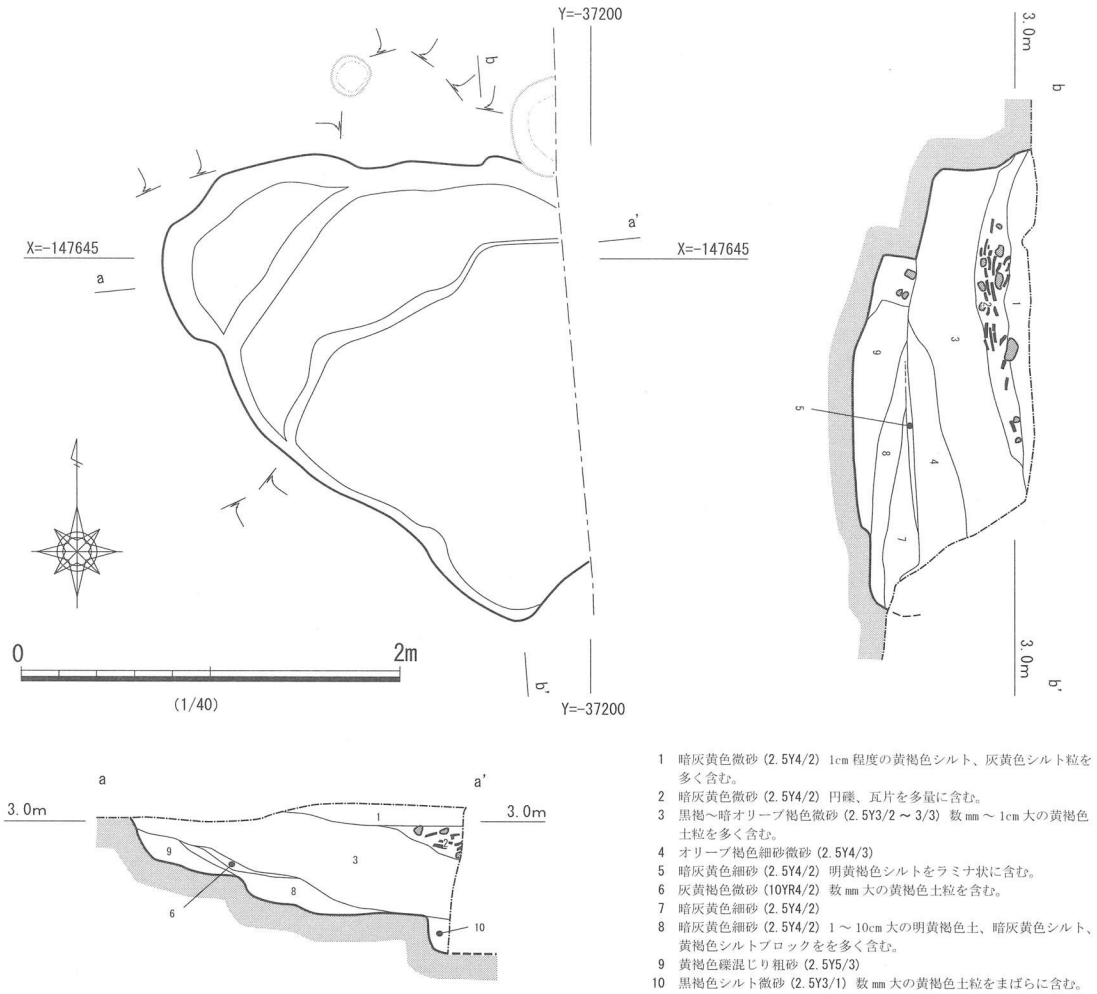
第120図　SP283出土遺物2(1/3・1/4)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
20	瓦	軒丸瓦 瓦当	外径　(14.4) 文様区径10.2	左巻き三巴文、珠文列の頂部に「大」の字。瓦当内面ナデ。内面コビキB痕。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む。 (焼成)良好	(外面)灰(N6/0～5/0)/(内面)灰(5Y6/1～N1/0) (断面)灰黄～灰(2.5Y7/2～N5/0)

第121図　SP283出土遺物3(1/3・1/4)

に開く碗(2)、広東形碗(3、4)を含む。第120図7は瀬戸・美濃系とみられる染付磁器の広東形碗、8、9は京焼系陶器の端反形碗である。13～18は備前焼である。13は小型、蓋付きの甕形の製品で塩壺とみられる。14～16は捏鉢(こねばち)で、外面にはいわゆる「緋襷(ひだすき)」がかかっている。17は器壁が厚く、体部がほぼ垂直に立ち上がる大型品で、火鉢や匣鉢(さやばち)などの、さほど深くない器形になるものと思われる。18はやはり体部がほぼ垂直に立ち上がる大型品で、平面形が隅丸方形になるようである。体部下部に楕円形の透かし孔が連なっており、内面の底面にはいわゆる「牡丹餅(ぼたもち)」が認められるなどさほど深くない器形と



1　暗灰黄色微砂(2.5Y4/2)　1cm程度の黄褐色シルト、灰黄色シルト粒を多く含む。
2　暗灰黄色微砂(2.5Y4/2)　円礫、瓦片を多量に含む。
3　黒褐～暗オリーブ褐色微砂(2.5Y3/2～3/3)　数mm～1cm大の黄褐色土粒を多く含む。
4　オリーブ褐色細砂微砂(2.5Y4/3)
5　暗灰黄色細砂(2.5Y4/2)　明黄褐色シルトをラミナ状に含む。
6　灰黄褐色微砂(10YR4/2)　数mm大の黄褐色土粒を含む。
7　暗灰黄色細砂(2.5Y4/2)
8　暗灰黄色細砂(2.5Y4/2)　1～10cm大の明黄褐色土、暗灰黄色シルト、黄褐色シルトブロックをを多く含む。
9　黄褐色礫混じり粗砂(2.5Y5/3)
10　黒褐色シルト微砂(2.5Y3/1)　数mm大の黄褐色土粒をまばらに含む。

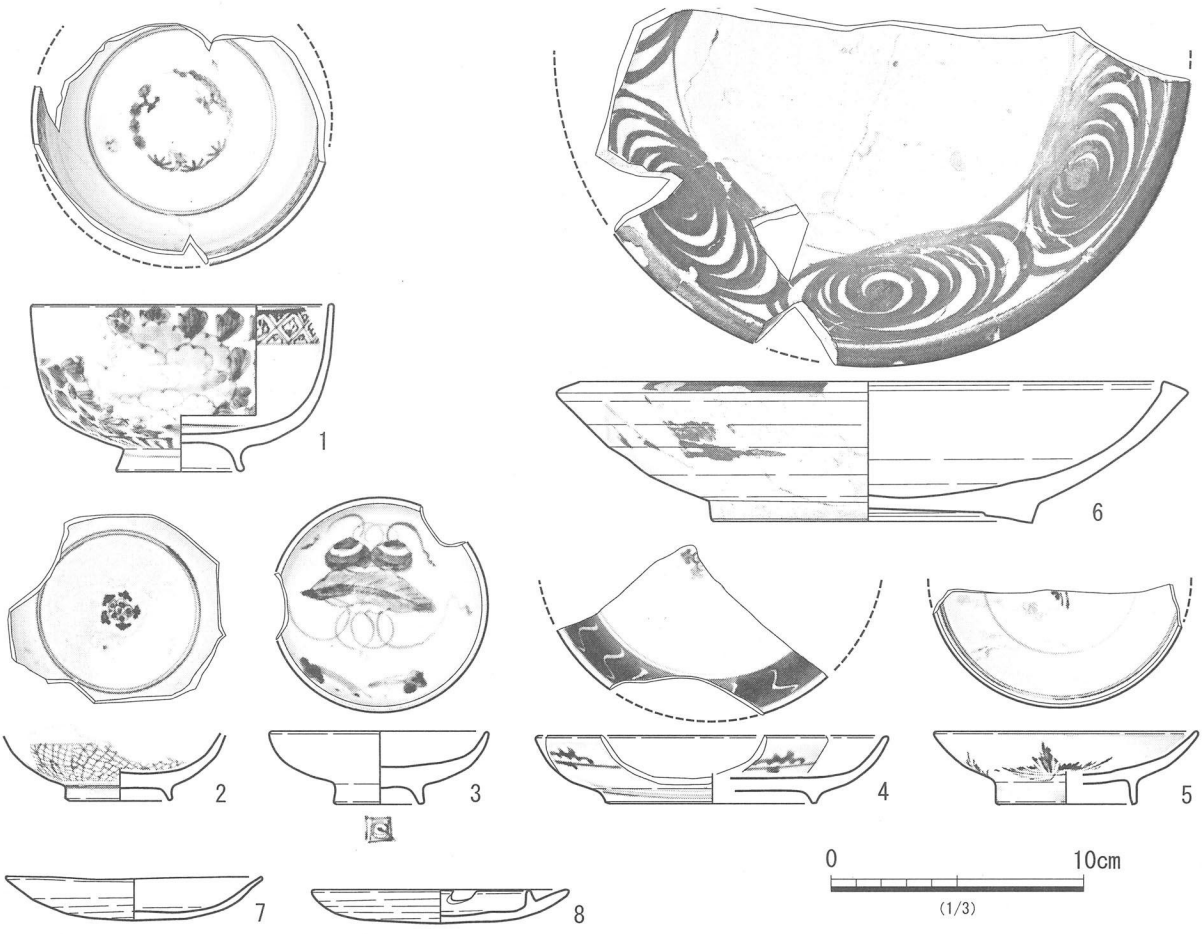
第122図　SP284(1/40)

みられ、匣鉢（さやばち）とみられる。19は擂鉢底部の破片。体部の密なスリメが見込端で一旦止まっており、見込には放射状のスリメが施されている。関西系、特に明石産の擂鉢と思われる。21は粘板岩製の硯で、長さ14.0cm、幅5.6cm、高さ1.6cmを測る。墨堂部分が使用により凹んでいる。なお、広東形碗や端反形碗を含んでおり、十九世紀前半に位置づけられる。

SP284

SP284はX=-147645.0、Y=-37200.0付近に検出した土坑で、東側は調査区外に及んでいる。南北約2.3m、深さ約0.95mを測る。埋土上層（第122図2層）に瓦片などを多く含むほか炭化物や有機質を多く含む黒褐色土が厚く堆積しており（3層）、ゴミの廃棄土坑とみられる。

出土遺物は肥前産の染付磁器では、口縁部内面に四方襷文を描くもの（1）、見込に手描きの五弁花文を入れるもの（2）、コンニャク印判の五弁花文を入れるもの（3）などがある。6は瀬戸産の陶器大皿でい



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	肥前染付磁器	碗	口径　11.9 高さ　6.7	大形の丸碗。高台部釉剥ぎ。外面は一面に牡丹を、内面は口縁内面に四方襷文と見込に圏線二条、松竹梅を描く。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
2	肥前染付磁器	碗？		底部付近の破片。高台部釉剥ぎ。外面は体部下半に格子目状の文様。内面見込に圏線二条と五弁花文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5GY8/1) (断面)灰白(5Y8/1)
3	肥前染付磁器	皿	口径　8.6 高さ　2.9	高台部釉剥ぎ。高台端部に砂付着。内面に芭蕉葉と宝珠(?)。高台内に落款風の文様。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)青磁釉・明緑灰(7.5GY7/1～8/1) (断面)灰白(N8/0)
4	肥前染付磁器	皿	口径　13.8 高さ　2.8	高台部釉剥ぎ。外面に唐草、内面はコンニャク印判で「S」の字状の文様と見込に五弁花文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
5	肥前染付磁器	皿	口径　10.4 高さ　2.9	外面に木の葉状の文様。高台内、内面見込にも同様の文様か。	(胎土)陶石・白磁胎 (焼成)良好	(釉)白色釉・灰白(5Y8/1) (断面)灰白(5Y8/1)
6	瀬戸施釉陶器	大皿(馬の目皿)	口径　23.2 高さ　5.6	いわゆる「馬の目皿」。高台部無釉。内面に鉄釉で楕円形の渦巻き状の文様を描く。見込にハリ支え痕。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)白色釉・灰白(2.5Y8/1～5Y8/2) (断面)灰白(2.5Y8/1～8/2)
7	備前	灯明皿	口径　10.0 高さ　1.4	灯芯受け付きの灯明皿。1/2周程度の破片。灯芯受けの二カ所にヘラ切りの凹み。凹みから口縁部にかけ煤付着。外面ヘラケズリ	(胎土)1mm以下の砂粒を含む (焼成)良好	(外面・断面)にぶい赤褐(2.5YR4/4～5/4) (内面)暗赤褐(5YR3/3)
8	備前	小皿(灯明皿)	口径　10.3 高さ　1.8	内面から外面口縁部下、ヨコナデ。外面の下半をヘラケズリ。口縁端部に煤付着。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰赤～赤(2.5YR4/2～10R5/6) (断面)暗赤褐～赤褐(2.5YR3/3～10R5/6)

第123図　SP284出土遺物(1/3)

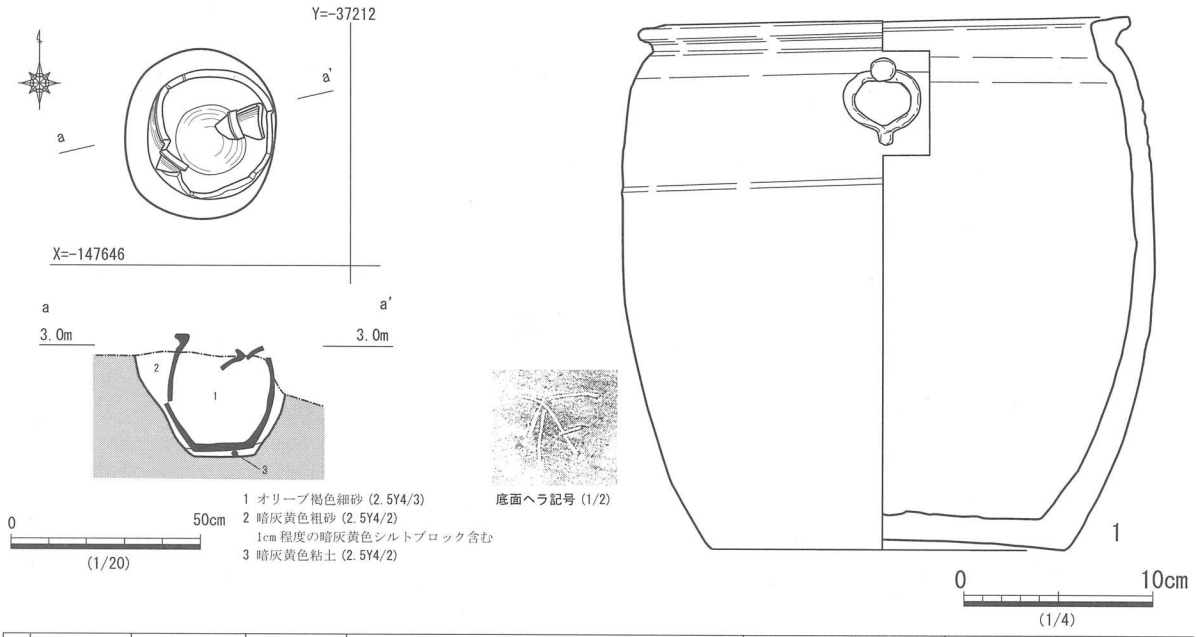
わゆる「馬の目皿」と呼ばれるものである。

SP284は出土遺物、特に瀬戸・馬の目皿の存在から、十九世紀前半頃のものとみられる。

SP290

SP290はX=−147646.2、Y=−37212.4付近で検出した径40cmほどの土坑である。中に甕一個体を納めており、甕内にはネコとみられる獣骨がはいっていた。甕は備前焼で、口縁部と底部の径がほとんど変わらず胴部や肩の張りの少ない筒状のもので、全面に塗土を施し赤褐色に発色している。底部には「本」の字とみられるヘラ記号がある。塗土の一般化する十八世紀中頃以降の製品とみられる。

SP290の位置は、十八世紀初頭以降、藩学の北限付近にあたっている。ネコの骨以外何も入れられていないことからネコを埋葬したものである可能性が高い。



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	備前	甕	口径　24.1 胴部径 28.3 高さ　28.2	口縁部ヨコナデ、ほかはロクロ目。特に、肩部はロクロ目が深く回線状に見える。全面に塗土。肩部に取手状の飾りを貼り付ける。底部にヘラ記号。	(胎土) 1mm以下の砂粒を多く含む (焼成) 良好	(内面) 赤褐(10R4/1) (外面) 赤褐～明赤褐(10R4/4～2.5YR5/6) (断面) 赤(10R5/6)

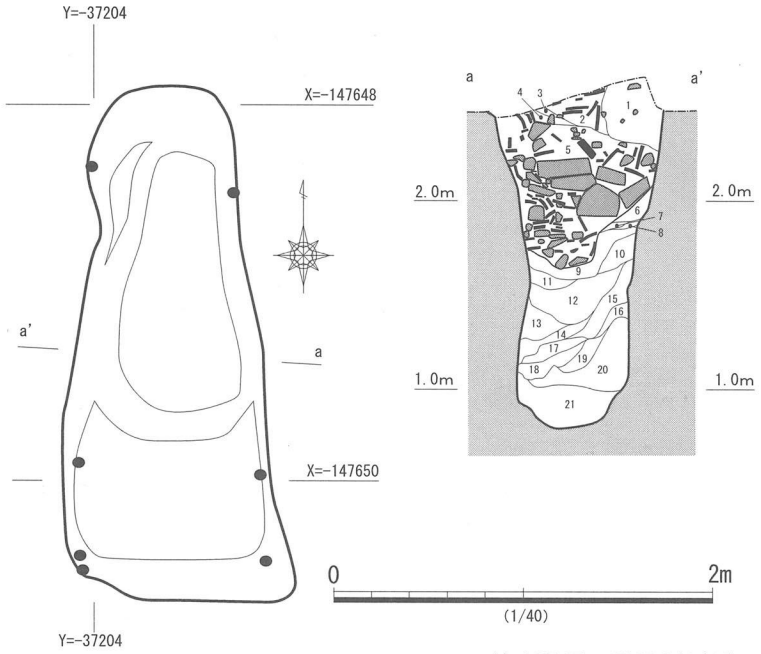
第124図　SP290(1/20)と出土遺物(1/4)

SP294

SP294はX=−147649、Y=−37204付近に所在する長さ約2.7m、幅約1.2m程度の隅丸長方形の土坑である。南端部以外は旧西校舎基礎により上部を失っている。底面は南側1/3程度が標高約2.3mと検出面からの深さ0.9m程度なのに対し、北側2/3は標高約0.8m、深さ約2.4mほど掘削されている。土坑の長辺側に三対の杭が打たれており、なんらかの上部構造に関係するものと思われる。埋土は上部が漆喰塊、豊島石石材片、瓦片、陶磁器類を多量に含む砂質土で、廃絶時に埋め戻された土層と考えられるのに対し、下部には非常に粘質の強い灰色～黒色土が堆積しており、使用されていた段階で堆積した土層と考えられる。

写真12　SP294出土漆喰塊

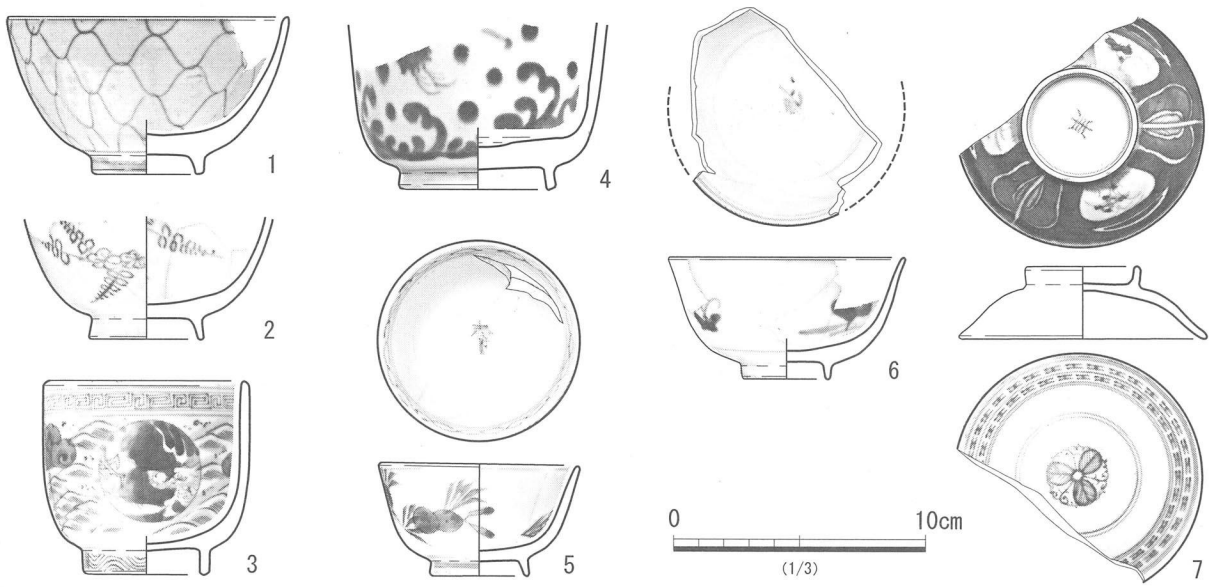
上層に多量に含まれる漆喰(しっくい)塊は、厚さ8～10cm、高さ20cm前後の壁体状のもので、平面形が直線的な破片と円弧を描く破片がある。胎土



1 暗オリーブ褐色微砂（2.5Y3/3）円礫、漆喰塊を含む
2 灰色細砂（7.5Y4/1）瓦片多い。木炭粒わずかに含む
3 黒褐色細砂（2.5Y3/1）木炭粒を多量に含む
4 灰オリーブ色細砂（5Y4/2）
5 オリーブ黒色細砂微砂（7.5Y3/2）
多量の瓦片、割石、木片等を含む
6 灰色粘質細砂（5Y4/1）
7 灰色粘土（7.5Y4/1）
8 オリーブ黒色粘質微砂（7.5Y3/2）
9 黒色粘土（7.5Y2/1）
10 灰色粘土微砂（7.5Y4/1）
11 灰色粘土微砂（7.5Y4/1）
12 黒色粘土（7.5Y2/1）
13 灰色粘土微砂（7.5Y4/1）
14 黒色粘土（7.5Y2/1）
15 灰色粘土微砂（7.5Y4/1）
1cm 大のオリーブ灰色シルトブロックを含む
16 灰色細砂（7.5Y4/1）
1 ～ 2cm 大の灰色粘土ブロックを多く含む
17 灰色粘土（7.5Y4/1）
18 オリーブ黒色粘土（10Y3/1）
19 灰～オリーブ黒色粘質細砂（10Y4/1 ～ 3/1）
オリーブ黒色粘土ブロックを含む
20 灰色粘土（10Y4/1）
21 黒色粘土（10Y2/1）

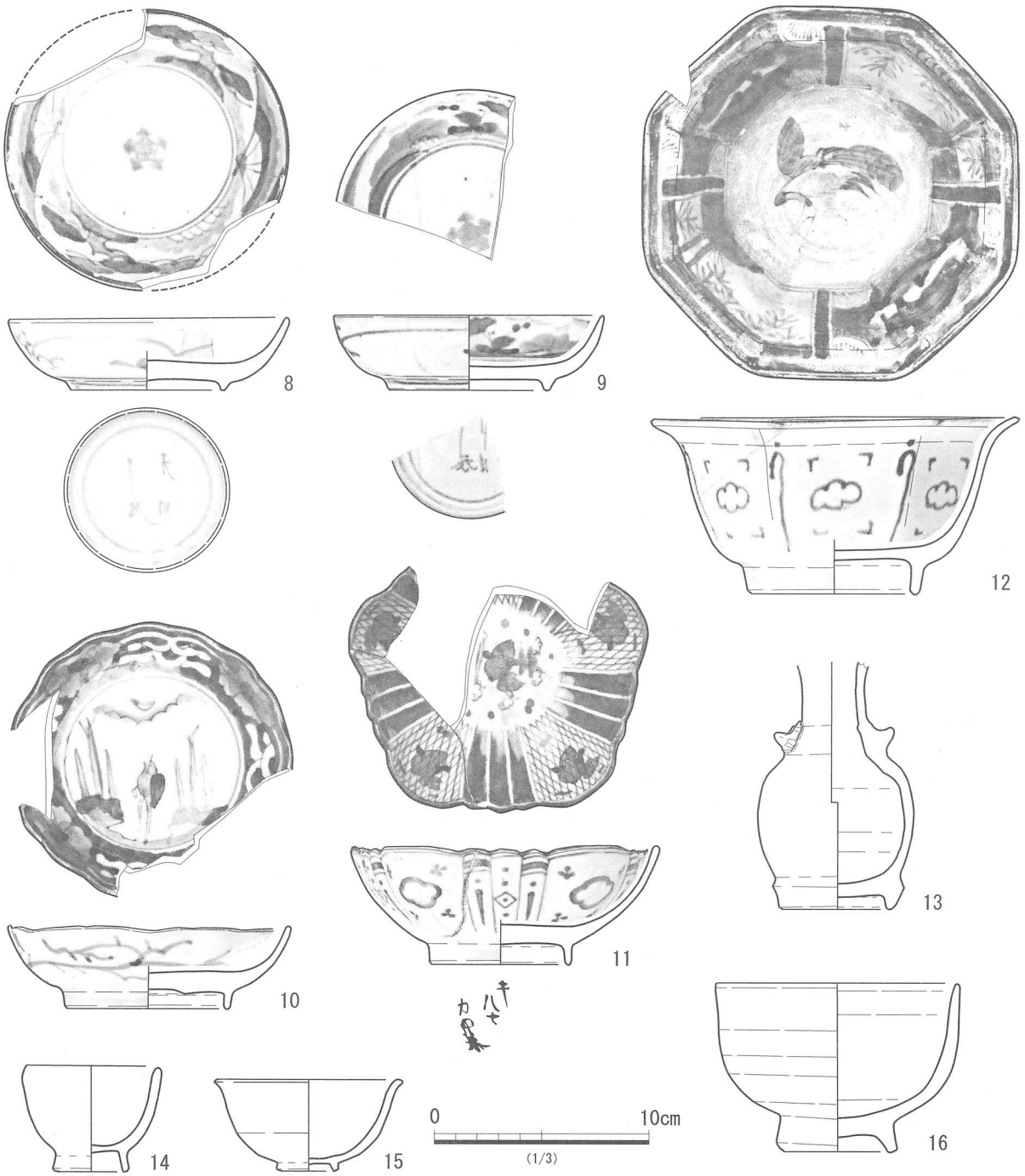
第 125 図　SP294(1/40)

は浅黄色(2.5Y7/3 ～ 5Y7/4)で、5mm以下の砂粒を多量に含んでいる。表面は灰白色(2.5Y8/1 ～ 5Y8/1)の化粧土が塗られている。内面下部には幅8cm前後にわたって、底の剥がれた痕跡があり、大きさは不明だが、元は長楕円形もしくは隅丸長方形の水槽状のものであったと考えられる。SP294の上部構造に関係するものである可能性もある。



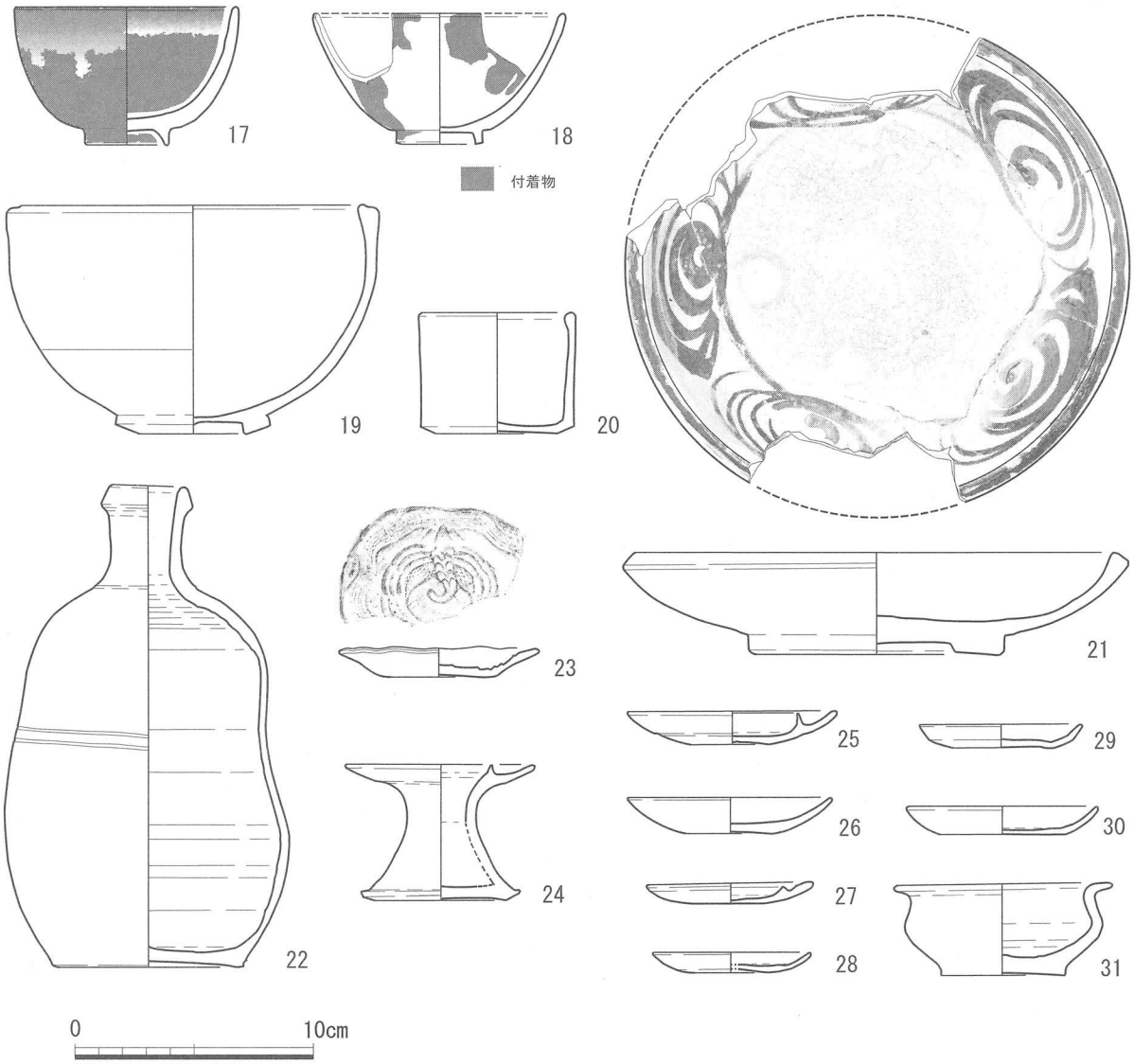
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	肥前染付磁器	碗	口径　11.1 高さ　6.3	丸碗。高台部釉剥ぎ。外面に網目文。高台に砂付着。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1～7/1) (断面)灰白(N8/0～7/0)
2	肥前染付磁器	碗	底径　4.6	丸碗？。口縁部欠損。高台部釉剥ぎ。外面に藤(？)文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10GY8/1) (断面)灰白～白(N8/0～9/0)
3	肥前染付磁器	碗	口径　8.2 高さ　7.7	筒丸碗。高台部釉剥ぎ。焼継あり。高台内に焼継印。外面は口縁部下に雷文、体部に波、雲、円文内に龍。内面は口縁内面に雷文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
4	肥前染付磁器	碗？	底径　6.2 高さ　5.1	筒丸碗か。高台部釉剥ぎ。内面下部は無釉。外面に波文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
5	肥前染付磁器	碗	口径　8.0 高さ　4.5	端反碗。高台部釉剥ぎ。外面に草花(クチナシ？)文。内面は口縁内面に綱目文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5Y8/1) (断面)白(N9/0)
6	肥前染付磁器	碗	口径　9.2 高さ　4.8	端反碗。高台部釉剥ぎ。高台内に焼継印。外面に蝶、草花文。内面は口縁部内面と見込に圏線、見込に草花？文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(2.5GY8/1) (断面)灰白～白(N8/0～9/0)
7	肥前染付磁器	碗蓋	口径　9.8 高さ　2.9	高台部釉剥ぎ。外面に団扇、壺風の表現内に草花文。内面は口縁内面に工字文(雷文の変形？)。見込に三弁の花文(花唐草？)。高台内に変形字銘。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10GY8/1) (断面)白(N9/0)

第126図　SP294出土遺物1(1/3)



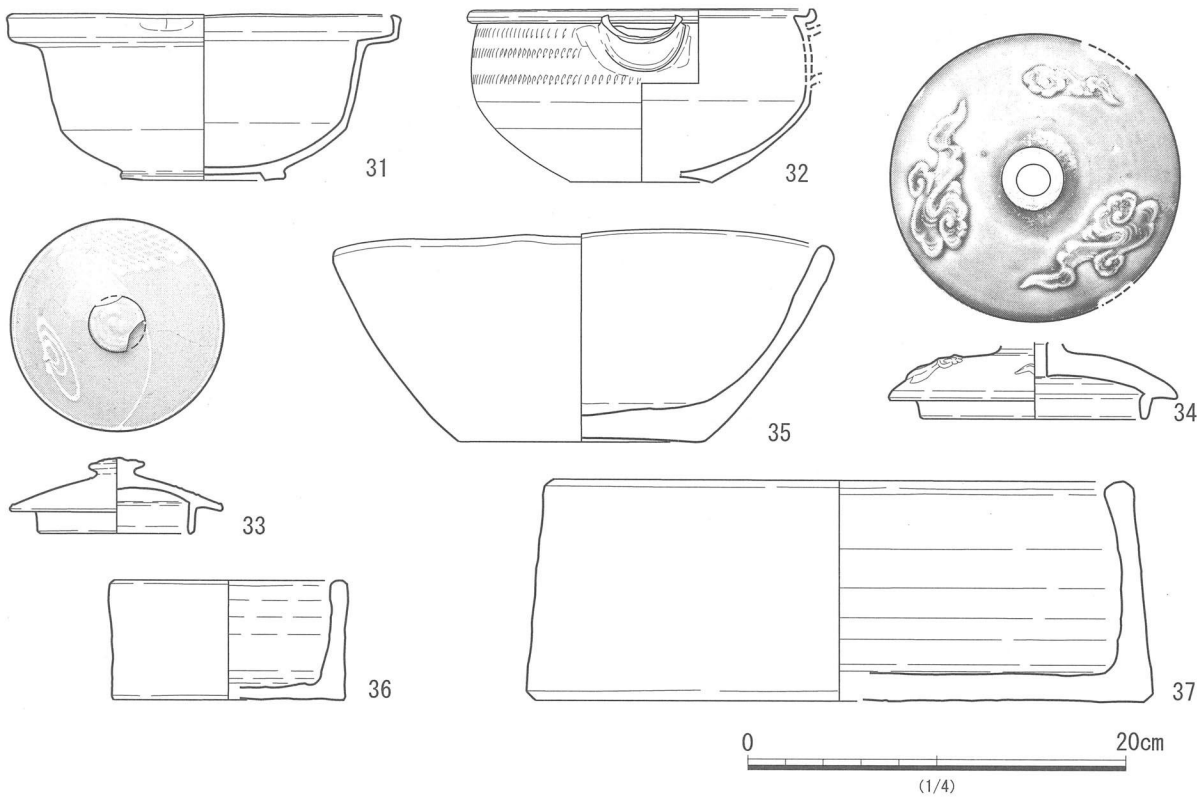
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
8	肥前染付磁器	皿	口径　13.2 高さ　3.4	高台部釉剥ぎ。外面に唐草文。内面は松、扇子、見込にコンニャク印判による五弁花文。高台内に変形字銘。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0～5Y8/1)
9	肥前染付磁器	皿	口径　(12.6) 高さ　3.5	1/5周程度の破片。高台部釉剥ぎ。外面に唐草文。内面は草花文、見込にコンニャク印判による五弁花文。高台内に変形字銘。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰～灰白(7.5GY8/1～N8/0)/(断面)灰白(N8/0)
10	肥前染付磁器	皿	口径　13.2 高さ　3.9	花形皿。蛇の目凹形高台。外面は唐草文。内面は花弁文、見込に月、雲、鳥(鶴か)、植物を描く。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
11	肥前染付磁器	鉢	口径　14.2 高さ　5.6	五角形の花形鉢。焼継あり。高台内に焼継印。高台部釉剥ぎ。外面は環珞文か。内面は体部内面区画内に網文と金魚、見込に金魚と水草(?)。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(2.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
12	肥前染付磁器	鉢	口径　18.1 高さ　4.5	八角形の鉢。高台部釉剥ぎ。外面は環珞文か。内面は体部内面区画内に竹、山中の人物。見込に鶴を描く。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(2.5Y8/1) (断面)灰白(N8/0)
13	肥前磁器	花入	最大径　7.3 残存高　11.6	口縁部～頸部上半を欠損。高台部釉剥ぎ。頸部の付け根に木葉風の耳を貼り付け。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)青磁釉・明緑灰(10GY7/1) (断面)灰白(N7/0～7.5Y7/1)
14	関西系陶器	猪口	口径　6.5 高さ　5.0	ほぼ完形。高台端部～高台内無釉。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)釉・明緑灰(5GY7/1) (断面)浅黄(2.5Y7/3)
15	関西系陶器	碗	口径　8.3 高さ　4.3	端反形碗。3/4周程度の破片。高台無釉。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)釉・灰白(10Y7/2) (断面)灰黄(2.5Y7/2)
16	肥前陶器 (内野山系)	碗	口径　11.2 高さ　7.9	ほぼ完形の丸碗。高台部釉剥ぎ。高台端部に砂付着。	(胎土)やや砂質 (焼成)良好	(釉)釉・灰黄(2.5Y7/2) (断面)灰白(2.5Y8/1)

第127図　SP294出土遺物2(1/3)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
17	関西系陶器	碗	口径　(9.5) 高さ　5.8	1/5周程度の破片。天目風の丸碗。全面に鉄釉、口縁部から体部上半の内外面に明青灰色の釉。高台部釉剥ぎ。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(釉)鉄釉・暗褐(10YR3/3) (断面)褐灰～灰黄褐(10YR5/1～5/2)
18	関西系陶器	碗	口径　(10.4) 高さ　5.5	1/4周程度の破片。高台無釉。内面から外面の一部に滓状のガラス質の付着物。釉表面は被熱のためか光沢を失っている。	(胎土)やや砂質強い (焼成)良好	(釉)白色釉・灰白(5Y8/1～7/1)/(断面・外面)灰白～褐灰(5Y8/1～7.5YR6/1)
19	関西系陶器	鉢	口径　(15.6) 高さ　9.6	口縁部1/3周程度の破片。体部下半～高台無釉。内面側面と見込に計４カ所ハリ支え痕。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)鉄釉・明褐～暗褐(7.5YR5/6～3/4) (断面・外面)にぶい黄橙～橙(10YR7/4～5YR7/6)
20	関西系陶器	火入？	口径　6.6 高さ　5.1	筒状の容器。底部無釉。底部ヘラ切り痕。	(胎土)やや砂質強い (焼成)良好	(釉)灰黄褐(10YR6/2) (断面・外面)橙～灰褐(2.5Y6/6～7.5YR5/2)
21	瀬戸施釉陶器	皿(馬の目皿)	口径　21.1 高さ　4.3	高台無釉。見込に胎土目風の融着痕５カ所。	(胎土)やや砂質強い (焼成)良好	(釉)灰白～灰(5Y7/2～6/1)、鉄釉・褐(7.5YR4/4) (断面・外面)灰白～灰(5Y7/2～6/1)
22	関西系？陶器	徳利	口径　3.8 最大径　11.9 高さ　20.3	体部～底部一部欠損。頸部内面から外面に鉄釉。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(釉)鉄釉・暗褐(7.5YR3/4) (内面)灰黄～浅黄(2.5Y6/2～7/4) (断面)浅黄(2.5Y7/4)
23	備前	小皿	高さ　1.3	方形平面、型押し成形の小皿。亀を表現、中央に鶴。外面に塗土	(胎土)やや砂質だが、砂粒は認められない。(焼成)良好	(外面)明赤褐～赤褐(5YR3/4～4/6)/(内面)明赤褐～にぶい赤褐(2.5YR5/6～4/3)
24	信楽	灯明台	口径　7.9 高さ　5.8	内面上半から外面に施釉。底部無釉。底部ヘラ切り痕。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白～灰オリーブ(5Y7/2～6/2) (断面・外面)灰黄～にぶい橙(2.5Y7/2～5YR6/4)
25	信楽	灯明皿	口径　8.8 高さ　1.4	灯芯受け付きの灯明皿。口縁部外面に煤付着。口縁端部よりしたの外面無釉。外面工具ナデ。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白～灰オリーブ(5Y7/2～6/2) (断面・外面)灰白(5Y7/1)
26	信楽	灯明皿	口径　8.6 高さ　1.5	口縁部外面に煤付着。口縁端部より下の外面無釉。外面ナデ。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5Y7/2～7/1) (断面・外面)灰白～浅黄(2.5Y7/1～7/3)
27	備前	灯明皿	口径　7.0 高さ　0.9	灯芯受け付きの灯明皿。口縁部外面に煤付着。外面下半ケズリ。内面に塗土。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を含む (焼成)良好	(外面)灰赤(2.5YR1/2)/(内面)暗赤褐(2.5YR3/3)/(断面)灰(7.5Y6/1)
28	備前	小皿(灯明皿)	口径　6.6 高さ　0.9	口縁部内外面に煤付着。外面下半ケズリ。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を含む (焼成)良好	(内外面)灰赤(2.5YR5/2) (断面)灰(N4/0)
29	土師質土器	小皿	口径　(6.8) 高さ　1.0	1/2周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部に糸切り痕	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多くまばらに含む。(焼成)良好	(内外面)灰黄(2.5Y7/2) (断面)灰黄(2.5Y7/2)
30	土師質土器	小皿	口径　8.0 高さ　1.2	1/3周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部糸切り後板ナデ。	(胎土)0.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)灰白(10YR8/2) (断面)灰白(10YR8/2)
31	土師質土器	香炉？	口径　9.1 高さ　3.9	香炉状の小壺。内外面ともヨコナデ。底部に糸切り痕。	(胎土)0.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)灰白～灰黄(2.5Y8/2～7/2) (断面)灰白(2.5YR8/2)

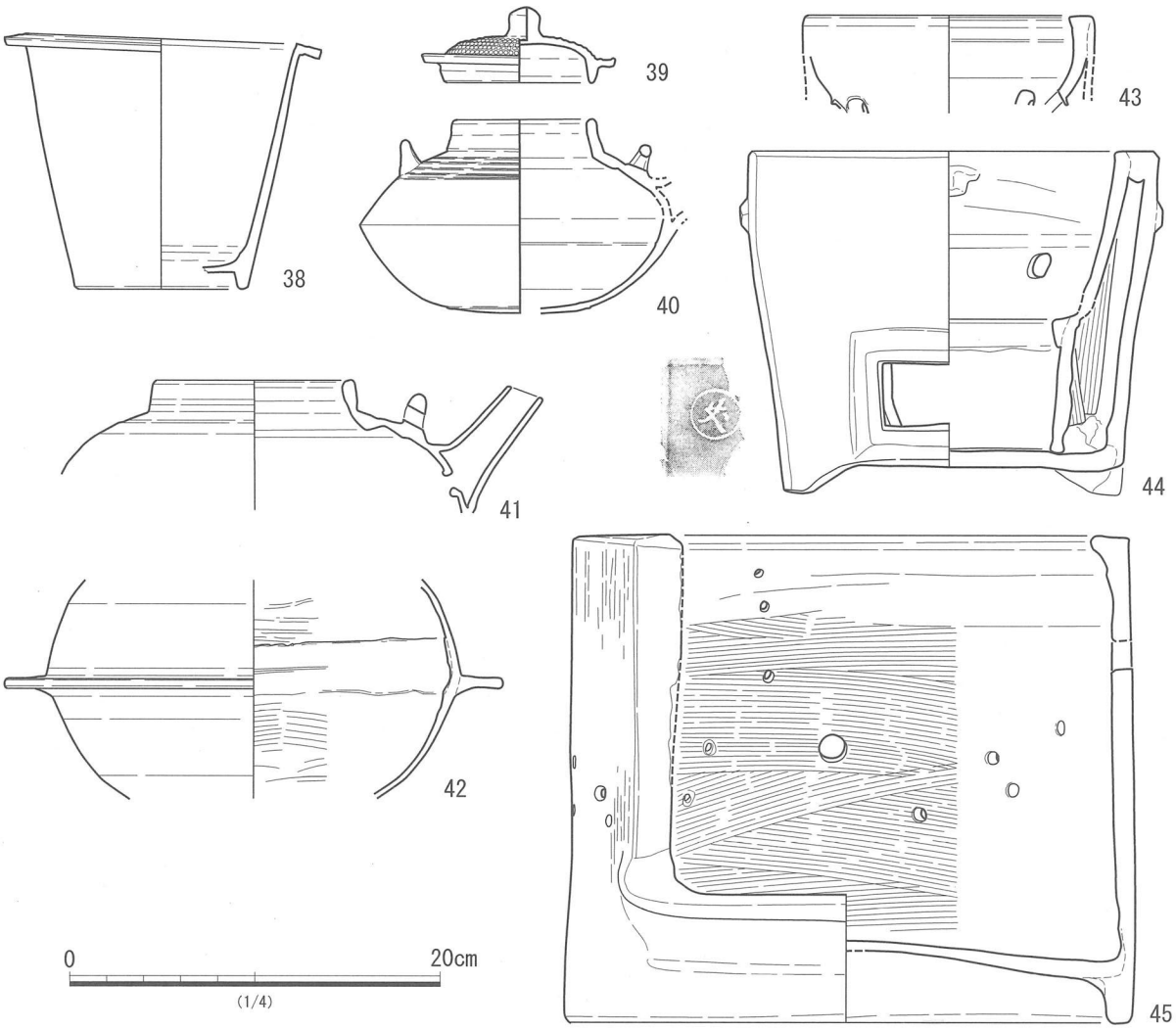
第128図　SP294出土遺物3(1/3)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
31	関西系陶器	鉢	口径　21.0 高さ　8.9	高台部無釉。口縁部は花形。見込にハリ支え痕３カ所。	(胎土)0.2mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)透明釉・オリーブ～オリーブ黄(5Y5/1～6/4)/(断面等)灰白(5Y7/1)
32	関西系陶器	行平鍋	口径　18.4 高さ　9.3	外面口縁部から体部上半に塗土。内面口縁部より下、注口内に透明釉。外面体部上半に列点(飛カンナ)。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・オリーブ黄(5Y6/3)/(塗土)にぶい赤褐(5YR4/4)/(外面)灰黄褐～にぶい黄橙(10YR6/2～7/4)/(断面)灰白(2.5Y8/1)
33	関西系陶器	蓋	最大径　11.3 高さ　4.0	土瓶の蓋。上面に透明釉、白色釉を盛るようにして網代状、馬の目状の文様を描く。	(胎土)0.2mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(釉)透明釉・浅黄(2.5Y7/4)/(内面)にぶい黄橙(10YR7/4)/(断面)淡黄(2.5Y8/3)
34	瀬戸美濃系陶器	蓋	最大径　11.7 残存高　4.1	つまみ部分欠損。壺などの蓋か。上面に透明釉、貼り付けの雲文３カ所。	(胎土)砂質強い。0.5mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(釉)透明釉・オリーブ(5Y5/4～5/6) (内面・断面)灰白(2.5Y8/1)
35	備前	捏鉢	口径　27.0 高さ　11.3	全面に塗土。	(胎土)0.2mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい赤褐～にぶい褐(5YR4/4～7.5YR5/4)/(断面)暗紫灰～灰(5RP4/1～N4/0)
36	備前	匣鉢	口径　(12.5) 高さ　6.4	口縁部1/4周程度の破片。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)灰褐(5YR4/2)/(内面)灰赤～にぶい赤褐(2.5YR4/2～4/3)/(断面)明赤褐～暗灰(2.5YR5/6～N3/0)
37	備前	匣鉢	口径　(31.2) 高さ　11.7	口縁部1/4周程度の破片。内外面に塗土。底面へラケズリ後ナデ、「S」字状のヘラ記号？。内面底面に「牡丹餅」。	(胎土)3mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)赤褐(10R4/3)/(底面)赤(10R5/6)・(内面)赤褐(10R4/4)/(断面)赤褐(10R5/4)

第129図　SP294出土遺物4(1/4)

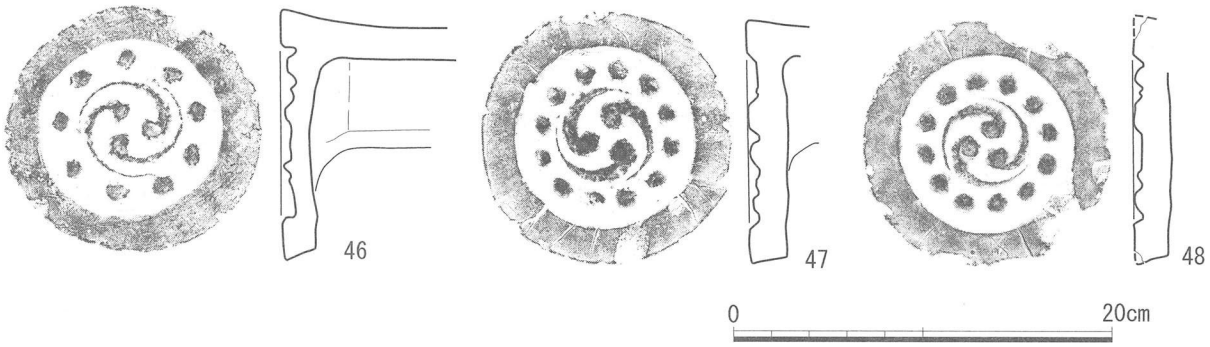
出土遺物は陶磁器類のほか瓦質土器、瓦類がある。第126図1～第127図13は肥前産の磁器である。1は外面に網文を染付する丸碗で、高台に砂が付着しており砂目積みであることがわかる。4は筒丸碗としているが、やや大形で内面下部が無釉となっており、火入などの器種の可能性が高い。5、6は端反形碗である。8､9は外面に唐草文を描く皿であり､見込にコンニャク印判による五弁花文を入れている。10は花形の皿で、蛇の目凹形高台を持つ。11の花形鉢には焼継があり、判読できないが、高台内に焼継印がある。18は京焼系(信楽か)の碗であるが、釉表面が被熱のためか光沢を失っており、内面に赤褐色、ガラス質の滓状の付着物がある。これは外面側にも流れ落ちるように付着している。滓状の物質については分析等行っていないため不明だが、融点の低い焼継材のようなものを溶かしたものかもしれない。21は瀬戸産の大皿で、いわゆる「馬の目皿」と呼ばれるものである。23は備前焼の型押し成形の小皿で、亀の形態のものである。頭、前足、後ろ足の表現があり、非常に不明瞭だが地紋風に亀甲文が入れられている。中央には鶴を表現している。24～30は灯明台、灯明皿で、24～26が信楽産、27、28が備前焼、29、30が土師質土器である。31は信楽産と見られる鉢、32はやはり信楽産の行平鍋である。33はSP250などで出土している土瓶(第101図35、36)などの蓋、34は同じく第101図38のような鉢状の容器の蓋と見られる。35は備前焼の捏鉢、36、37は備前焼の匣鉢である。



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
38	産地不明陶器	植木鉢	口径　17.0 高さ　13.8	無釉。口縁部から内面に塗土。	(胎土)砂質やや強い (焼成)良好	(外面)にぶい橙(5YR6/3)/(内面)にぶい赤褐(2.5YR4/3～4/4)/(断面)にぶい橙(5YR6/4)
39	瓦質土器	蓋	最大径　8.1 高さ　4.1	土瓶の蓋。	(胎土)砂質強い。0.5mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(外面)褐灰～灰(10YR4/1～N6/0)/(内面)灰～灰白(N5/0～2.5Y7/1)/(断面)灰白(2.5Y7/1)
40	瓦質土器	土瓶	最大径　17.2 高さ　10.5	注口欠損。外面にキラコ。体部上部に釣手１対、５条の凸線。口縁部付近に煤付着。外面は一部被熱のため光沢のある青灰～暗紫灰色に変色。	(胎土)3mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰(N6/0～5/0) (内面)灰～灰白(N6/0～5Y7/1) (断面)灰白(5Y8/1)
41	瓦質土器	土瓶	口径　(10.5) 残存高　7.3	注口より上、1/3周程度の破片。外面にキラコ。内面は工具ナデ。内面に煤付着。	(胎土)砂質強い。2mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)黒～暗灰(N2/0～3/0)/(内面)黒(N2/0) (断面)灰白～灰(5Y7/1～N4/0)
42	瓦質土器	羽釜	最大径　27.0	体部の2/5周程度の破片。外面はヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリの後横方向のヘラミガキか。外面下半に煤付着。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)黒～灰(N2/0～4/0)/(内面)黄灰～暗灰(2.5Y6/1～N3/0)/(断面)灰～灰白(N5/0～7/0)
43	瓦質土器	涼炉	口径　(12.5) 高さ　6.1	口縁部1/8周程度の小破片。平面円形の小型の焜炉。内面ナデ、口縁端部～外面ヘラミガキ。二重構造で内側の壁体には径1cm程度の孔が並ぶ。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)黒(N2/0) (内面)灰白～褐灰(2.5Y7/1～7.5YR4/1) (断面)にぶい橙(10YR7/2)
44	瓦質土器	鍋物焜炉	一辺　22.3 高さ　18.8	平面正方形、二重構造で中は円形の焜炉。外面は底面を除きヘラミガキ。下端付近の側面に方形の窓をあける。外枠内面は幅10cm程度の板によるハケメ。内側の体部内面はヨコナデ。内部上部に鍋などを保持する突起がある。内側の体部上半に円孔、下端には方形の窓。上面に○に火(?)の刻印。	(胎土)3mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)黒(N2/0) (内面)にぶい褐～褐灰(7.5YR5/3～10YR4/1) (断面)にぶい橙(5YR6/4)
45	瓦質土器	置竈	口径　30.0 高さ　26.6	外面縦方向のヘラミガキ、外面下半～底面調整不明。口縁部内面ヨコナデ、体部内面横～斜め方向のハケメ。内面底面はナデ。体部に径5mm程度と径1cm程度の円孔多数。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)にぶい褐～黒(7.5YR5/3～N2/0) (内面)明赤褐～にぶい橙(5YR5/6～7.5YR6/4) (断面)にぶい赤褐(5YR5/4)

第130図　SP294出土遺物5(1/4)

第130図39～45には瓦質土器類をあげている。39～41は土瓶とその蓋である。外面にはキラコが施されており、熱を受けて光沢のある青灰～暗紫灰色に変色した部分がある。43は小片ではあるが、平面円形で体部が二重構造となった小型の焜炉（こんろ）で、煎茶道用の涼炉（りょうろ）とみられる。44は平面方形で体部が二重構造の焜炉で、牛鍋の普及とともに広まったといわれるいわゆる「鍋物焜炉（なべものこんろ）」である。内側の体部内面上部に鍋などを支える突起が二カ所に認められ、もとは三カ所に貼り付けられていたとみられる。外面の上面に○に火(?)の刻印がある。45は置竈（おきかまど）である。体部に径0.5cm程度と径1cm程度の円孔を多数



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
46	瓦	軒丸瓦 瓦当	外径　13.7 文様区径 9.7	左巻き三巴文、珠文数9。瓦当内面ナデ。丸瓦部は内外面とも板状工具による整形。	(胎土)1mm以下の砂粒をまばらに含む/(焼成)良好	(内外面)暗灰～灰白(N3/0～7.5Y7/1) (断面)灰白～灰(7.5Y7/1～6/1)
47	瓦	軒丸瓦 瓦当	外径　12.9 文様区径 9.3	右巻き三巴文、珠文数12。瓦当内面ナデ。瓦当面にキラコ。	(胎土)1mm以下の砂粒をまばらに含む/(焼成)良好	(内外面)灰～灰白(N4/0～7.5Y7/1) (断面)灰白(7.5Y7/1)
48	瓦	軒丸瓦 瓦当	外径　13.1 文様区径 9.2	左巻き三巴文、珠文数12。瓦当内面ナデ。瓦当面にキラコ。	(胎土)1mm以下の砂粒をまばらに含む/(焼成)良好	(内外面)灰～灰白(N5/0～7.5Y7/1) (断面)灰白(N7/0)

第131図　SP294出土遺物6(1/4)

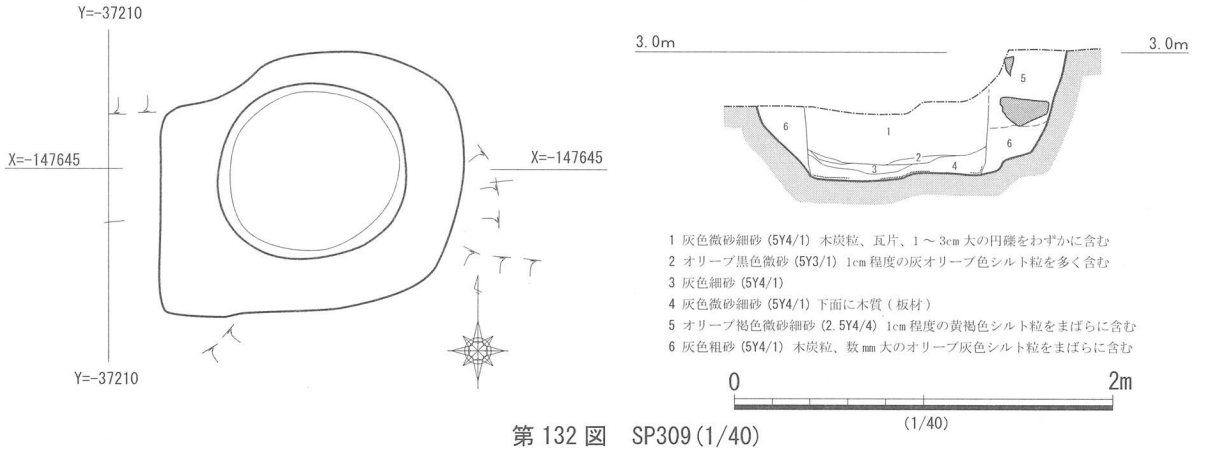
あけている。第131図46 ～ 48は軒丸瓦である。47、48は瓦当面に「キラコ」を塗布するもので、巴や唐草の表現が太く、陵が鋭く、珠文も大きい。

SP294は、焼継のある鉢(11)、馬の目皿(21)、キラコを塗布した瓦(47、48)などの存在から十九世紀代に埋められたものとみられる。機能については、縮小後の藩学絵図の中にこの付近に浴室や厠の記載があるものがあり、これらに関係する遺構の可能性が考えられる。しかし、便槽としては肥の利用なども考えると深すぎるものであり、通常の桶などを入れるものと構造も大きく異なっている。上部構造も失われていることから不明といわざるを得ない。

SP309

SP309はX=-147645、Y=-37209付近に所在する土坑である。SX270を切って掘られており、上部は旧西校舎基礎により大きく壊されている。径約1.5mのほぼ円形で、底面の標高は2.32 ～ 2.35m。掘り込まれた面の標高が3.2m程度とすると、深さは90cm前後ということになる。底面に桶の底板とみられる木質がわずかに残っており、側板はほとんど残っていないが、土層断面では掘方埋土(第132図5 ～ 6層)と桶内の埋土(1 ～ 4層)に分層することができる。桶は直径95cm程度のもので、立ち上がりについては40cm程までは観察できるが、それ以上については不明である。

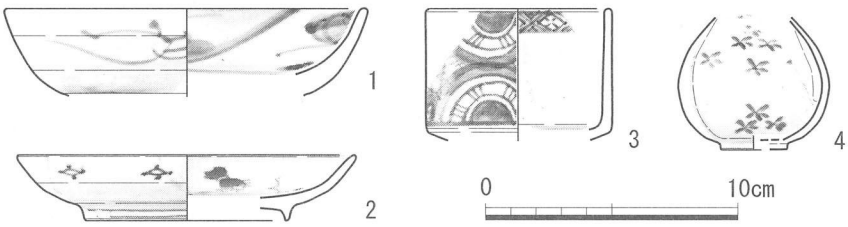
出土遺物は瓦類、染付磁器などがあるが、少量かつ破片である。いずれも桶内の埋土から出土している(第133図)。1、2は肥前産染付磁器の皿。3は同じく肥前産染付磁器の筒形碗で、口縁部内面に四方襷文を廻らしている。4は平面が方形になる小形の瓶類で、肥前産染付磁器である。底は平らで高台



第 132 図　SP309(1/40)

を持たず、外面に小さな花文を多数散らす。

SP309は桶を伴うなどの特徴から、便槽である可能性が高い。出土遺物は遺構の破却時に混入したものとみられるが、量も少なく、時期を限定することは困難である。しかし、口縁部内面に四方襷文をもつ筒形碗を含んでおり、十八世紀後半以降に埋められたものと考えられる。



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	肥前染付磁器	皿	口径　(11.2)	1/5周程度の破片。高台部欠損。外面に唐草文、内面に花弁文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(2.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
2	肥前染付磁器	皿	口径　(13.3) 高さ　2.1	1/5周程度の破片。高台部釉剥ぎ。外面に宝？、内面に紅葉等。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10GY8/1) (断面)灰白～白(N8/0)
3	肥前染付磁器	碗	口径　(7.2)	筒形碗。1/6周程度の破片。高台部釉剥ぎ。外面は丸文、内面は口縁部内面に四方襷文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(5GY8/1) (断面)灰白(N8/0～7/0)
4	肥前染付磁器	小瓶	最大幅　(6.0) 底辺　5.3	平面方形の小瓶。底面釉剥ぎ。内面は無釉、ヘラ状の工具でなで上げ。外面に花弁文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10GY9/1) (断面)灰白(N8/0～9/1)

第133図　SP309出土遺物(1/3)

SE333

SE333は調査範囲の南西角にかろうじてかかった、井戸と見られる遺構である。調査区内にかかった部分は掘方のみであり、調査区南壁、西壁面の角に裏込めの石材と見られる花崗岩石材が認められることから石積みの井戸と考えられる。深さに関しては、標高1.2m程度までは掘削することができたが、それ以上追求することができなかった。また、掘方内からは出土遺物もほとんどなく、SE255と同様藩学絵図にも記載のない井戸であり、時期に関しても手がかりがない。

写真 13　SE333

SP299 ほか柱穴列

SP299、SP300、SP301、SP302、SP303、SP305、SP307、SP315の８基ピットは、いずれも柱根痕を伴う柱穴であり、約９mにわたって一直線に並んでいる。埋土が判別しにくく、いずれも藩学の造成土である第Ⅸ層中の粗砂層上面で検出している。これらの柱穴は、径が35～50cm、底の標高が2.5～2.7mであり、掘り込み面が標高3.2m程度と仮定すると、深さは50～70cmということになる。柱穴の間隔はSP300とSP315を除くと1.05mほどで、軸が座標北から西へ20°ほど振っている。SP315は第Ⅸ層をさらに20cm程度掘り下げた時点で検出しているため、10cmほどの深さしか残っておらず、柱根痕も認識できなかった。柱穴の間隔が1.05mほどとすると、SP299との間にもう２基存在することとなるが、旧西校舎基礎の撹乱もあり検出することはできなかった。

出土遺物は土師質土器の小片や備前焼と見られる擂鉢片がわずかに出土しているものの、図示が可能なもの、時期を判断できるものなどはない。

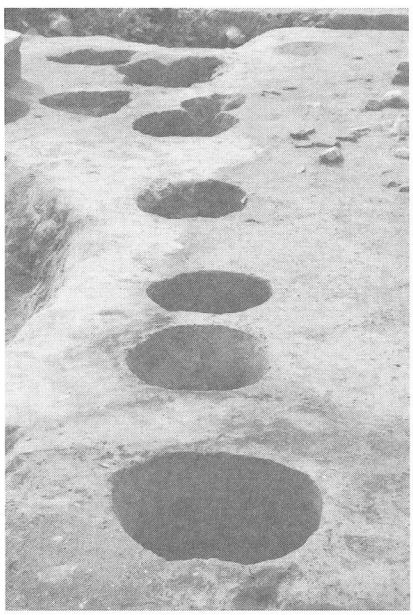
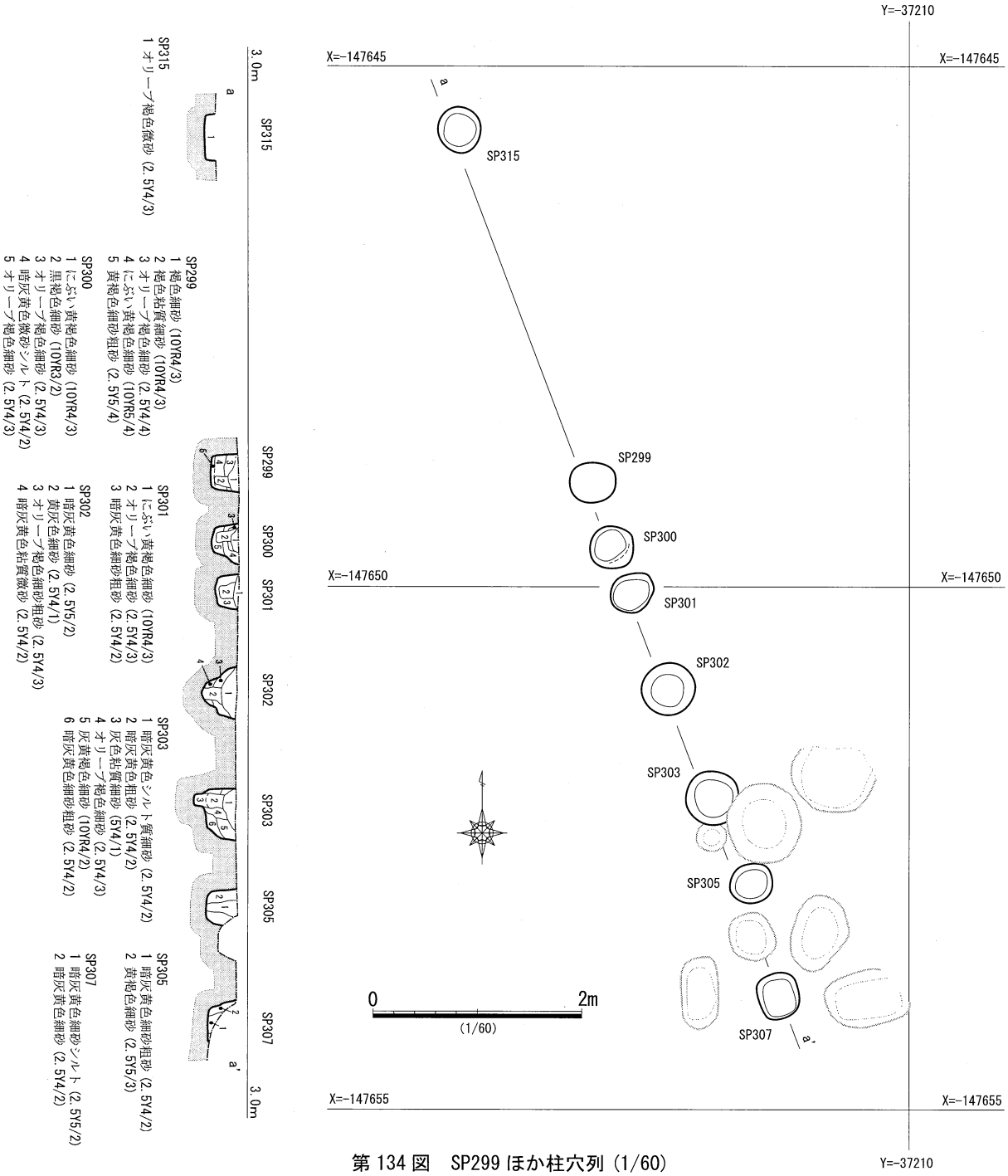


写真 14　SP299 ほか柱穴列
（北側から、手前が SP299）



第 134 図　SP299 ほか柱穴列 (1/60)

柱穴間の間隔が異なるSP300を含むか否か問題はのこるものの、規模や柱根痕を伴う構造の共通性などから一連の塀などの構造物ととらえて差し支えないものと思われる。なお、寛文期とされる藩学絵図では、北側の通路が調査範囲の中央付近から東に拡がっており、この東辺のラインが検出した柱穴列に位置、角度ともほぼ一致する。調査区北半部で検出した道路遺構やこの柱穴列の北側に検出した道路造成掘方の状況とも矛盾しない。検出状況や出土遺物から遺構の時期を判断することはできないが、道路遺構などとの関係や絵図との一致から、十七世紀後半代の藩学縮小以前の遺構である可能性が高い。

ｄ）小結

近世遺構面１・２は藩学開校の寛文9年(1669)以降の遺構面ととらえられ、藩学造成土と考えられる第Ⅸ層によりそれ以前の遺構と明確に分離することができる。調査範囲は開校以降、一貫して藩学校内だった部分を含み、初めて発掘調査により藩学関連遺構が確認された。特に、藩学開校時の状況を伝えるとされる、『岡山市史　宗教教育編』掲載の絵図とほぼ一致する礎石建物、道路遺構等の遺構が確認された意義は大きい。

ここまでにも触れてきているが、調査範囲のうち北半部は比較的遺構面や遺構の残りが良い。遺構は礎石の基礎地行の掘方や礎石跡が大半を占め、明治維新後に武家屋敷地が廃絶する際のものと見られる瓦だまりを除くとゴミの廃棄土坑などはほとんどない。一方、南半部は旧西校舎基礎のため遺構の残りが悪く、遺構面自体も残っていない。遺構はゴミの廃棄土坑や井戸など大形で深いものが多い。こうした傾向は、単に遺構面の残存状況のみを反映したものではなく、土地の利用形態自体の傾向でもある。すなわち、北半部は藩学開校時に藩学関係者の屋敷地がおかれた部分であり、藩学縮小後も一貫して武家屋敷地であった。礎石跡が多い－建物が建っていた空間であったため廃棄土坑なども少ない状況となっているようである。一方、南半部は藩学の主要施設の背後の空間にあたり、絵図などを見ても建物などが余り多くない部分である。もちろん遺構面が残っていれば、絵図に記載されている建物跡、礎石が検出された可能性はあるが、ゴミの廃棄土坑や井戸などが多いのはそのためと思われる。

出土遺物は、調査区北半部でゴミの廃棄土坑がほとんどないこともあるが、一般的な城下町遺跡と比べごく少ないように思われる。また、炮烙鍋など土師質の鍋、釜の類が少なく、土瓶、行平鍋など、焜炉類が多いように思われる。これも藩学が若干の学内居住者がいたとはいえ、基本的に生活空間ではないことに由来するものと思われる。

なお、調査区北半部については、遺構の残存状況が良いこと、特に藩学絵図と一致する遺構群が確認されたことから、岡山市教育委員会文化財課、同施設課、岡山市営繕課と遺構面の保存について協議した。その結果、この部分については杭などをできる限り避け、地中梁等基礎についても遺構面が存在する標高3.2mより上で掘削が収まるよう設計を検討することとなった。

注

（１）乗岡　実 2000「近世の備前焼擂鉢とその類似品」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1998（平成10年度）岡山市教育委員会
（２）野上建紀 2000「磁器の編年（色絵以外）1,碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
（３）岡山市史編集委員会編 1968『岡山市史』宗教・教育編　岡山市、P354「岡山藩学校古図」
（４）本文中にも記述しているが、この絵図は現在行方不明である。ただし、岡山大学所蔵の「池田家文庫」中に張り紙の下にこの絵図と同様の建物配置を描く絵図（T11-129-8）がある。T11-129-8の張り紙は、宝永５年(1708)とされる同じく「池田家文庫」中の城下図「岡山内曲輪絵図（T6-20）」の張り紙に対応していると見られ、18世紀初頭の藩学縮小に伴うものと考えられる。
（５）注(2)文献
（６）乗岡　実 2001「第4節 瓦について」『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会

４　近世遺構面３

ａ）遺構面の概要

近世遺構面３は岡山城三之外曲輪整備に伴う造成土とみられる第XI層の上面にあたり、標高2.５～2.7ｍの高さを測る。近世遺構面１・２とは厚さ60cmほどの岡山藩藩学の造成土を隔てており、旧西校舎基礎の下面から検出したもの以外、明瞭に分離することができる。岡山城三之外曲輪が整備される十七世紀初頭から岡山藩藩学の造営工事が開始される寛文9年(1669)正月の間の遺構面ととらえられる。

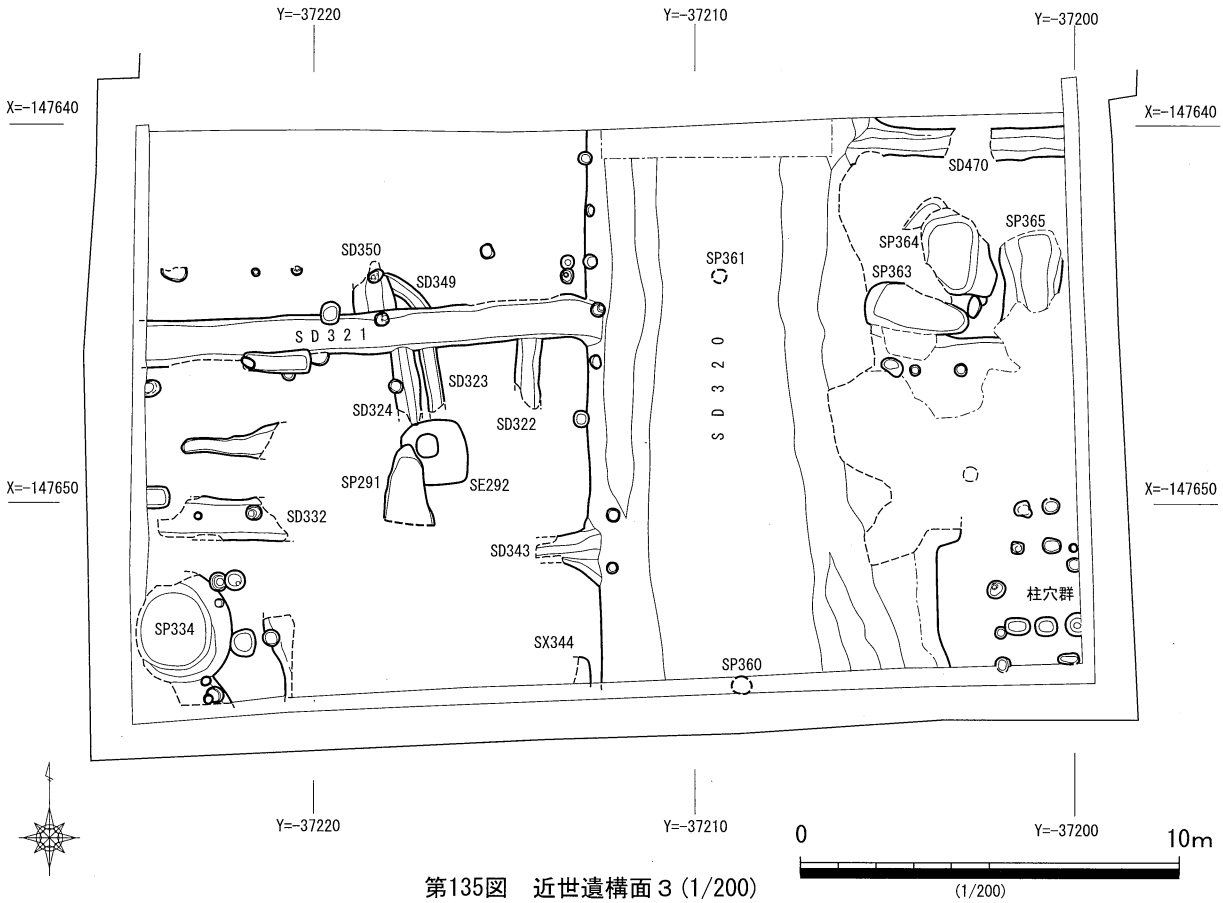
検出遺構はSD320 、SD321、SD470などの溝状遺構、SP291などのゴミの廃棄土坑とみられる遺構、井戸(SE292)、SP336などの柱穴などがある。藩学開校以前の調査地点は天台宗東叡山寛永寺の末寺である円乗院や武家屋敷地であり、検出遺構の大半はこれらの関連遺構や城下の水路などであると考えられる。

なお、近世遺構面１・２に伴う藩学関連遺構保存のため、調査は南半部の約400㎡のみを対象としている。

ｂ）遺構と出土遺物

SP291

SP291はX=-147650、Y=-37217.5付近に所在する長楕円形の土坑で、南側はSE255に切られている。全体が旧西校舎基礎内であるため、検出状況からは遺構面が特定できないが、出土遺物等から近世遺構

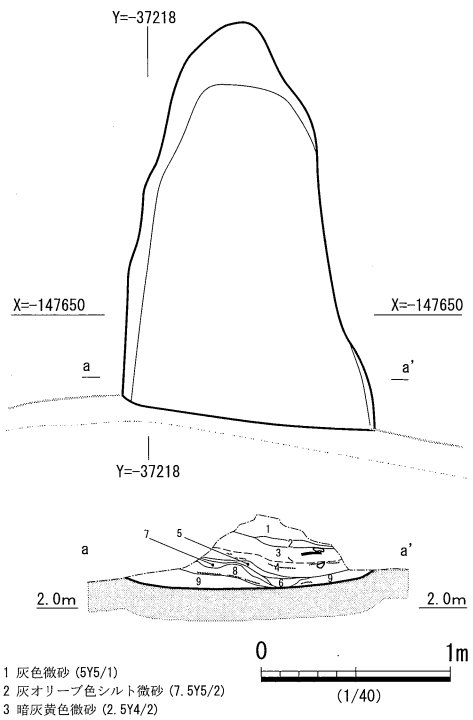


第135図　近世遺構面３(1/200)

面３に伴うものと考えた。残っている部分で、長径2.0m、短径1.3m、底面は標高2.1mを測る。掘り込み面が、近世遺構面３だとすれば、深さは70cm程度ということになる。埋土は木片や木製品などの植物質を多量に含む層(第136図4層)、炭化物を多量に含む層(5層)、層の下面付近に薄い板材が集中する層(8層)などがあり、ゴミなどの廃棄土坑とみられる。

出土遺物には陶磁器類の他、木製品がある。

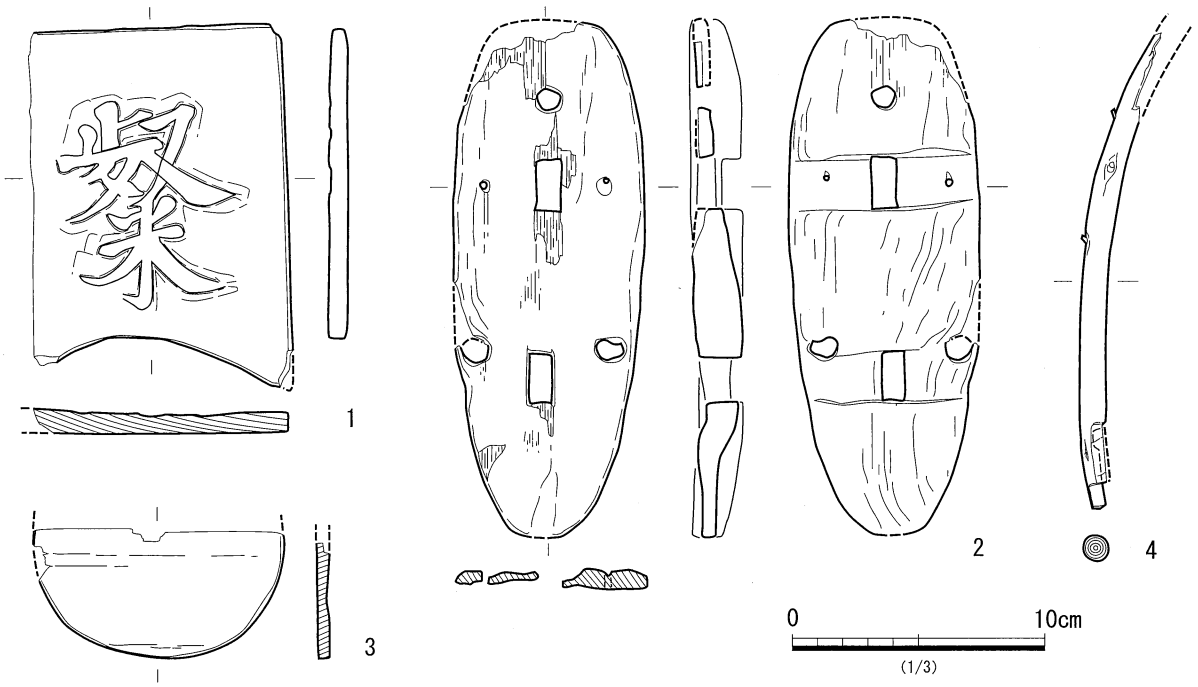
第137図1は厚さ0.9cmほどの板材で、表面に「粲」の文字を浮彫にしている。長さ14.5cmほどのほぼ長方形で、下辺は円弧状に抉れている。文字より右側は欠損しているが、下辺の形態からも、さほど大きく割れていないものと思われる。用途などはわからないが、何かに取り付けた札のようなものと思われる。なお、「粲」の文字には「白米」、「潔い」、「美しい」などの意味がある。2は差歯下駄で、残存状態が悪くつぶれなどが激しいが、残存長20.2cm、幅7.6cmを測る。3は円形の板材で1/2程度の破片だが、曲物の底板と見られる。4は樹皮を剥がしただけの枝で、片側の端部に加工痕がみられ、断面方形の突起や方形の抉り込みを設けている。もう一方の端部は欠損しているが、若干湾曲しており、手網などの部材と思われる。



1 灰色微砂 (5Y5/1)
2 灰オリーブ色シルト微砂 (7.5Y5/2)
3 暗灰黄色微砂 (2.5Y4/2)
4 暗オリーブ褐色微砂 (2.5Y3/3) 木質、有機質多く含む
5 黒色炭化物層 (N1.5/0)
6 灰色シルト (5Y4/1) 木炭粒多く含む。
7 灰色シルト (5Y4/1) 1cm大の灰オリーブ色シルト粒多く含む
8 灰～オリーブ黒色シルト (5Y4/1～3/1) 下面に板材あり
9 灰色シルト微砂 (5Y4/1)

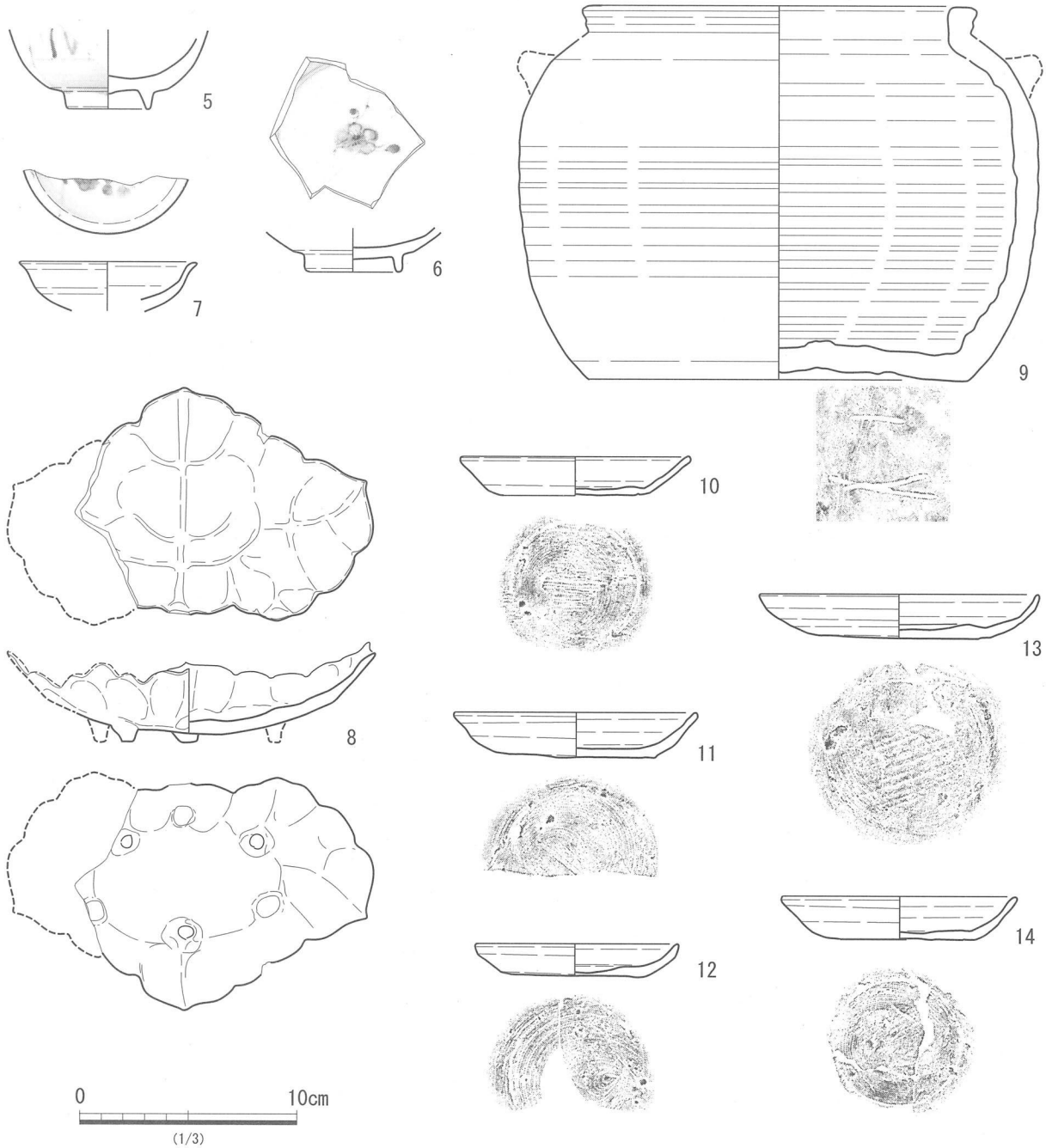
第136図　SP291(1/40)

第138図には陶磁器類、土器類をあげている。5～7は肥前産とみられる染付磁器である。5は高台部



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
1	木製品	木札	長さ　14.5 / 厚さ　0.9	加工痕のある板材。表面に「粲」の文字を浮彫。	
2	木製品	下駄	長さ　20.2 / 幅　7.6 / 厚さ　1.9	差歯下駄。残存状態が悪く、ゆがみやつぶれが激しい。前方の差歯は釘で留めていたよう。	
3	木製品	曲物(底板)	径　9.9 / 厚さ　0.6	1/2程度の破片。	
4	木製品	部材(タモ?)	残存長　18.9 / 径　1.0	樹皮を取っただけの枝で、片側端部に断面方形の突起がある。突起の内側に方形の抉込みとそこから突起側に溝がのびる。	

第137図　SP291出土遺物1(1/3)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
5	肥前染付磁器	碗	高台径　3.9	体部下半の破片。丸碗。高台部無釉。外面に網文？。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
6	肥前染付磁器	碗	高台径　4.5	高台部付近の破片。高台部釉剥ぎ。高台に砂付着。高台外面、高台内に圏線。内面見込に花(梅?)。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
7	肥前染付磁器	皿	口径　(8.0)	口縁部2/5周程度の破片。内面見込に花弁文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(5G8/1) (断面)灰白(N8/0)
8	肥前磁器	皿	短径　10.8 高さ　4.6	木葉形、型押しの皿。底部に突起状の脚６があり、うち３が欠損。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(7.5Y7/1) (断面)灰白(2.5Y7/1)
9	備前	壺	口径　(18.4) 高さ　(17.5)	体部以下1/6周程度の破片。接合しない口縁部破片あり。肩部に突起。体部外面下部に板状工具によるケズリに近いナデ。外面底面指頭圧痕、ヘラ記号あり。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰赤～にぶい赤褐(2.5YR4/2～4/3) (内面)明赤褐(2.5YR5/6) (断面)明赤褐(2.5YR5/6)
10	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径　10.5 高さ　2.3	内外面ともナデ。底部外面に糸切り痕、中央部を板ナデ。口縁部内外面に煤付着。	(胎土)1mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)灰白(10YR8/2) (断面)浅黄橙(10YR8/3)
11	土師質土器	小皿	口径　11.1 高さ　2.1	内外面ともナデ。底部外面に糸切り痕。	(胎土)1mm以下の砂粒を含む (焼成)良好	(内外面)灰白(7.5YR8/2) (断面)灰白(7.5YR8/2)
12	土師質土器	小皿	口径　9.3 高さ　1.6	内外面ともナデ。底部外面に糸切り痕。	(胎土)0.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)灰白～浅黄(2.5Y8/1～8/3) (断面)灰白～灰(2.5Y7/1～N5/0)
13	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径　12.8 高さ　2.1	内外面ともナデ。底部外面に糸切り痕、中央部を板ナデ。内面に煤付着。	(胎土)1mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)灰白(10YR8/1) (断面)灰白(10YR8/1)
14	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径　10.7 高さ　2.0	内外面ともナデ。底部外面に糸切り痕、中央部を板ナデ。口縁部内外面に煤付着。	(胎土)1mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい黄橙(10YR7/3) (断面)浅黄橙(10YR8/3)

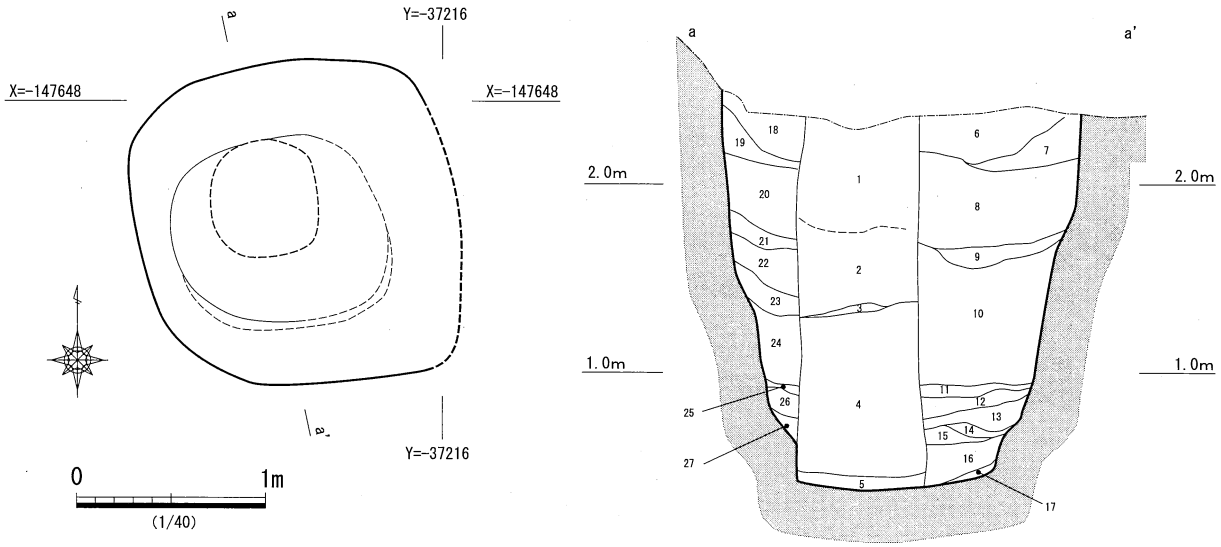
第138図　SP291出土遺物2(1/3)

を無釉に、6は高台畳付けに白色の細かい砂が付着している。8は木の葉を模した型打成形の磁器であり、やはり肥前産と見られる。底部に突起状の脚６があり、内面は葉脈を表現している。9は備前焼の壺である。体部から底部の破片だが、口縁部から頸部にかけての接合しない破片があり、口径18.4cm、器高17.5cm程に復元できる。肩部に一対の突起(耳)があるようである。10 ～ 14は土師質土器の小皿である。10、13、14には口縁部の内外面などに煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。11、12には煤の付着は認められない。

SP291の出土遺物には、高台部無釉碗や砂目積みの碗など十七世紀前半代の特徴を持つものが目立つ。ゴミの廃棄土坑内の遺物であり、掘り込み面も不明であるため時期を限定することは困難だが、藩学開校よりも遡る可能性が高い。

SE292

SE292はX=-147648.5、Y=-37216.5付近に所在する井戸である。これも全体が旧西校舎基礎内にあるため掘り込み面が分からないが、SP291に切られていることから近世遺構面３に属する可能性が高い。SE292は、木製の井戸枠を入れていたと見られ、井戸枠の木質自体は残っていないが、竹製のタガの痕跡が20 ～ 40cm間隔で残っていた。井戸の直径は60 ～ 69cm、掘方は径1.9mを測る。底は標高0.38mであり、2.3mほどの深さだったと思われる。なお、出土遺物はほとんどなく、井戸内から漆塗りの椀が1点出土しているのみである。これはほぼ完形の木製の椀で、口径11.7cm、高さ3.7cmを測る。内面に朱漆、外面に黒漆を塗っている。

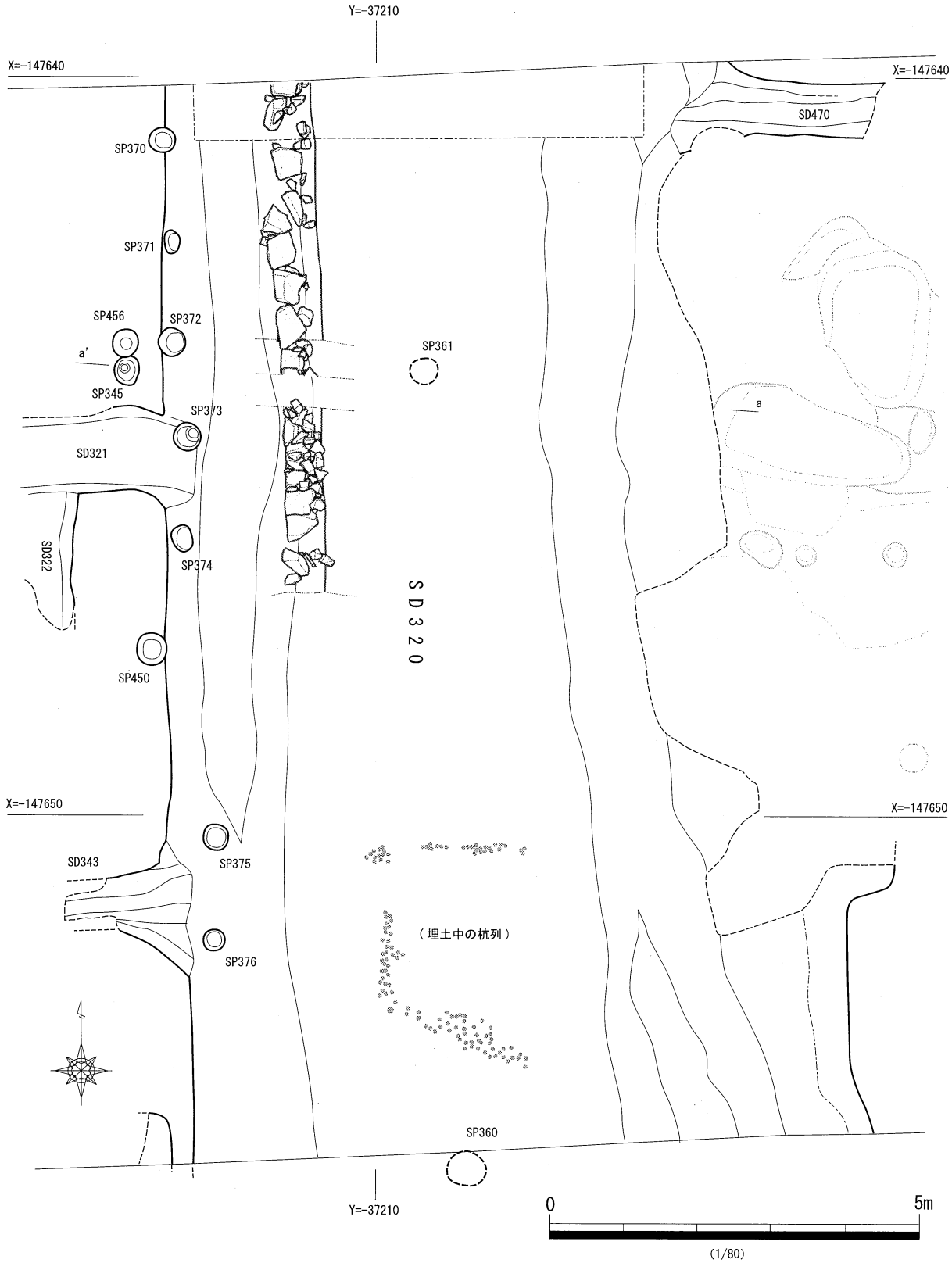


1 暗灰黄色粗砂(2.5Y4/2) 1 ～ 5cm大の暗灰黄～オリーブ褐色粘土ブロック多く含む
2 灰～オリーブ黒色粗砂(7.5Y4/1 ～ 3/1) 1 ～ 5cm大の灰色粘土ブロック多く含む
3 灰色粗砂(10Y5/1)
4 灰～オリーブ黒色粗砂(7.5Y4/1 ～ 3/1) 1 ～ 5cm大の灰色粘土ブロックまばら
5 灰色粗砂(7.5Y4/1)
6 黄褐色シルト(2.5Y5/3) 1 ～ 3cm大の暗灰黄色粘土シルトブロックを多量に含む
7 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)
8 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2) 3 ～ 6cm大の黄灰色シルトブロック多い
9 灰色微砂(5Y4/1) 1 ～ 5cm大の暗灰黄～オリーブ灰色粘土シルトブロック多い
10 灰色微砂(5Y4/1) 1 ～ 5cm大の灰オリーブ色シルトブロック含む
11 灰色微砂細砂(5Y4/1) 3 ～ 8cm大の灰オリーブ色シルト、1cm程度の黒色粘土ブロックを多く含む
12 暗オリーブ灰色微砂(2.5GY4/1 ～ 3/1)
13 オリーブ灰～暗オリーブ灰色微砂(2.5GY5/1 ～ 4/1)
14 黒色粘質微砂(5Y2/1)
15 灰色微砂(5Y4/1)
16 灰色微砂(5Y4/1) 1 ～ 5cm大のオリーブ灰色シルトブロック含む
17 灰色粗砂(5Y4/1)
18 暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)
19 暗灰黄～黄灰色シルト(2.5Y4/2 ～ 4/1)
20 灰色微砂シルト(7.5Y4/1) 1 ～ 5cm大の灰色粘土ブロックまばら
21 灰オリーブ色シルト(5Y5/2)
22 灰色微砂(5Y4/1) 1 ～ 5cm大の灰オリーブ色シルトブロック含む
23 灰オリーブ色粘質シルト(5Y5/2 ～ 4/2)
24 灰色粘質シルト微砂(5Y4/1)
25 オリーブ灰色シルト(2.5GY5/1)
26 暗オリーブ灰色シルト(2.5GY4/1)
27 灰色細砂(5Y4/1)

第 139 図　SE292(1/40)

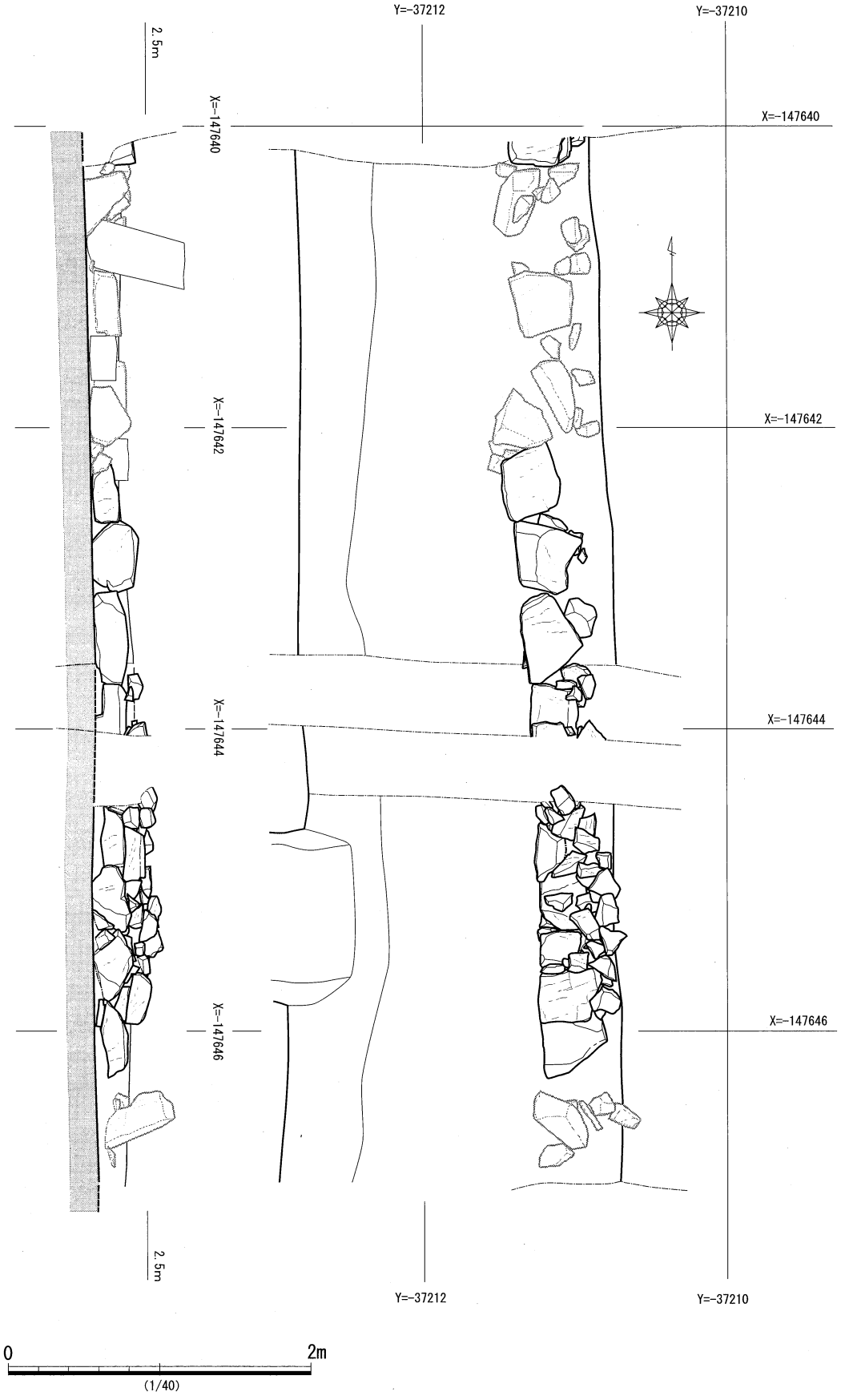
SD320

SD320は調査区のほぼ中央を南北に流れる大形の溝状遺構である。幅7 ～ 9m、底は標高1.2m程度で

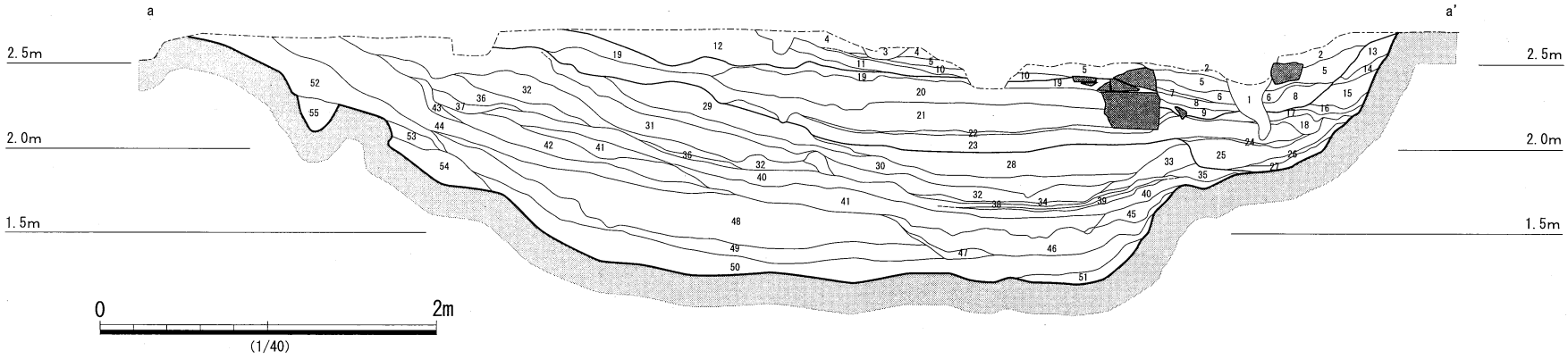


第 140 図　SD320(1/80)

検出面から約1.3mの深さがある。埋土は黒色～オリーブ灰色の粘質土が中心で有機質や未分解の植物質を多く含み、概ね水のあまり流れない淀みような状態だったものと思われる。東側の岸寄りには、標高2.0～2.2mの高さの埋土中に溝内に張り出すような形で杭や径1cm程度の竹が多数突き立てられており、草や木の枝が多量に堆積している部分があった。また、SD320の北西部の上層には幅50cm、高



第 141 図　SD320 上層石組み遺構 (1/40)



1	生痕	灰オリーブ色～オリーブ灰色細砂 (5Y6/2 ～ 4/2)
2	SD320 上層	にぶい黄褐色細砂 (2.5Y6/3) 鉄分沈着。
3	〃	暗灰黄色細砂 (2.5Y5/2)
4	〃	黄褐～暗灰黄色砂質シルト (2.5Y5/2 ～ 5/3)
5	〃	黄褐色細砂 (2.5Y5/3)
6	〃	オリーブ灰色細砂 (5Y6/3)
7	〃	灰オリーブ色細砂 (5Y5/3)
8	〃	灰オリーブ色細砂 (5Y5/2)
9	〃	灰色細砂 (5Y4/1) 5mm 程度の木炭粒を多く含む。
10	〃	にぶい黄色細砂 (2.5Y6/3) 木炭粒を多く含む。
11	〃	黄褐～暗灰黄色砂質シルト (2.5Y5/2 ～ 5/3)
12	〃	黄褐～にぶい黄褐色微砂細砂 (2.5Y5/3 ～ 10YR4/3)
13	SD320 下層 1	黄褐色細砂 (2.5Y5/4)
14	〃	黄褐色細砂 (2.5Y5/4)
15	〃	灰オリーブ色細砂 (5Y5/2 ～ 7.5Y4/2)
16	〃	灰オリーブ色細砂 (5Y6/2)
17	〃	暗オリーブ～灰オリーブ色細砂 (5Y4/3 ～ 5/3)
18	〃	灰色微砂細砂 (5Y4/1)
19	〃	灰黄色細砂 (2.5Y6/2)
20	〃	灰オリーブ色微砂 (5Y5/2)
21	〃	灰オリーブ色砂質シルト (5Y5/2) 部分的に薄いシルトと微砂の互層状を呈する。
22	〃	灰白色微砂 (5Y7/2) 肌理の細かい砂層。
23	〃	黒色微砂シルト (10Y2/1) 木片等有機質を多く含む。部分的に黒色シルト、灰黄色微砂、有機質を含む灰黄褐色土の互層状を呈する。
24	〃	灰オリーブ色細砂 (5Y4/2)
25	〃	灰黄色微砂 (2.5Y4/1)
26	〃	灰色シルト (5Y4/1) と灰色微砂 (5Y6/1) からなるラミナ状堆積層
27	〃	灰色シルト (5Y4/1)
28	SD320 下層 2	灰黄色粘土シルト (2.5Y4/1)
29	〃	オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/3)
30	〃	オリーブ黒色シルト (10Y3/1) 有機質の強い部分と砂質の強い部分がある。
31	〃	オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/3) ～オリーブ黒色微砂シルト (5Y3/2)
32	〃	オリーブ黒色粘土シルト (7.5Y3/2) 有機質、木片を多く含む。
33	〃	灰オリーブ色細砂 (7.5Y4/2)
34	〃	オリーブ黒色粘土シルト (10Y3/1) やや砂質強い。
35	〃	オリーブ黒色粘土シルト (10Y3/1)
36	〃	暗灰黄～オリーブ褐色微砂シルト (2.5Y4/2 ～ 4/3)
37	〃	灰オリーブ色細砂 (5Y4/2)
38	〃	オリーブ黒色粘土 (5Y3/1)
39	〃	オリーブ黒色粘土シルト (10Y3/1) 木片を多く含み、やや有機質強い。
40	〃	オリーブ黒色粘土シルト (10Y3/1) 有機質、木片を多く含む。
41	〃	黒色粘土 (2.5GY2/1) 有機質、板材等を含む。
42	〃	暗灰黄色微砂細砂 (2.5Y5/2)
43	〃	暗オリーブ色細砂粗砂 (5Y4/3)
44	〃	オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/3) ～暗灰黄色微砂シルト (2.5Y4/2)
45	〃	オリーブ黒色細砂 (7.5Y3/1)
46	〃	暗オリーブ灰色粘土シルト (2.5GY3/1) 有機質、木質遺物を含む。
47	〃	オリーブ黒色粘土シルト (10Y3/1)
48	〃	オリーブ黒色粘土 (5Y3/2)
49	〃	オリーブ黒～灰オリーブ色粘質微砂 (5Y3/2 ～ 4/2)
50	〃	灰オリーブ色細砂 (5Y4/1)
51	〃	オリーブ黒色砂質シルト (5Y3/1)
52	〃	黄褐色細砂 (2.5Y5/3) 粗砂をブロック状に含む。
53	〃	暗灰黄色微砂シルト (2.5Y5/2)
54	〃	オリーブ褐色粗砂 (2.5Y4/4)
55	〃	黄褐色細砂 (2.5Y5/4) 杭跡、もしくは生痕か。

第 142 図　SD320 土層断面 (1/40)

さ30cm程度の花崗岩割石を並べた列石が検出された。この列石は、旧西校舎基礎により一部壊されているが、Y=-37211mライン付近におよそ7mにわたって、西側に面をそろえて並んでいた(第141図)。石材は標高2.1m程の高さの薄い砂層上に基礎構造などを伴わず直接置かれており、残りのよい部分でも二段しか残っていない。SD320の最終段階の護岸とみられ、この段階には幅1.5m、深さ0.5m程度の細い溝になっていたようである。

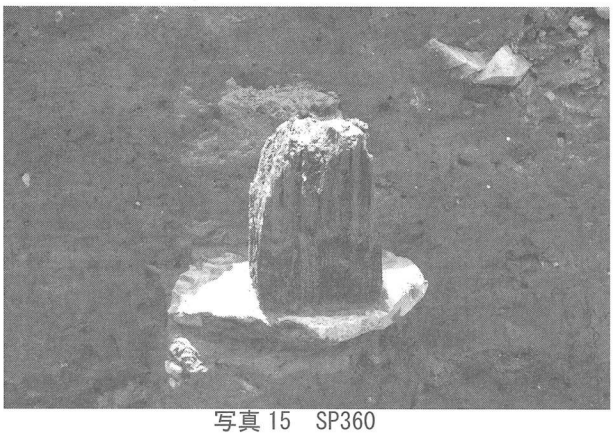
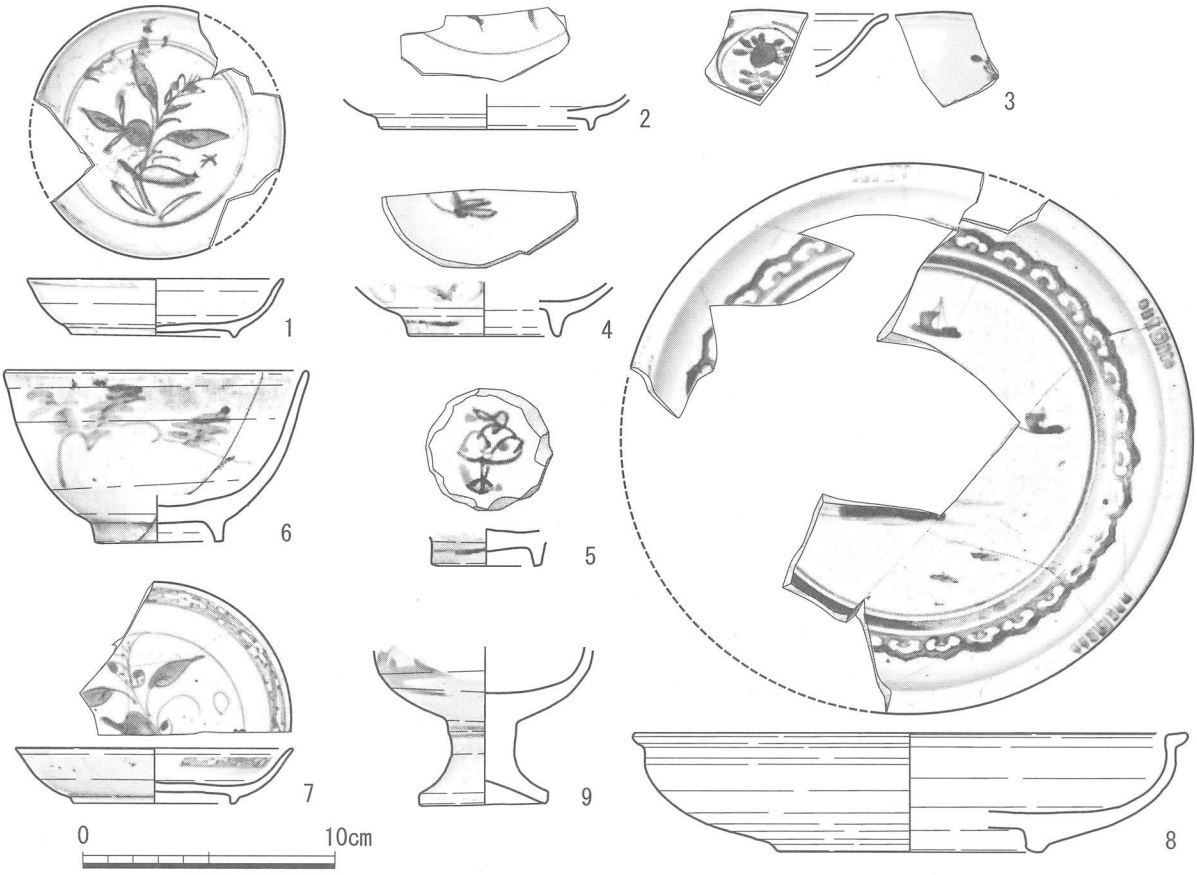


写真15　SP360

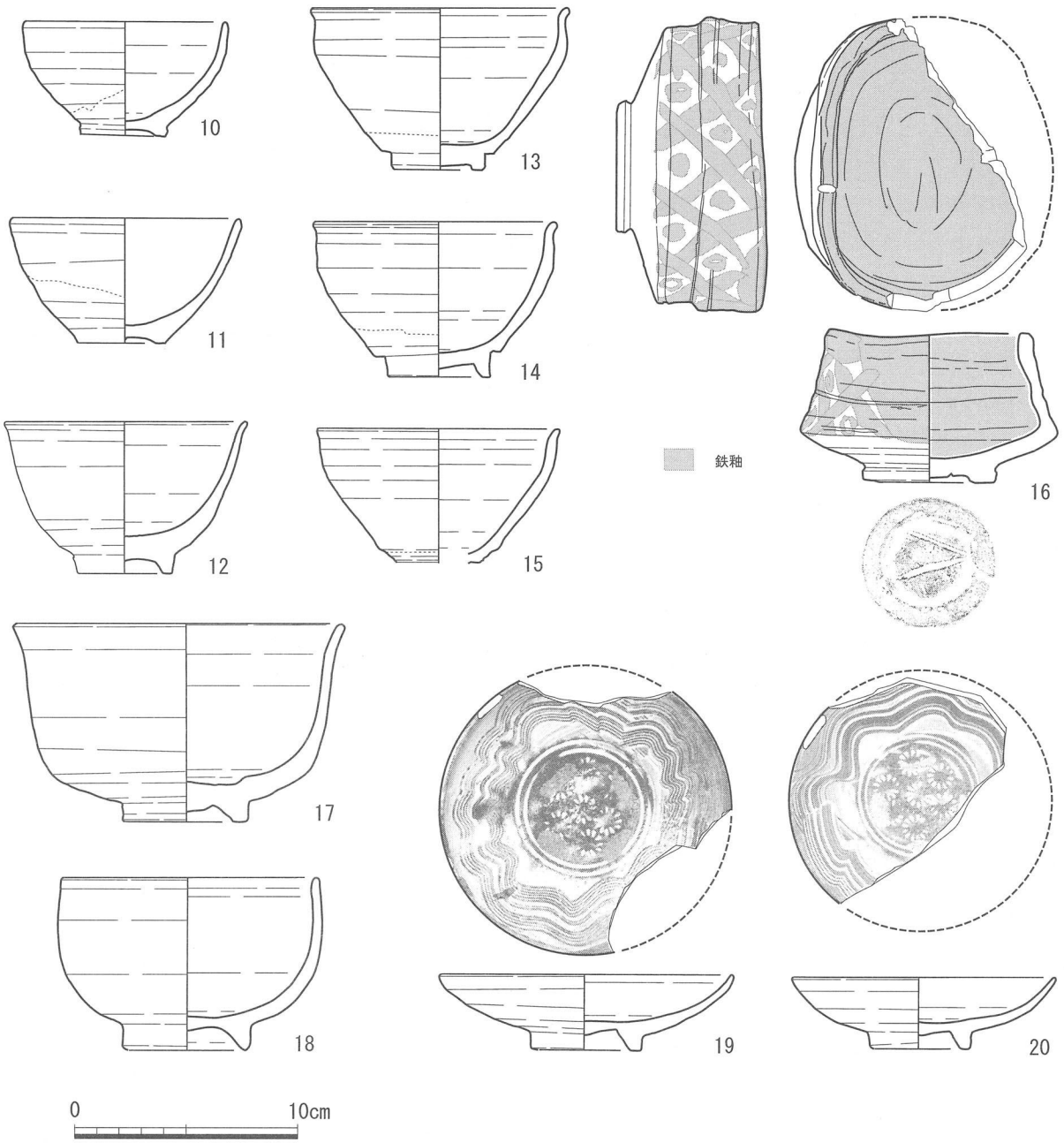
SD320西側の肩や斜面、SD320の中央部付近からはSP360、SP361やSP370などの柱穴を検出している。



(1/3)

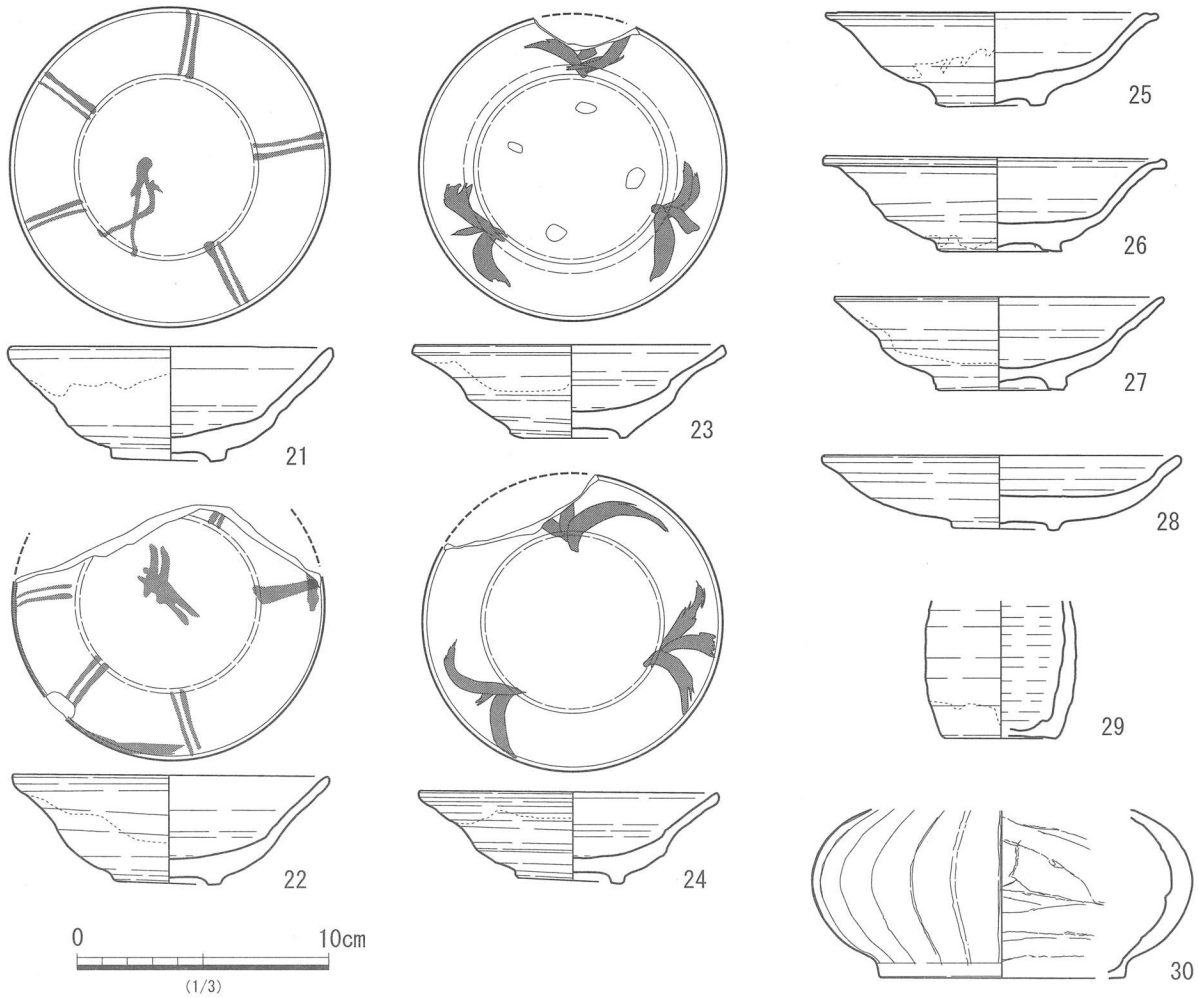
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	中国産染付磁器 (景徳鎮)	皿	口径　10.1 高さ　2.4	高台部釉剥ぎ。口縁部外面、高台付け根に圏線それぞれ１条。内面は見込に草花文。口縁部内面に１条、見込端に２条の圏線。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
2	中国産染付磁器 (景徳鎮)	皿	高台径 (8.2)	高台部付近の小破片。高台部釉剥ぎ。内面は見込に草花文、見込端に１条の圏線。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰～灰白(10GY8/1 1～N8/0)/(断面)灰白(N8/0)
3	中国産染付磁器 (景徳鎮)	皿	—	口縁部付近の小破片。内面に花弁文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明青灰(5B7/1) (断面)灰白(N8/0)
4	中国産染付磁器 (漳洲窯)	皿	高台径 (5.9)	高台部付近の小破片。高台部釉剥ぎ。内面は見込に草花文。外面に不明文様。外面下部と高台外面に圏線１条。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
5	中国産染付磁器 (漳洲窯)	皿?	高台径 (4.3)	高台部の破片。高台部釉剥ぎ。内面は見込に花弁文。高台外面に圏線１条。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰～灰白(7.5GY8/1 ～2.5GY8/1)/(断面)灰白(N8/0)
6	肥前染付磁器	椀	口径　11.9 高さ　6.9	口縁部～体部の一部を欠損。高台部釉剥ぎ。高台畳付けに砂付着。外面に山(?)と松(?)。漆状の接着剤で焼き継ぎ風に破片を接合。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明オリーブ灰(2.5GY7/1) (断面)灰白(N8/0)
7	中国産染付磁器 (景徳鎮)	皿	口径　(10.9) 高さ　2.2	1/4周程度の破片。高台部釉剥ぎ。口縁部内面に四方襷文、見込に草花文。口縁部外面に圏線１条。割れ口に漆状の接着剤付着。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・明青灰(5B7/1) (断面)灰白(N8/0)
8	肥前染付磁器	皿	口径　(21.8) 高さ　4.8	1/4周程度の破片。高台部釉剥ぎ。口縁部に大小の方格を並べた文様。如意頭文で見込を区画、区画内に海、島(?)、船を描く。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)釉・灰白(10Y7/2) (断面)灰黄(2.5Y7/2)
9	肥前染付磁器	仏飯具	底径　5.0	体部上半以上欠損。底部無釉。外面に草花文(?)。底面にひも状の文様。	(胎土)やや砂質 (焼成)良好	(釉)釉・灰白(2.5GY8/1) (底面・断面)灰白(2.5Y8/2)

第143図　SD320出土遺物1(1/3)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
10	肥前陶器	碗	口径　8.9 高さ　5.2	体部下半～高台部無釉。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰白(5Y8/1)/(外面)赤褐～にぶい黄橙(10YR4/3～7/2)・(断面)灰黄褐(10YR6/2)
11	肥前陶器	碗	口径　10.1 高さ　5.7	体部下半～高台部無釉。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)透明釉・にぶい赤褐(5YR5/3) (外面・断面)にぶい赤褐(2.5YR5/1)
12	肥前陶器?	碗	口径　10.7 高さ　6.9	体部下半～高台部無釉。	(胎土)0.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(釉)透明釉・にぶい黄(2.5Y6/3) (外面)にぶい黄橙～橙(10YR6/3～5YR6/6) (断面)にぶい橙(7.5YR7/3)
13	瀬戸美濃系陶器	碗(天目碗)	口径　11.9 高さ　7.1	高台部無釉。高台内に「上」の墨書。	(胎土)砂質強い。1.5mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(釉)鉄釉・褐～黒(7.5YR4/4～10YR2/1)/(外面)にぶい黄橙(10YR6/3)/(断面)灰白(10Y8/2)
14	瀬戸美濃系陶器	碗(天目碗)	口径　10.7 高さ　7.0	高台部無釉。	(胎土)砂質強い。1mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(釉)鉄釉・にぶい赤褐～赤黒(5YR1/3～10R2/1) (外面・断面)灰白(2.5Y8/1)
15	瀬戸美濃系陶器	碗(天目碗)	口径　(10.8)	1/6周程度の破片、高台欠損。高台部無釉。	(胎土)砂質強い。1mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(釉)鉄釉・にぶい黄褐～黒(10YR1/3～2/1) (外面・断面)灰白(5Y8/1)
16	瀬戸美濃系陶器	碗(織部)	長径　13.5 高さ　6.9	口縁部1/2周程度、高台部は完存。外面に鉄釉で格子目状の文様を描く。高台部無釉。高台内に三角形のヘラ記号状沈線。	(胎土)砂質強い。1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)鉄釉・黒(N2/0)、透明釉・灰白(10YR8/2) (外面・断面)灰白(10YR8/2～2.5Y8/1)
17	肥前陶器	碗	口径　14.8 高さ　9.0	高台部無釉。	(胎土)1mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰白(7.5Y7/1)/(外面)にぶい赤褐～にぶい褐(5YR5/4～7.5YR5/3)/(断面)灰白(5Y7/1)
18	肥前陶器 (内野山系)	碗	口径　11.3 高さ　7.8	1/3周程度の破片。高台部釉剥ぎ。体部外面に黄緑～青緑色の釉薬を斑紋状にかける。	(胎土)緻密 (焼成)良好	(釉)透明釉・淡黄～浅黄(2.5Y8/3～7/3) (断面)浅黄(2.5Y8/3)
19	肥前陶器	皿(三島手)	口径　13.1 高さ　3.5	高台部無釉。見込に４カ所の胎土痕。内面に白化粧土の刷毛目、及び花文を象眼。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)透明釉・黒褐(10YR3/1) (高台部・断面)赤褐(10YR4/4)
20	肥前陶器	皿(三島手)	口径　11.8 高さ　3.2	高台部無釉。見込と高台に各４カ所の胎土痕。内面に白化粧土の刷毛目、及び花文を象眼。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)透明釉・黒褐(10YR3/1) (高台部・断面)赤褐(10YR4/4)

第144図　SD320出土遺物2(1/3)

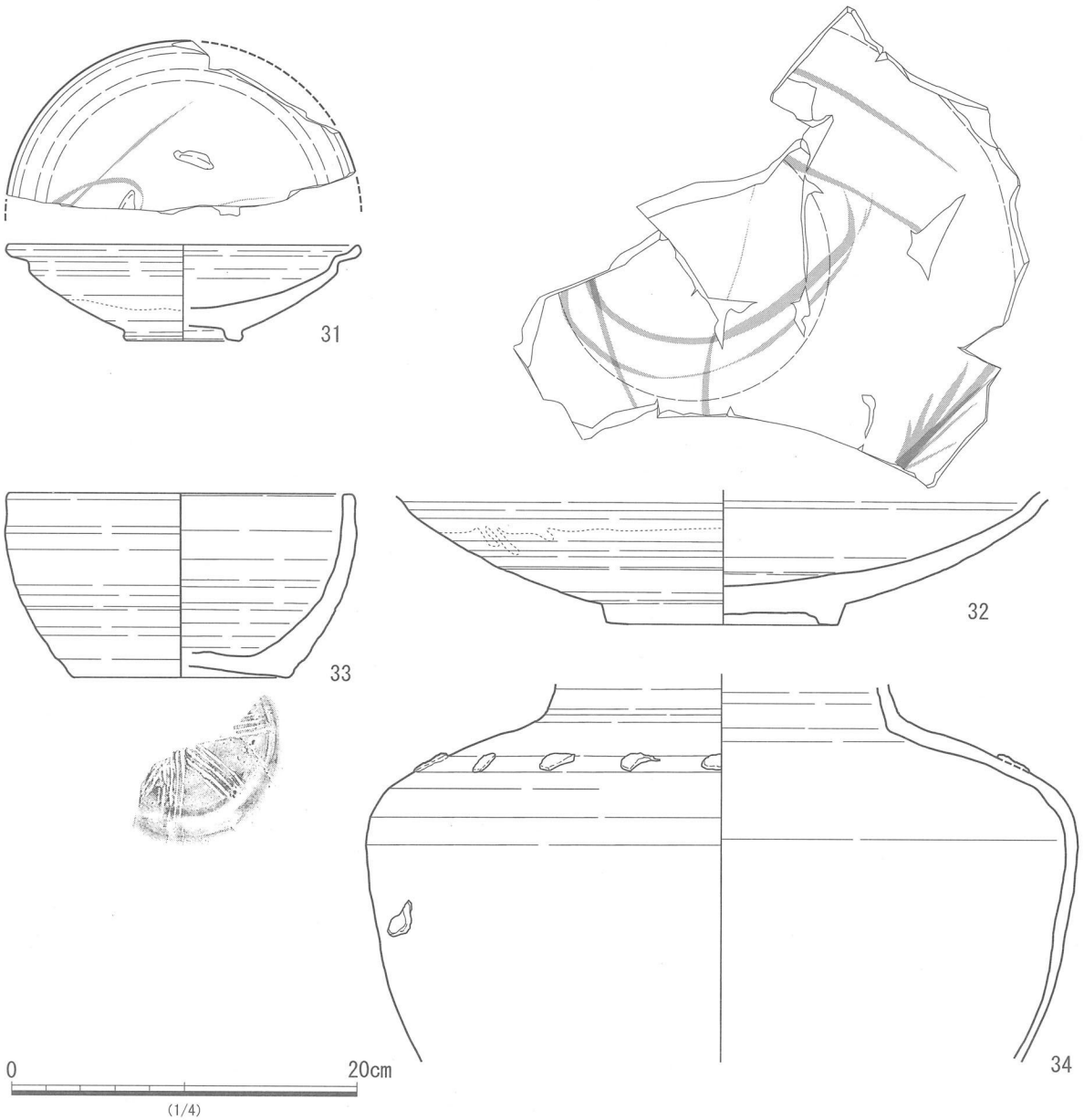


No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
21	肥前陶器	皿	口径　12.8 高さ　4.6	体部下半～高台部無釉。内面に鉄釉で二条一単位の放射状の文様。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を含む(焼成)良好	(釉)灰釉・灰黄褐(10YR5/2)/(外面)にぶい赤褐(2.5YR4/3)/(断面)にぶい橙(7.5YR7/3)
22	肥前陶器	皿	口径　12.6 高さ　4.1	体部下半～高台部無釉。内面に鉄釉で二条一単位の放射状の文様。	(胎土)1mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・にぶい黄橙(10YR6/3)/(外面)にぶい黄褐(10YR5/3)/(断面)にぶい黄橙(10YR7/4)
23	肥前陶器	皿	口径　12.5 高さ　3.7	体部下半～高台部無釉。内面に鉄釉で植物(?)文様。見込に胎土目痕４カ所。	(胎土)3.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰褐(7.5YR6/2)/(外面)にぶい橙(7.5YR6/4)/(断面)にぶい褐(7.5YR6/3)
24	肥前陶器	皿	口径　11.9 高さ　3.6	体部下半～高台部無釉。内面に鉄釉で植物(?)文様。	(胎土)砂質強い。3mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰～灰褐(7.5YR6/1～5/2)/(外面)にぶい褐(7.5YR5/4)/(断面)褐灰(7.5YR6/1)
25	肥前陶器	皿	口径　13.2 高さ　3.8	体部下半～高台部無釉。見込に砂付着(砂目痕)。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰～明オリーブ灰(7.5YR6/1～5GY7/1) (外面)にぶい黄橙(10YR6/4)/(断面)灰白(N7/0)
26	肥前陶器	皿	口径　13.6 高さ　3.8	高台部無釉。高台部周辺、見込に砂付着(砂目痕)。	(胎土)1mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰オリーブ(5Y6/2)/(外面)橙(2.5YR6/6)/(断面)灰白～にぶい黄橙(N7/0～10YR6/3)
27	肥前陶器	皿	口径　13.1 高さ　3.8	体部下半～高台部無釉。高台部周辺、見込に砂付着(砂目痕)。	(胎土)1mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰白(N8/0～2.5GY8/1)/(外面)にぶい黄橙(10YR6/4)/(断面)灰白(N7/0)
28	肥前陶器	皿	口径　14.2 高さ　3.0	高台部無釉。高台部周辺に砂付着。	(胎土)1mm以下の砂粒を多量に含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰白(5Y7/1) (外面)にぶい黄橙(10YR6/3) (断面)にぶい黄橙～灰白(10YR7/3～2.5Y7/1)
29	瀬戸美濃系陶器	茶入?	最大径　5.9 残存高　5.5	底部1/3周程度の破片、体部上半欠損。体部下端～底部無釉。	(胎土)緻密、やや砂質。(焼成)良好	(釉)鉄釉・黒褐(10YR2/2)/(外面)灰褐(5YR4/2) (断面)灰白(5Y8/1)
30	関西系？陶器	壺?	最大径(15.0) 残存高　6.7	体部1/8周程度の破片。外面に緑色釉。内面強い指ナデ。	(胎土)2mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(釉)緑色釉・(内面・断面)灰白(10YR8/2)

第145図　SD320出土遺物3(1/3)

SP360は南側の壁面付近から検出したもので、SD360の埋土上から掘り込まれている。柱穴内に板状の石材を置き、その上に一辺17cmほどの断面方形の柱を立てていた(写真15)。SD361も同様の柱穴であり、石材は伴わないもののほぼ同じ大きさの断面方形の柱が残存していた。SP370などは柱根は残っていないものの柱穴や杭跡とみられ、SD320と重なるものはいずれもSD320の埋土上から掘られているようである。間隔も一定でなく組み合わせも不明だが、SD320が縮小した段階の溝脇に作られた塀などに伴うものと考えられる。

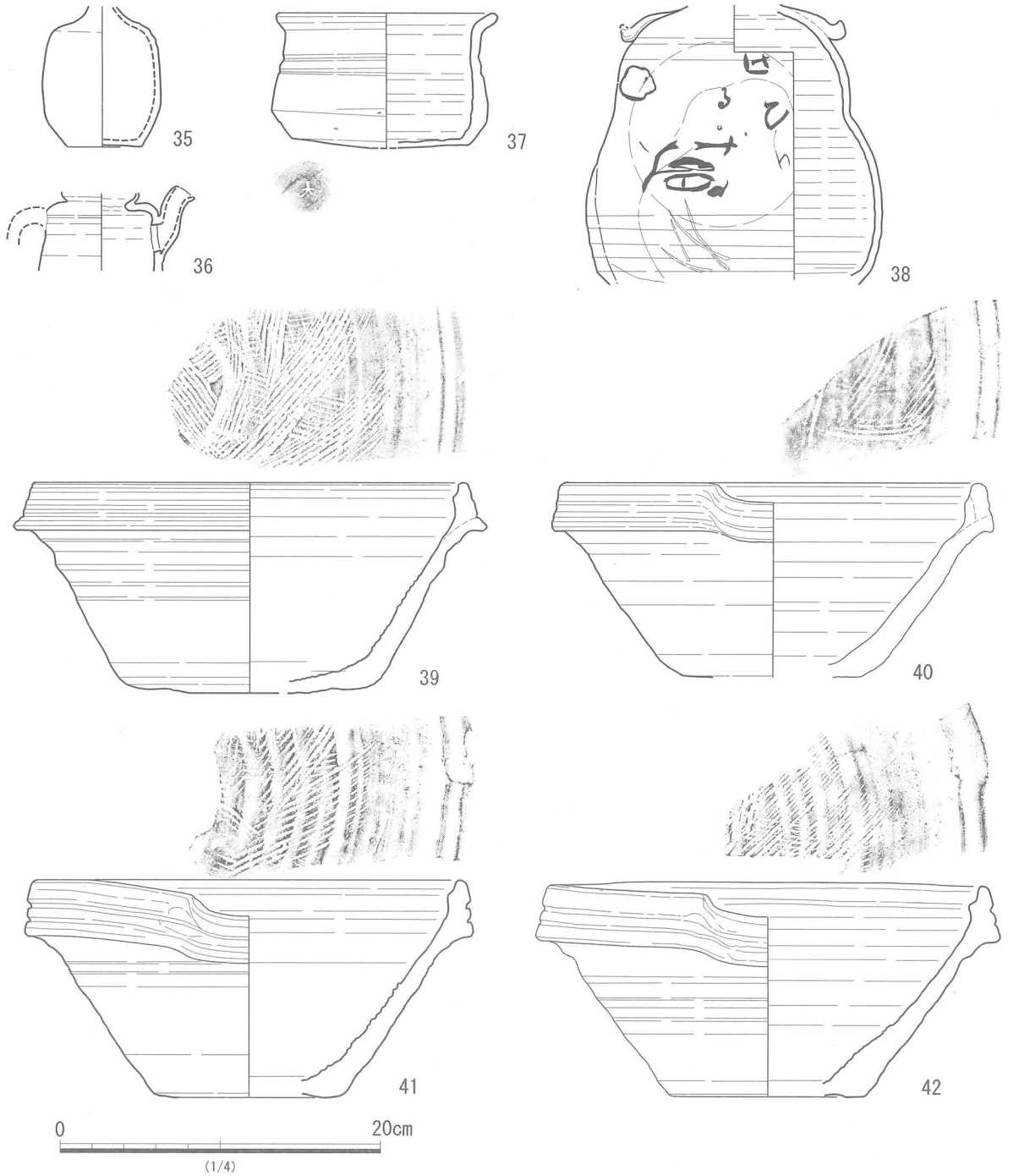
SD320からは陶磁器類の他、木製品など多量の遺物が出土している。



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
31	肥前陶器	皿	口径　20.2 高さ　5.6	1/2周程度の破片。体部下半～高台部無釉。内面に鉄釉で植物(?)文様。見込に胎土目痕２カ所。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(釉)灰釉・暗灰黄～黄褐(2.5Y5/2～5/3) (外面)にぶい黄褐(10YR5/3)/(断面)にぶい黄橙～にぶい橙(10YR7/3～7.5YR7/4)
32	肥前陶器	大皿	高台径 13.4 残存高　7.9	体部から高台部の破片。体部下半～高台部無釉。内面に鉄釉で植物(?)文様。	(胎土)1mm以下の砂粒を含む (焼成)良好	(釉)灰釉・灰～灰オリーブ(7.5Y5/1～6/2) (外面)にぶい褐(7.5YR5/3) (断面)黄灰～灰白(2.5Y6/1～N7/0)
33	関西系?	捏鉢(擂鉢)	口径　19.9 高さ　10.8	1/4周程度の破片。内外面とも無釉で、体部外面の一部に灰釉(自然釉)がかかる。内外面ともロクロ目で、見込に櫛状工具(幅1.5cm、5条)によるスリ目が放射状にはいる。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)明赤褐(5YR5/6) (内面)にぶい褐～にぶい黄褐(7.5YR5/3～10YR5/4) (断面)灰白(N7/0)
34	上野・高取系?	甕?	最大径(41.0) 残存高 22.0	体部上部～頸部の一部の1/4周程度の破片。内外面とも鉄釉を施す。外面ナデもしくはロクロ目、内面は指頭圧痕状の凹凸が認められる。肩部に貼り付け文風に胎土目痕６カ所。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(釉)鉄釉・暗赤褐(5YR3/2～3/3) (断面)灰褐～明褐灰(7.5YR6/2～7/1)

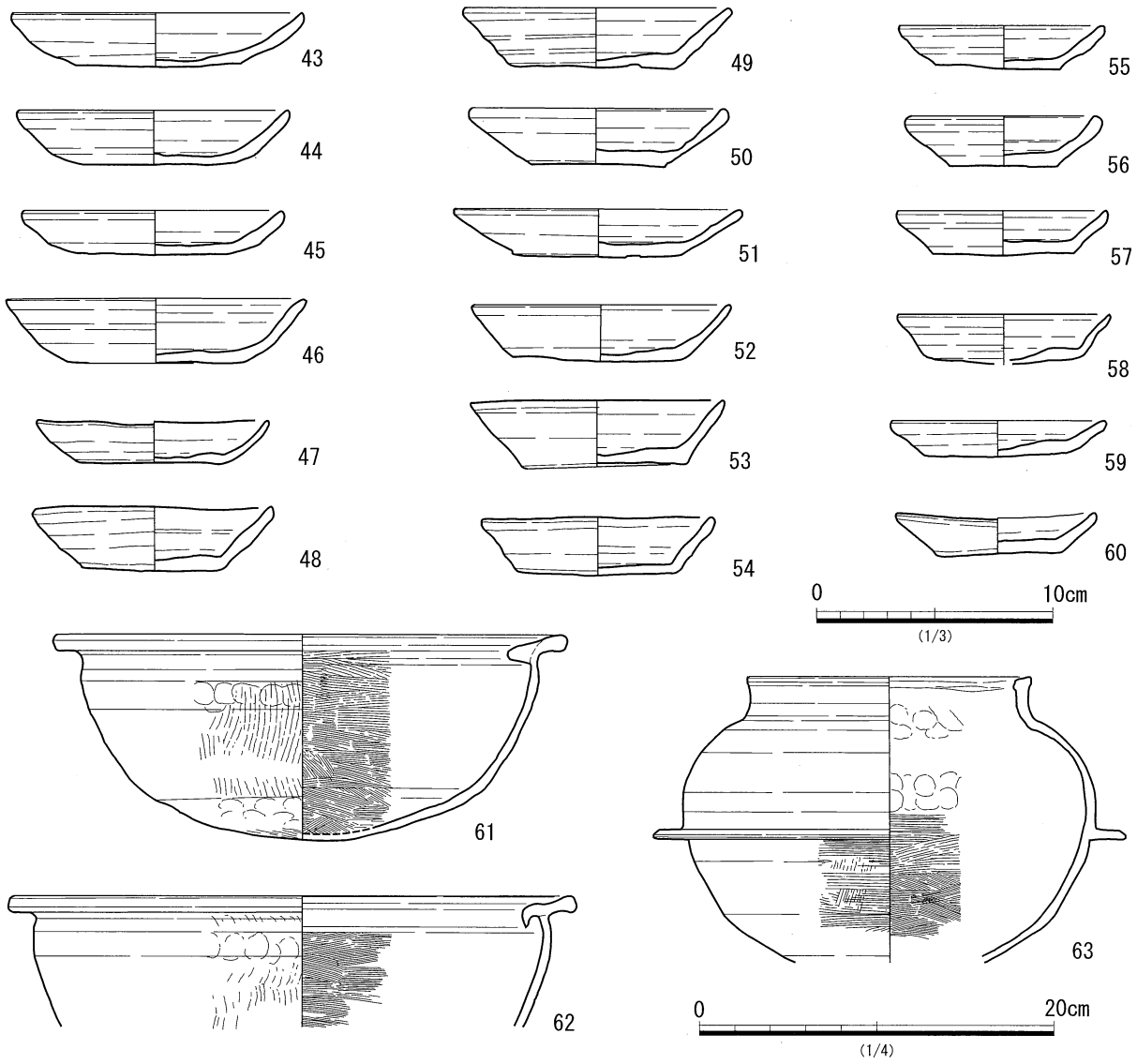
第146図　SD320出土遺物4(1/4)

第143図1 ～ 5、7は中国産の染付磁器とみられる。6、8、9は肥前産の染付磁器で、8などには高台に砂が付着しており砂目積みの製品と判断できる。なお、8はSP364から同一個体の破片が出土しており、接合した。第144図10 ～ 12は肥前陶器の碗、13 ～ 15は瀬戸美濃産の天目碗である。16はいわゆる織部である。いびつな楕円形の体部側面に白色の地に鉄釉で格子目状の文様を描いており、内面は鉄釉をかけている。19、20は肥前産の陶器で、「三島手(みしまで)」と呼ばれるものである。赤褐色の胎土に白化粧土の刷毛目で波状文を描き、見込にはスタンプによる花文に白化粧土を象眼する。21 ～ 28、31、32は肥前産陶器の皿である。胎土目積み痕のあるもの(23、31)と砂目積みのもの(25 ～ 28)があり、21 ～ 24、



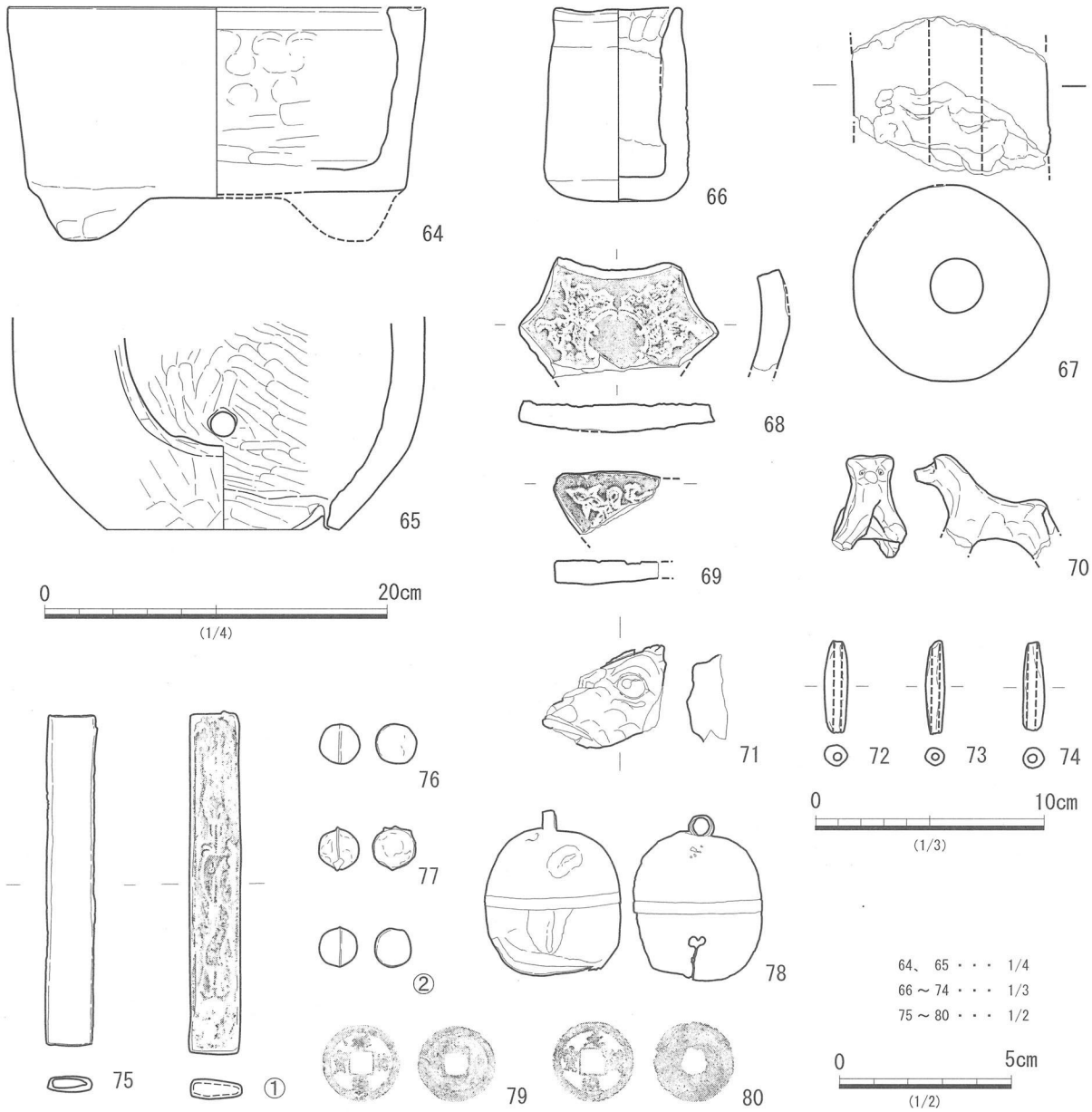
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
35	備前	壺(徳利)	最大径　7.1 残存高　8.8	頸部より上欠損。外面の広い範囲に自然釉、灰付着。底面に「一」のヘラ記号。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)暗赤褐～灰白(5YR3/2～5Y7/1) (断面)灰白(N7/0)
36	備前	水差	最大径　7.7 残存高　5.0	底部、口縁部、取手欠損。	(胎土)1mm以下の砂粒を含む (焼成)ややあまい	(外面)赤褐(5YR4/6) (断面)にぶい赤褐(2.5YR5/4)
37	備前	建水	口径　13.8 高さ　8.5	体部外面に沈線２条。緋襷がかかる。体部下半ヘラケズリ、底面はナデ。底面に「太」の押印。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面)赤～黒褐(10R1/6～7.5YR3/1) (断面)灰(N6/0～4/0)
38	備前	壺(瓶)	最大幅　18.4 残存高　17.5	いびつな平面の壺。頸部以上、底部欠損。肩部に飾耳１対。体部側面の牡丹餅内に梅(?)、人面(?)、文字(?)を墨書。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)暗赤褐～暗赤灰(10R3/2～7.5R3/1) (内面)にぶい赤褐(2.5YR4/3)/(断面)灰白(N7/0)
39	備前	擂鉢	口径　(26.6) 高さ　13.3	1/5周程度の破片。内外面ともヨコナデ(ロクロ目)。内面に櫛状工具によるスリ目、放射状に幅3.2cm、9条のスリ目を施した後、幅3.5cm、11条のスリ目を左回りに施す。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)灰赤～明赤褐(2.5YR4/2～5/6) (断面)灰(N6/0)
40	備前	擂鉢	口径　(25.5) 高さ　12.3	1/4周程度の破片。内外面ともヨコナデ。内面に幅3.5cm、10条程度の櫛状工具によるスリ目を入れるが、摩耗が激しい。	(胎土)3.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面)灰(N4/0) (断面)灰赤(7.5R4/2)
41	備前	擂鉢	口径　(26.3) 高さ　13.7	1/2周程度の破片。内外面ともヨコナデ(ロクロ目)。内面に櫛状工具によるスリ目、放射状に幅3.2cm、9条のスリ目を施した後、幅4.0cm、10条のスリ目を左回りに施す。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)にぶい赤(7.5R4/4) (断面)灰(N6/0)
42	備前	擂鉢	口径　(26.6) 高さ　13.5	1/2周程度の破片。内外面ともヨコナデ(ロクロ目)。内面に櫛状工具によるスリ目(幅3.2cm、7条)。	(胎土)7mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)暗赤褐～にぶい赤褐(7.5R3/3～2.5YR1/4) (内面)暗赤褐(10R1/3)/(断面)灰(N6/0)

第147図　SD320出土遺物5(1/4)



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
13	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 12.2/高さ 2.3	底部に糸切り痕、口縁部外面に煤付着.	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面)灰黄褐(10YR6/2)/(断面)灰黄褐～灰(10YR6/2～N4/0)
14	土師質土器	小皿	口径 11.3/高さ 2.7	底部に糸切り痕.	(胎土)1mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい黄橙(10YR7/2)/(断面)灰黄褐(10YR6/2)
15	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 10.8/高さ 1.9	底部に糸切り痕、口縁部の内外面に煤付着.	(胎土)2mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(内外面・断面)灰黄(2.5Y6/2)
16	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 12.1/高さ 2.8	2/3周程度の破片、底部に糸切り痕、内外面に煤付着.	(胎土)1mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(内外面・断面)にぶい橙(5YR6/4)
17	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 9.8/高さ 1.9	底部に糸切り痕、口縁部の内外面に煤付着.	(胎土)0.5mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(内外面・断面)にぶい橙(7.5YR7/4)
18	土師質土器	小皿	口径 9.8/高さ 2.8	底部に糸切り痕.	(胎土)1mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい黄橙(10YR6/4～7/3)/(断面)灰白(10YR8/2)
19	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 11.1/高さ 2.6	底部に糸切り痕、口縁部の内外面に煤付着.	(胎土)0.5mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(外面)にぶい黄褐～灰(10YR5/3～4/1)/(内面)にぶい黄橙～にぶい黄褐(10YR6/3～5/3)/(断面)にぶい黄(2.5Y6/3)
50	土師質土器	小皿	口径 10.7/高さ 2.5	底部に糸切り痕.	(胎土)1mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい黄橙(10YR7/3)/(断面)にぶい褐～にぶい黄橙(7.5YR5/3～10YR7/3)
51	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 12.0/高さ 2.1	底部に糸切り痕、内面に油(?)痕跡.	(胎土)1.5mm以下の砂粒を僅かに含む/(焼成)良好	(内外面・断面)灰黄(2.5Y7/2)
52	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 10.7/高さ 2.4	底部に糸切り痕、内外面に煤付着.	(胎土)0.5mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(内外面)浅黄～灰(2.5Y7/3～N6/0)/(断面)灰白(5Y8/1～N7/0)
53	土師質土器	小皿	口径 10.7/高さ 2.9	底部に糸切り痕.	(胎土)1.5mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(内外面)灰白～にぶい橙(5Y7/1～7.5YR7/4) (断面)にぶい橙(7.5YR7/4)
54	土師質土器	小皿	口径 9.7/高さ 2.5	底部に糸切り痕.	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい橙(7.5YR7/4)/(断面)にぶい黄橙(10YR6/4)
55	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 8.6/高さ 1.9	底部に糸切り痕、内外面に煤付着.	(胎土)1mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(外面)にぶい橙(5YR7/4)/(内面)にぶい橙(7.5YR7/4)
56	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 7.8/高さ 2.2	底部に糸切り痕、内面に油状のシミ、口縁部内面に煤.	(胎土)0.5mm以下の砂粒を僅かに含む/(焼成)良好	(内外面・断面)にぶい橙(7.5YR7/4)
57	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 8.8/高さ 1.9	底部に糸切り痕、口縁部の内外面に煤付着.	(胎土)1mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(内外面・断面)にぶい橙～にぶい黄橙(7.5YR6/4～10YR7/3)
58	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径 8.9/高さ 2.1	底部に糸切り痕、口縁部の内外面に煤付着.	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面・断面)にぶい橙～灰白(7.5YR7/3～10YR8/1)
59	土師質土器	小皿	口径 8.9/高さ 1.5	底部に糸切り痕.	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい橙～にぶい黄橙(7.5YR6/4～10YR7/3)
60	土師質土器	小皿	口径 8.4/高さ 1.8	底部に糸切り痕.	(胎土)0.5mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(内外面・断面)にぶい橙(7.5YR7/4)
61	土師質土器	鍋	口径 29.0/高さ 11.7	外面は縦方向のハケメ(4本/cm)の後、底部と体部上半に指頭圧痕、内面は横方向のハケメ(10本/cm).	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)黒～灰褐(N2/0～7.5YR4/2)/(内面)暗灰(N3/0)
62	土師質土器	鍋	口径 (32.0)	1/3周程度の破片、外面は縦方向の粗いハケメの後、体部上端に指頭圧痕、内面は横方向のハケメ(10本/cm).	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)黒(N2/0)/(内面)黄灰(2.5Y4/1)/(断面)にぶい褐(7.5YR5/4)
63	土師質土器	羽釜	口径 (15.8) 最大径(26.6)	1/3周程度の破片、外面下半ハケメ、外面上半～口縁部ナデ、内面は横方向のハケメ、上半部に指頭圧痕.	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)褐灰～黒(10YR4/1～N2/0)/(内面)黄灰～黒(2.5Y4/1～7.5Y2/1) (断面)灰白(7.5Y7/1)

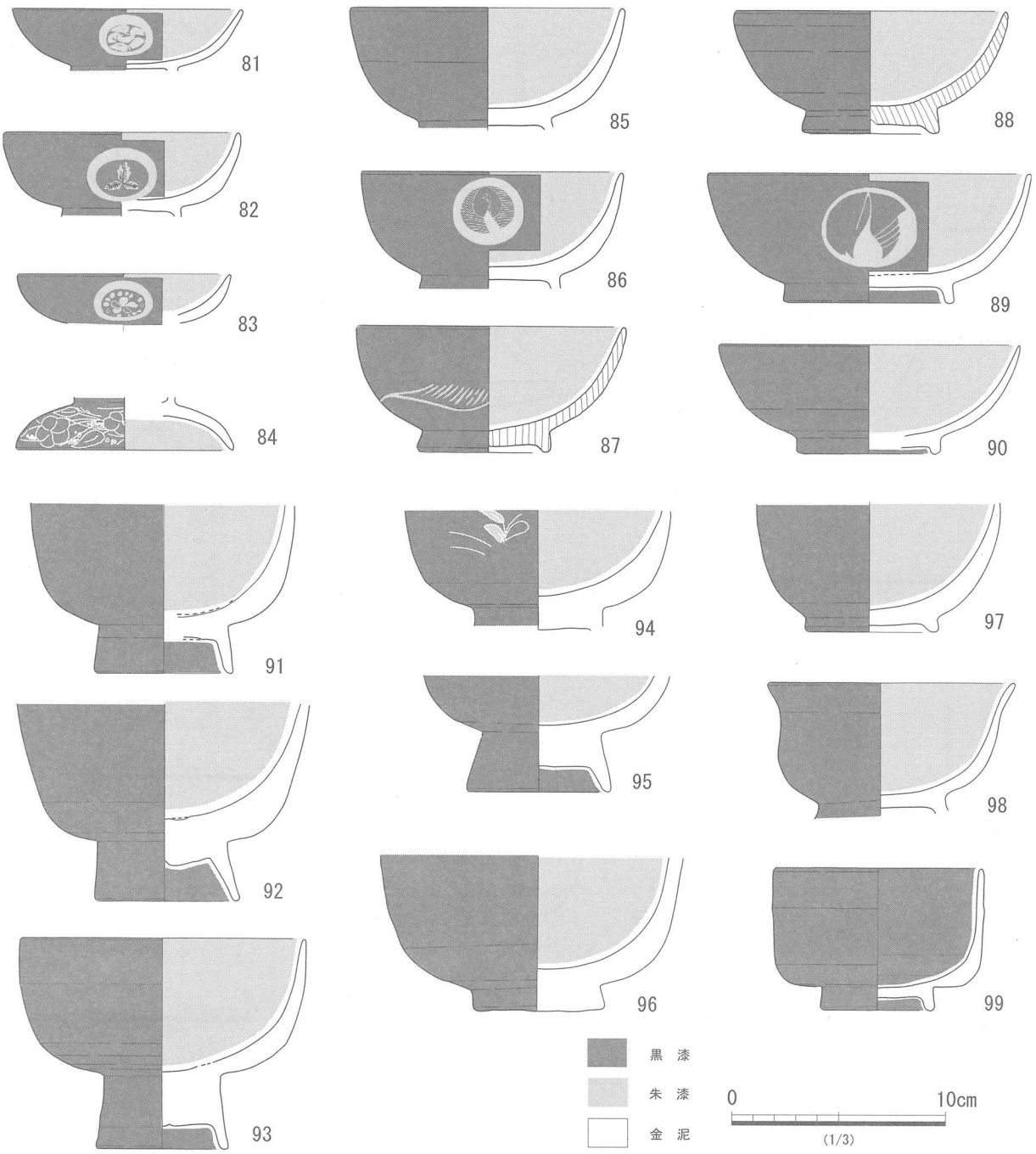
第148図　SD320出土遺物6(1/4)



No.	種類	器種・部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調
61	土師質土器	火鉢？	最大径21.2/残存高13.6	平面隅丸方形。底部四隅に脚。内外面ともナデ。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面)灰～黄灰(5Y4/1～2.5Y5/1)/(断面)にぶい黄橙(10YR7/3)
65	瓦質土器	七輪(中子)？	最大径21.2/残存高12.5	正面に窓、二方向に小円孔。外面上具ナデ、内面ナデ。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面)灰白～灰(5Y7/1～N1/0)/(断面)灰白～灰(N8/0～N5/0)
66	土師質土器	焼塩壺	口径　5.1/高さ　8.5	内外面ともナデ。底部にヘラ記号(？)。	(胎土)3mm以下の砂粒を含む/(焼成)良好	(内外面・断面)赤橙～浅黄(10R6/6～2.5Y7/3)
67	土製品	ふいご羽口	径　8.6	長さ約7cmの破片。鍛滓様の付着物あり。	(胎土)6mm以下の砂粒を多量に含む/(焼成)良好	(内外面)灰白～黄灰(5Y7/1～2.5Y6/1)/(断面)にぶい黄橙(10YR6/3)
68	土製品	不明	幅　8.7/厚さ　1.2	表面に指羽螺文を印刻。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面・断面)橙～暗灰(5YR6/6～N3/0)
69	土製品	不明	厚さ　1.0	表面に唐草(？)の印刻。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を少量含む/(焼成)良好	(外面)にぶい橙～にぶい黄橙(5YR6/4～10YR6/3)/(断面)暗灰(N3/0)
70	土製品	土人形(犬)	残存長　1.5/残存高　3.1	手づくねの土製品。脚欠損。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)橙(5YR6/8～6/6)/(断面)橙～にぶい橙(5YR6/6～6/4)
71	輪前境	鯉？	残存長　3.8		(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)にぶい赤褐～褐灰(2.5YR1/4～5YR1/1)/(断面)褐灰(10YR5/1)
72	土製品	漁網錘	長さ　1.1/径　1.0		(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)橙(2.5YR6/6)
73	土製品	漁網錘	長さ　1.2/径　0.9		(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)赤橙～にぶい黄橙(10R6/8～10YR7/4)
74	土製品	漁網錘	長さ　3.9/径　0.9		(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)赤～にぶい赤褐(10R5/6～2.5YR5/4)

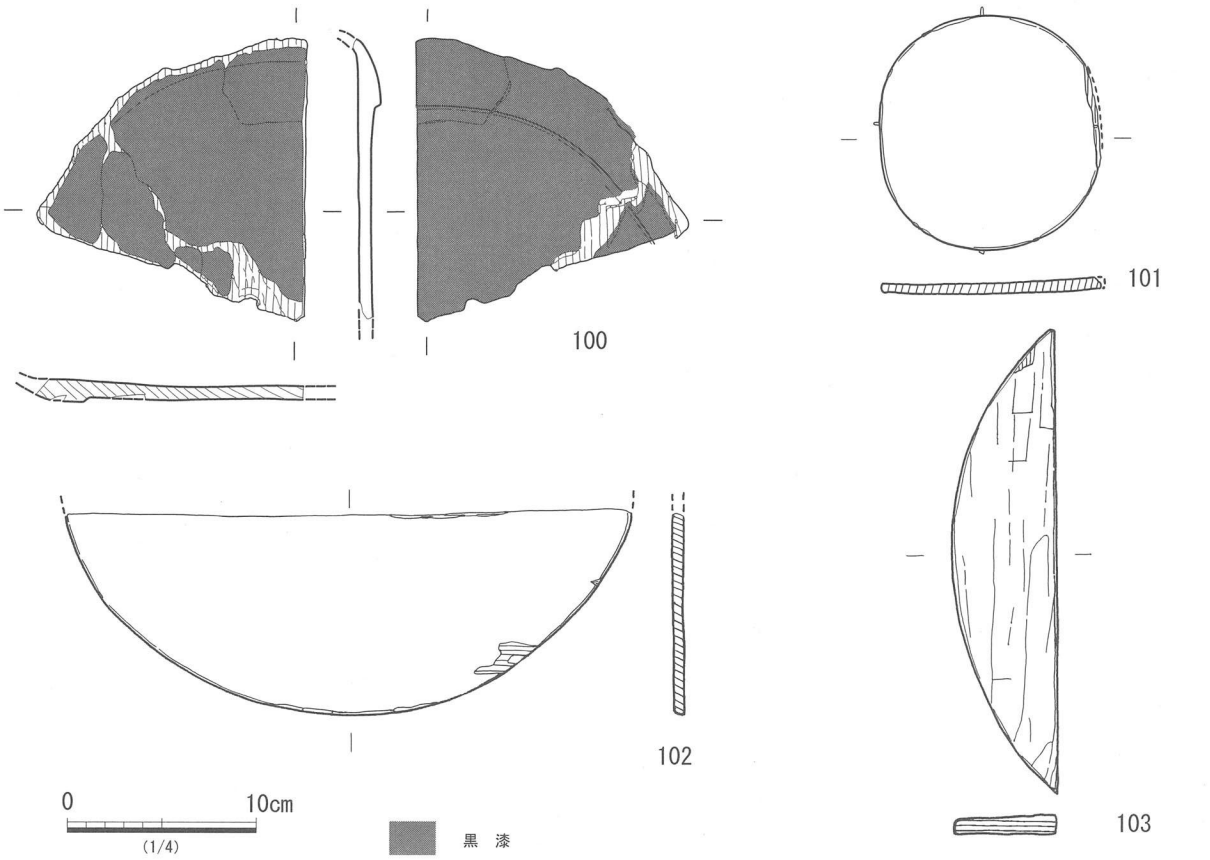
No.	種類	器種・部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	備考
75	青銅製品	小柄(鞘？)	長さ　9.8/幅　1.1/厚さ　0.5	薄い青銅板を折り曲げ。	
①	青銅製品	小柄(柄？)	長さ10.1/幅　1.5/厚さ　0.6	薄い青銅板を折り曲げ、表面に旗などの彫刻のある薄板をはる。	包含層出土。
76	鉛製品	銃弾	直径　1.2	型合わせ目のバリあり。	
77	鉛製品	銃弾	直径　1.2	型合わせ目のバリあり。	
②	鉛製品	銃弾	直径　1.2	型合わせ目のバリあり。	包含層出土。
78	銅製品？	鈴	長径　4.9/短径　3.9	土圧により若干変形。内部に5mm程度の小礫が入る。	
79	渡来銭	洋符通寶	直径　22.8mm/厚さ　0.9mm	北宋銭。	
80	渡来銭	元祐通寶	直径　21.1mm/厚さ　1.2mm	鋳出しが非常に悪く、背面も平ら。模鋳銭か。	

第149図　SD320出土遺物7(1/2・1/3・1/4)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
81	木製品	椀	口径　10.7 / 残存高 2.9	1/2周程度の破片。高台欠損。外面に黒漆、丸に橘の紋を朱漆で三方にいれる。内面朱漆。	
82	木製品	椀	口径　10.9 / 残存高 4.0	1/2周程度の破片。高台欠損。外面に黒漆、丸に三つ葉柏の紋を朱漆で三方にいれる。内面朱漆。	
83	木製品	椀	口径　9.9 / 残存高 2.3	1/2周強程度の破片。底部欠損。外面に黒漆、丸に花の紋を朱漆でいれる。内面朱漆。	
84	木製品	蓋	口径　10.0 / 残存高 2.5	1/3周程度の破片。外面に黒漆、全面に草花文を金泥でいれる。内面朱漆。	
85	木製品	椀	口径　12.6 / 残存高 5.8	1/2周程度の破片。高台欠損。外面に黒漆。内面朱漆。	
86	木製品	椀	口径　12.1 / 残存高 5.5	2/3周程度の破片。高台欠損。外面に黒漆、丸に鶴の紋を三方にいれる。内面朱漆。	
87	木製品	椀	口径　12.5 / 高さ　5.9	外面に黒漆、朱漆で施紋残存。内面は朱漆を塗布するが、火を受けており残りが悪い。	
88	木製品	椀	口径　12.8 / 高さ　5.8	外面に黒漆、内面に朱漆を塗布。	
89	木製品	椀	口径 (15.0) / 高さ　6.1	1/3周程度の破片。土圧による変形激しい。外面に黒漆、丸に鶴の紋を朱漆でいれる。内面朱漆。	
90	木製品	椀	口径 (14.5) / 高さ　5.1	1/4周程度の破片。外面に黒漆を塗るが剥離激しい。内面朱漆。	
91	木製品	椀	残存高 8.0	口縁部欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を塗布。外面に金泥(?)による文様が僅かに残る。	
92	木製品	椀	残存高 9.3	口縁部欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を塗布。	
93	木製品	椀	口径　13.2 / 残存高 9.9	外面に黒漆、内面に朱漆を塗布。高台内に線刻あり。	
94	木製品	椀	残存高 5.7	口縁部、高台欠損。外面に黒漆、朱漆と金泥で草花紋を施す。内面朱漆。	
95	木製品	椀	残存高 5.5	口縁部欠損。内外面とも火を受けており、外面に黒漆、内面に朱漆が僅かに残存。	
96	木製品	椀	残存高 7.3	口縁部欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を塗布。	
97	木製品	椀	残存高 6.1	口縁部欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を塗布。高台内に線刻あり。	
98	木製品	椀	口径 (10.4) / 残存高 6.2	高台欠損。端反形。外面に黒漆、内面に朱漆を塗布。外面に秋草(ススキか)紋様の痕跡あり。	
99	木製品	椀	口径　(9.6) / 高さ　6.7	1/2～1/4周程度の破片。内外面とも黒漆を塗布。	

第150図　SD320出土遺物8(1/3)

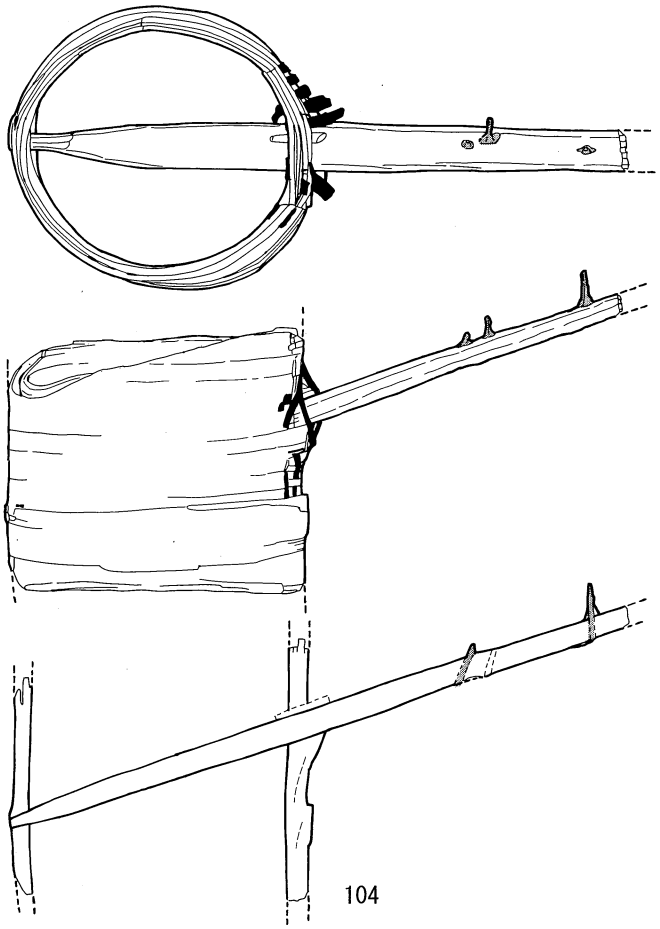


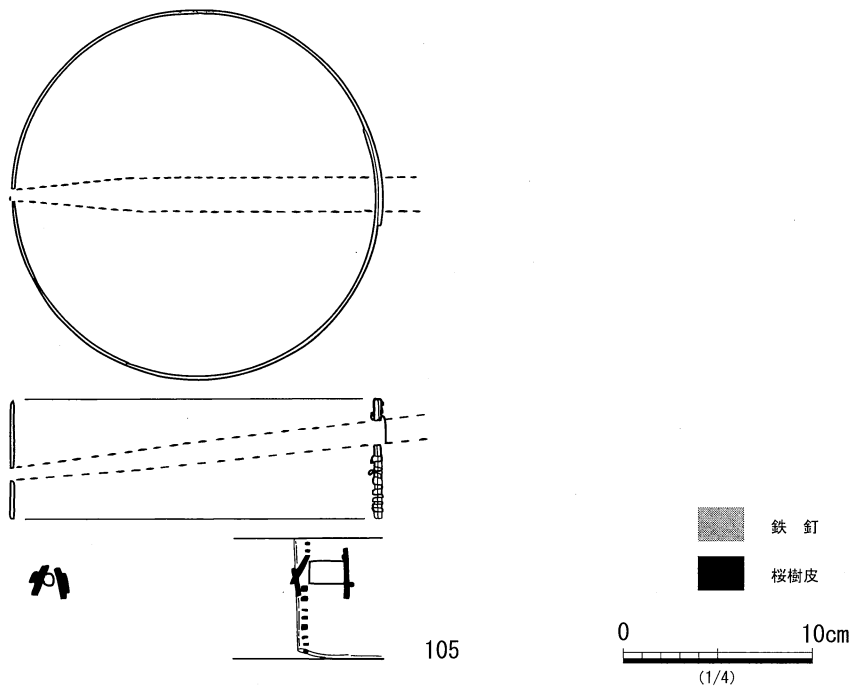
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
100	木製品	盤	－	底部付近1/5周程度の破片。内外面に黒漆。	
101	木製品	曲物(底板)	長径　12.5 / 厚さ　1.1	楕円形の曲物底板。側面四方に木釘残存。底面に黒漆(?)わずかに残存。	
102	木製品	曲物(底板)	残存径29.9 / 厚さ　0.7	1/2周弱程度の破片。径30cm以上の大形の曲物。	
103	木製品	曲物(底板)	残存径21.8 / 厚さ　1.1	1/3周程度の破片。	

第151図　SD320出土遺物9(1/4)

31、32には内面に放射状の線文や簡略化した植物とみられる文様が鉄釉で描かれている。29は瀬戸美濃産の茶入とみられる。

35～42には備前焼をあげている。38はいびつな平面形の壺で、側面に人面とみられる目や眉毛のような表現、梅花(?)、文字とおもわれるものを墨書している。39～42は擂鉢である。いずれも放射状のスリ目に斜め方向のスリ目が付加されており、40などのように非常に摩滅したものも目立つ。43～60には土師質土器の小皿をあげている。いずれも底面に糸切り痕を持つもので、灯明皿とみられる煤が付着するものと、儀式用の坯とみられる煤が付着しないものがある。61～63は土師質土器の炮烙鍋及び羽釜である。61、62は口縁部が外折するいわゆる瀬戸内系の炮烙で、内耳に円孔を２箇所をあける。よく使用されており、外面に煤が付着、内面は摩滅し光沢を持つ。64は火鉢とみられる厚手の土師質土器で、底面縁に突起状の脚をもつ。65は瓦質土器である。底のない丸みを帯びた筒状のもので、最大径は24.2cmを測る。正面に大きな「窓」、側面から背面に円孔３を持っており、七輪や焜炉などの中子とみられる。67はふいごの羽口である。滓状のもの、炉壁片もわずかながら認められる。同様のものがSD321などで出土しており、SP334では多量の炉壁とともに廃棄されている。後述するが、SP334は17世紀初頭の遺構と考えられ、SD320などで出土するものは量もわずかであり、混入したものであろう。68、69は厚さ1cm程度の板状の土製品で、揚羽蝶や唐草紋(?)をスタンプ状に陰刻している。何らかの「型」あるいはスタンプと見られるが、表面に火熱を受けたような様子はない。70は素焼き手づくねの犬土製品、71は備前焼の鯉とみられる魚の頭部で、置物などの一部と見られる。72～74は漁網錘で、下





No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
104	木製品	柄杓	長径　15.8 / 高さ　14.0	曲物の柄杓。底板欠損。柄に鉄釘３本。	
105	木製品	柄杓	口径 (19.8)/ 高さ　6.4	曲物の柄杓。底板欠損。	
106	木製品	柄杓(柄)	長さ 38.4/最大幅 3.0/厚さ　1.3	曲物側板の痕跡、その内側に隣接して小さな凹みあり。	

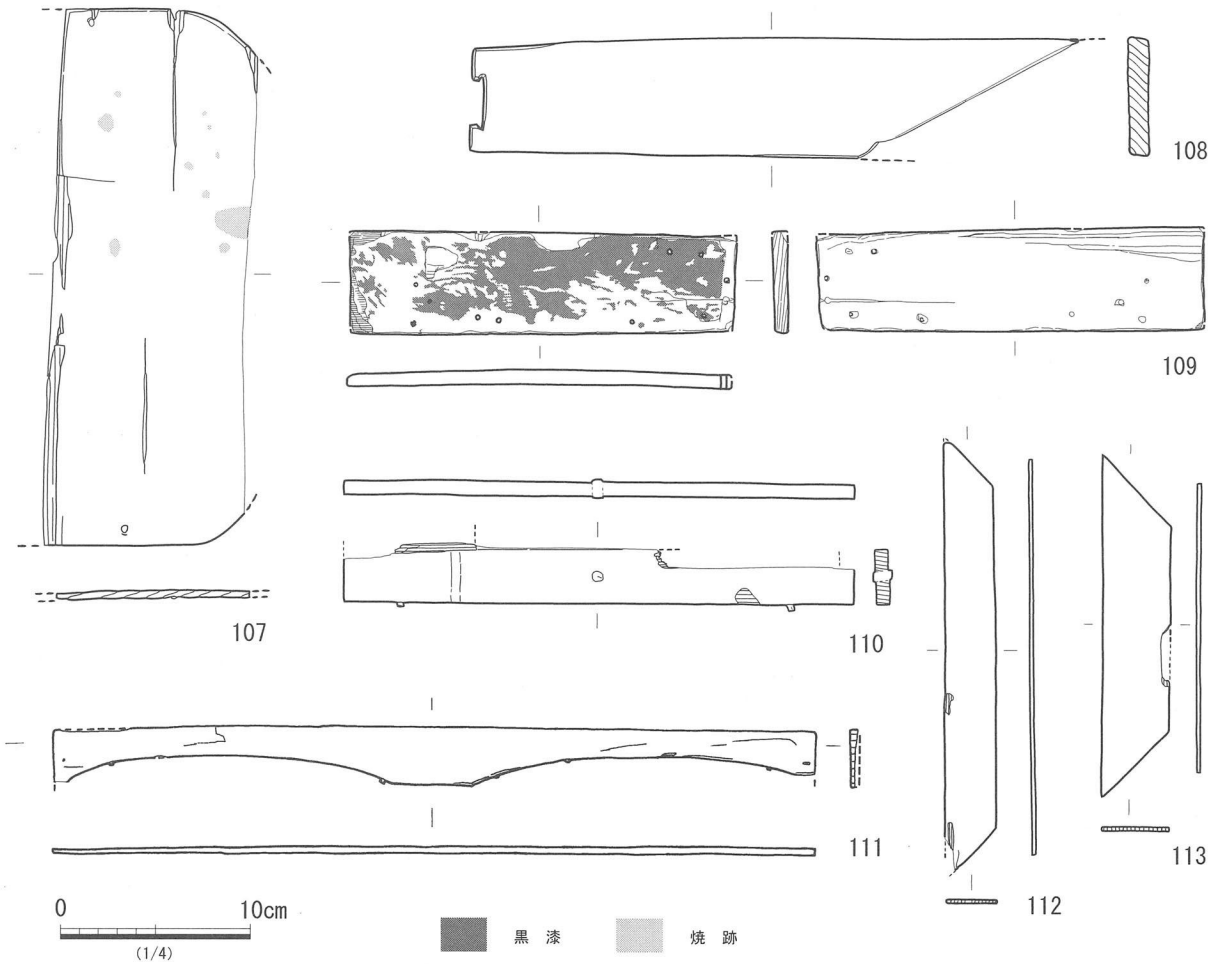
第152図　SD320出土遺物10(1/4)

層遺構からの混入である可能性が高い。

75～80には金属製品をあげている。75は小柄(こづか)の鞘とみられ、銅、または青銅製と思われる。①は関連資料としてあげた包含層出土のもので、表面に旗などの彫刻を入れた薄い金属板を貼り付けている。76、77と②は鉛製の火縄銃の銃弾である。いずれも1.2cm程の直径で型の合わせ目痕が残る。78は銅製とみられる鈴である。箔などは残っていないが、内部に5mm大の小礫が入っていた。79、80は渡来銭である。北宋の祥符通寶(しょうふつうほう)(79)と元祐通寶(げんゆうつうほう)(80)だが、元祐通寶は文字や背面の鋳出しが非常に悪く模鋳銭(もちゅうせん)の可能性がある。

第150図～第158図には木製品をあげている。なお、図示したものは出土した木製品の一部で、これら以外に椀などの破片、白木箸、曲物や桶の部材、性格不明の板材や加工木など多量の木製品が出土している。

81～99は塗物の椀とその蓋である。大部分が外面に黒漆、内面に朱漆を塗っており、外面には朱漆や金泥で文様を入れるものがある。口径10cm程度、浅めで高台の低く、器壁の薄いもの(81～83)、口径12cm程度でやや深いもの(85～87)、口径15cm程度で浅い器形のもの(89、90)、高台の高い深い器形のもの(91～95)



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	備 考
107	木製品	箱等部材(底板)	長さ 28.6/厚さ 0.5	折敷などの底板か。隅丸方形で、周辺部に釘穴２残存。一部に焼損跡。	
108	木製品	箱等部材	残存長32.0/最大幅 6.5/厚さ 1.1	小口に方形の抉り込みのある板材。	
109	木製品	箱等部材	長さ 20.5/幅 5.0/厚さ 0.8	長方形の板材。表面に黒漆を塗布。一方の側面に木釘６、周辺部に釘跡11。	
110	木製品	箱等部材	長さ 27.1/厚さ 1.0	複雑な形状の板材。側面に木釘２残存。表面にも木釘貫通。	
111	木製品	箱等部材	長さ 39.2/幅 3.2/厚さ 0.4	裏面剥離。円弧状の抉り込みがあり、その側面に木釘がのこる。	
112	木製品	箱等部材	長さ 18.3/幅 3.6/厚さ 0.3	台形の部材。折敷などの底板か。	
113	木製品	箱等部材	長さ 18.3/幅 3.6/厚さ 0.3	台形の部材。折敷などの底板か。	

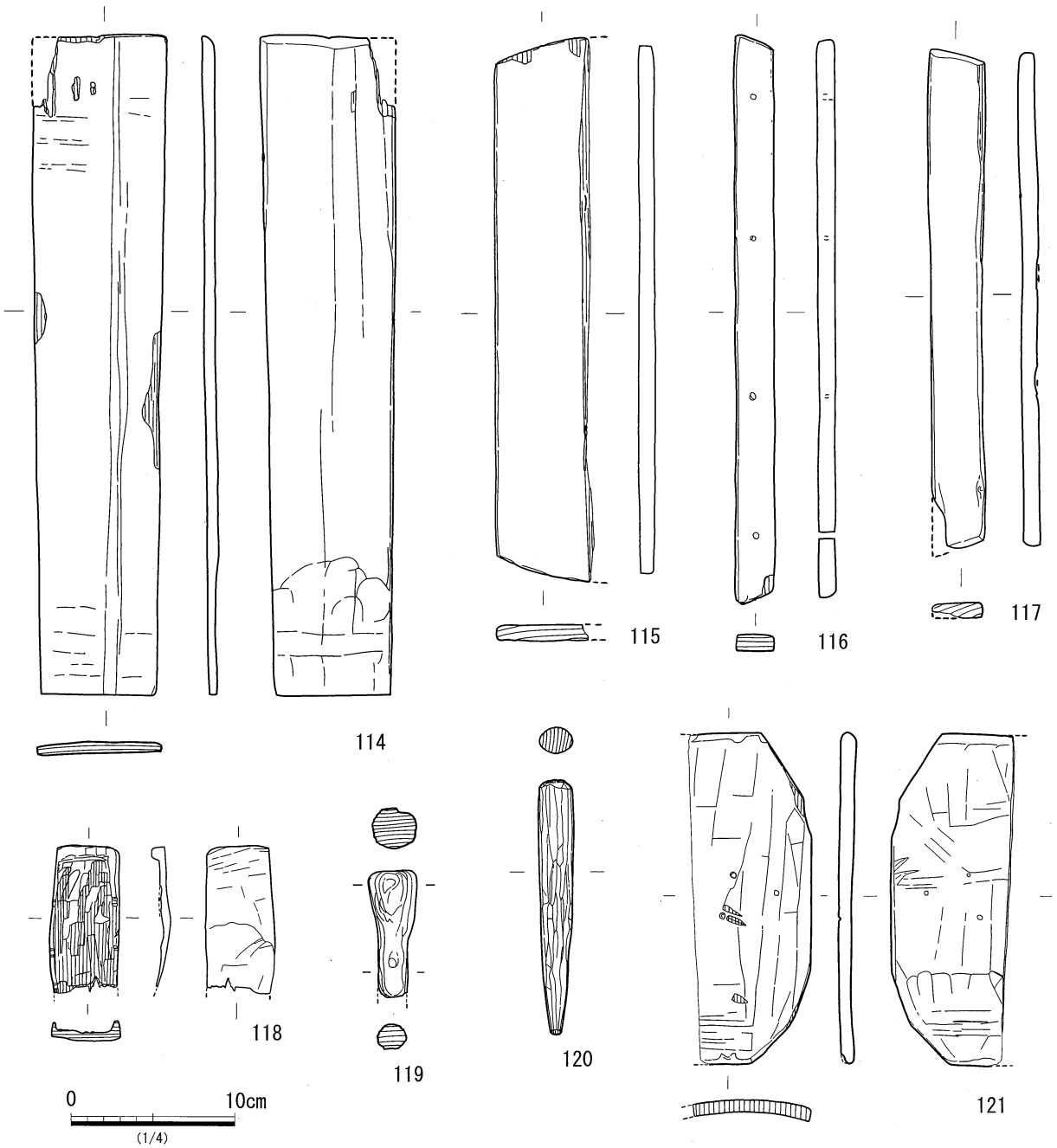
第153図　SD320出土遺物11(1/4)

などのバリエーションがある。また、端反り形のもの(98)、筒丸形のもの(99)もみられる。100は塗物の盤または盆で、口縁部が欠損しているが30cm程度の直径になるものと思われる。

101～103は大きさも様々だが、薄手の円盤状の板材で、曲物類の底板とみられる。側面に木釘が残るもの(101)などがある。104～106は曲物の柄杓である。曲物側面に方形の穿孔をし、そこから斜めに柄を貫通させるものである。柄は104では樹皮で曲物側板と固定し、穿孔に木釘状のものを差し込んで補強している。相当長い柄を持つもののようで、折れたためか釘で継ぎ足していたようである。106では曲物側板の痕跡の内側部分に木釘の跡と見られる小穴がある。

107～113は薄手の加工のある板材で木箱や折敷などの部材とみられる。いずれも釘跡や木釘が残存し、組み立てて使用されていたことが分かる。109の様に表面に黒漆を塗布したものもある。しかし、それぞれどのような形態のもののどの部分かは不明である。

114～117は桶の部材と考えられる。114は桶の側板で、外面側上下二カ所にタガの痕跡と見られる圧痕、内面側下端付近に底板の痕跡と見られる圧痕が認められる。115、117は桶の底板と考えられるものである。116は形態上の共通性からやはり桶の底板と考えられるが、一列に四カ所の木釘、釘穴がある。桶内側に仕切りなどを設けたものであろうか。118は小形の刳り抜き式容器、119、120は樽など

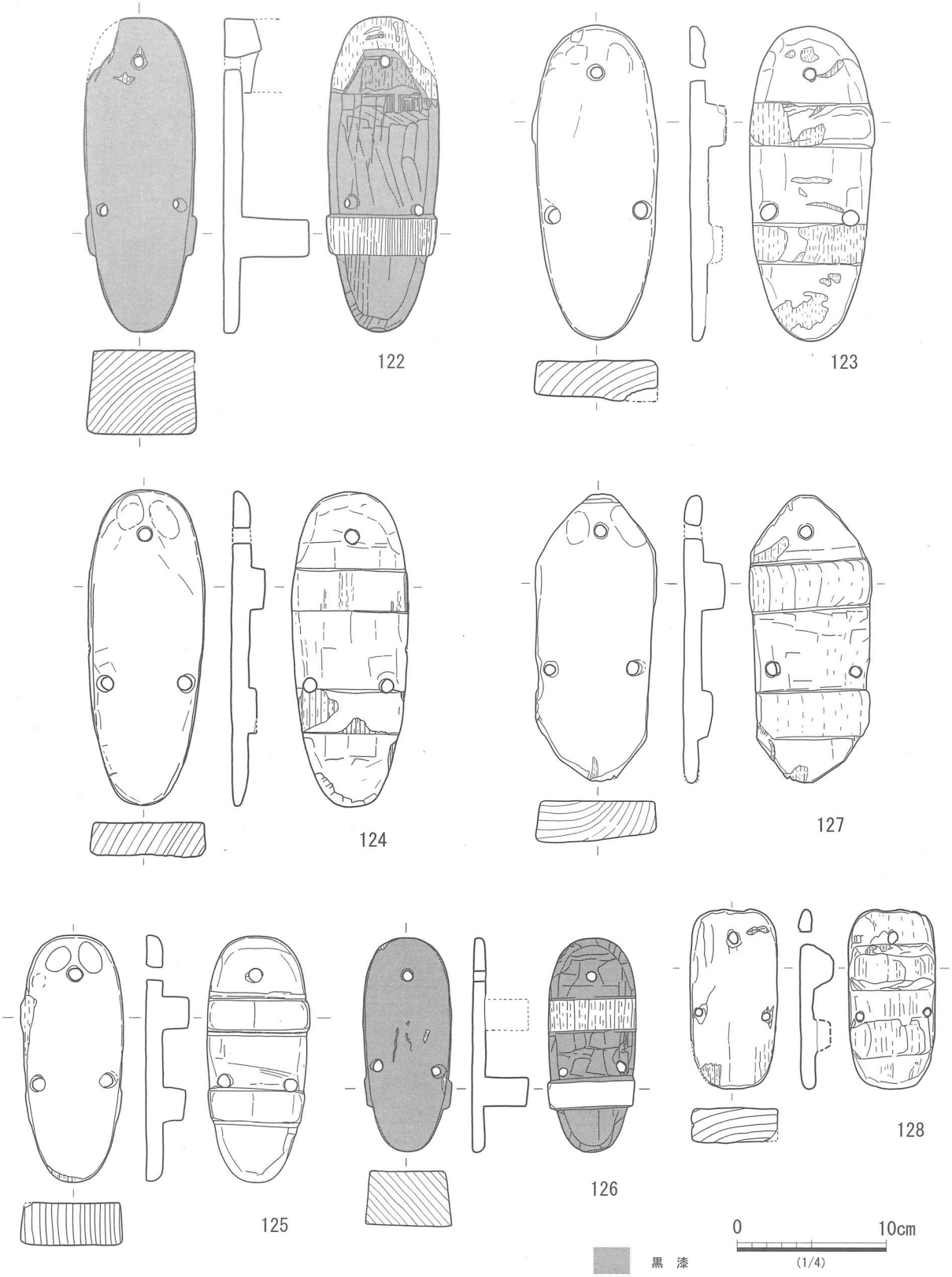


No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
114	木製品	桶部材(側板)	長さ　40.5/幅　8.2/厚さ　0.8	外面にタガ痕跡、内面に底板の痕跡が圧痕状に残る。	
115	木製品	桶部材(底板)	長さ　33.4/残存幅 6.1/厚さ　1.1	割れ側の側面に木釘２カ所残存。表面側縁部に摩擦したような痕跡。	
116	木製品	桶部材(底板)?	長さ　34.8/幅　2.4/厚さ　1.1	平面台形の板材。桶の底板とみられるが、一列に木釘、釘穴が４カ所貫通。	
117	木製品	桶部材(底板)	長さ　30.6/幅　3.6/厚さ　1.0	平面台形の板材。	
118	木製品	小形容器？	残存長 9.1/幅　4.3	小形の刳り抜き容器か。	
119	木製品	栓	残存長 7.8/最大径 3.0	樽などの栓とみられる。	
120	木製品	栓	長さ　15.7/最大径 2.0	先をとがらせた棒状品。樽などの栓とみられる。	
121	木製品	容器蓋？	長さ　20.4/残存幅 7.3/高さ　0.9	浅い皿状の木製品。中央に木釘が３カ所に残り、取手などを取り付けていたものか。	

第154図　SD320出土遺物12(1/4)

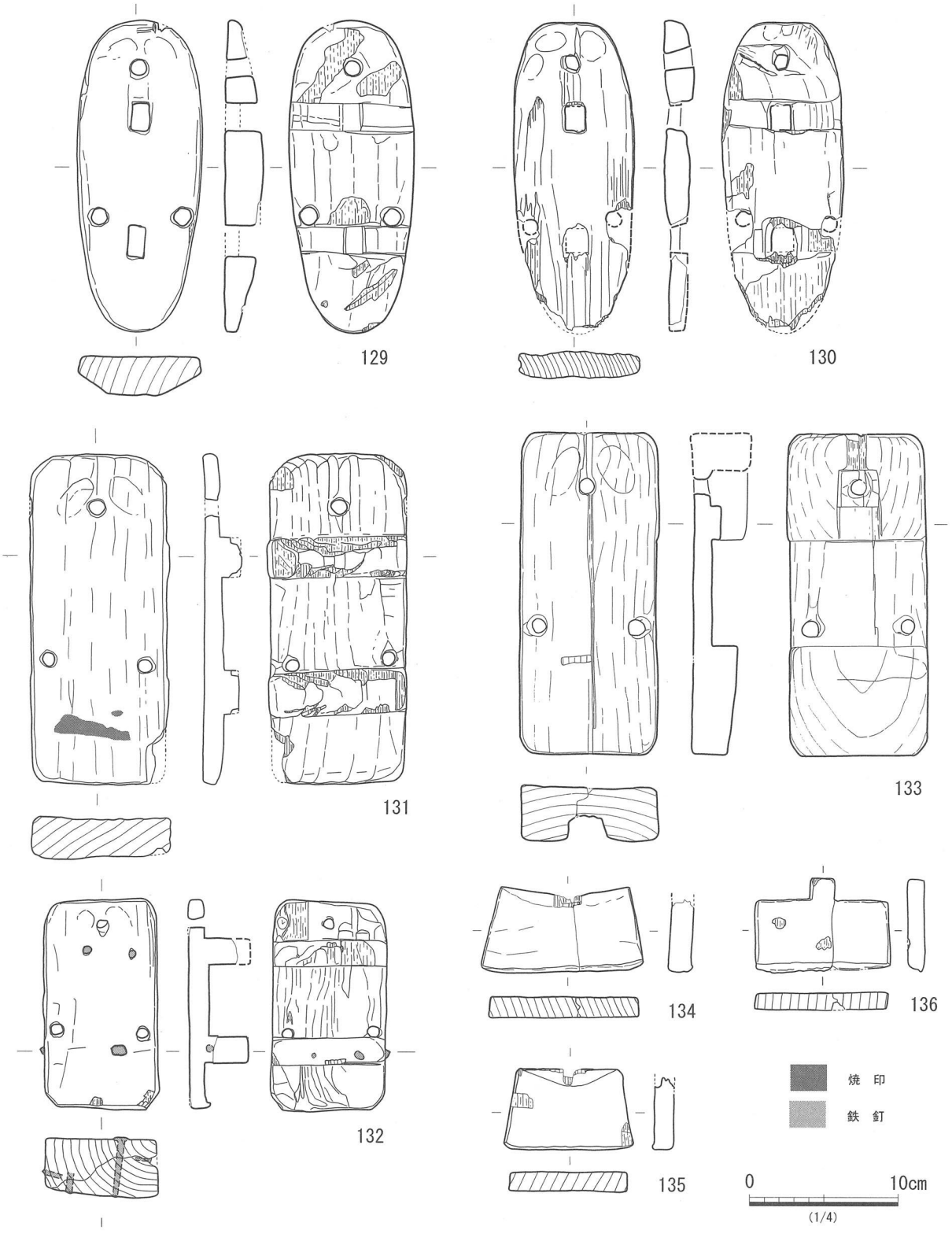
の栓と見られる。121は浅い皿状の木製品で、合子状の容器の蓋と思われる。

122 ～ 133には下駄をあげている。丸形のもの(122 ～ 126・129・130)と、角形のもの(128・131 ～ 133)がある。また、刳り下駄(122・133)、連歯下駄(123 ～ 128・131・132)、差歯下駄(129・130)がある。丸形の下駄は残りの悪いものも多いが、大部分は黒漆が塗られていたようである。よく使い込まれたものが多く、132では割れたものを鉄釘で接合して使用している。爪先に残る指の圧痕から左足用、右足用が判別できるものがあるが、形態的には区別できない。134 ～ 136は差歯下駄の歯である。下が拡がる



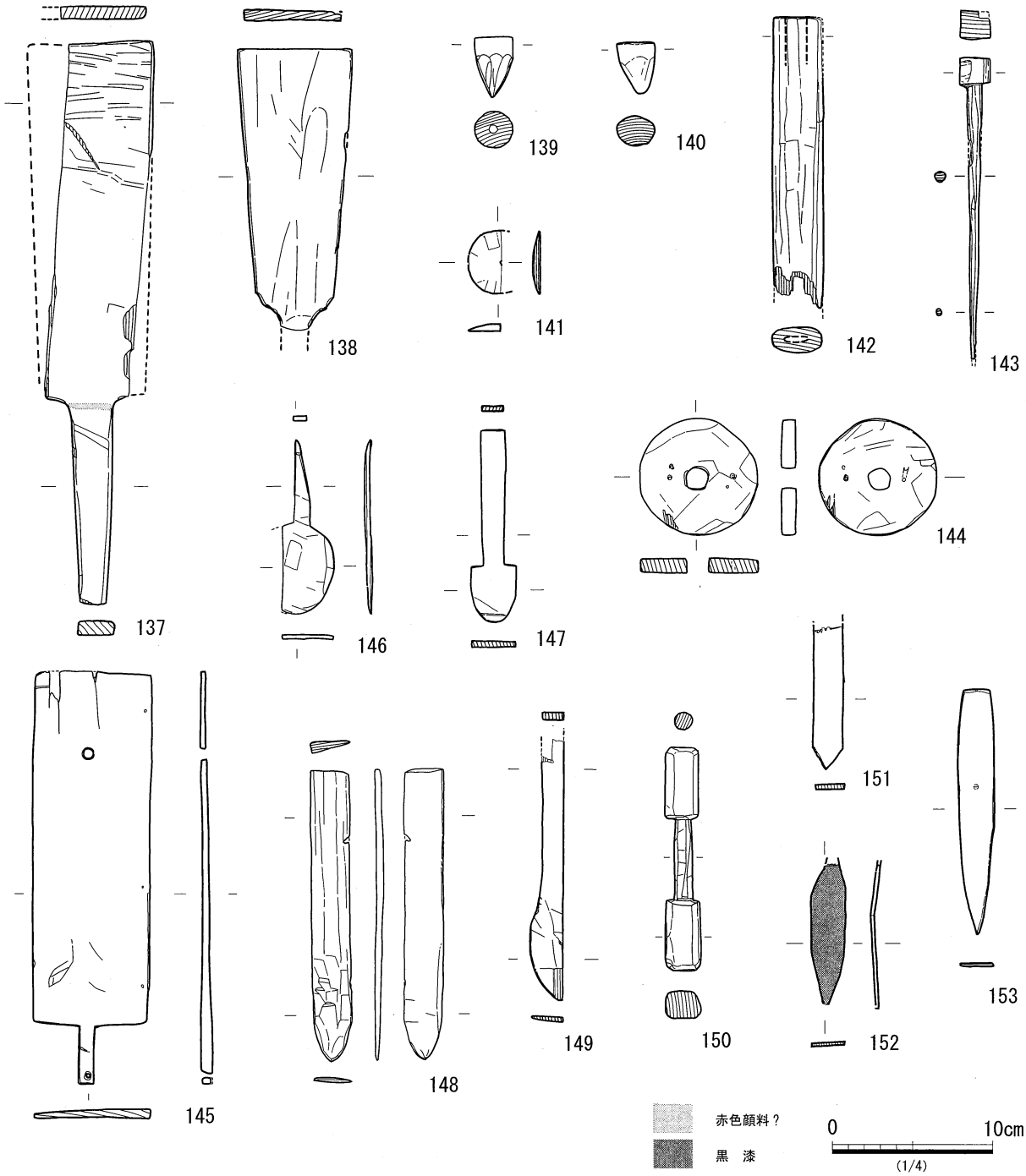
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
122	木製品	刳り下駄	長さ　21.2/幅　7.4/高さ　5.7	丸形の刳り下駄。ほぼ全面に黒漆を塗布。爪先側の歯欠損。	
123	木製品	連歯下駄	長さ　21.1/幅　8.3/高さ　2.1	丸形の連歯下駄。上面爪先に指圧痕。側面、歯の前後に黒漆とみられる痕跡。	
124	木製品	連歯下駄	長さ　21.3/幅　7.3/高さ　2.2	丸形の連歯下駄。上面爪先に指圧痕。下面にわずかに黒漆とみられる痕跡。	
125	木製品	連歯下駄	長さ　16.6/幅　6.8/高さ　2.9	丸形の連歯下駄。上面爪先に指圧痕。下面に黒漆とみられる痕跡。	
126	木製品	連歯下駄	長さ　14.5/幅　5.9/高さ　3.7	小形丸形の連歯下駄。ほぼ全面に黒漆を塗布。爪先側の歯欠損。	
127	木製品	連歯下駄	長さ　19.1/幅　8.2/高さ　2.8	平面六角形の連歯下駄。上面爪先に指圧痕。踵側の歯がよく摩滅。	
128	木製品	連歯下駄	長さ　12.1/幅　5.8/高さ　2.3	小形隅丸方形の連歯下駄。踵側歯欠損。	

第155図　SD320出土遺物13(1/4)



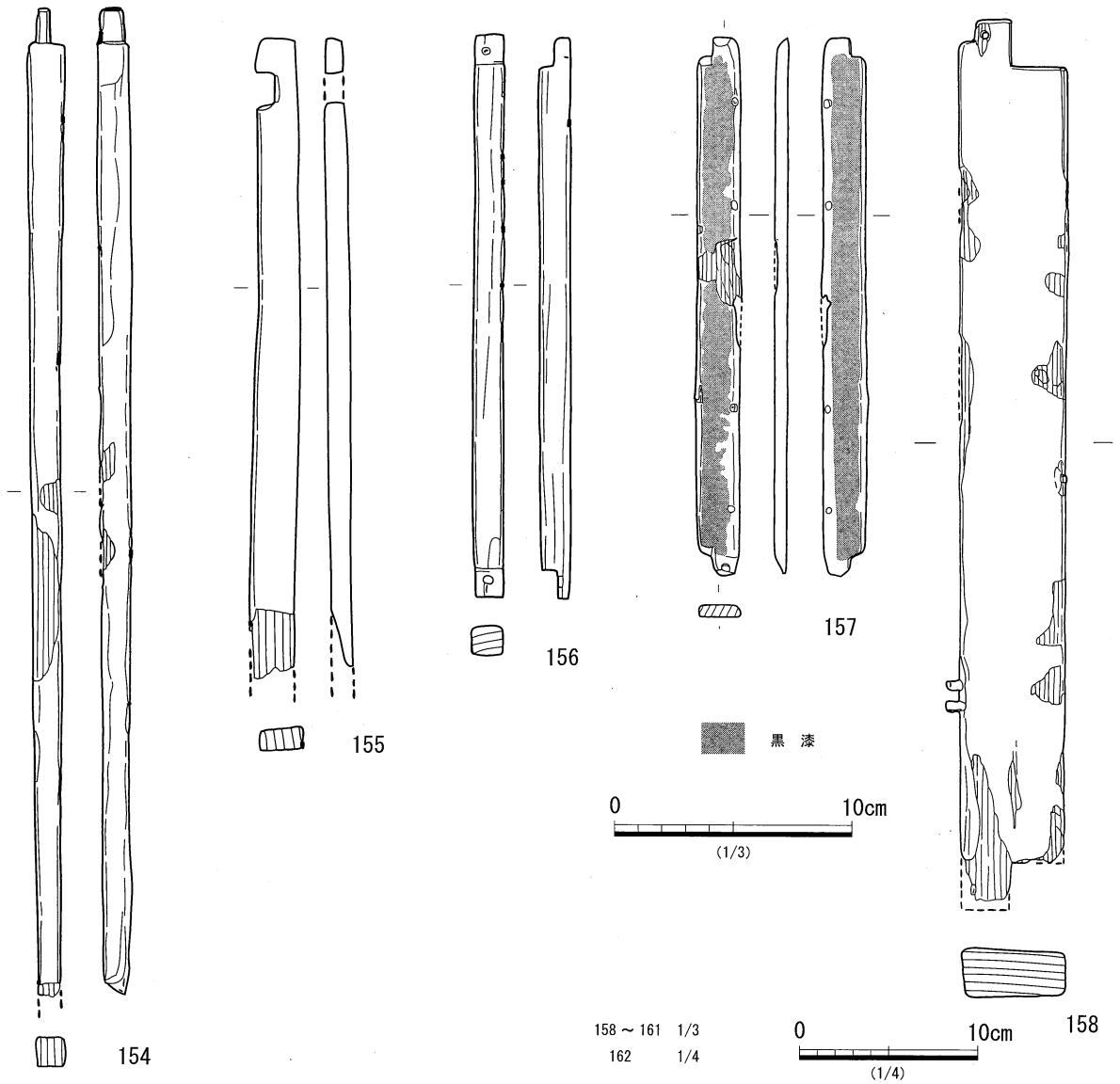
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
129	木製品	差歯下駄	長さ　21.1/幅　8.4/厚さ　2.6	丸形の差歯下駄。側面、上面のごく一部に黒漆残存。上面爪先に指圧痕。	
130	木製品	差歯下駄	残存長20.7/幅　8.1/厚さ　1.9	丸形の差歯下駄。土圧により変形、残存状態不良。上面爪先に指圧痕。	
131	木製品	連歯下駄	長さ　22.1/幅　9.3/高さ　2.9	角形の連歯下駄。上面爪先に指圧痕。踵側に「一」字の焼印。	
132	木製品	連歯下駄	長さ　14.3/幅　7.9/高さ　3.9	角形の連歯下駄。上面爪先に指圧痕。大きく割れたものを鉄釘６で接合。	
133	木製品	刳り下駄	長さ　21.8/幅　9.3/高さ　3.7	角形の刳り下駄。上面爪先に指圧痕。	
134	木製品	差歯下駄(歯)	幅　10.9/残存高 5.8/厚さ　1.4	差歯下駄の歯。上部の突起欠損。下面は摩滅、小石、砂多数。	
135	木製品	差歯下駄(歯)	幅　8.2/残存高 5.5/厚さ　1.4	差歯下駄の歯。上部の突起欠損。下面は摩滅、小石、砂多数。	
136	木製品	差歯下駄(歯)	幅　9.1/高さ　9.1/厚さ　1.2	差歯下駄の歯。下面は摩滅、砂多数。	

第156図　SD320出土遺物14(1/4)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
137	木製品	羽子板	長さ　35.2/残存幅　5.5/厚さ　0.9	表面に無数の鋭利な刃物による傷。柄基部に赤色顔料(?)。	
138	木製品	羽子板	残存長17.8/幅　7.3/厚さ　0.7	柄欠損。	
139	木製品	独楽	長さ　3.8/径　2.4	上面に径6mm程度の小孔。	
140	木製品	独楽	長さ　3.3/径　2.4		
141	木製品	不明	径　3.4/厚さ　0.5	薄い円盤状の木製品。1/2周程度の破片。中央部に穿孔。	
142	木製品	柄	残存長18.3/幅　3.2/厚さ　1.7	刃物の柄。端部に茎を差し込む孔あり。	
143	木製品	木釘？	残存長18.9/頭部幅　1.8	大形の木釘状の木製品。頭部は断面方形、軸部は断面円形に加工。	
144	木製品	弾み車？	径　7.3/厚さ　1.0	中央に径1.3cm程度の孔のある円盤状品。その両脇に２個１対の小孔をあける。	
145	木製品	不明	長さ　26.0/幅　7.4/厚さ　0.7	一方の小口側に細い突起のある板状品。突起側がやや厚く、他の小口側がやや薄い。中央付近と突起の先端に小孔あり。	
146	木製品	ヘラ？	長さ　11.0/残存幅　3.2/厚さ　0.3	円盤状の板材の一方に先端の尖る突起の付くヘラ、あるいは匙状の木製品。	
147	木製品	ヘラ？	長さ　12.1/幅　2.3/厚さ　0.4	片側が匙状に拡がるヘラ状木製品。	
148	木製品	ヘラ	長さ　18.4/幅　2.5/厚さ　0.7	片側縁が刃部となるヘラ状木製品。	
149	木製品	ヘラ	残存長16.4/幅　2.1/厚さ　0.5	メス形のヘラ状木製品。	
150	木製品	不明	長さ　14.1/幅　2.3/高さ　1.7	両側が太く、中央部を細く削る。何かの部材か。	
151	木製品	不明	残存長 8.9/幅　1.8/厚さ　0.3	小口側を尖らせる薄い板状品。	
152	木製品	不明	長さ　15.4/幅　2.3/厚さ　0.2	小口側を尖らせる薄い板状品。表面に黒漆を塗布。	
153	木製品	不明	残存長 8.9/幅　2.1/厚さ　0.2	小口側を尖らせる薄い板状品。中央部に釘穴。	

第157図　SD320出土遺物15(1/4)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
154	木製品	部材	残存長41.9/幅　1.6/厚さ　1.5	端部に断面長方形の突起を持つ部材。	
155	木製品	部材	残存長27.0/幅　1.9/厚さ　1.0	端部付近に抉りのある部材。	
156	木製品	部材	長さ　23.7/幅　1.3/厚さ　1.3	両端に小孔のある突起。	
157	木製品	部材	長さ　22.8/幅　1.9/厚さ　0.6	表面、裏面に黒漆を塗布、一方の辺に沿って釘穴５箇所。	
158	木製品	部材	残存長49.9/幅　6.1/厚さ　2.9	両小口側に突起を持つ部材。側面にリング状の金具が２個１対で付く。金具の脱痕２箇所。	

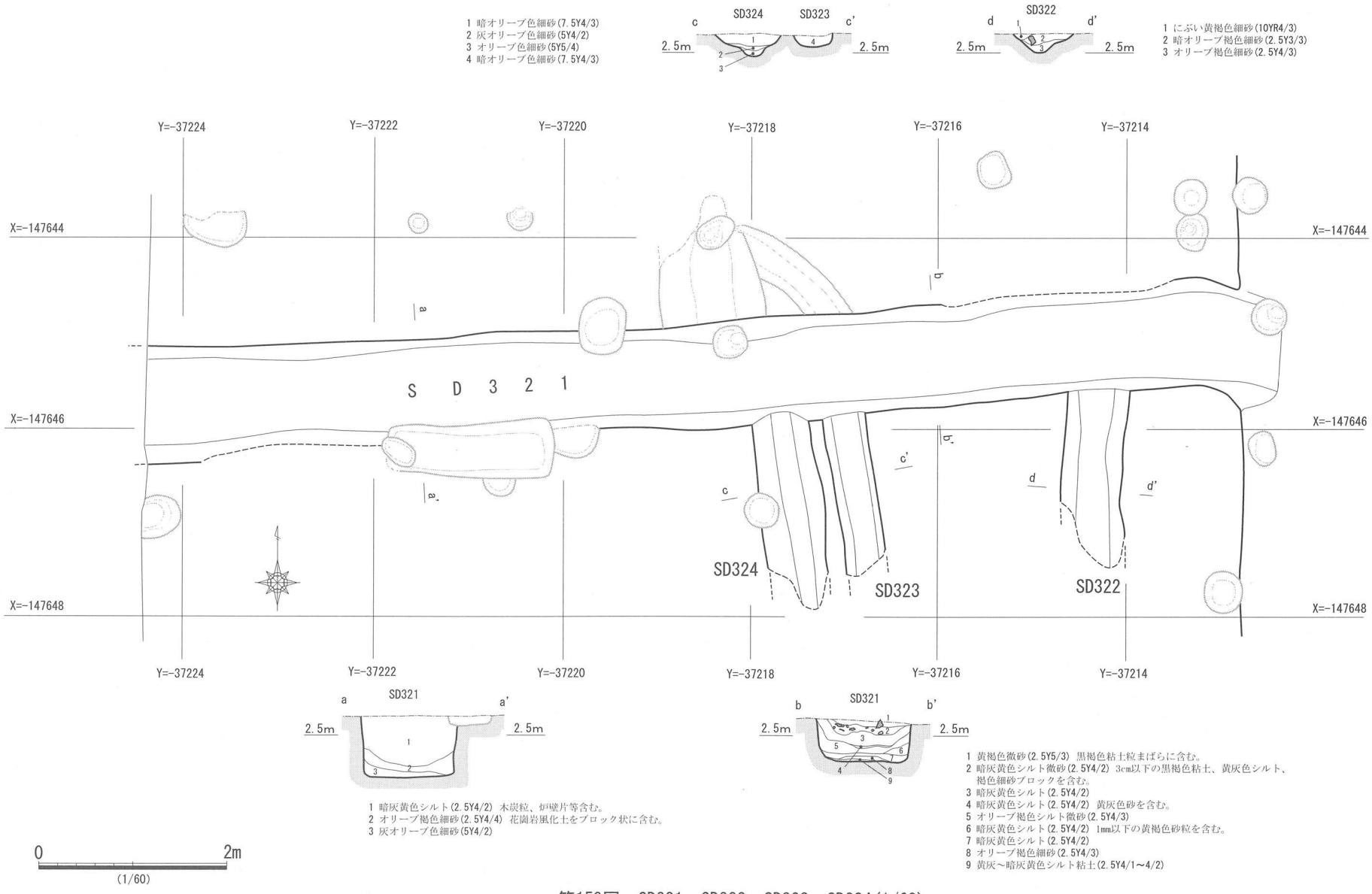
第158図　SD320出土遺物16(1/3･1/4)

ものと拡がらないものがあり、下面がつぶれ、砂や小石が食い込んでいる。

137、138は羽子板、139、140は独楽(こま)と考えられる。139は元は軸があったのか、上面に小孔を持つ。142は包丁や工具類などの刃物の柄と見られる。144はやや厚手の円盤状の木製品で、紡錘車などの弾み車とみられる。146～149はヘラ状の製品である。用途は不明だが、148、149はヘラと考えてよいものと思われる。150は取っ手状の木製品である。151、153などは片方の端部を尖らせた薄い板材で、何かに取り付けていたような釘穴を持つものもある。文字などはないが札の類であろうか。

154～158は部材類である。154～157はほぼ同じような太さの細い角材で建具などの部材であろうか。157は表裏に黒漆を塗布しており、第153図に挙げたような箱状のものの部材の可能性もある。

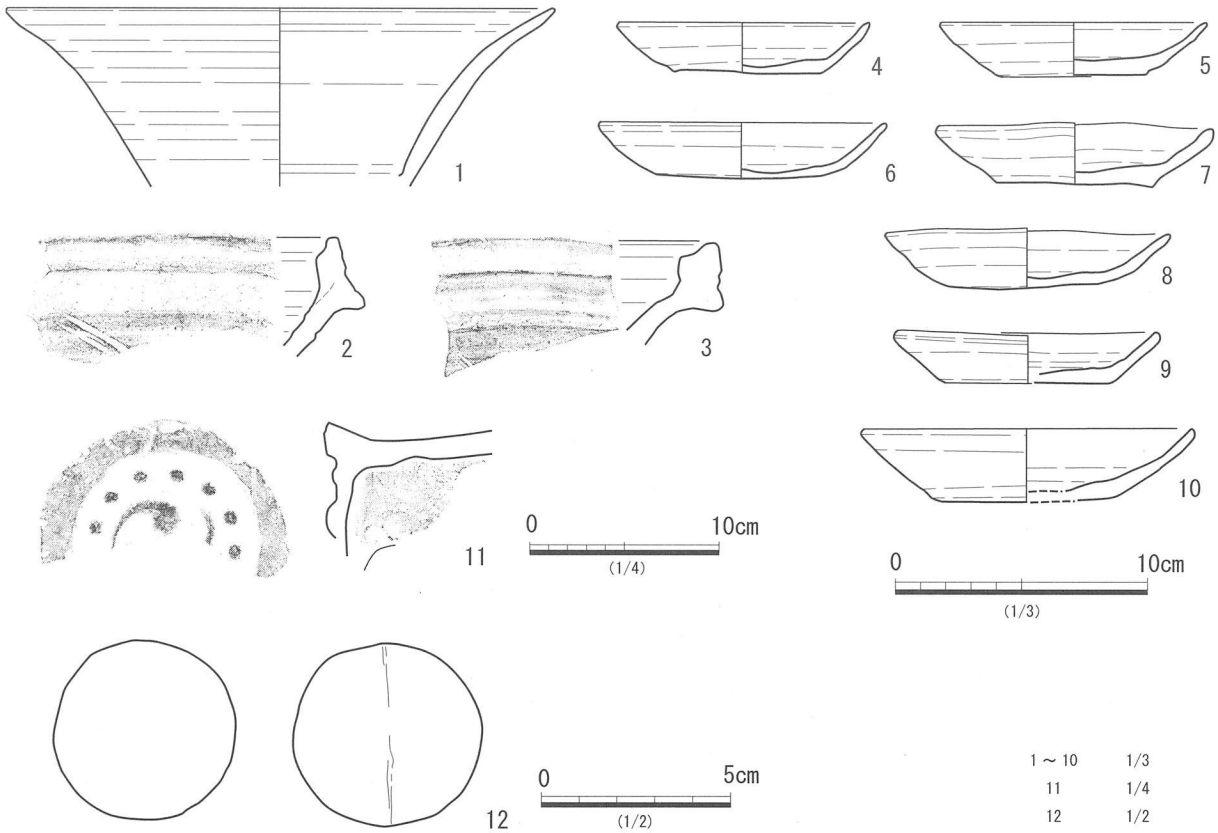
158は大形の板状の部材で、一方の長辺側の側面にリング状の金具を取り付ける。もとは三対付けられていたようで、もう一方の側面には釘がみえる。開閉可能なものの部材、あるいはぶら下げて使用するようなものであろうか。なお、金具が側面に付いているため、開閉するものであれば、密閉状態



第159図　SD321・SD322・SD323・SD324(1/60)

にはならない。

SD320の出土遺物は、肥前産陶器では砂目積みの陶器皿や白化粧土の刷毛目、象眼技法を用いた「三島手」の皿など1610年代から1650年代に生産されたとされるものが目立つ。また、備前焼擂鉢の特徴も十七世紀前半代に位置付けられるものである。SD320は縮小しながらも、最終的には1669年の藩学建設時の造成土で埋められており、出土遺物の状況もこれと矛盾しない。なお、SD320からはこのほか、アカニシ、ハマグリなどの貝殻、イヌ、鳥類などの獣骨類が出土している。有機質に富む粘質土が堆積する滞水状態で、食物残滓を含む多量のゴミが捨てられており、環境的にはかなり悪い状態であったことが想像される。



No.	種類	器種・部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調
1	肥前染付磁器	鉢？	口径　21.6	1/4周程度の破片。内面見込に圏線？。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(2.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
2	備前焼	擂鉢	口径　(26.6)	口縁部の1/8周程度の破片。内面に斜め方向のスリ目。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)橙～褐灰(2.5YR6/8～5YR4/1)/(内面)明赤褐～灰赤(2.5YR5/6～5/2)/(断面)灰黄褐(10YR5/2)
3	備前焼	擂鉢	口径　(29.6)	口縁部の1/12周程度の破片。内面に斜め方向のスリ目。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)赤褐(10R5/4)/(内面)にぶい赤褐(7.5R4/3) (断面)灰白(N7/0)
4	土師質土器	小皿	口径　9.8 高さ　2.1	内外面ともヨコナデ。底部に糸切り痕。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を少量含む (焼成)良好	(内外面・断面)灰白(10YR8/2)
5	土師質土器	小皿	口径　10.5 高さ　2.2	内外面ともヨコナデ。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を少量含む (焼成)良好	(内外面・断面)灰白(2.5Y8/2)
6	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径　11.2 高さ　2.2	内外面ともヨコナデ。底部糸切り後板ナデ。口縁部内外面に煤付着。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)浅黄橙～灰白(7.5YR8/4～2.5Y8/1) (断面)灰白(10YR8/2)
7	土師質土器	小皿	口径　10.7 高さ　2.5	内外面ともヨコナデ。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)橙～にぶい橙(5YR7/8～7.5YR7/4) (断面)橙(5YR7/6)
8	土師質土器	小皿(灯明皿)	口径　11.2 高さ　2.4	内外面ともヨコナデ。底部糸切り後板ナデ。口縁部内外面に煤付着。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面・断面)浅黄橙～灰白(10YR8/3～8/1)
9	土師質土器	小皿	口径　10.2 高さ　2.1	1/2周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部に糸切り痕。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)橙～にぶい橙(2.5YR7/6～7.5YR7/4) (断面)橙～にぶい橙(2.5YR7/6～7.5YR6/3)
10	土師質土器	小皿	口径　13.0 高さ　2.9	内外面ともヨコナデ。底部に糸切り痕。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰白～にぶい黄橙(10YR8/2～7/3) (内面・断面)灰白(10YR8/2)
11	瓦	軒丸瓦 瓦当	外径　12.9 文様区径9.0	左巻き三巴文、珠文７残存。瓦当内面ナデ。丸瓦部内面にコビキB痕。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面・断面)黄灰(2.5Y4/1)

No.	種類	器種・部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	備考
12	鉄製品	砲弾	直径　4.9	鋳造の砲弾。型合わせ目の痕跡あり。	

第160図　SD321出土遺物(1/2・1/3・1/4)

SD321

SD320の西側には、これと直交してSD321が存在する(第159図)。X=-147645.5mライン付近に、調査範囲の端からSD320までの約12mにわたって検出している。SD321は石組みなどを伴わない素堀の状態で、幅約1.0m、底は標高2.05～2.2mで、検出面から50～70cmほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は黒褐色粘土、灰黄色シルト、褐色砂をブロック状に含む暗灰黄色シルト質土を主体としており、人為的に埋められた状況を示している。

出土遺物はさほど多くなく、陶磁器類、土師質土器、瓦類がある(第160図)。また、布状の塊(写真16)や混入したと見られる滓状のもの、炉壁片もわずかながら認められる。

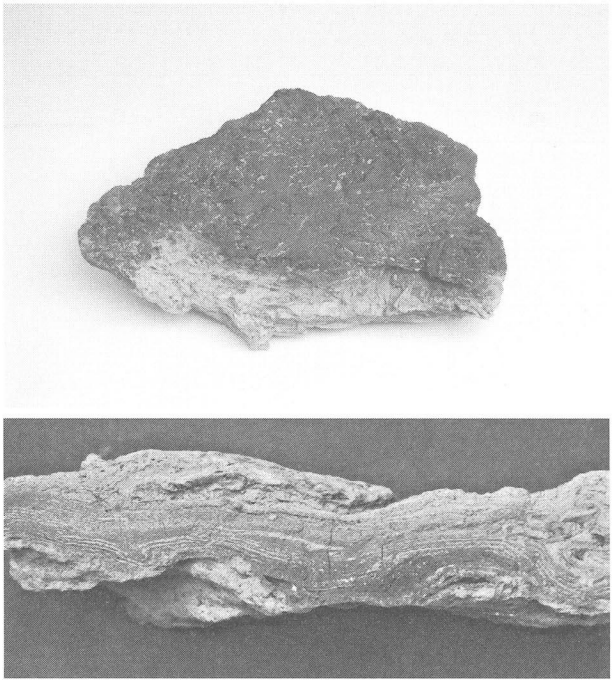
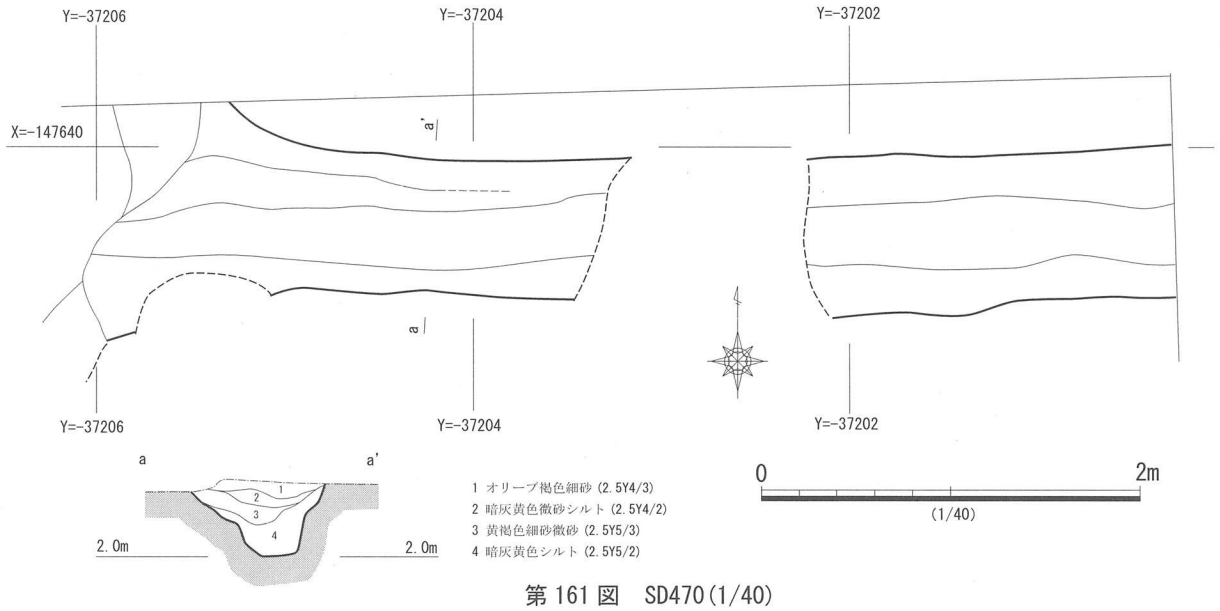


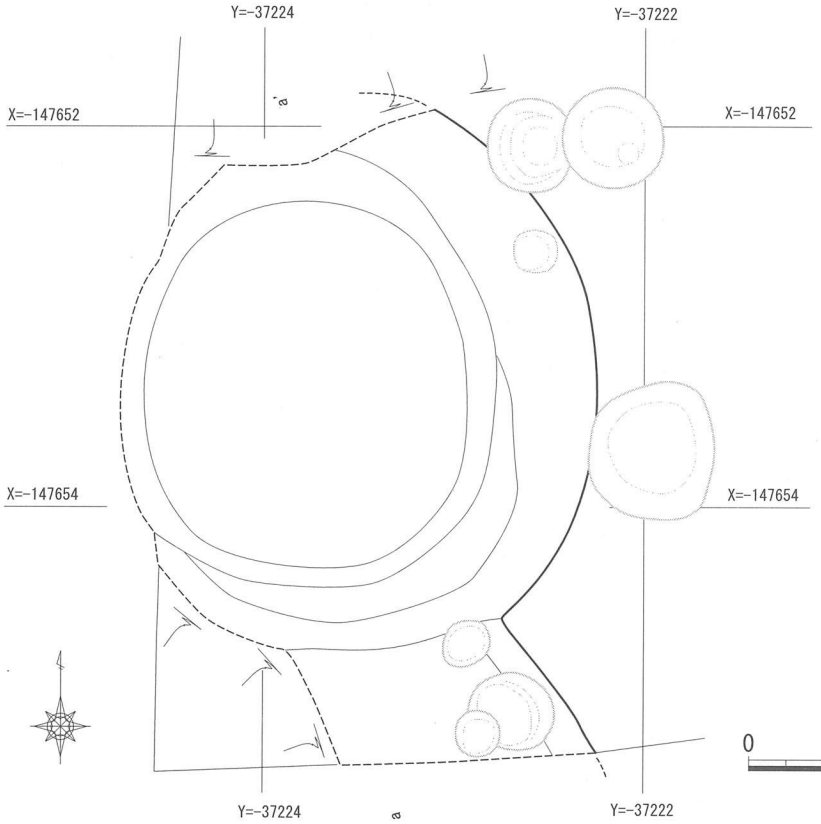
写真16　布状塊とその断面

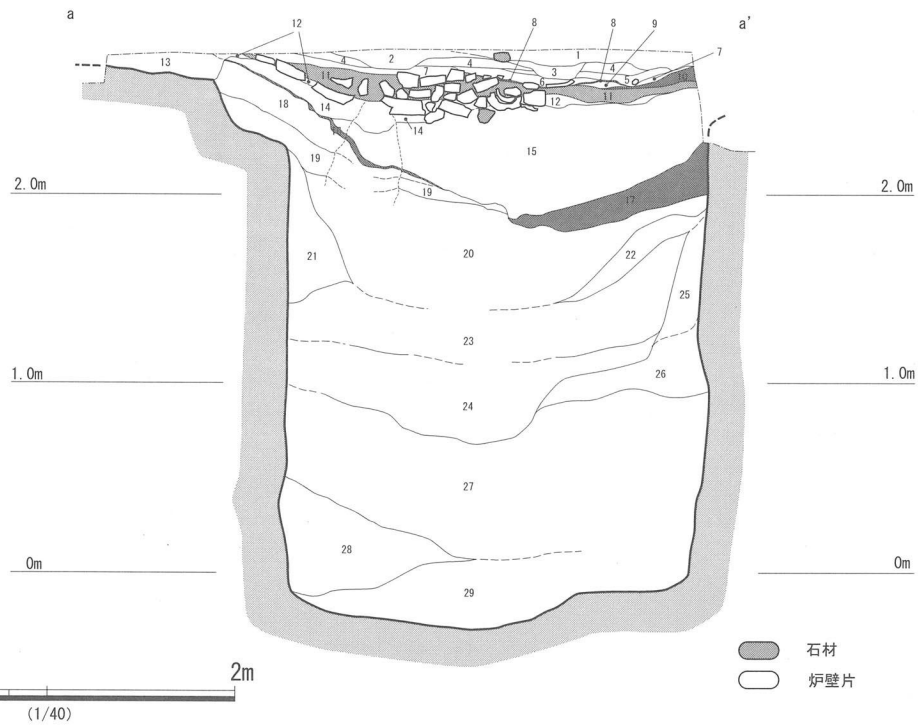
1は肥前産染付磁器の鉢とみられる。見込端に圏線1条が見られる。2、3は備前焼擂鉢である。口縁部付近の小破片だが、斜め方向にスリ目がほど超されていることが確認できる。図示していないが、陶磁器類にはほかに、肥前産陶器の甕や志野風の陶器などの小破片が認められる。4～10は土師質土器の小皿である。6、8には口縁部に煤が付着し灯明皿として使用されている。11など瓦類も若干出土している。12は直径4.9cmの鉄製の玉で、大筒の砲弾と考えられる。鋳造品であり、型の合わせ目の痕跡が認められる。

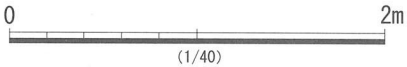
布状塊は長さ27cm、厚さ3cm程度の板状の塊で、細かい布目が見え、それが何層にも折り重なって固まったもののようである。写真の上面側はやや光沢のある黒色を呈する樹脂状のものが染みこみ、あるいは覆っており、所々に炭化した植物の枝が付着している。塊内部から写真の裏面側は浅黄橙色を呈しており、肌理(きめ)の細かい泥土状のもので固まっているように見える。分析等を行っておらず、現状ではどのようなものか不明である。



第161図　SD470(1/40)

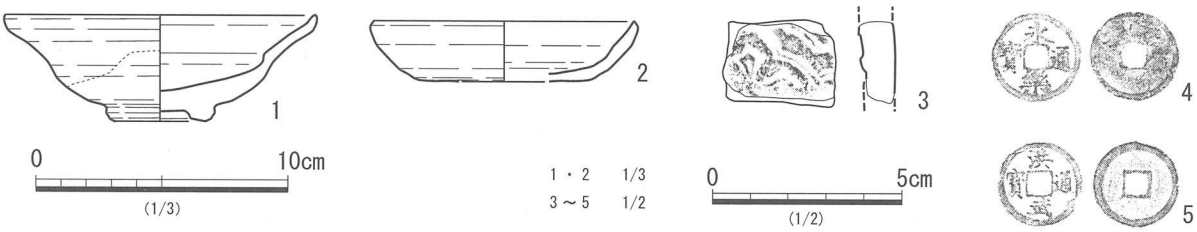






1 SP334上層 黄褐色微砂(2.5Y5/3)
2 〃 オリーブ褐色微砂(2.5Y4/3) 数mm大の黄褐色微砂、黄灰色シルト粒含む。
3 〃 オリーブ褐色微砂シルト(2.5Y4/3)
4 〃 黄褐色細砂(2.5Y5/3) にぶい黄色砂、にぶい褐色土をブロック状に含む。下面に木炭粒を多量に含む部分あり。
5 〃 にぶい黄～黄褐色細砂(2.5Y6/3～5/3)
6 〃 暗灰黄色微砂シルト(2.5Y4/2)
7 〃 オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3) 5mm大の灰オリーブ色粘土粒を含む。
8 〃 黒色炭化物層(N2/0)
9 〃 暗灰黄色微砂(2.5Y4/2)
10 〃 黒色炭化物層(N2/0) 暗灰黄色微砂をブロック状に含む。
11 〃 オリーブ褐色細砂微砂(2.5Y4/3) 焼土粒、炉壁片を多量に含む。
12 〃 オリーブ褐色粗砂(2.5Y4/4) 焼土粒まばら、炉壁片を多量に含む。
13 SX335埋土 オリーブ褐色細砂美砂(2.5Y4/3) 1～3cm大の灰～黄灰色シルト、褐色微砂ブロックを多く含む。
14 SP334中層 オリーブ褐色微砂(2.5Y4/3) 白色砂、木炭粒をまばらに含む。
15 〃 黒褐色シルト、黄灰色シルト、灰オリーブ色シルト、灰色シルトブロックからなる層。
16 〃 黒色炭化物層(N2/0)
17 〃 暗オリーブ褐色極粗砂(2.5Y3/3) 木炭粒多量、明黄褐色粘質砂粒、焼土塊を含む。
18 SP334下層 オリーブ褐色細砂(2.5Y4/4)
19 〃 オリーブ褐色細砂(2.5Y4/4) 黄灰色粘土シルト、灰オリーブ色シルト粒を多く含む。
20 〃 灰～暗オリーブ色粗砂(5Y4/1～4/3) 1～10cm大の黒褐色粘質砂、オリーブ灰色シルト、灰色粘土ブロックを多量に含む。
21 〃 オリーブ黒色細砂微砂(7.5Y3/1)
22 〃 灰色粘質細砂(7.5Y4/1)
23 〃 灰色細砂(5Y4/1) 1～10cm大の黒褐色粘質砂、オリーブ灰色シルト、灰色粘土ブロックを多量に含む。
24 〃 灰色粘質細砂(7.5Y4/1) 1～10cm大の黒褐色粘質砂、オリーブ灰色シルトブロックを多量に含む。
25 〃 暗灰黄～オリーブ褐色細砂(2.5Y4/2～4/3) 1～5cm大のオリーブ灰色粘土ブロック含む。
26 〃 灰色粘質細砂粗砂(7.5Y4/1) 1～2cm大のオリーブ灰色粘土、黒色粘土ブロック含む。
27 〃 灰色粘質細砂(5Y4/1) 1～10cm大の灰色粘質微砂、黒色粘土、オリーブ灰色粘土ブロックを多量に含む。
28 〃 灰色粘質細砂(5Y4/1)
29 〃 灰色粘質微砂(5Y4/1) 1～10cm大の灰色粘質微砂、黒色粘土、オリーブ灰色粘土ブロックを多量に含む。

第162図 SP334(1/40)



No.	種類	器種・部位	法量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調
1	肥前産陶器	皿	口径　12.3 高さ　4.2	1/2周程度の破片。高台部無釉。内面見込に胎土目痕。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(釉)灰釉・にぶい黄橙(10YR7/2) (外面・断面)にぶい黄橙(10YR7/3)
2	土師質土器	小皿	口径　(10.3) 高さ　2.4	1/8周程度の破片。内外面ともナデか。底部に糸切り痕。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)にぶい褐(7.5YR5/4) (断面)明赤褐(5YR5/6)
3	土製品	不明	厚さ　0.9	表面に菱形の文様、唐草?を印刻。表面の風化激しい。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)にぶい橙(7.5YR6/4～7/4) (断面)にぶい橙(7.5YR6/4～7/4)

No.	種類	器種・部位	法量	形態・技法等の特徴	備考
4	渡来銭	永楽通寶	直径　23.6mm/厚さ　0.9mm		SP334下層出土
5	渡来銭	洪武通寶	直径　22.9mm/厚さ　1.4mm		SP334下層出土

第163図　SP334出土遺物1(1/2・1/3)

SD321は出土遺物の特徴からも、SD320と一定の段階同時に存在した溝と見られ、武家屋敷地の区画溝、排水溝などと考えられる。なお、SD320には西側にSD343、東側にSD470が、SD321にはSD322、SD323、SD324といった溝状遺構が取り付いており、同様の区画溝や排水溝などと考えられる。

SD470

SD470はSD320の東側に直交して、X=-147640.5mライン付近に検出した溝状遺構である(第161図)。SD320から調査範囲内約6mにわたって検出しており、調査区外へと続いている。幅約70cm、底は標高約2.0mを測る。出土遺物はほとんどない。SD320側でやや幅が拡がり、深さも若干深くなっており、これもSD320に合流する城下の区画溝と考えられる。

SP334

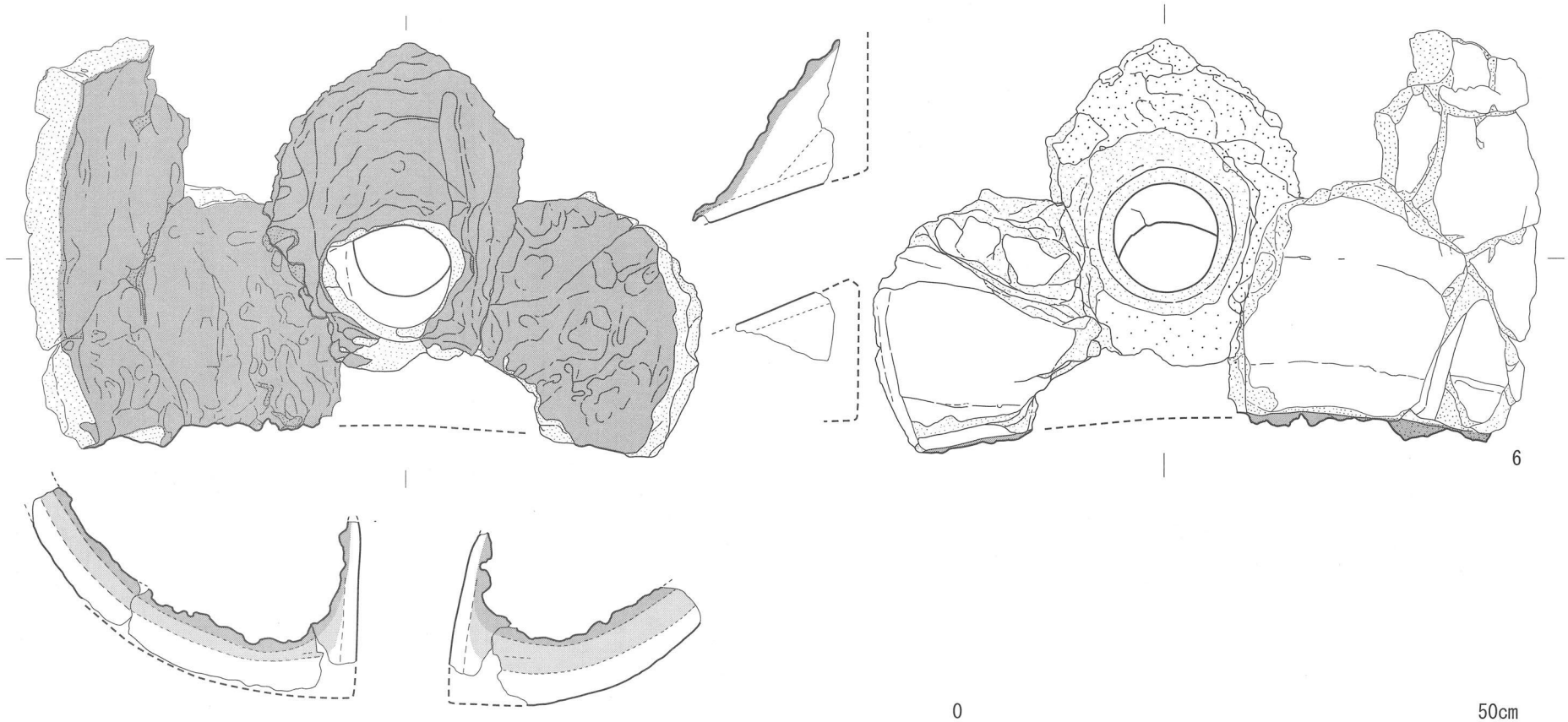
SP334は調査範囲の南西端、X=-147653.0m、Y=-37224.0m付近に検出した大形の土坑である(第162図)。直径約3mのほぼ円形で、底面は標高-0.3m、検出面からほぼ垂直に約3m掘り込んでいる。石組みなどはなく素掘りの井戸状ではあるが、径が井戸としては大きく性格は不明である。埋土は標高1.8m付近までの下層は黒色粘土、灰色粘土、オリーブ灰色粘土、黄灰色シルトをブロック状に多量に含んでおり、人的に埋められている(第162図18～29層)。その上に炭化物層(16層)、炭化物、焼土塊を多量に含む層(17層)がのり、さらに黒褐色シルト、黄灰色粘土シルト、灰オリーブ色シルト、灰色シルトなどのブロックからなる層(15層)で埋められている。上層には炭化物や焼土塊の他、炉壁や滓状の物質が多量に含まれている(11、12層)。埋土や周辺の土層は焼けたり熱を受けた様子はなく、これらの炉壁は投棄された状況と見られる。

出土遺物はごくわずかで肥前産陶器、土師質土器片などが数点出土しているにすぎない(第163図)。

1は肥前産の陶器皿で見込に胎土目痕を残す。3は表面に菱形の文様、唐草紋(?)を陰刻した板状の土製品で、SD320出土の第149図68、69と同種のものと見られる。4、5は渡来銭で、明の永楽通寶(4)と洪武通寶(5)である。

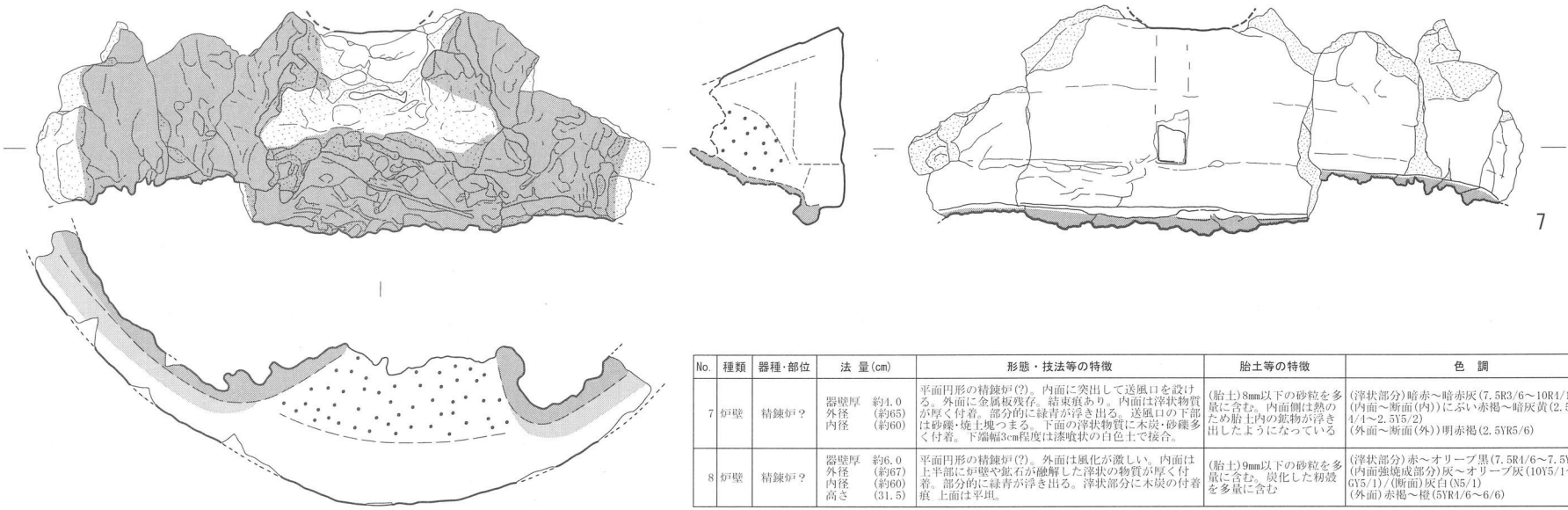
炉壁はコンテナ20箱ほどの量が出土しており、胎土の特徴に二種類が存在する(第164～166図)。

6、7は8mm以下の石英、長石粒を多量に含む胎土を持つもので、器壁の厚さは約4cm、破片の円弧の状態から内径60cmほどの円形の炉となるものと思われる。破片の量は次にあげる胎土のものよりやや多い。8は胎土に炭化した籾殻を多量に含むもので、器壁の厚さは約6cm、内径約60cmの円形の炉であると考えられる。いずれも内面が強い熱を受け、胎土中の石英、長石が浮き出したようになり、ガラス質の滓状の物質が付着する。

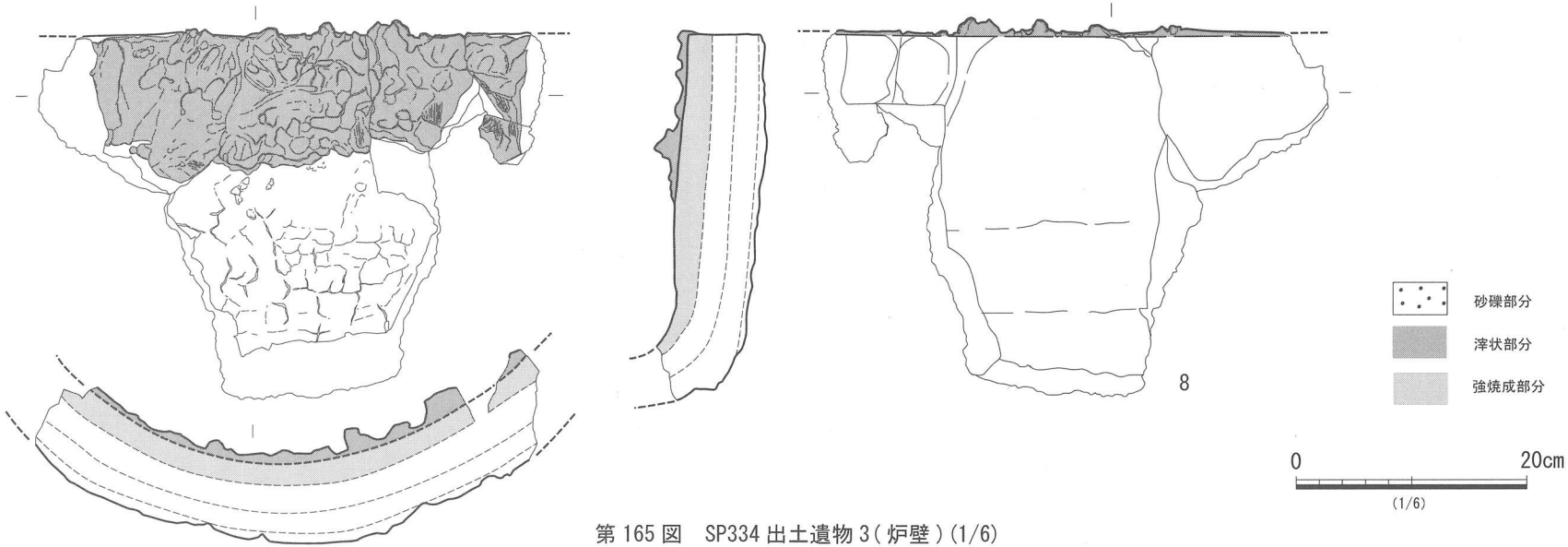


No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
6	炉壁	精錬炉?	器壁厚 約1.0 外径 (約65) 内径 (約60) 送風口径 9.1	平面円形の精錬炉(?)。内面側に突出して送風口を設ける外面は風化が激しいが、金属板などを取り付けて結束した痕跡がある。内面は炉壁や鉱石が融解した滓状の物質が厚く付着。部分的に緑青が浮き出る。	(胎土)8mm以下の砂粒を多量に含む。 内面側は熱のため胎土内の鉱物(石英、長石)が浮き出したようになっている	(滓状部分)暗赤～暗赤灰(7.5R3/6～10R4/1) (内面～断面(内))にぶい赤褐～暗灰黄(2.5YR4/4～2.5Y5/2) (外面～断面(外))明赤褐(2.5YR5/6)

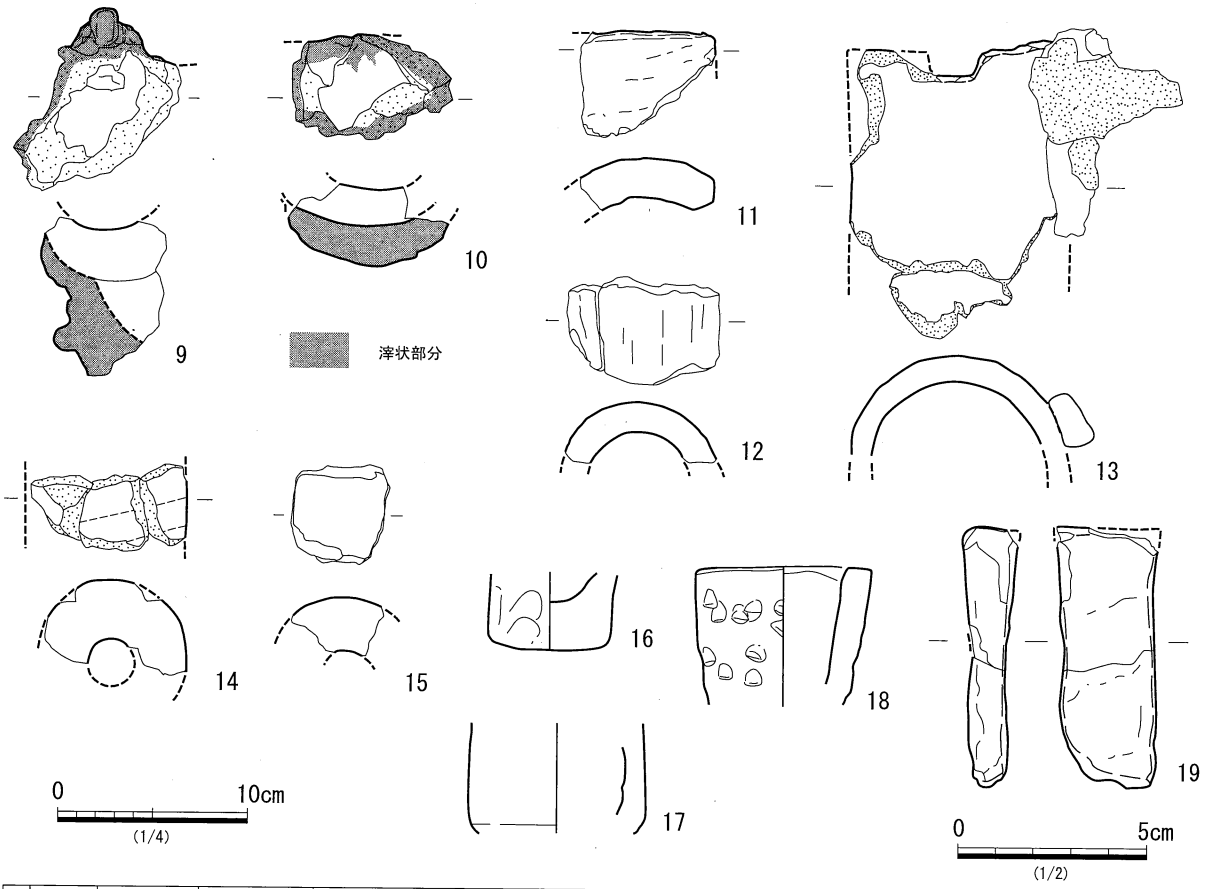
第164図 SP334出土遺物2(炉壁)(1/6)



No.	種類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
7	炉壁	精錬炉？	器壁厚　約4.0 外径　(約65) 内径　(約60)	平面円形の精錬炉(?)。内面に突出して送風口を設ける。外面に金属板残存。結束痕あり。内面は滓状物質が厚く付着。部分的に緑青が浮き出る。送風口の下部は砂礫・焼土塊つまる。下面の滓状物質に木炭・砂礫多く付着。下端幅3cm程度は漆喰状の白色土で接合。	(胎土)8mm以下の砂粒を多量に含む。内面側は熱のため胎土内の鉱物が浮き出したようになっている	(滓状部分)暗赤～暗赤灰(7.5R3/6～10R1/1) (内面～断面(内))にぶい赤褐～暗灰黄(2.5YR 4/4～2.5Y5/2) (外面～断面(外))明赤褐(2.5YR5/6)
8	炉壁	精錬炉？	器壁厚　約6.0 外径　(約67) 内径　(約60) 高さ　(31.5)	平面円形の精錬炉(?)。外面は風化が激しい。内面は上半部に炉壁や鉱石が融解した滓状の物質が厚く付着。部分的に緑青が浮き出る。滓状部分に木炭の付着痕 上面は平坦。	(胎土)9mm以下の砂粒を多量に含む。炭化した籾殻を多量に含む	(滓状部分)赤～オリーブ黒(7.5R4/6～7.5Y3/2) (内面強焼成部分)灰～オリーブ灰(10Y5/1～2.5GY5/1)/(断面)灰白(N5/1) (外面)赤褐～橙(5YR1/6～6/6)



第 165 図　SP334 出土遺物 3（炉壁）(1/6)

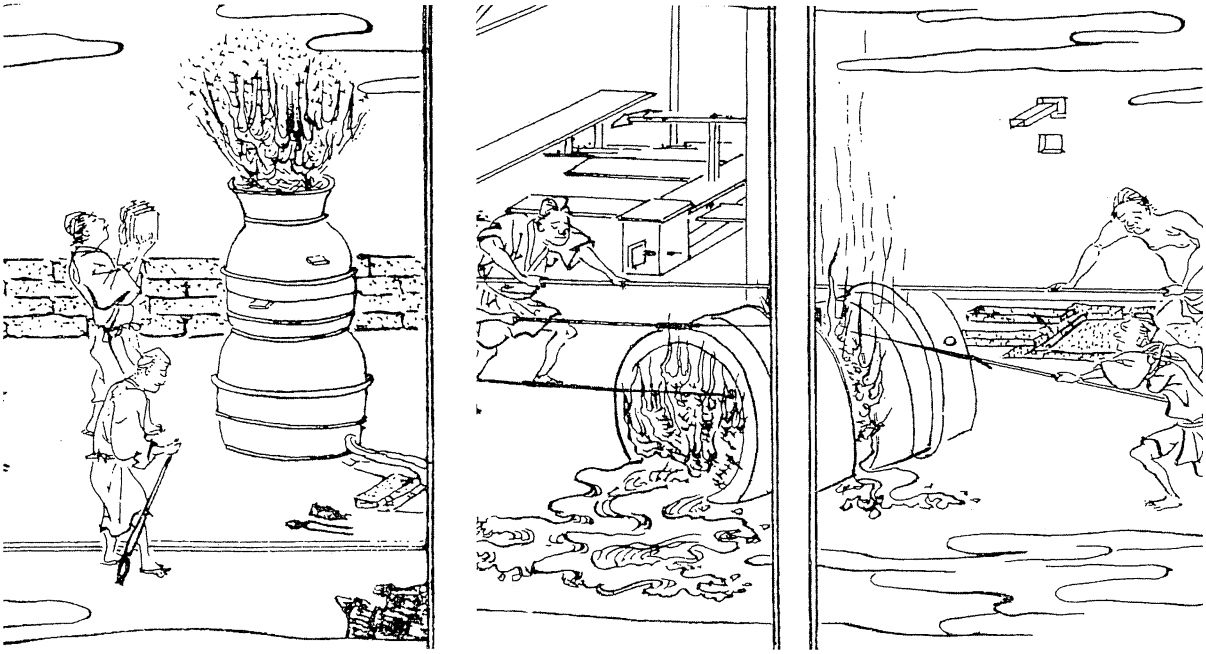


No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
9	炉壁	精錬炉？ 送風口部分	–	ふいご羽口をうける孔の部分か。炉内面側とみられる部分に滓状の物質が厚く付着。部分的に緑青が浮き出る。	(胎土)5mm以下の砂粒を多量に含む	(滓状部分)灰(10Y5/1)/(羽口部分)にぶい橙～橙(7.5YR6/4～5YR7/6)/(断面)灰白(7.5Y7/1)
10	炉壁	精錬炉？ 送風口部分	–	ふいご羽口をうける孔の部分か。炉内面側とみられる部分に滓状の物質が厚く付着。部分的に緑青が浮き出る。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多量に含む。炭化した籾殻を多く含む	(滓状部分)にぶい赤(7.5R4/4)/(羽口部分)明赤褐～橙(2.5YR5/6～5YR7/6)/(断面)灰(N4/0)
11	炉壁	精錬炉？ 送風口部分	器壁厚　2.0	羽口状の土製品。薄手で、破片の一方の側面は端部になっている。	(胎土)3mm以下の砂粒を多量に含む。炭化した籾殻を多く含む	(内面)橙(5YR7/6)/(外面)にぶい黄橙～灰(10YR7/1～5Y6/1)/(断面)にぶい橙～灰(7.5YR6/4～N4/0)
12	炉壁	精錬炉？ 送風口部分	器壁厚　1.6	羽口状の土製品。薄手。	(胎土)2mm以下の砂粒を多量に含む	(内面)橙(5YR6/6)/(外面)橙～灰白(5YR6/6～5Y7/1)/(断面)明赤褐(5YR5/6)
13	炉壁	精錬炉？ 送風口部分	器壁厚　1.3 内径　(9.2)	羽口状の土製品。薄手。外面の一部に炉壁の壁体、鉄製品(?)が付着。	(胎土)3mm以下の砂粒を多量に含む	(内面)にぶい橙(7.5YR6/4)/(外面)橙～にぶい橙(2.5YR6/6～5YR6/4)/(断面)赤(10R5/6)
14	土製品	羽口?	器壁厚　3.2 内径　(2.4)	羽口状の土製品。厚手。	(胎土)5mm以下の砂粒を多量に含む	橙(5YR7/6)～にぶい黄橙(10YR7/3)～灰(N6/0)
15	土製品	羽口?	器壁厚　2.9	羽口状の土製品。厚手。	(胎土)5mm以下の砂粒を多量に含む	(内面～断面)にぶい橙(5YR6/4) (外面)灰(5Y6/1～5/1)
16	土製品	るつぼ?	最大径　(6.2) 残存高　4.1	底部周辺の破片。内外面ともナデ。	(胎土)5mm以下の赤褐色粒を多量に含む。砂粒はほとんど含まない (焼成)ややあまい	(内面～断面)にぶい橙(7.5YR7/3) (外面)にぶい橙～灰褐(7.5YR7/3～5/2)
17	土製品	るつぼ?	最大径　(9.4) 残存高　4.1	底部付近の小破片。内外面ともナデ。	(胎土)5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内面)明赤灰～明褐灰(7.5YR7/1～5YR7/1) (外面)にぶい橙～橙(7.5YR7/4～5YR6/6)
18	土製品	るつぼ?	口径　(9.4) 残存高　4.1	1/2周程度の破片。外面は爪痕のある圧痕。内面ナデ。外面下部に滓状の付着物。	(胎土)5mm以下の砂粒を多量に含む (焼成)良好	(内外面)にぶい橙～橙(7.5YR7/4～5YR7/6) (断面)浅黄橙(10YR8/3)
19	鉄製品	楔	長さ　6.6 幅　2.6 厚さ　1.4	炉壁に付着。上面がやや拡がりつぶれたようになる。	–	–

第166図　SP334出土遺物4(羽口・るつぼ等)(1/2・1/4)

6、7は送風口部分を持つ破片で、送風口は内面側に大きく突出して設けられている。器壁の厚さは約4cmを測る。6の外面には縦方向に幅約2cmの金属板のようなものを当てた圧痕が認められる。7では外面に幅2cm程度の鉄製の板が縦方向に付着している。鉄板の下端付近に接合面があり、その上の炉壁は漆喰(しっくい)状の白色土で接合されているように見える。内面側はこの接合痕に沿って滓状物質が浸入にしている。送風口部分の下側は、滓状物質に噛み込むような形で花崗岩風化土や土器砕片が詰まっており、その下面には滓状物質に多量の木炭の圧痕が残っている。なお、6の下端は鉄板の圧痕の状況から、7で観察できる接合面に相当するようである。

8は下部が若干内湾しており、底部に近い破片と見られる。内面上半に滓状の物質が付着、下半は熱を受け灰白色に変色、細かいクラックが格子状に入っている。上端は非常に平らで、器壁は6、7に比



第 167 図　絵図に見える精錬炉（天保六年江戸橋場鋳銭座絵図より）

べ厚く約6cmを測る。9 ～ 13は送風孔部分の破片で、胎土は6、7と同じ特徴を持つ。

14、15はふいごの羽口と考えられる破片である。外径は約9cm程度で、炉壁の送風口の径にほぼ一致する。

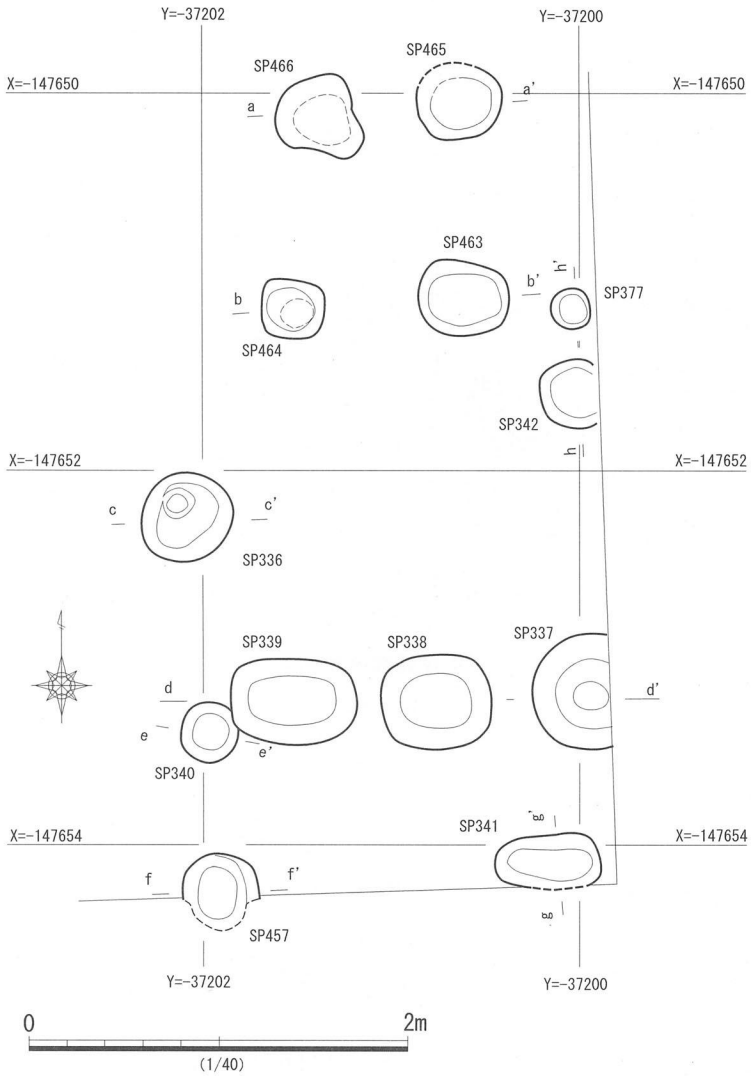
16 ～ 18はるつぼとみられる土製品の破片である。18の外面下部に滓状の付着物がある以外は使用された痕跡はない。また、炉壁や羽口には鉄製品が付着するものが複数見られる。残存状態が悪く、炉壁などを壊さないと取り出せないものも多いため、形態が分かるものはほとんどないが、19はその内の1点である。長さ6.6cm、幅2.6cmを測る鉄製の楔であり、先述の金輪や金属板を締めたり、羽口を受ける円筒状の土製品を固定するために挿入されたものとみられる。

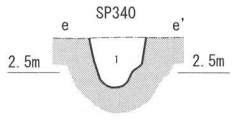
これらの炉壁は分析等を行っていないため定かではないが、滓状部分には所々緑青（ろくしょう）が浮き出した部分があり、銅の精錬炉である可能性が高い。全形を復元するのは困難だが、8のような底が丸いものの上に、6、7のような送風口を持つものが漆喰で接合され、さらに何段か筒状のものを重ね、外側を細い鉄板と金輪で絞めたものと考えられる。6、7と8は胎土が異なり別個体の可能性もあるが、一基の炉を構成するものと思われる。なお、第167図は『大日本貨幣史』付図に収録された天保六年江戸橋場鋳銭座絵図の一部である(1)。天保通寶の製作工程を解説した絵図であり、大吹所の場面に精錬炉が見える。いわゆる甑炉と呼ばれるものであり、出土した炉壁はこうした形態のものと思われる。

SP334は炉壁が多量に投棄された特徴的な遺構ではあるが、それ以外の出土遺物が少なく時期を限定することが困難である。しかしながら、胎土目の肥前陶器は十六世紀末から1610年代に生産されたものとされ、1点のみの出土ではあるが、岡山城三之外曲輪造成当初の段階に遡る遺構である可能性がある。また、直接精錬が行われた部分などは調査範囲からは検出されていないが、炉壁が多量に投棄された状況からも付近に、おそらく銅の精錬関係の構造物があったものと見られ、三之外曲輪の造成や城内の整備段階にそれに資材を供給する工房などである可能性が考えられる。

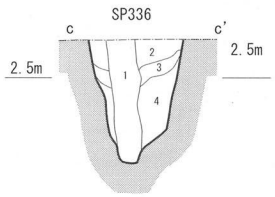
SP336 ほか柱穴群

調査範囲の南西部付近からは、SP336などの柱穴を集中的に検出している（第168図）。やや径も小さく、浅いSP377、SP340、SP341、SP342を除くと、柱根痕が観察できる。SP337、SP338、SP339が約80cm間隔で並ぶように見え、SP463、SP464、SP465、SP466もそれぞれの間隔が約80cmと共通しており、これら

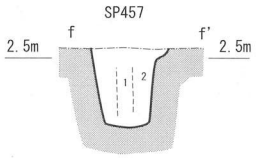




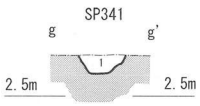
SP340
1 オリーブ褐色微砂(2.5Y4/3)



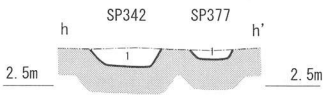
SP366
1 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)
2 暗灰黄色微砂(2.5Y4/2)
3 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)にぶい黄色粒含む
4 暗灰黄色微砂(2.5Y4/2)黄褐色シルト粒を多く含む



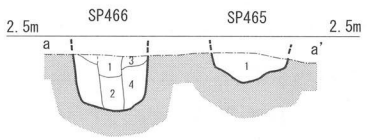
SP457
1 黄褐色微砂(2.5Y5/3)
2 灰色粘質微砂(5Y5/1)



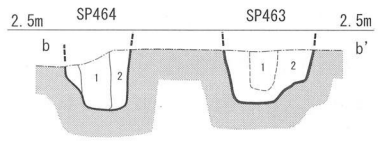
SP341
1 オリーブ褐色細砂粗砂 (2.5Y4/3)



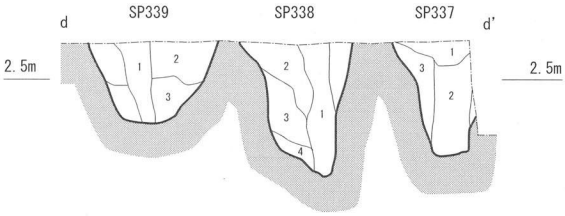
SP342
1 暗灰黄色シルト微砂(2.5Y5/2)
SP377
1 黄褐色微砂(2.5Y5/3) 下部に2～5mm大の円礫含む。



SP465
1 黄灰色細砂 (5Y4/1)
SP466
1 暗灰黄色微砂細砂 (2.5Y5/2)
2 暗灰黄色粘質微砂 (2.5Y5/2)
3 暗灰黄色細砂 (2.5Y5/2)
4 黄褐色微砂シルト (2.5Y5/3) にぶい黄色土ブロック多い



SP463
1 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2)やや粘質強い
2 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2)
SP464
1 黄褐色微砂(2.5Y5/3)
2 暗灰黄色シルト微砂(2.5Y5/2)オリーブ褐色砂ブロック含む



SP337
1 暗灰黄色微砂細砂 (2.5Y4/2) にぶい黄色シルト粒を含む
2 暗灰黄色微砂シルト (2.5Y4/2)
3 暗灰黄色微砂シルト (2.5Y4/2)3cm 大のにぶい黄色シルト、黒褐色粘土ブロック含む
SP338
1 オリーブ褐色微砂 (2.5Y4/3) 暗灰黄色微砂、灰黄色シルトブロック含む
2 暗灰黄色微砂シルト (2.5Y4/2)1cm 大の灰黄色シルトブロック含む
3 黄褐色シルト微砂 (2.5Y5/4)
4 灰オリーブ色微砂 (5Y4/2)
SP339
1 オリーブ褐色微砂 (2.5Y4/3)
2 暗灰黄色微砂 (2.5Y4/2) 黄褐～にぶい黄色土粒多く含む
3 暗灰黄色シルト微砂 (2.5Y5/2)

第168図　SP336ほか柱穴群 (1/40)

の柱穴で掘立柱建物となる可能性がある。小規模な庇付きの建物が想定されるが、約80cmという柱間は建物の柱間としてはやや狭いように思われ、柱穴の深さも様々である。調査範囲外にどのように続くのかも分からず、建物であるかどうか断定することはできない。

No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	瀬戸美濃系陶器	茶入(?) 口縁部～体部	口径　(3.1) 最大径(6.2)	1/6周程度の破片。 内外面に鉄釉。	(胎土)1mm以下の砂粒わずか/(焼成)良好	(釉)鉄釉・暗赤～暗赤褐(10R3/6～3/2)/(断面)灰白(2.5Y7/1)

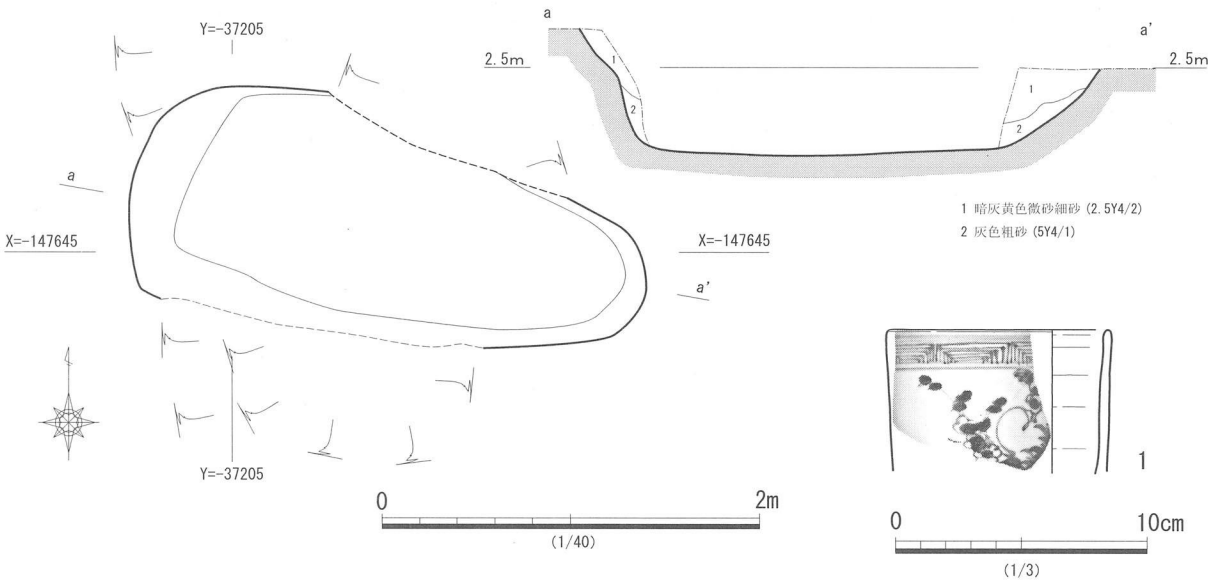
第169図　SP465出土遺物(1/2)

出土遺物はほとんどないが、SP465からは茶入とみられる小片が出土している(第169図)。これは口径3.4cm程に復元できるごく小さなもので、内外面に鉄釉をかける。瀬戸あるいは美濃産の陶器とみられる。

SP363

SP363はX=-147645.0、Y=-37204.0付近に検出した長楕円形の土坑である。中央部を上層遺構によって失っているが、長径約2.7m、短径約1.3m、底面は標高2.0m付近で遺構面から約70cm程度掘り込まれている。埋土は暗灰黄色～灰色の砂質土である。形態的にはゴミの廃棄土坑状であるが、遺物はさほど多くなく、埋土の状況からもその可能性は低い。

遺物は肥前産の染付磁器片、土師質土器片が少量出土している。いずれもごく小破片である。1はそのうち最も大きな破片で、肥前染付磁器の碗である。口縁部の1/4周程度の破片であり、口縁部外面に雷文、外面に花卉文を施している。

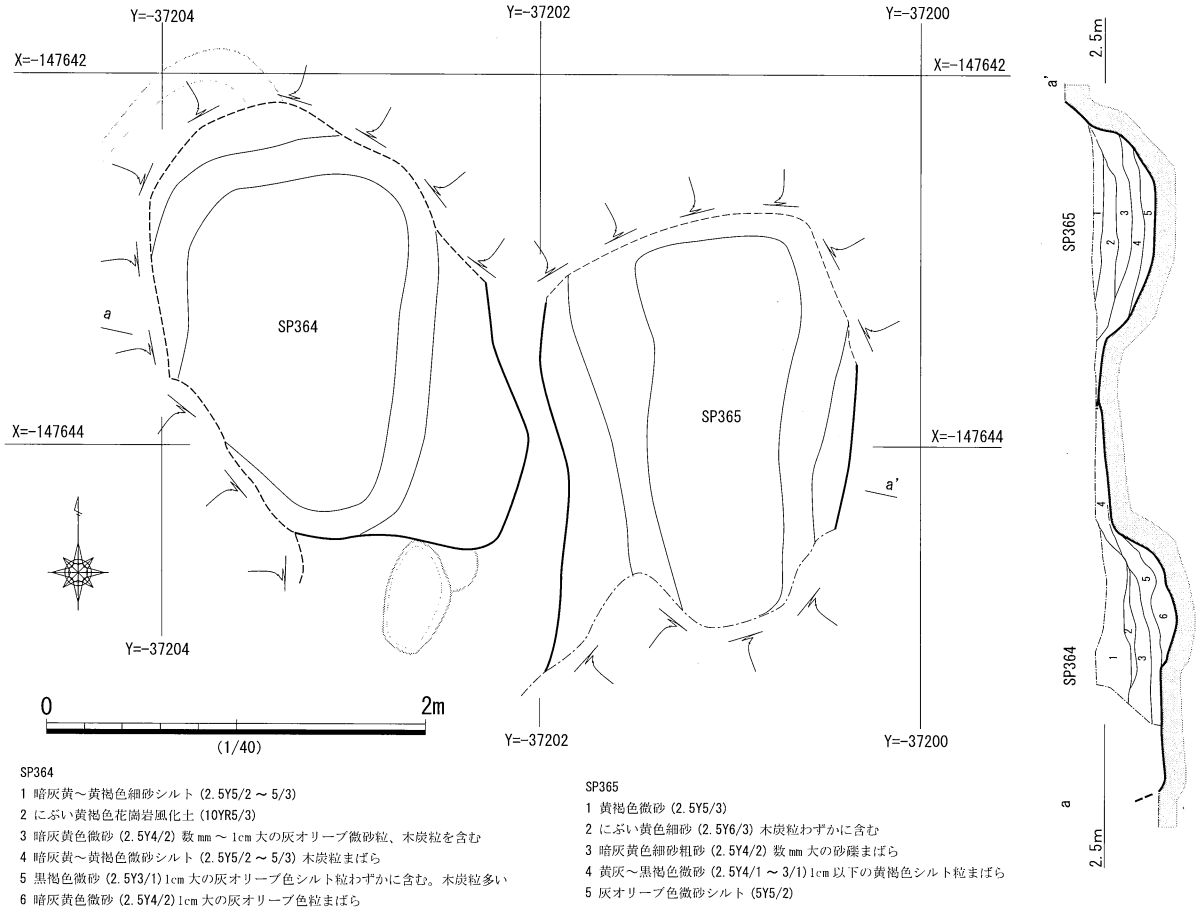


No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	肥前染付磁器	碗 口縁部～体部	口径　(8.7)	1/4周程度の破片。外面に花卉文、口縁部外面に雷文。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(10G8/1) (断面)灰白(N8/0)

第170図　SP363(1/40)と出土遺物(1/3)

SP364・SP365

SP364はX=-147643.5、Y=-37203.5付近、SP365はX=-147644.0、Y=-37201.0付近に隣接して検出された土坑である。どちらも南北を旧西校舎基礎によって失っており、正確な規模は分からないが、長径2～3m、短径1.5～2m程度の楕円形ないし隅丸方形で、底は標高2.1～2.2mを測る。両者は浅い掘り込みでつながったような状態になっており、切り合い等は観察できなかった。埋土はどちらも黄褐色～暗灰黄色の砂質土を主体にしており、埋土下部には黒褐色微砂質土(第171図SP364第5層、SP365第



第 171 図　SP364・SP365 (1/40)

4層）がある。黒褐色土層を中心に瓦片や陶磁器類など遺物を含んでいるものの、その量は決して多くない。SP363と同じく、形態的にはゴミの廃棄土坑状であるが、黒褐色土層もゴミなどの廃棄のために形成されたものとは考えられず、その可能性は低い。SP363とは位置も隣接しており、同じような性格の土坑群とみられるが、その性格は不明である。

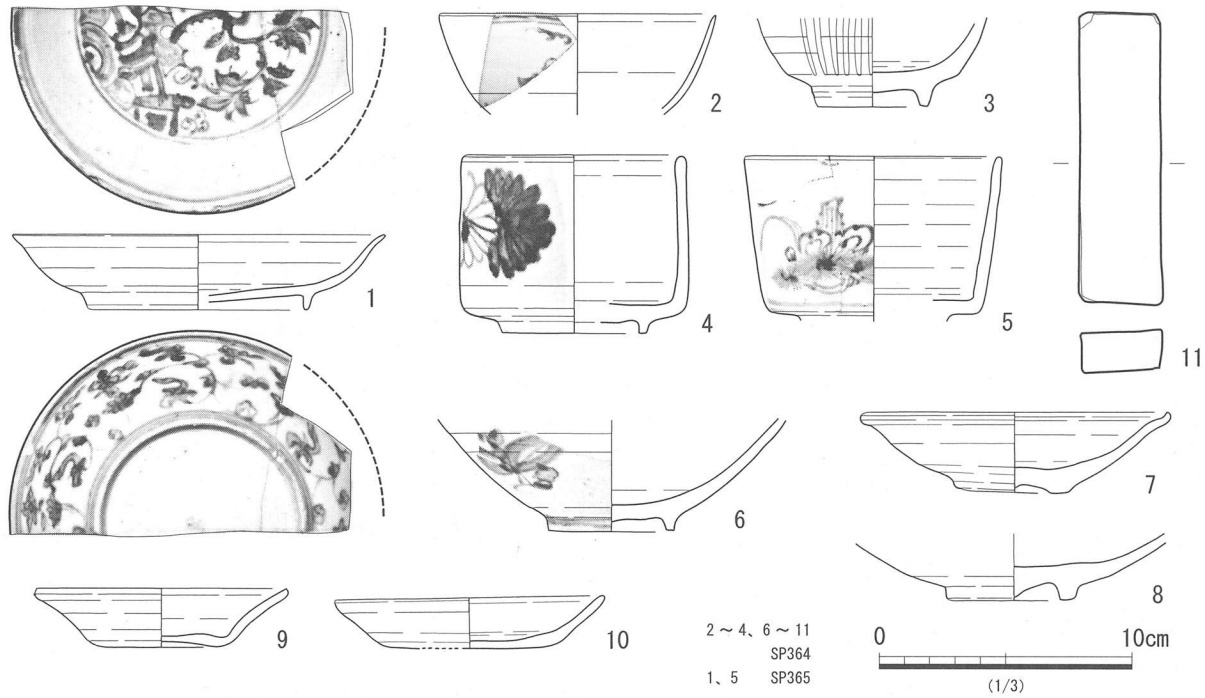
出土遺物には陶磁器類、土師質土器のほか、砥石、瓦類がある（第172図）。1、2は中国（景徳鎮）製とみられる染付磁器である。非常に薄手のつくりで、1の高台部には丁寧な釉剥ぎが認められる。3 ～ 6は肥前産の染付磁器である。3、4、6の高台部には砂が付着しており、砂目積みの製品であることが分かる。7、8は肥前産の陶器皿である。7には口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと見られる。

c）小結－藩学以前の調査区周辺－

近世遺構面３はこれまでも述べてきたとおり、岡山城三之外曲輪が造成される慶長6 ～ 7年（1601 ～ 1602）から岡山藩藩学が開校する寛文9年（1669）の間の六十数年間の遺構面である。検出された遺構は溝を中心とするもので、決して十分な内容とはいえないが、絵図類を参考に調査区で検出された遺構群の性格、変遷について若干触れておきたい。

城下図と調査範囲

岡山城の城下図のうち、藩学開校以前のものには池田家文庫（岡山大学付属図書館蔵）中の「岡山古図



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	中国産染付磁器 (景徳鎮)	皿	口径　11.8 高さ　3.0	高台部釉剥ぎ。外面に唐草紋、口縁部外面に2条、高台外面に3条の圏線。内面は見込に橋、波、樹木。口縁部内面と見込端に２条の圏線。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
2	中国産染付磁器? (景徳鎮?)	碗? 口縁部～体部	口径　(10.9)	1/4周程度の破片。外面に雲、草花?、口縁部外面に2条の圏線	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・灰白(N8/0) (断面)灰白(N8/0)
3	肥前産磁器	碗 体部～高台部	底径　4.4	1/4周程度の破片。高台畳付けに砂日痕。外面に陰刻の縦線。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)青磁釉・明緑灰(5G7/1) (断面)灰白(N8/0)
4	肥前染付磁器	碗	口径　(8.5) 高さ　7.1	1/4周程度の破片。高台部釉剥ぎ、畳付け砂日痕。外面に菊紋。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰(7.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
5	肥前染付磁器	碗	口径　(10.0)	1/2周程度の破片。高台部欠損。外面に松、鳥、外面下端に圏線２条。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)青磁釉・明緑灰(7.5GY8/1) (断面)灰白(N8/0)
6	肥前染付磁器	鉢 体部～高台部	底径　5.0	1/2周程度の破片。高台部釉剥ぎ、畳付け砂日痕。外面に花弁文、高台外面に圏線2条。	(胎土)陶石 (焼成)良好	(釉)透明釉・明緑灰～明オリーブ灰(7.5GY8/1～2.5GY8/1)/(断面)灰白(N8/0)
7	肥前陶器	皿	口径　12.1 高さ　3.3	体部下半～高台部無釉。内面見込に胎土日痕(?)３箇所。口縁部内外面に煤付着。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰白(5Y7/1) (外面)橙(5YR6/6)
8	肥前陶器	皿 体部～高台部	底径　5.2	体部下半～高台部無釉。内面見込、高台畳付けに砂日痕。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(釉)灰釉・灰白(2.5Y8/1)/(外面)にぶい赤褐～にぶい黄橙(2.5YR5/4～10YR6/3)/(断面)にぶい黄橙～灰白(10YR6/3～2.5Y7/1)
9	土師質土器	小皿	口径　(8.9) 高さ　2.4	口縁部1/3周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部糸切り痕。	(胎土)0.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい黄橙(10YR7/2) (断面)にぶい黄橙(10YR7/2)
10	土師質土器	小皿	口径　(10.6) 高さ　2.1	口縁部2/3周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部糸切り痕、後ナデ。	(胎土)2mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)灰白(10YR8/1) (断面)灰白(10YR8/1)

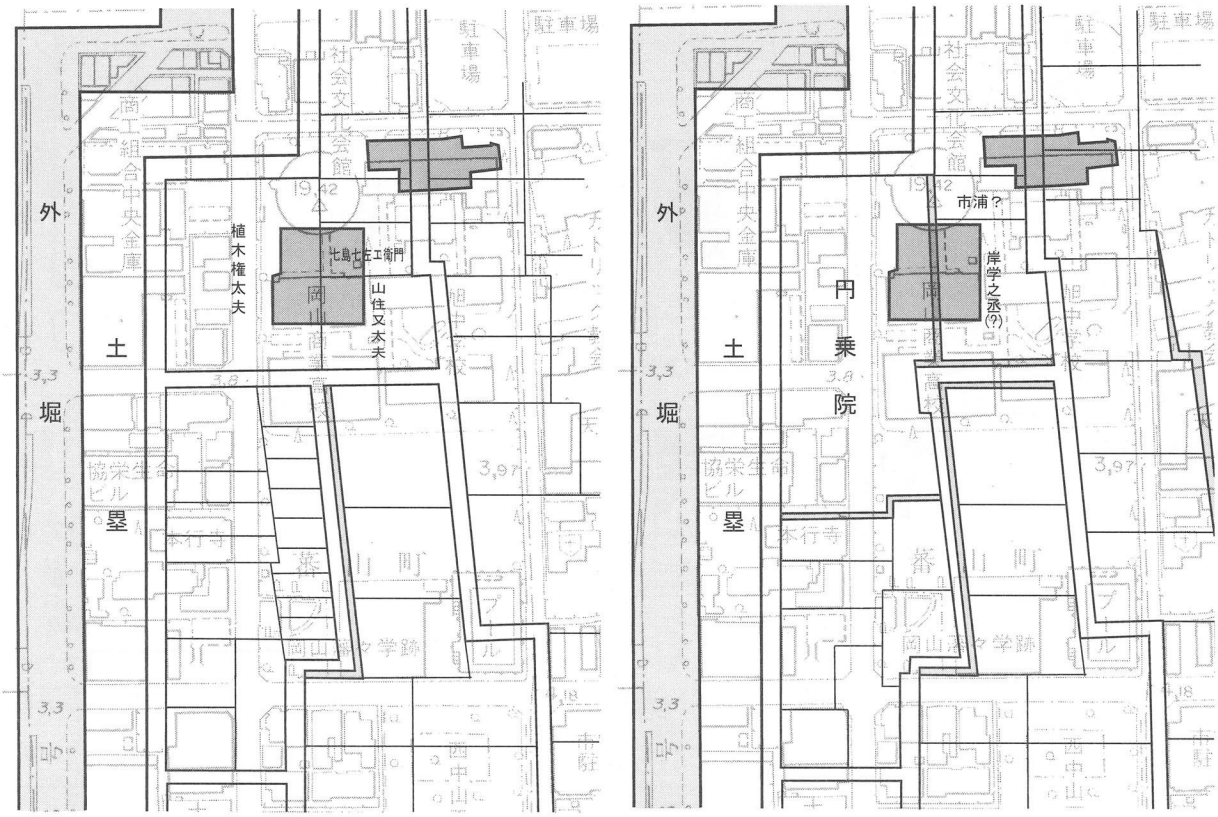
No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	備　考
11	石製品	砥石	長さ 11.5/幅　3.3/厚さ　1.6	凝灰岩(?)製砥石。	

第172図　SP364・365出土遺物(1/3)

」(T6-5)と「備前国岡山城下図」(T6-8 ～ 11)が知られている。

「岡山古図」は寛永9年(1632)以前の城下図である。寛永9年は備前岡山藩主池田忠雄の死去に伴い、その子光仲と因幡鳥取藩の池田光政で国替えが行われた年にあたる。絵図には国替えによる屋敷地の変更が張り紙で表記されている。「備前国岡山城下図」は四枚で城下全体をカバーする絵図で、年号などは記されていないが、慶安年間(1648 ～ 1651)のものとされる。この両図から、そこに記された寸法、区画整理前の道路配置などを参考に、調査区周辺の状況を現在の地図上に復元したものが第173図である。

「岡山古図」では調査範囲周辺は武家屋敷地であり、調査区のほぼ中央を南北に屋敷境が通っている。「備前国岡山城下図」では西側が円乗院となり、調査区の中央には水路の表現がある。円乗院は天台宗東叡山寛永寺の末寺で(2)、『池田家履歴略記』(3)には「円乗院は興国公(池田利隆)の御時より有りし寺にや但し宮内少輔殿(池田忠雄)の時に建てられしか祥ならずいつれに久しき寺にはありて池田の御家より定められし祈祷寺なる」(4)とある。寛文7年(1667)、池田光政の宗教政策の一環で祈祷の差し止め、廃寺となっている。



「岡山古図」(T6-5)　　「備前国岡山城下図」(T6-11)

第173図　藩学開校以前の調査区周辺(1/2,500)

城下図と検出遺構

さて、調査区では溝を中心に多数の遺構を検出しているが、出土遺物などからは十七世紀前半代という以上に細分することは困難である。

調査区ではほぼ中央にSD320を検出している。これは「備前国岡山城下図」にみえる水路に相当するとみられる。円乗院廃転の経緯や時期からすれば、SD320上層の石組みを伴う段階がこの絵図の情景にふさわしい。「岡山古図」では水路の表現が調査区より南で止まっており、調査区付近は屋敷境を示す線のみであるが、SD320自体は「岡山古図」の段階まで遡る可能性が高く、屋敷の裏手部分はしっかりした構造物で区画されておらず、滞水した沼のような状態であったと思われる。一方、SD320から分かれているSD321、SD470などはどうであろうか。上の復元がどこまで正確かは分からないが、SD470の付近には「岡山古図」ではちょうど屋敷境がきている。SD321に相当する表現はどちらの絵図にも見えないが、絵図では数十年の間にかなり屋敷割りが変化しており、「岡山古図」の前後の段階で西側の広い屋敷地がさらに分割されていた可能性はある。なお、SD320などの出土遺物、特に木製品が、藩学段階のものより非常に多岐にわたっている。絶対量が多いこともあるだろうが、藩学関係の遺構では木札、曲物や塗物など容器類、白木箸がほとんどであったのに対し、羽子板や独楽、下駄のほか様々なものがある。中でも小柄(第149図74)、火縄銃の銃弾(第149図75、76)、大筒の砲弾(第160図12)などは武家屋敷ならではの出土品といえるだろう。特に銃弾類の出土は、絵図からは窺うことができないが、鉄砲や大筒を扱う役職の人物がこの周辺に居住していたことを示している可能性がある。

円乗院に関しては、寺院の存在を窺わせる遺構や出土遺物はほとんどない。強いて挙げれば、SP291から出土している「粲」の文字を彫った木札(第137図1)は、通常の武家屋敷よりは寺院に関わるものである可能性はある。

岡山城三之外曲輪の造成と検出遺構

岡山城三之外曲輪は小早川秀秋が慶長6年(1601)に岡山城に入城し、慶長7年(1602)に死去するまでの二年足らずの間に整備されたものといわれている。なかでも外堀はわずか二十日間で掘削されたと言われ、「二十日堀」とも呼称される。しかし、先に挙げた「岡山古図」以前の状況を示す史料はほとんどない。

今回の調査では、三之外曲輪の整備される初期の段階に遡る可能性がある遺構はSP334のみである。これもわずかな出土遺物からの類推にすぎず、断定できるものではない。しかしながら、SP334には銅の精錬炉とみられる炉壁が多量に廃棄されており、通常の武家屋敷地の遺構とは性格を異にすることは明らかである。今回、直接精錬などを行ったとみられる遺構は検出していないが、SP334自体、直径、深さとも3m程もある素掘り井戸状の遺構であり、精錬関係の特殊な遺構である可能性がある。報告部分でも述べたが、三之外曲輪の造成や城内の整備段階にそれに資材を供給する工房などである可能性が考えられる。岡山城三之外曲輪、特にその初期に遡る可能性のある遺構が検出されたのは今回が初めてであり、いまだ片鱗にすぎないが、三之外曲輪の開発に直接関係する可能性のある遺構であることは注目される。

なお、本調査では三之外曲輪の造成土と見られる土層を確認している(第70図第XI層)。岡山城二の丸域では花崗岩風化土の造成土が分厚く確認されているのに対し、黄褐色砂質土を主体とする純然たる沖積地の土層である。造成土の供給元としては外堀などを掘削した残土が第一に考えられるが、土塁の造成や三之外曲輪の面積を考えると、外堀の残土のみでは到底足りるとは思えず、周辺の微高地や河道内などからかなりの量の土が供給されているものと思われる。いずれにしても、二の丸域との造成土の差は、二の丸域が主に上級武士の屋敷地であるのに対し、三之外曲輪が主に下級武士の屋敷地として用いられていることや、伝承をそのまま信用するわけにはいかないものの、かなりの突貫工事で造成されていることを反映している可能性がある。

注

(1)吉田賢輔 1925『大日本貨幣史』大蔵省　付図(佐野英山『鋳貨図録』)

(2)岡山市史編集委員会編 1968『岡山市史』宗教･教育編　岡山市

(3)斉藤一興 寛政頃? 『池田家履歴略記』巻之十一(復刻･日本文教出版　1963 『池田家履歴略記』上巻)

(4)円乗院は「岡山古図」には見えず､少なくともこの地には光政の代になってから移されたものと見られる。記録などがなく『池田家履歴略記』の書かれた寛政頃には分からなくなっていたものであろうか。

5　古代遺構面

a）遺構面の概要

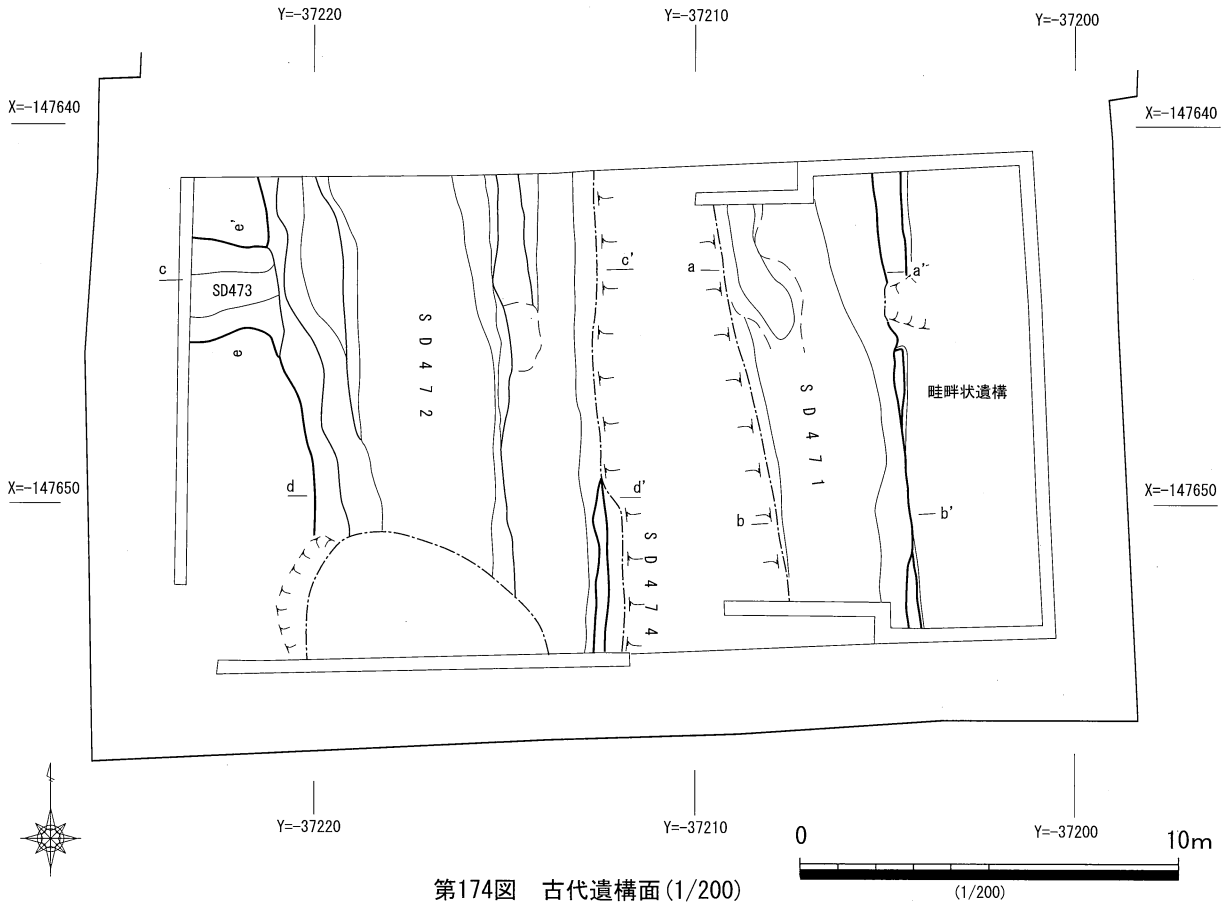
古代遺構面は、洪水砂層とみられる第XIV層の下面にあたり、標高2.0～2.1mを測る。遺構面の基盤となっている第XV層(第XV-②層)は水田耕土とみられる黄褐～オリーブ褐色微砂質土である。検出遺構は、SD471、SD272、SD473などの溝状遺構であり、調査範囲の中央部大半を占めている。SD471の東側には畦畔(けいはん)とみられる帯状の盛土を検出している。

b）遺構と出土遺物

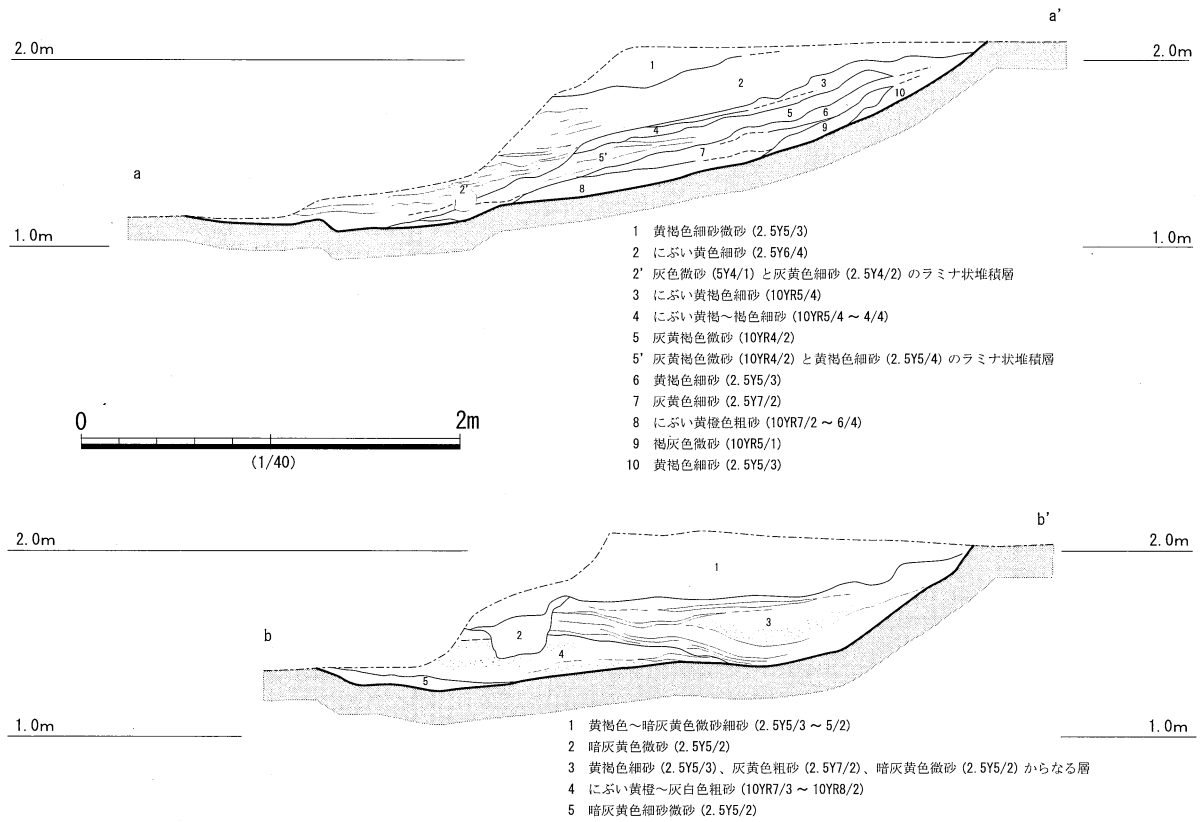
SD471

SD471は調査区の東より、ほぼ南北方向に検出した溝状の遺構である。底は標高1.0～1.3mであり、深さ0.7～1.1mを測る。西側をSD320により壊されているが、現状で幅3.5～4.2m程であり、もとは幅6m程度の規模であったと見られる。東側の肩には畦畔状遺構が検出されている。溝の斜面は緩やかで皿状の断面を呈している。埋土は黄褐色細砂と灰黄褐色微砂からなるラミナ層を中心とするもので、流水による堆積と判断できる。少なくとも調査区内では南北方向に流れることや、畦畔を伴うことから用水路と考えられるが、斜面の状況や溝断面の形状などあまり人為的な掘方には感じられない。

出土遺物は下層遺構面に由来する弥生土器や古墳時代の土師器の破片が大半を占め、SD471の時期を窺わせるようなものはない。また、SD472などとの層序関係を観察できる部分もないが、埋土の状況な



第174図　古代遺構面(1/200)



第175図　SD741土層断面（1/40）

どから、SD472などとさほど隔たった時期のものとは思われず、ほぼ同時に存在したものとみてよいだろう。

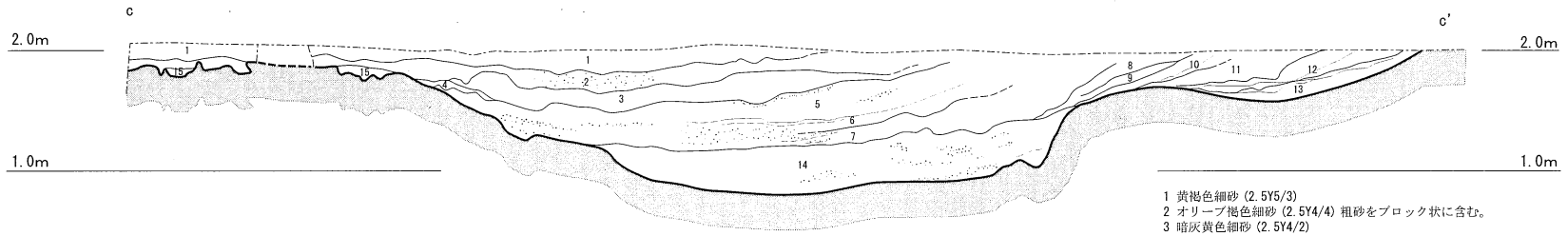
畦畔状遺構

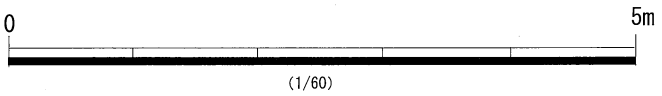
SD471の東側肩に検出した帯状の盛土である。黒褐色シルト質土からなる盛土（第70図ⅩⅤ-①層）であり、周辺の水田耕土と大きく異なっている。盛土の高さは、上面が上層の第ⅩⅢ層により削平されていると見られるが、現状で約5cm程度である。幅は最大で90cmほどだが、大部分はSD471により削り取られたようになっている。SD471に削られながらもほぼ平行すること、最終的には同じ洪水砂（第ⅩⅣ層）によって埋没していることなどから、SD471と同時に存在した水田畦畔と考えられる。X=-147645、Y=-37204付近に盛土のとぎれる水口状の部分があるが、少なくとも調査範囲内にはSD471に堰や杭列などの遺構は残っておらず、取排水のための水口か、洪水などのために盛土が失われた部分かは判断できない。

SD472

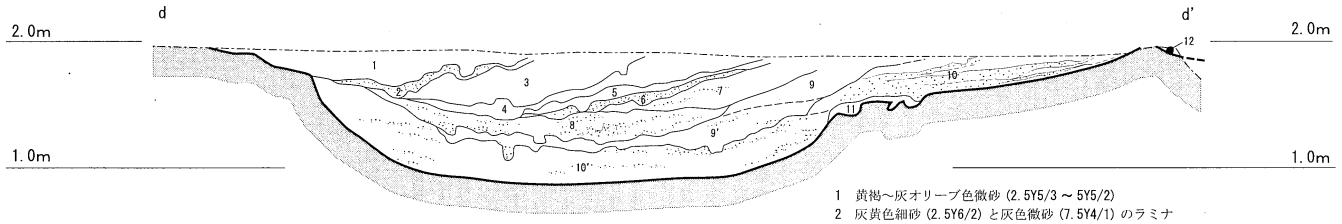
SD472は調査区のほぼ中央に南北方向に検出した溝状の遺構である。底は標高0.8～0.9mであり、深さ1.1～1.2mを測る。幅は7～9m程であり、東側に幅約2m、標高約1.6mの段状の部分がある。西側にはSD472に直交して、SD473が合流している。埋土は黄褐色細砂、灰黄色砂、にぶい黄色粗砂、暗灰黄色微砂などからなるラミナ層を中心とするもので、流水による堆積と判断できる。ほぼ南北方向に流れることやSD473が直交することから用水路と考えられるが、やはり斜面の状況や溝断面の形状などあまり人為的な掘方には感じられない。

出土遺物は多くないが、須恵器坏や丹塗りの土師器などが出土している（第177図）。これらの土器類は九世紀前半頃のものと見られ、SD472の時期の一端を示すものと考えられる。

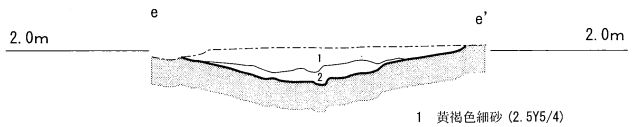




1 黄褐色細砂 (2.5Y5/3)
2 オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/4) 粗砂をブロック状に含む。
3 暗灰黄色細砂 (2.5Y4/2)
4 オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/4) 木炭粒をわずかに含む
5 暗オリーブ色細砂 (5Y4/4) 粗砂をラミナ状に含む。
6 暗オリーブ色細砂 (5Y4/3) と黄褐色粗砂 (2.5Y5/4) のラミナ層
7 オリーブ黒色微砂細砂 (5Y3/2) 粗砂をラミナ状に含む。
8 黄褐色細砂 (2.5Y5/4)
9 オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/6)
10 オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/3)
11 黄褐色細砂 (2.5Y5/4)
12 オリーブ褐色細砂粗砂 (2.5Y4/4 ～ 4/3) 粗砂をラミナ状に含む。
13 黄褐色細砂～粗砂 (2.5Y5/3 ～ 5/4)
14 暗オリーブ褐色微砂 (2.5Y3/3) 粗砂をラミナ状に含む。
15 にぶい黄色細砂 (2.5Y6/3)

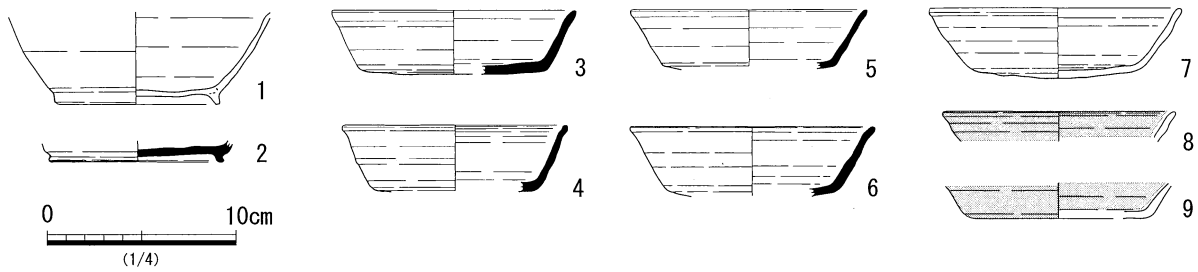


1 黄褐～灰オリーブ色微砂 (2.5Y5/3 ～ 5Y5/2)
2 灰黄色細砂 (2.5Y6/2) と灰色微砂 (7.5Y4/1) のラミナ
3 灰～黄褐色微砂 (7.5Y4/1 ～ 2.5Y5/3) 灰黄色砂をラミナ状に含む
4 灰オリーブ～オリーブ褐色細砂微砂 (5Y4/2 ～ 2.5Y4/4)
5 暗灰黄色シルト微砂 (2.5Y5/2)
6 にぶい黄色細砂 (2.5Y6/3)
7 オリーブ褐色細砂微砂 (2.5Y4/4) 灰黄色砂をラミナ状に含む
8 暗灰黄色微砂細砂 (2.5Y4/2) とにぶい黄色細砂粗砂 (2.5Y6/3) のラミナ
9 オリーブ褐色細砂微砂 (2.5Y4/4 ～ 4/6)
9' 暗灰黄～黄灰色微砂 (2.5Y4/1 ～ 4/2) にぶい黄色砂をラミナ状に含む
10 暗灰黄色細砂微砂 (2.5Y4/2) とにぶい黄色細砂 (2.5Y6/3) のラミナ
10' 黄褐色細砂 (2.5Y5/4)、にぶい黄褐～黄褐色微砂 (10Y5/3 ～ 2.5Y5/5)、にぶい黄色細砂 (2.5Y6/3)、暗灰黄色微砂 (2.5Y5/2) からなる砂層群
11 黄灰色微砂 (2.5Y5/1) 黒褐色粘土をブロック状に含む
12 黄褐色微砂 (2.5Y5/3) SD474 埋土



1 黄褐色細砂 (2.5Y5/4)
2 オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/4) 粗砂をブロック状に含む。

第 176 図　SD472・SD473 土層断面 (1/60)



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
1	土師器	坏	残存高 4.9 底径 8.8	口縁部欠損。内外面ともヨコナデ。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)灰白(10YR8/2) (断面)にぶい黄橙(10YR6/3)
2	須恵器	坏	残存高 5.7 底径 9.2	底部の1/2周程度の破片。内外面ともヨコナデ。	(胎土)1mm以下の砂粒を少量含む (焼成)良好	(外面)灰(N5/0) (内面・断面)灰(N6/0～7/0)
3	須恵器	坏	口径 (12.9) 高さ 3.4	1/3周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部ナデ。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(外面)灰白(5Y8/1～7/1) (内面・断面)灰白(5Y8/1)
4	須恵器	坏	口径 (11.8) 高さ 3.5	1/3周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部ナデか。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰白～灰(N8/0～4/0) (内面・断面)灰白(5Y8/1)
5	須恵器	坏	口径 (12.4) 高さ 3.1	1/4周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部ナデか。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰白～灰(5Y7/1～N3/0) (内面・断面)灰白～灰(N7/0～6/0)
6	須恵器	坏	口径 (12.8) 高さ 3.7	1/3周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部ナデ。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰白～灰(N7/0～6/0) (内面・断面)灰白～灰(N7/0～5/0)
7	土師器	坏	口径 (13.3) 高さ 3.8	1/3周程度の破片。内外面ともヨコナデ。底部ケズリか。	(胎土)1mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)灰白～暗灰(2.5Y8/1～N3/0) (断面)灰白(2.5Y8/1)
8	土師器	坏	口径 (12.2)	口縁部の1/8周程度の破片。内外面ともヨコナデ。内外面に赤色顔料塗布。	(胎土)0.5mm以下の砂粒をわずかに含む/(焼成)良好	(内外面)明赤褐(2.5YR5/6) (断面)灰白(10YR8/2)
8	土師器	坏	底径 (9.4)	底部の1/7周程度の破片。内外面ともヨコナデ。内外面に赤色顔料塗布。	(胎土)0.5mm以下の砂粒を多く含む/(焼成)良好	(内外面)にぶい赤褐～明赤褐(2.5YR5/4～5/6) (断面)にぶい橙～灰白(5YR6/4～10YR7/1)

第177図　SD472出土遺物(1/4)

SD473

SD473はSD472の西側に直交する溝状遺構である。幅2.2～2.8m、底は標高1.8～1.9mで、深さ10～20cm程度の浅い溝状遺構である。土層断面(第176図c-c'断面)で見る限り、SD472とSD473の埋土に切り合い関係はなく、同時に存在、機能した溝と考えられる。

SD474

SD472の東側に存在する溝状の遺構である。SD320のため、幅40cmほど、深さ10cm程度の部分が僅かに残るのみである。埋土はSD471、SD472の上層部分や第XIV層と共通する黄褐色砂質土である。極めて部分的な検出であるため詳細は不明。SD471の西側の肩である可能性も残される。

c）小結

古代遺構面は第１次調査区(北校舎調査区)のIV層上面付近に対応している考えられる。第１次調査区では、第２次調査区の第XIV層に対応する洪水砂は顕著でなく、一部に鋤床状の酸化鉄の沈着が著しい部分があるものの水田耕土とみられる灰黄色粘質土が直接乗っているようである。１次調査のIV層上面は標高2m前後の高さであり、地形的には大きな変化はないようである。１次調査では、この時期に相当する遺構として、溝13、溝15、溝16の溝状遺構が検出されている。これらは、規模などSD471、SD472によく類似しており、出土遺物もほぼ同じものであるが、いずれも北東から南西の斜めの方向に流れている。それに対し、第２次調査ではSD471、SD472などはいずれも南北方向の溝として検出しており、一見条里に伴う溝や区画とみえる。これらの溝群が同一のものであるか否かは不明といわざるを得ないが、ほぼ同時期の溝群が近接した場所に存在する溝群であり、SD471などの溝群も北側調査区では地形に沿う形で方向が変わっている可能性が高い。

6　弥生・古墳時代遺構面

a）遺構面の概要

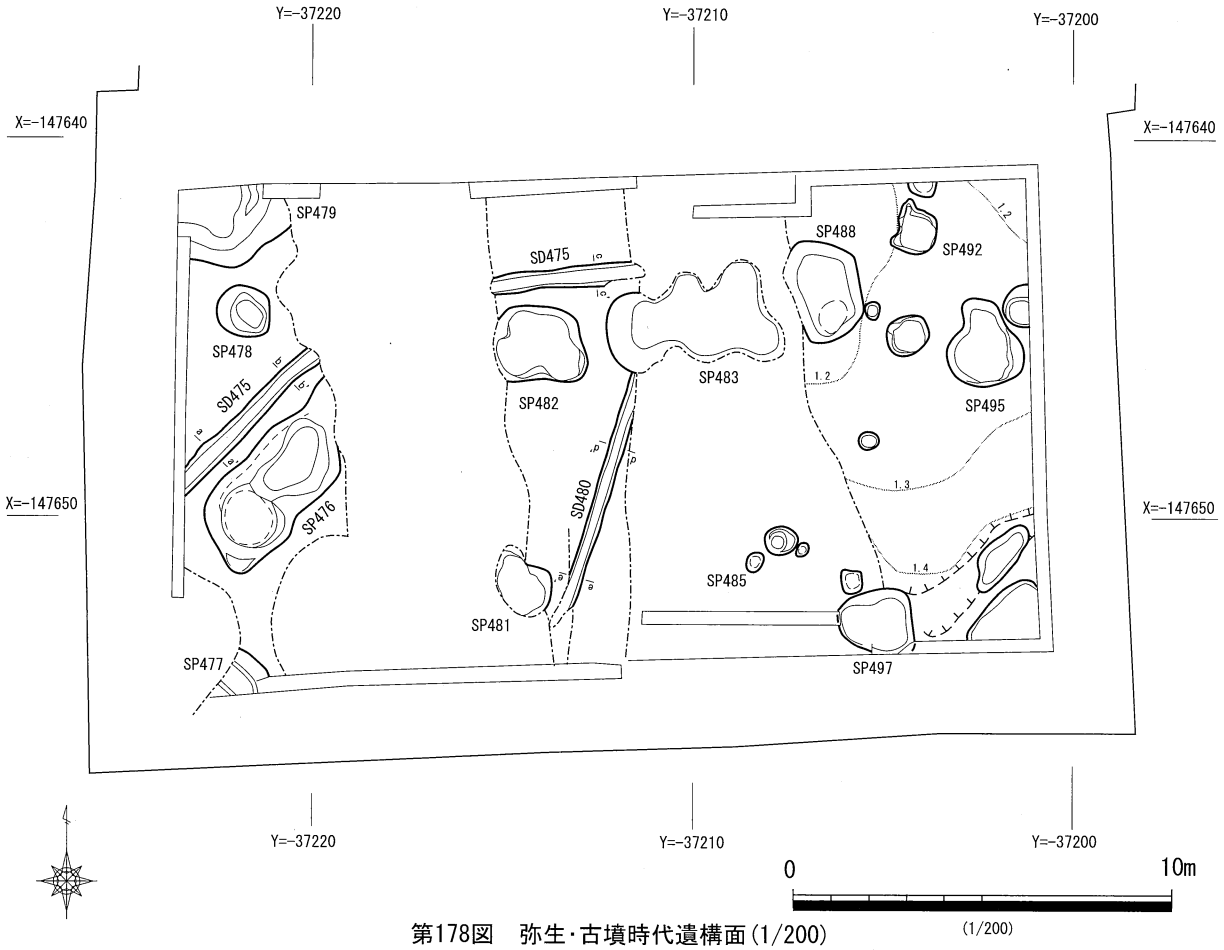
弥生･古墳時代遺構面は主に微高地基盤層である第XⅧ層上面にあたる。微高地基盤上面は西側から南側にかけては標高約1.6mの高さがあるが、北東部で谷状に低くなり、標高1.2m程度となっている。谷状部分には低湿地堆積層と見られる暗灰黄色～灰オリーブ色粘質土(第XVI層)が堆積しており、一部の遺構はこの第XVI層上面から掘り込まれているようである。

検出遺構は弥生時代後期前半のSD475、SD480の細い溝状遺構のほか、SP476などの不定形の大形土坑が多数認められる。なお､出土遺物は概して少なく､遺構に伴う遺物はすべて弥生後期前半のものだが､遺構検出時などには僅かながら古墳時代とみられる土器片も出土しており、第XVI層上面から掘り込まれている遺構なども古墳時代に下る可能性が高い。

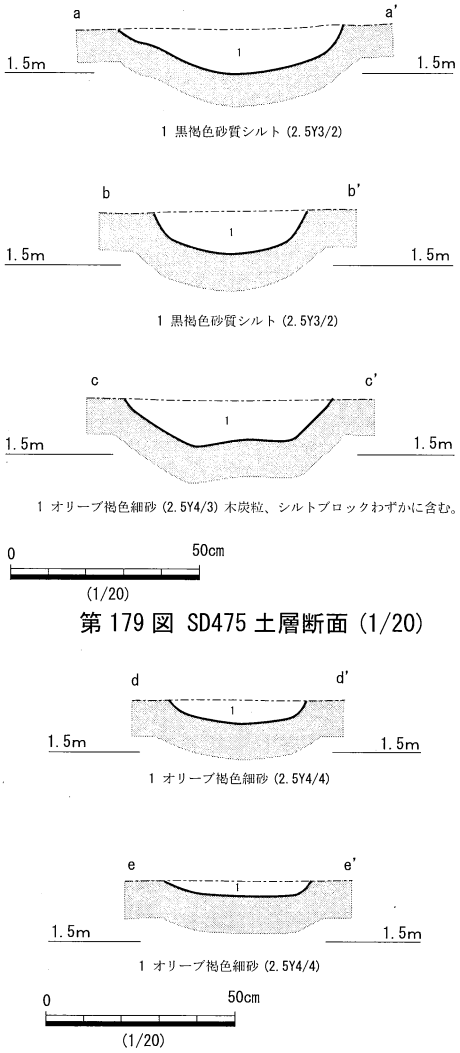
b）遺構と出土遺物

SD475

SD475は調査区西側から中央部付近にかけて検出した溝状遺構である(第179図)。上層のSD472により一部が失われているが、X=-147643.5、Y=-37211.5付近からX=-147649.0、Y=-37223.0付近にかけ、緩やかに弧を描きながら存在する。幅40～60cmほどの細い溝であり、底は標高1.5～1.55mと深さも10～15cm程度を測るにすぎない。出土遺物はほとんどなく、弥生土器と見られる微細な破片数点が出土



第178図　弥生･古墳時代遺構面(1/200)



第 179 図 SD475 土層断面 (1/20)

第 180 図　SD480 土層断面 (1/20)

しているのみである。時期は限定できないが、この溝に沿ってSP476、SP482、SP483などが掘られているように見え、何らかの関連がある可能性がある。

SD480

SD480は調査区のほぼ中央で北東から南西方向に検出した溝状遺構である(第180図)。幅30 ～ 40cm、深さは5 ～ 6cmとごく細く、浅い。出土遺物も土器の小片が数点出土しているのみである。

SP476

SP476はSD475に沿うように検出された、北東から南西に長い不定形の土坑である(第181図)。北東側は上層のSD472に切られているが、長径約5m、短径約2mを測る。土坑の南西部が直径約1.5mの円形に下部の拡がるフラスコ状に深くなっており、一見複数の土坑が重なっているように見えるが、埋土の違いや切り合い等は確認できなかった。底はほぼ平らとなっており、標高約0.7m、検出面からの深さ約95cmを測る。埋土は1 ～ 5mm大の黄灰色シルトや黒褐色シルト粒からなる層や1 ～ 5mm大の黄灰色シルト粒を多量に含む黒褐色シルトからなっており、埋め戻された埋土とみられる。なお、第181図a-a'断面は埋土掘削前に設定したこともあり、土坑最深部に掛からず、土坑の壁面の一部が掛かってしまっている。

出土遺物は弥生土器が数点出土している。1は弥生土器の短頸壺である。口縁部から胴部上半の破片で、外面を斜め方向の細かいハケメとし、内面は横方向のヘラケズリが施される。2、3と4、5は甕形土器であり、接合しないがそれぞれ同一個体とみられる。これらの土器はその特徴から弥生時代後期前半、後期Ⅱ[(1)]に相当すると見られる。

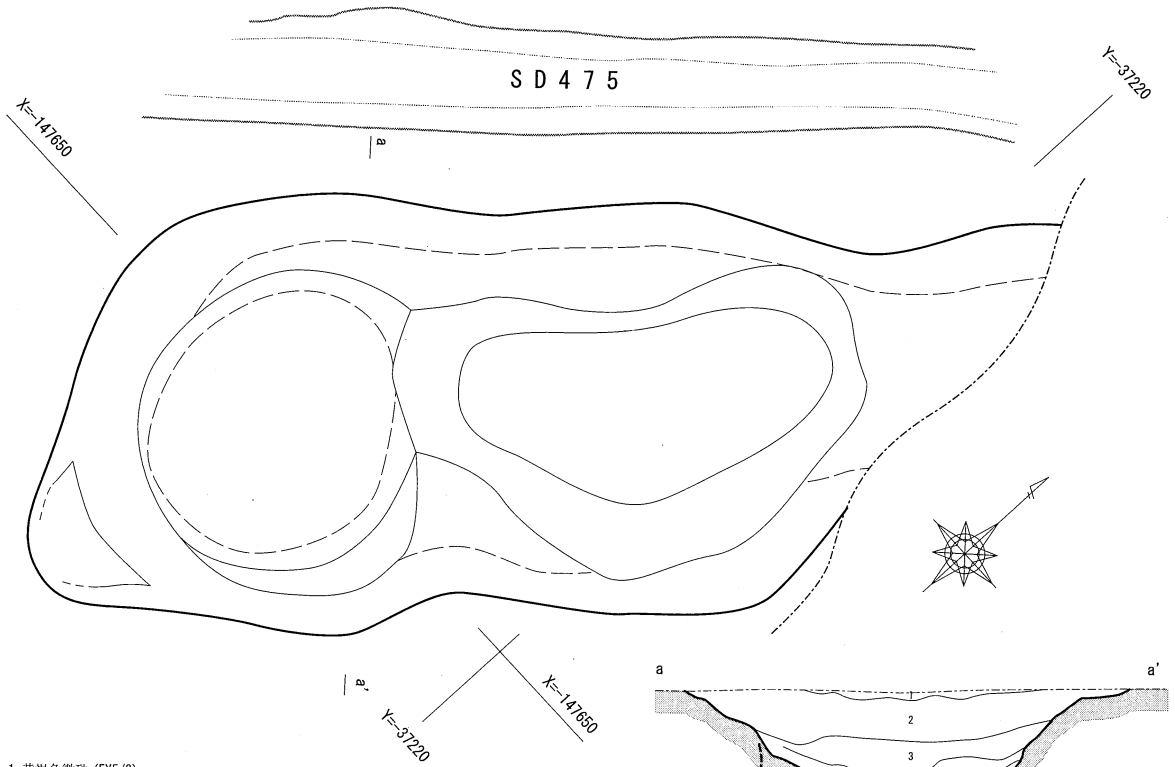
SP477

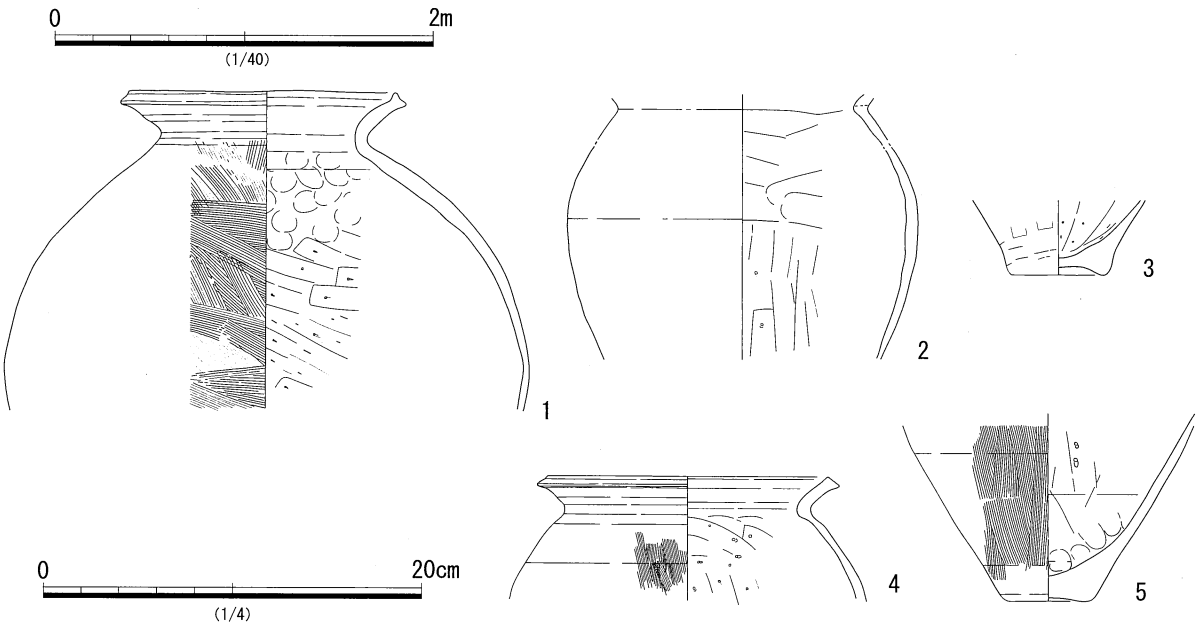
SP477は調査範囲の南西角付近に検出した土坑である。上層のSP334と一部調査区外となるが、短径1.5m程の楕円形の土坑のようである。断面形は掘方端部から緩やかに下った後ほぼ垂直に標高0.8m付近まで掘られており、検出面からの深さは約85cmを測る。埋土は0.5 ～ 2cm大の灰黄色シルト粒を多く含む黒褐色～灰色粘質土であり、埋め戻された状況とみられる。出土遺物はほとんどない。

SP478

SP478は調査範囲の西部、X=-147644.5、Y=-37222.0付近に検出したほぼ円形の土坑である(第182図)。直径約1.3m、断面形は掘方端部から緩やかに下った後ほぼ垂直に標高0.75m付近、検出面から約85cmの深さに掘られている。底面はほぼ平らで、完形の甕形土器１点が入れられていた。埋土は、特に上半部は薄い黄灰色シルト質土やオリーブ黒色シルト質土が重なっており、凹みに流入した自然堆積層に見える。少なくとも深さ50cmほどの凹みとして放置されていた可能性が高い。

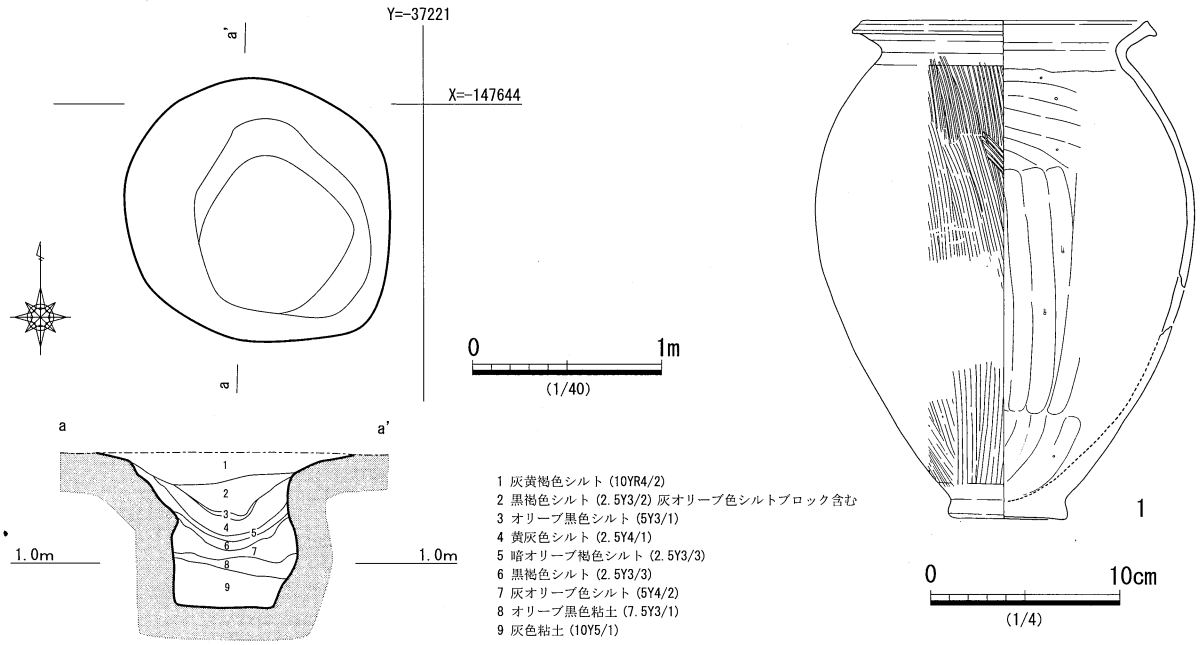
出土遺物はほぼ底面から出土した完形の甕形土器のみである(第182図1)。外面は縦方向のハケメの





No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
1	弥生土器	壺 口縁部～胴部	口径　14.1 最大径 27.8	底部欠損。外面斜め方向のハケメ(8本/cm)、口縁部～頸部ヨコナデ。内面横～斜め方向のヘラケズリ。内面肩部付近指頭圧痕。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)灰白～灰黄(5Y7/1～2.5Y6/2) (断面)灰白～灰(5Y7/1～N5/0)
2	弥生土器	甕 胴部	最大径 18.5	胴部の1/2周程度の破片。風化激しく調整不明瞭。外面ヘラミガキか。内面下半部縦方向、上半部横方向のヘラケズリ。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)浅黄橙(7.5YR8/3)/(内面)灰白～灰黄褐(2.5Y7/1～10YR5/2)/(断面)灰(N6/0)
3	弥生土器	甕 底部	底径　5.0	1/2周程度の破片。外面工具ナデ(?)、内面ヘラケズリ。2と同一個体か	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)橙～灰黄(5YR7/8～2.5Y7/2) (内面)灰黄褐～黄灰(10YR6/2～2.5Y6/1) (断面)にぶい黄橙～灰(10YR6/3～N5/0)
4	弥生土器	甕 口縁部～肩部	口径　(14.8)	1/4周程度の破片。外面縦方向のハケメ(10本/cm)、口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)にぶい黄褐(10YR5/3) (断面)灰白～灰黄(2.5Y8/1～6/1)
5	弥生土器	甕 底部	底径　4.4	外面縦方向のハケメ(10本/cm)。内面縦方向のヘラケズリ、内面底面は指頭圧痕。	(胎土)3mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰褐(7.5YR4/2) (内面)灰黄褐～にぶい黄橙(10YR4/2～6/3) (断面)にぶい黄橙～黒(10YR6/3～2/1)

第 181 図　SP476(1/40) と出土遺物 (1/4)



No.	種　類	器種・部位	法　量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	弥生土器	甕	口径　15.0 高さ　26.5 底径　5.6	外面縦方向のハケメ(6本/cm)の後、下半部に縦方向のヘラミガキ。内面下半縦方向のヘラケズリ、同上半部は横方向のヘラケズリ。口縁部周辺ヨコナデ。胴部下半に焼成後穿孔あり。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)にぶい黄褐～浅黄(10YR7/3～2.5Y7/3)

第 182 図　SP478(1/40) と出土遺物 (1/4)

後、下半部に縦方向のヘラミガキを施す。内面は縦方向から上半部では横方向にヘラケズリを施している。外面には煤が付着しており、胴部下半には焼成後の穿孔がある。弥生時代後期前半、後期Ⅱに相当するものと見られる。

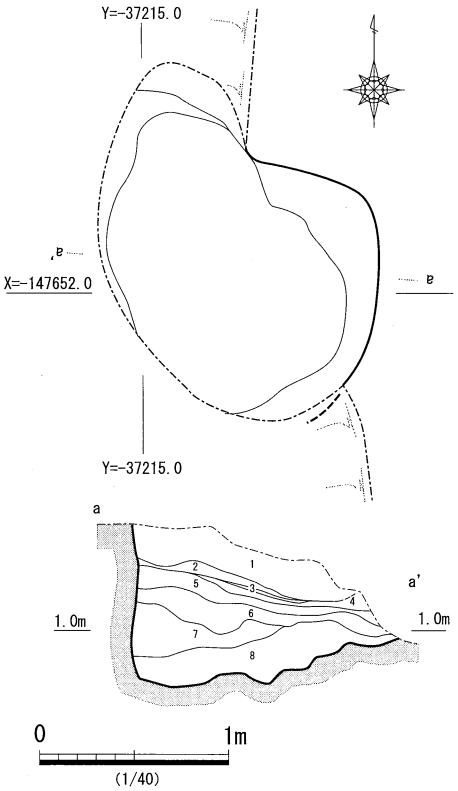
なお、SP478はほかの大形土坑と埋土の状況など非常によく似ているが、規模が大きく異なり土器埋納用の土坑である可能性がある。

SP479

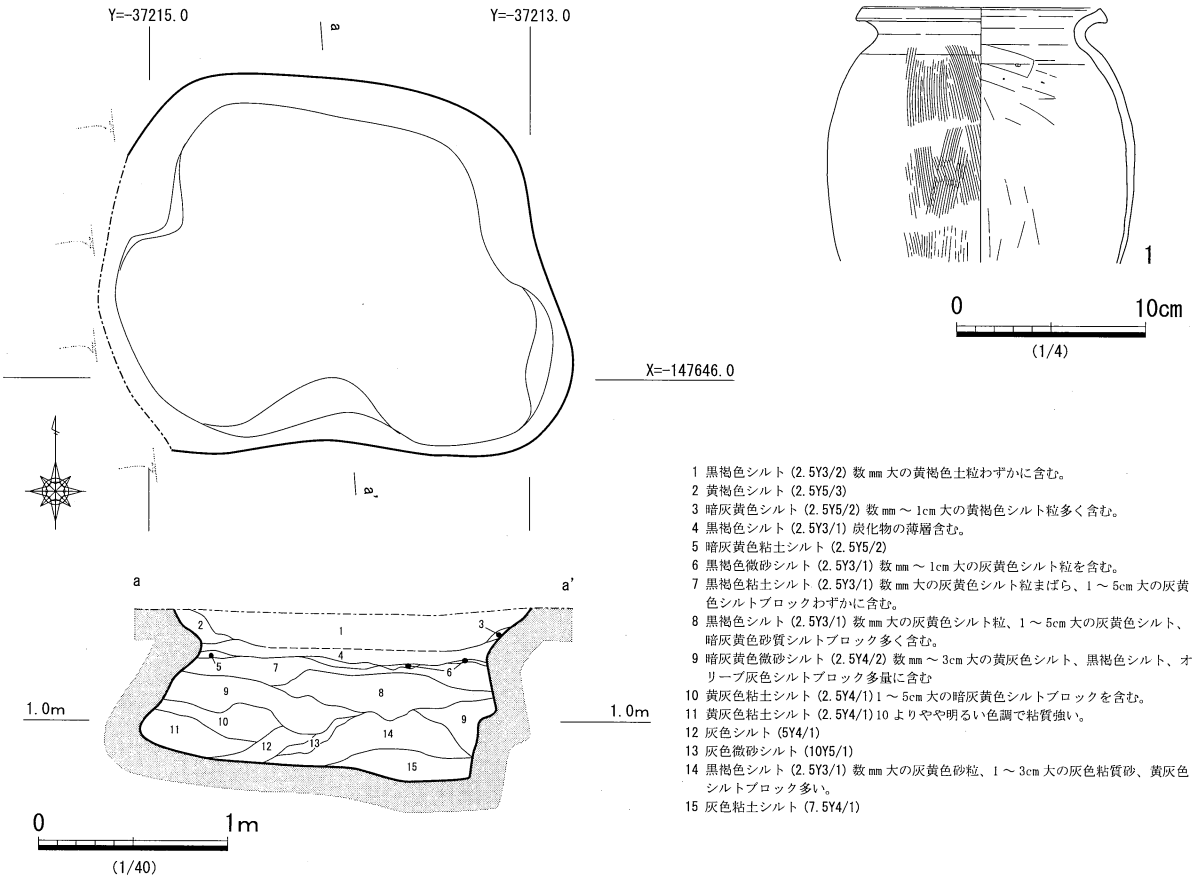
SP479は調査範囲の北西角、X=-147642.5、Y=-37222.0付近に検出した大形の土坑である。調査区外に及ぶため全貌は不明だが、東西3m強、南北2m以上、底面は標高0.7m付近であり、検出面からの深さ約80cmを測る。埋土はおおむねシルト質土や砂質土をブロック状に含む灰色から黒褐色シルト質土で、埋め戻された状況と見られる。出土遺物はごく少ないが、弥生後期前半に位置付けられる壺形土器底部の破片が出土している。

SP481

SP481は調査範囲の中央南より、X=-147652.0、Y=-37215.0付近に検出した土坑である(第183図)。上層のSD472に切られているが、長径約2mを測り、底面は標高0.7m程度、検出面からほぼ垂直またはやや外側に拡がりながら約85cm掘



第 183 図　SP481 (1/40)



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
1	弥生土器	甕 口縁部～胴部	口径 (12.6) 最大径(16.1)	1/4周程度の破片。外面縦方向のハケメ(8本程度/cm)。内面斜め方向のヘラケズリ。口縁部周辺ヨコナデ。	(胎土)2mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)にぶい褐(7.5YR5/4)/(内面)灰黄褐(10YR6/2)/(断面)にぶい黄橙(10YR7/3)

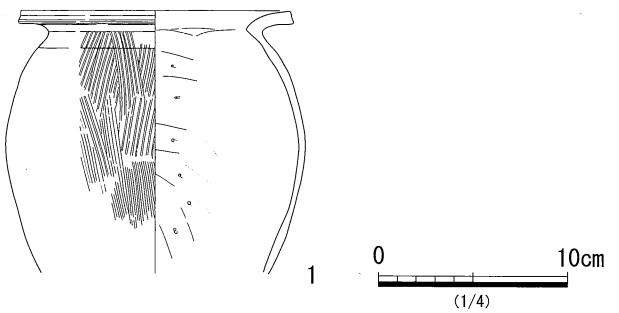
第 184 図　SP482(1/40) と出土遺物 (1/4)

り込まれている。埋土は下層が灰色シルト、暗灰黄色シルト、黒褐色シルト、灰オリーブ色シルトをブロック状に含む黒褐色から灰色のシルト質土であり(第183図6 ～ 8層)、埋め戻された状況を示す。上層は薄い層が重なる、あるいは炭化物をラミナ状に含む部分があるなど凹みに流入した堆積土とみられる。なお、遺物は出土していない。

SP482

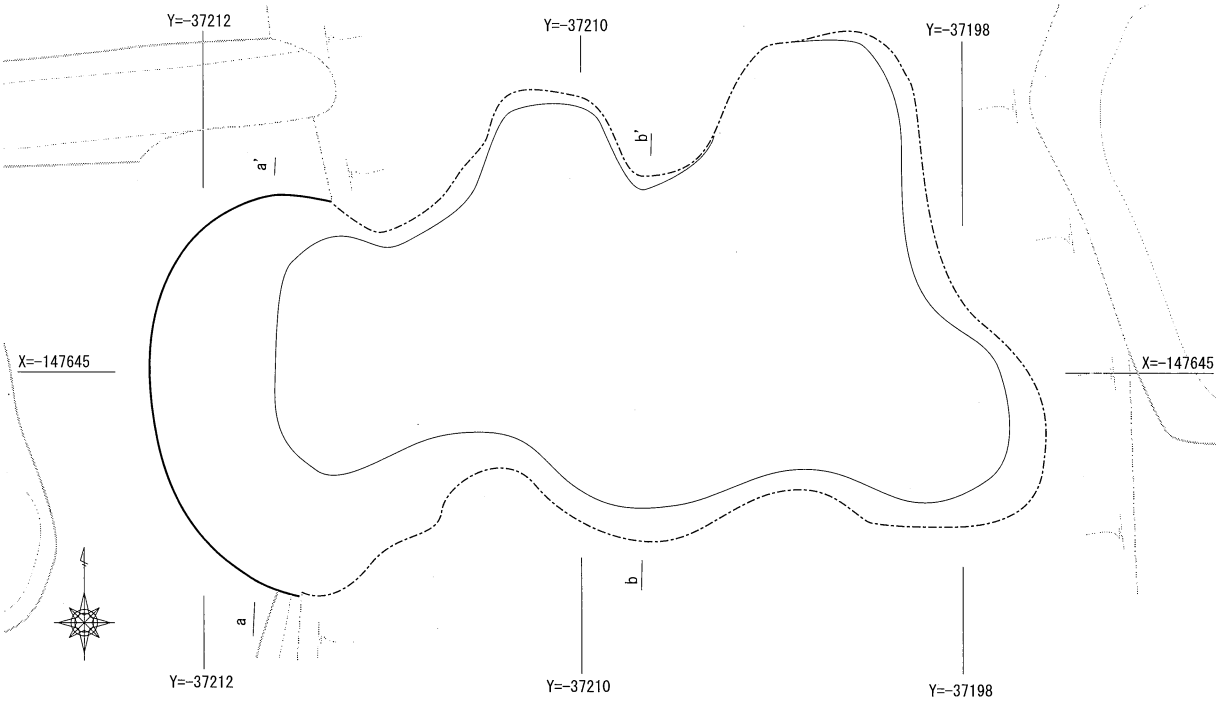
SP482は調査範囲のほぼ中央、X=-147645.5、Y=-37214.0付近に検出した、ほぼ楕円形の土坑である(第184図)。長径約2.5m、短径約1.9mを測り、底面は標高0.7m付近で検出面からほぼ垂直、または大きく下に拡がりながら約90cm掘り込まれている。埋土は下部が黄灰色シルト、黒褐色シルト、暗灰黄色シルトなどをブロック状に含む黒褐色から灰色のシルト質土、粘土シルトであり(第184図7 ～ 15層)、埋め戻された状況と見られる。上部は比較的薄い層が堆積しており、炭化物の薄層を含むなど流入土とみられる。

出土遺物は少なく、甕形土器(第184図1)と壺形土器の胴部破片が出土している。1は口縁部～胴部上半の破片で弥生時代後期前半、後期Ⅱに位置付けられる。



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
1	弥生土器	甕 口縁部～胴部	口径 11.3 最大径 15.9	1/2周程度の破片。外面縦方向のハケメ(10本程度/cm)。内面斜め方向のヘラケズリ。口縁部周辺ヨコナデ。	(胎土)3.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)にぶい黄橙(10YR7/1) (内面・断面)にぶい黄橙(10YR6/3)

第 185 図 SP483 出土遺物 (1/4)

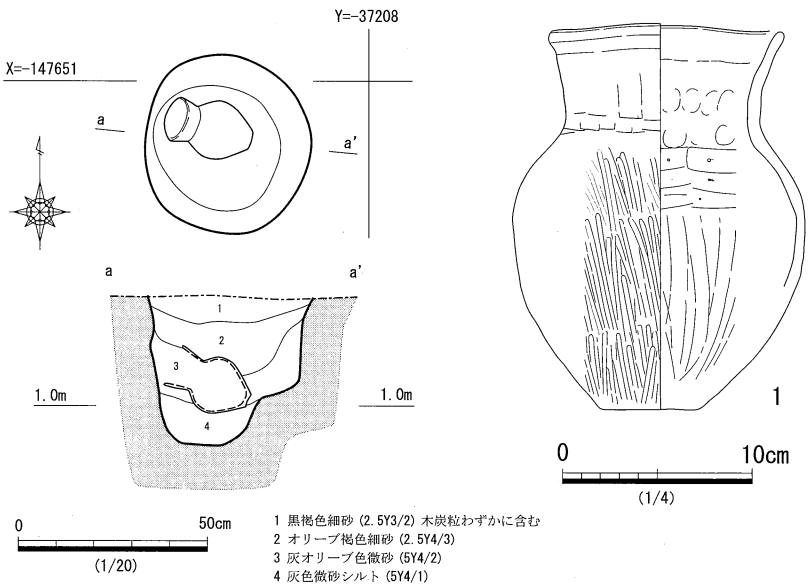


第 186 図　SP483（1/40）

SP483

SP483は調査範囲のほぼ中央部、X=-147645.0、Y=-37210.0付近に所在する不定形の大形土坑である（第186図）。大部分が上層のSD320、SD471に掘られており土坑の下部しか残っていないものの、長径約5m、短径約2mを測る。底は標高0.8m付近で、やはり急傾斜またはやや下に拡がりながら掘られているようである。

出土遺物は甕形土器が１点のみ出土している（第185図）。口縁部から胴部上半の1/2周程度の破片で、弥生時代後期前半（後期Ⅱ）



No.	種　類	器種・部位	法　量（cm）	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色　調
1	弥生土器	直口壺	口径　12.0 最大径　15.9 高さ　20.5	外面縦方向のヘラミガキ。内面下半部縦方向のヘラケズリ、同上半部横方向のヘラケズリ。頸部内面に指頭圧痕、口縁部周辺ヨコナデ。胴部に穿孔。	（胎土）2mm以下の砂粒を多く含む/（焼成）良好	（外面）灰白～灰黄（5Y7/1～2.5Y7/2）/（内面）浅黄（2.5Y7/3）

第 187 図　SP484（1/20）と出土遺物（1/4）

に位置付けられる。

SP484

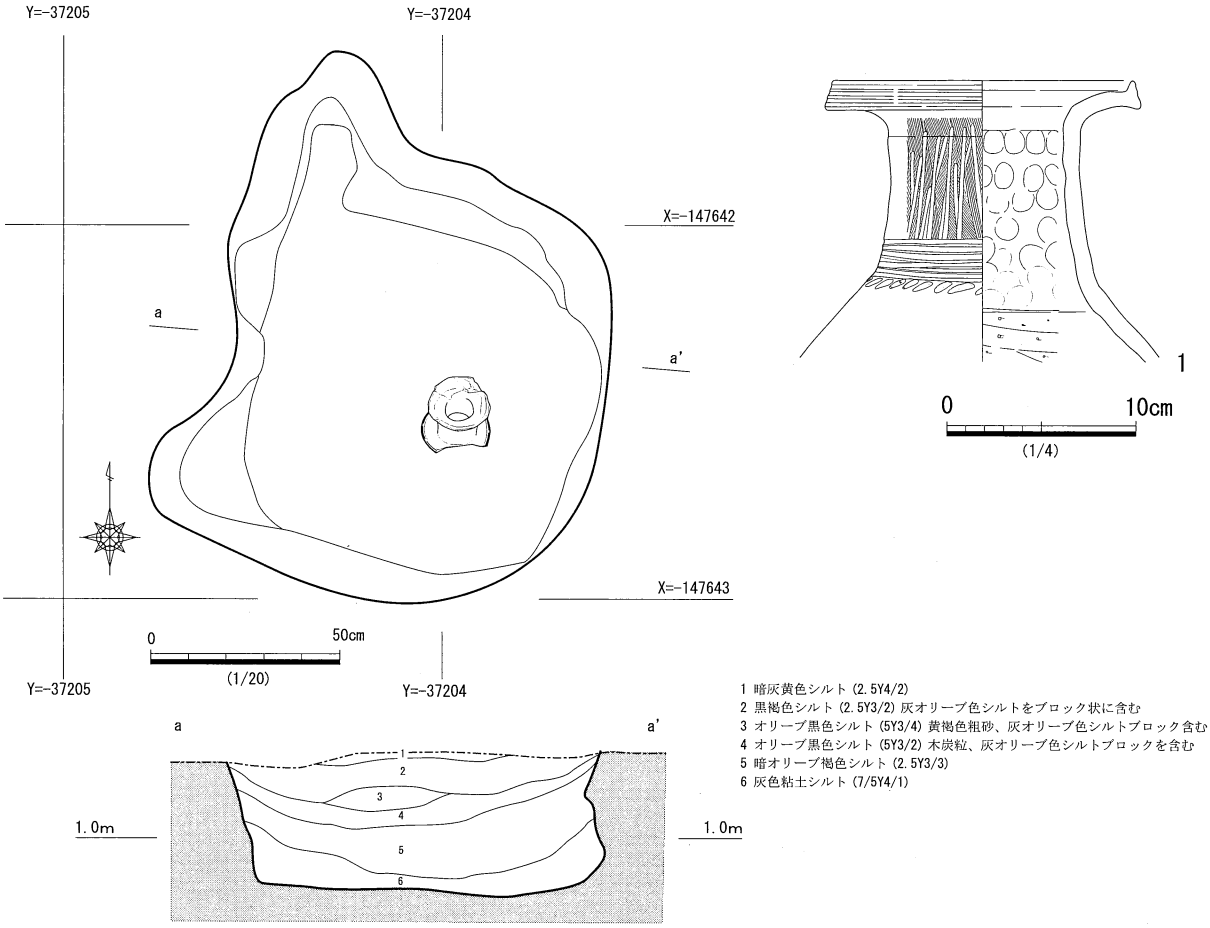
X=-147651.2、Y=-37208.4付近に所在する小形の土坑である(第187図)。上層のSD320の範囲にあたり、土坑上部は失われているようである。直径40～50cmを測り、底は標高0.9m付近である。内部に完形の壺形土器1点を入れていた。

この壺は口縁部がほぼ直立する直口壺で、胴部に焼成後の穿孔がある。胴部の中程から下部にかけ煤が付着しており、火にかけられて使用されたものと見られる。

SP484はほかの大形土坑と異なり、入れられた直口壺1点分程度の大きさしかないことから、土器埋納用の土坑とみられる。しかしながら、SD320などにより上部が失われているため、近接して存在するSP485、SP486などとともに大形土坑の底部の一部である可能性も捨てきれない。しかしながら、ほかの大形土坑の底部はほぼ平らであり、一方SP484、SP485はそれ自体40～60cmほどの深さがあり、その可能性は低いものと考えられる。

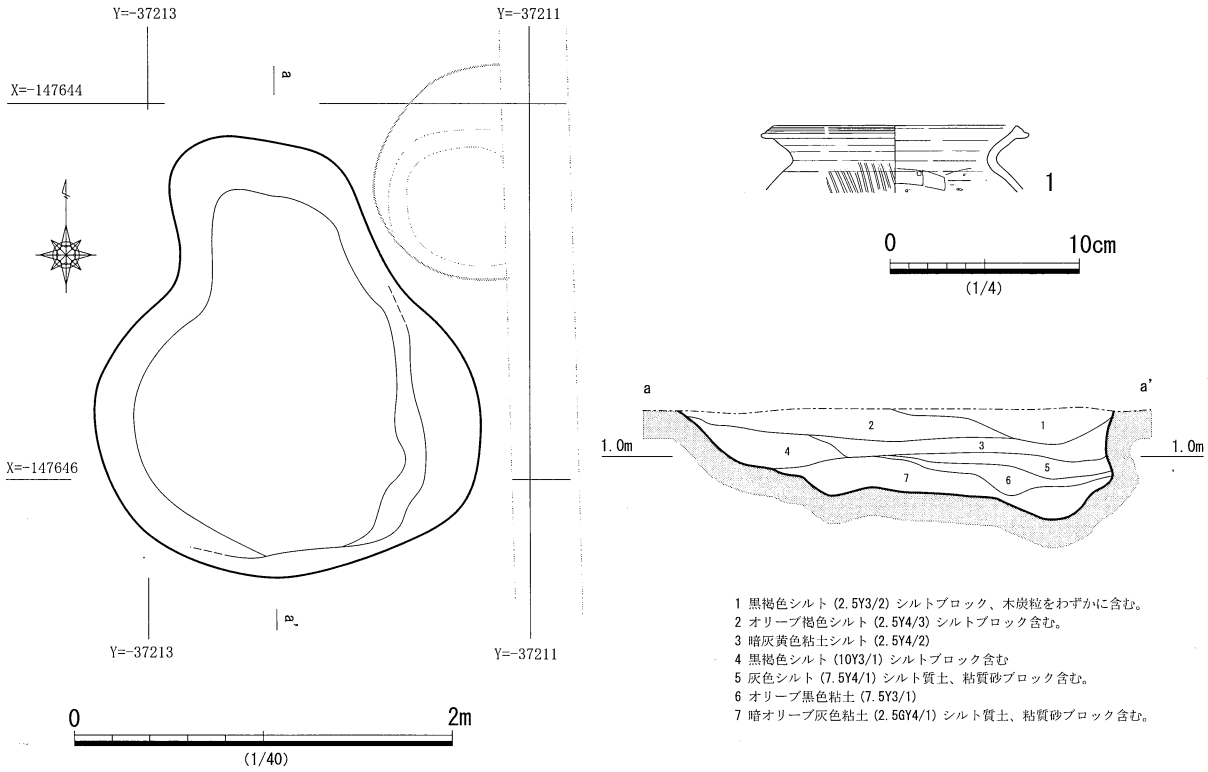
SP492

SP492は調査範囲北東部の谷状の低地部、X=-147642.5、Y=-37204.0付近に所在する不定形の土坑である(第188図)。南北約1.4m、東西約1.2mを測る。底面はほぼ平らで標高約0.85m、検出面(標高約



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
1	弥生土器	壺 口縁部～頸部	口径　15.9	口縁端部に3条、頸部下半に6条のヘラ描き沈線。胴部上端に櫛状工具による列点文。頸部外面縦方向のハケメ(13本程度/cm)の後ヘラミガキ。胴部内面横方向のヘラケズリ、頸部内面に指頭圧痕。口縁部周辺ヨコナデ。	(胎土)1.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(外面)灰白(2.5Y7/1) (内面)灰白(2.5Y7/1) (断面)灰白～灰(2.5Y7/1～5Y5/1)

第188図　SP492(1/20)と出土遺物(1/4)



No.	種 類	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
1	弥生土器	甕 口縁部～胴部	口径 (12.9)	2/5周程度の破片。外面縦方向のハケメ(4本程度/cm)。内面横方向のヘラケズリ。口縁部周辺ヨコナデ。	(胎土)2.5mm以下の砂粒を多く含む (焼成)良好	(内外面)にぶい黄橙(10YR7/2～7/3) (断面)にぶい黄橙～灰(10YR7/2～5Y6/1)

第 189 図　SP495(1/40) と出土遺物 (1/4)

1.2m)から垂直に近い傾斜で35cm程度掘り込まれている。埋土はおおむね黒褐色～オリーブ黒色のシルト質土で砂質土やシルト質土のブロックを含んでいる。

出土遺物は少なく、底面付近から大形の壺形土器片のほか甕形土器の小片が数点出土している(第188図1)。壺形土器は広口の長頸壺で口縁部～肩部付近の破片である。口縁部と頸部下部にヘラ描き沈線、胴部上端に櫛状工具による列点文を施す。弥生時代後期前半(後期Ⅱ)に位置付けられるものである。

SP495

SP495は調査範囲東部の谷状の低地部、X=-147645.0、Y=-37202.5付近に所在する不定形の土坑である(第189図)。南北約2.3m、東西約2.0mを測り、底は標高0.65 ～ 0.8m付近、検出面(標高1.25m付近)から40 ～ 60cmほど掘り込まれている。埋土はオリーブ灰色～黒褐色のシルト質土、粘質土で砂質土、シルト質土ブロックを含んでいる。

出土遺物は甕形土器などの小片が出土している。第189図1はそのうち口縁部の2/5周程度に復元できるものである。やはり弥生後期前半(後期Ⅱ)に位置付けられる。

なお、記述したもの以外のうちSP491、SP494、SP497などは底面のレベルが標高0.7 ～ 0.8m、垂直に近い傾斜で掘られていること、埋土の下部は埋め戻された土層の特徴、上部は流入した土層の特徴を持つこと、遺物などはほとんど含んでいないことなど記述してきた大形土坑と共通する。また、性格不明ながら、SP490、SP493、SP498など径0.5 ～ 1m程度の小形の土坑も存在する。

c）小結－大形土坑の性格－

第２次調査区で検出された大形土坑は、先述のとおり形態や埋土の特徴、底面のレベルなどで共通しており、同じ性格の土坑群ととらえられる。これらは下が拡がる形態や集落周辺の低位部に近い地点に存在することなど貯蔵穴に類似するが、内部には何も残されておらず、その可能性は低い。底面のレベルである標高0.7m付近が微高地基盤層が粘土質の部分（XⅧ-③～⑥層）から砂質の強い部分（XⅧ-⑦層）に変わる境界付近にあたっていることから、これらの土坑は粘土採掘坑と考えられる。

本調査地点の北約400mに所在する南方遺跡（広島高裁岡山支部・岡山地家簡裁庁舎地点）では粘土採掘坑とされる袋状土坑が233基検出されている(2)。これらの土坑は弥生時代後期後半（後期Ⅳ）を中心とする時期のもので、今回の調査で検出した土坑群（後期Ⅱ）より若干新しい時期のものである。これらは「不整円形、楕円状」の平面形、垂直に近い傾斜や下方が広くなる断面形態、平坦な底部、底面が特定のレベル（標高50～90cm）に集中すること、規模、土坑底面の土層が砂層となっていること、下層が人為的な埋め戻し土、上層が流入土という埋土の状況など本調査で検出した大形土坑に酷似している。また、径0.5～1m程度の小形の土坑についても同様に扱っている。なお、南方遺跡の調査者は同様の土坑が粘土採掘坑として報告されている例を挙げながらも、最終的には木製品の出土状況などをあげ「木器に関わる何らかの遺構」と推定している(3)。木製品は土坑の底面か最下層中、最下層上面から出土しており、「埋め戻し前か埋め戻し途中に廃棄もしくは何らかの意図を持って置かれたもの」と考えられている(4)。こうした木製品の出土状況が粘土採掘坑であることを疑問視する材料となるかは理解しがたいが、逆に、これらの木製品は掘り棒、鋤、鍬など掘削用具に集中しており、破損品などを廃棄したものと考えられ、粘土採掘坑のしかも「埋め戻し土」中から出土するものとして極めてふさわしいものといえる。また、下層が人為的な埋め戻し土、上層が流入土という埋土の状況も、掘削時に発生した残土を埋め戻し、残った凹みはそのまま放置されたことを示していると考えられる。このことは土坑が穴の形態として機能するものではなく、また掘削後は無用のものであったことを示しているとみられ、やはり粘土の採掘－掘るという行為が目的の土坑である可能性が高い。

注

(1)弥生土器の編年、時期区分の表記については岡山県教育委員会で使用されているものに準拠した。

江見正己 1980「時期区分について」（江見正己ほか 1980「百間川原尾島遺跡１」旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39　建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会

正岡睦夫 1995「時期区分について」（中野雅美ほか 1995「津寺遺跡２」山陽自動車道建設に伴う発掘調査10『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会）

(2)岡田 博・下澤公明・小松原基弘・水田貴士 2006「南方遺跡－広島高裁岡山支部・岡山地家簡裁庁舎建て替えに伴う調査－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査調査報告200』岡山県教育委員会

(3)下澤公明 2006「袋状土壙について」（注(2)文献）

(4)小松原基弘 2006「袋状土壙出土の木器について」（注(2)文献）

表２　岡山城三之外曲輪跡（第２次調査）検出遺構一覧

遺構番号	検出遺構面	位置 X	位置 Y	遺構の性格等	時期	遺構の先後関係	備考
基礎１	近現代	-147627.8	-37218.4	コンクリート基礎	明治30頃～	基礎１→基礎２	師範学校校舎基礎
		-147630.0	-37199.6				
基礎２	近現代	-147627.6	-37215.8	コンクリート基礎	明治44～	基礎１→基礎２	女子師範学校食堂基礎
		-147632.0	-37199.6				
基礎３	近現代	-147627.6	-37215.8	コンクリート基礎	明治44～		女子師範学校玄関基礎
		-147640.5	-37209.8				
基礎４	近現代	-147635.0	-37218.9	コンクリート基礎	明治44～		女子師範関連遺構？
基礎５	近現代	-147635.4	-37218.9	コンクリート・煉瓦基礎	戦後？		不明。戦後仮校舎基礎か
基礎６	近現代	-147642.5	-37224.3	杭列	明治44～		女子師範学校校舎基礎
		-147651.8	-37219.0				
基礎７	近現代	-147629.6	-37223.0	コンクリート基礎	明治44～		女子師範学校寄宿舎（梅舎）基礎
池状遺構	近現代	-147637.0	-37202.0	泉池	明治44～？		女子師範泉池
枡状遺構１	近現代	-147633.0	-37215.0	集水枡			女子師範関連遺構？。コンクリート製
枡状遺構２	近現代	-147633.0	-37217.6	集水枡？			女子師範関連遺構？。円礫を充填した方形土坑
枡状遺構３	近現代	-147635.0	-37223.0	集水枡	明治44～？	枡３→枡４→基礎５	女子師範関連遺構？。石組みの枡。備前焼風の陶製土管接続
枡状遺構４	近現代	-147635.0	-37224.0	集水枡		枡３→枡４→基礎５	女子師範関連遺構？。素掘り（石組みか？）の枡。陶製土管接続。
戦災ゴミ穴１	近現代	-147633.5	-37221.5	廃棄土坑	昭和23年頃？		電球、融解した板ガラス、ガラス瓶等多量
戦災ゴミ穴２	近現代	-147631.0	-37221.5	廃棄土坑	戦後		炭、灰、煉瓦
００１	近現代	-147629.5	-37202.0	不明土坑	近代（明治期）		
００２a	近世１	-147635.2	-37201.0	溝状遺構	近代（明治期）		近代遺構面から掘り込み？
００２b	近世１	-147635.0	-37210.0	溝状遺構	近代（明治期）		近代遺構面から掘り込み？
００２c	近世１	-147635.0	-37204.0	溝状遺構に伴う（?）土坑	近代（明治期）		近代遺構面から掘り込み？
００３	近世１	-147629.0	-37200.0	方形土坑	近代？	SP004→SP005→SP003	
００４	近世１	-147629.0	-37200.4	柱穴		SP004→SP005→SP003	
００５	近世１	-147628.4	-37201.0	不明		SP004→SP005→SP003	
００６	近世１	-147629.0	-37201.6	漆喰貼りの枡状遺構	近代？		
００７	近世１	-147632.4	-37200.4	礎石基礎C		SP013→SP007	
００８	近世１	-147628.6	-37203.0	廃棄土坑	18C後半以降	SE064→SP008	
００９	近世１	-147632.2	-37202.8	柱穴・礎石基礎?C		SP010→SP009	
０１０	近世１	-147632.2	-37203.2	礎石基礎A2		SP010→SP009	建物１？
０１１	近世１	-147633.2	-37202.8	礎石基礎C			
０１２	近世１	-147635.6	-37202.0	礎石跡?B2?			
０１３	近世１	-147632.6	-37201.2	礎石基礎A2	17C後半	SP013→SP007	建物1?
０１４	近世１	-147633.4	-37200.4	礎石跡B2		SP014→SP016	
０１５	近世１	-147633.6	-37199.4	柱穴？		SP015→SP017	
０１６	近世１	-147633.4	-37200.8	柱穴？		SP014→SP016	
０１７	近世１	-147633.2	-37199.4	柱穴？		SP015→SP017	
０１８							抹消
０１９							抹消
０２０	近世１	-147635.2	-37212.4	礎石基礎A1	17C後半		建物１
０２１	近世１	-147633.0	-37212.6	廃棄土坑（瓦だまり）	18C後半	SP081→SP080→SK021	
０２２	近世１	-147632.6	-37214.0	植樹痕？			
０２３	近世１	-147633.0	-37214.2	礎石跡B1			
０２４	近世１	-147632.4	-37215.4	礎石基礎?C			
０２５	近世１	-147633.4	-37215.2	礎石跡B1			
０２６	近世１	-147635.6	-37215.0	礎石跡B1			
０２７	近世１	-147635.4	-37215.0	礎石跡B1			
０２８	近世１	-147636.4	-37214.8	礎石跡A3orB1			
０２９	近世１	-147636.2	-37213.8	不明土坑C?			
０３０	近世１	-147636.0	-37213.0	礎石跡B1			
０３１	近世１	-147636.6	-37212.4	礎石基礎A1	17C後半	SP031→SP085→(SX089)	建物１
０３２	近世１	-147636.8	-37210.4	礎石基礎A2	17C後半	SP032→SP085･SP086→(SX089)	建物１
０３３	近世１	-147637.8	-37210.6	礎石基礎A4			
０３４	近世１	-147637.8	-37209.2	礎石B?		SP094→SP034	
０３５	近世１	-147638.0	-37211.2	礎石基礎？			
０３６	近世１	-147637.8	-37211.8	礎石基礎?B1			
０３７	近世１	-147638.2	-37212.4	礎石基礎A1		SP090･SP092→SP037	建物１
０３８	近世１	-147639.4	-37214.2	柱穴・杭跡			
０３９	近世１	-147638.2	-37214.0	造成土？			円礫集中。SX101などと関連？。
０４０	近世１	-147638.2	-37214.6	礎石基礎A3orB1			
０４１	近世１	-147637.8	-37214.2	礎石跡B2			
０４２	近世１	-147638.6	-37215.0	礎石跡			
０４３	近世１	-147637.6	-37215.2	礎石基礎A3?			
０４４	近世１	-147636.8	-37216.2	礎石跡B1			
０４５	近世１	-147635.4	-37216.0	礎石跡B1			
０４６	近世１	-147636.4	-37216.8	礎石跡B1			
０４７	近世１	-147634.0	-37216.8	礎石跡B2			
０４８							抹消
０４９	近世１	-147638.0	-37208.2	礎石（縁東石?）	17C後半		建物1?
０５０	近世１	-147637.2	-37206.8	礎石基礎A2	17C後半		建物１
０５１	近世１	-147637.2	-37206.2	柱穴・杭跡			
０５２	近世１	-147637.2	-37205.4	柱穴・杭跡			
０５３	近世１	-147637.0	-37204.2	柱穴・杭跡			
０５４							SP116に統合
０５５	近世１	-147634.0	-37207.4	不明土坑C?	19C前半？		
０５６	近世１	-147632.6	-37207.4	柱穴・杭跡？			
０５７	近世１	-147632.0	-37209.0	礎石基礎A2	17C後半		建物１
０５８	近世１	-147632.4	-37206.2	礎石基礎A2?	17C後半		建物1?
０５９	近世１	-147632.4	-37205.2	礎石基礎A2oC			
０６０	近世１	-147631.2	-37209.2	礎石基礎A3?		SP060→SP061	建物1?
０６１	近世１	-147631.0	-37208.8	礎石跡B2		SP060→SP061	SP060の礎石抜け跡？
０６２	近世１	-147630.2	-37209.0	礎石基礎A2	17C後半	SP062(?)→SP063	建物1?
０６３	近世１	-147630.4	-37208.4	柱穴？		SP062(?)･SP065→SP063	
０６４	近世１	-147630.0	-37205.0	井戸	19C?	SE064→SP008	
０６５	近世１	-147630.4	-37208.2	礎石跡?B2		SP065→SP063	
０６６	近世１	-147630.6	-37207.8	柱穴・杭跡			
０６７							抹消
０６８	近世１	-147633.2	-37209.2	礎石基礎B3			

検出遺構一覧

遺構番号	検出遺構面	位置		遺構の性格等	時期	遺構の先後関係	備考
		X	Y				
０６９	近世１	-147630.2	-37211.4	不明土坑			
０７０	近世１	-147629.0	-37211.8	礎石基礎 ?C			
０７１	近世１	-147629.0	-37212.8	礎石基礎 A3		SP073 → SP071	
０７２	近世１	-147627.8	-37213.0	不明		SP073 → SP072	
０７３	近世１	-147628.4	-37212.8	柱穴？		SP073 → SP071･SP072	
０７４	近世１	-147629.6	-37214.4	不明土坑？			SK204 の一部？
０７５	近世１	-147628.4	-37214.6	礎石跡 ?B2			
０７６	近世１	-147628.6	-37216.6	礎石跡			
０７７	近世１	-147632.2	-37217.0	礎石跡 B2		SP077 → SP078	
０７８	近世１	-147632.4	-37216.8	杭跡？		SP077 → SP078	
０７９	近世１	-147633.0	-37216.4	礎石跡 ?B2			
０８０	近世１	-147633.2	-37211.6	柱穴？		SP081 → SP080 → SK021	
０８１	近世１	-147633.4	-37212.2	礎石基礎 A1	17C 後半	SP081 → SP080 → SK021	建物 1
０８２	近世１	-147634.6	-37216.6	柱穴・杭跡			
０８３	近世１	-147635.8	-37211.2	礎石基礎 ?C?			
０８４	近世１	-147636.0	-37211.6	礎石跡 B1			
０８５	近世１	-147636.6	-37211.2	礎石基礎 ?C		SP031･SP032 → SP085	
０８６	近世１	-147636.8	-37209.8	礎石基礎 ?C		SP032･SP087 → SP086	
０８７	近世１	-147636.8	-37209.2	礎石基礎 A3		SP088 → SP087 → SP086	
０８８	近世１	-147636.8	-37208.4	礎石基礎 A2	17C 後半	SP088 → SP087 → SP086	建物 1
０８９	近世１	-147636.6	-37210.0	Pit 埋土の切り合いか			
０９０	近世１	-147637.6	-37212.4	礎石・礎石基礎 A3			SP037 → SP090
０９１	近世１	-147637.4	-37211.2	不明小 Pit			
０９２	近世１	-147638.2	-37213.0	不明			
０９３	近世１	-147639.0	-37213.6	不明			
０９４	近世１	-147638.4	-37209.4	礎石・礎石基礎 A2?	17C 後半	SP094 → SP034	建物 1
０９５	近世１	-147630.4	-37202.6	礎石基礎 ?C	19C 前半		
０９６	近世１	-147631.6	-37201.6	溝状遺構			縁石等の据え方か
０９７							抹消
０９８	近世１	-147633.2	-37207.6	樹木痕跡？			
０９９	近世１	-147633.0	-37208.0	樹木痕跡？			
１００	近世１	-147633.6	-37207.6	礎石			
１０１	近世１	-147636.0	-37215.6	造成土？			円礫集中
１０２	近世１	-147633.4	-37204.6	柱穴			
１０３	近世１	-147633.4	-37204.0				SP148 の一部
１０４	近世１	-147633.8	-37203.4	礎石基礎 ?C			
１０５	近世１	-147634.0	-37203.8	柱穴・杭跡			
１０６	近世１						SP116 に統合
１０７	近世１	-147636.4	-37202.0	石材据え方？			
１０８	近世１	-147637.4	-37205.6	礎石（縁束石？）	17C 後半		建物 1?
１０９	近世１	-147637.2	-37202.2	礎石（縁束石？）	17C 後半		建物 1?
１１０		-147637.4	-37199.2				抹消
１１１	近世１	-147636.0	-37198.6	不明石材			
１１２	近世１	-147634.2	-37203.2	礎石？			
１１３	近世１	-147636.2	-37210.0	柱穴？			
１１４	近世１	-147635.6	-37212.4	礎石跡？			
１１５	近世１	-147636.4	-37205.4	礎石（縁束石？）	17C 後半		建物 1?
１１６	近世１	-147636.4	-37206.4	植樹痕？			
１１７	近世１	-147636.2	-37205.4	礎石	17C 後半		建物 1？
１１８	近世２	-147637.4	-37201.0	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１１９	近世２	-147637.0	-37200.4	礎石跡 ?B2			
１２０	近世２	-147635.6	-37199.4	礎石基礎 A1	17C 後半		建物 1
１２１	近世２	-147636.8	-37201.8	礎石跡 ?B2		SP128 → SP121 → SX107	
１２２	近世２	-147635.6	-37202.0	礎石基礎 A1	17C 後半	SP122 → SX107	建物 1
１２３	近世２	-147635.6	-37203.0	礎石跡 B2			
１２４	近世２	-147636.4	-37203.4	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１２５	近世２	-147637.4	-37203.4	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１２６	近世２	-147637.8	-37204.6	礎石跡 ?C		SP127 → SP126	
１２７	近世２	-147637.8	-37204.2	礎石跡 ?C		SP127 → SP126	
１２８	近世２	-147636.4	-37201.3	礎石基礎 A2	17C 後半	SP128 → SP121 → SX107	建物 1
１２９	近世２	-147636.6	-37207.0	柱穴		SP050 → SP129	
１３０	近世２	-147636.8	-37207.4	柱穴？			
１３１	近世２	-147637.0	-37208.0	礎石跡 ?B2			くぼみ？
１３２	近世２	-147635.0	-37206.4	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１３３	近世２	-147635.0	-37205.5	柱穴？		SP134 → SP133	
１３４	近世２	-147634.9	-37205.8	柱穴？		SP134 → SP133	
１３５	近世２	-147634.5	-37204.7	礎石基礎 B3?		SP136 → SP135	
１３６	近世２	-147634.3	-37204.4	礎石跡 C		SP136 → SP135	
１３７	近世２	-147634.6	-37203.4	礎石跡 B2			
１３８	近世２	-147635.0	-37202.5	礎石基礎 ?C		SP138 → SP209	
１３９	近世２	-147634.6	-37201.4	柱穴？		SP140 → SP139	
１４０	近世２	-147634.8	-37201.0	礎石基礎 ?C		SP140 → SP139	
１４１	近世２	-147634.6	-37199.2	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１４２	近世２	-147637.3	-37208.0	杭跡			
１４３	近世２	-147632.6	-37199.2	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１４４	近世２	-147630.6	-37199.0	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１４５	近世２	-147633.6	-37201.5	礎石跡 ?B2			
１４６	近世２	-147633.6	-37202.6	礎石跡 B2			
１４７	近世２	-147632.9	-37203.4	礎石跡 ?B2			
１４８	近世２	-147633.4	-37204.0	柱穴？			
１４９	近世２	-147631.6	-37201.4	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１５０	近世２	-147631.6	-37203.1	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1
１５１	近世２	-147631.4	-37204.0	礎石基礎 A2	17C 後半	SP212 → SP151	建物 1
１５２	近世２	-147629.6	-37201.5	礎石跡 ?C		SP210 → SP152 → SP006･SD153	
１５３	近世２	-147629.5	-37201.3	溝状遺構		SP210 → SP152 → SP006･SD153	SP006 に付属？
１５４	近世２	-147628.0	-37201.4	瓦だまり		SP154 → SP211	
１５５	近世２	-147627.4	-37200.1	礎石基礎 ?A2?	17C 後半	SP156 → SP155	建物 1?
１５６	近世２	-147627.4	-37200.6	礎石基礎 ?C?		SP156 → SP155	
１５７	近世２	-147633.4	-37206.4	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1。撹乱坑わきにわずかに残存

遺構番号	検出遺構面	位置 X	位置 Y	遺構の性格等	時期	遺構の先後関係	備考
１５８	近世２	-147636.6	-37211.5	杭跡？			
１５９	近世２	-147635.7	-37211.2	杭跡？			
１６０	近世２	-147637.6	-37213.5	杭跡？			
１６１	近世２	-147635.4	-37213.9	杭跡？			
１６２	近世２	-147633.8	-37213.9	杭跡・柱穴？			
１６３	近世２	-147635.8	-37215.3	杭跡？			
１６４	近世２	-147633.5	-37213.8	杭跡？			
１６５	近世２	-147633.1	-37213.8	杭跡？			
１６６	近世２	-147632.4	-37213.5	杭跡？			
１６７	近世２	-147633.4	-37211.1	杭跡？			
１６８	近世２	-147632.5	-37211.3	杭跡？			
１６９	近世２	-147633.4	-37208.1	柱穴？			
１７０	近世２	-147632.2	-37208.4	樹木痕跡？			
１７１	近世２	-147639.0	-37204.6	不明		SP317 → SP171 → SP316	
１７２	近世２	-147639.6	-37209.4	礎石跡 ?B3?			
１７３	近世２	-147639.7	-37210.2	礎石跡 ?B2?			
１７４	近世２	-147639.7	-37211.6	礎石跡 ?B2?			
１７５	近世２	-147640.0	-37215.0	礎石跡 ?B3?			
１７６	近世１?	-147640.0	-37221.0	廃棄土坑？			一部、基礎掘方と一緒に掘削。中段に瓦を敷く。
１７７	近世２	-147633.7	-37217.3	礎石跡 ?B1			
１７８	近世２						
１７９～１８９欠番							
１９０	近世２	-147632.2	-37208.3	不明			
１９１	近世２	-147632.0	-37212.2	礎石基礎 A1	17C 後半		建物 1
１９２	近世２	-147631.0	-37211.0	浅いくぼみ B2?			
１９３	近世２	-147631.0	-37212.8	礎石基礎 ?C			
１９４	近世２	-147631.2	-37215.0	溝状遺構			区画石列掘方・抜き跡？
１９５	近世２	-147631.4	-37214.4	礎石跡 ?C			
１９６	近世２	-147631.4	-37215.4	礎石跡 ?B2			
１９７	近世２	-147631.0	-37216.5	礎石跡 ?B2			
１９８	近世１	-147631.6	-37217.2	柱穴？			
１９９	近世１	-147632.8	-37217.4	礎石跡 ?B2			
２００	近世２	-147635.0	-37216.0	礫敷き道路			
２０１	近世２	-147630.1	-37216.5	礎石跡 ?B2			
２０２	近世２	-147628.3	-37216.1	礎石跡 ?B2			
２０３	近世２	-147628.5	-37213.1	礎石跡 ?B2?		SP217 → SP203	SP217 の一部か
２０４	近世２	-147629.0	-37214.2	不明土坑			
２０５	近世２	-147630.2	-37212.4	礎石跡 ?B2?		SP206 → SP205	
２０６	近世２	-147630.0	-37211.9	礎石基礎 A2	17C 後半	SP206 → SP205	建物 1
２０７	近世２	-147634.0	-37214.6	溝状遺構			SX200 に伴う溝、もしくは縁石据え方か
２０８	近世２	-147632.4	-37204.0	礎石基礎 A2	17C 後半		建物 1?
２０９	近世２	-147630.7	-37217.3	礎石跡 ?B2			
２１０	近世２	-147629.6	-37202.0	柱穴？			
２１１	近世２	-147628.4	-37201.7	礎石・礎石基礎 A3?		SP154 → SP211	
２１２	近世２	-147630.8	-37204.0	礎石跡 ?B2		SP212 → SP151	
２１３	近世２	-147629.4	-37200.5	柱穴？			
２１４	近世１	-147628.4	-37198.9	くぼみ			壁面では周囲に同様の土層が広がる。薄い砂層をラミナ状に含む自然堆積層
２１５	近世２	-147628.2	-37199.2	礎石跡 ?B2			
２１６	近世２	-147631.1	-37215.5	柱穴			
２１７	近世２	-147628.4	-37212.8	柱穴？		SP217 → SP203	
２１８	近世２	-147631.6	-37216.0	杭跡？			
２１９	近世２	-147631.3	-37211.3	杭跡？			
２２０							抹消
２２１	近世２	-147639.0	-37213.6	瓦だまり			
２２２							抹消
２２３	近世２	-147628.7	-37213.7	柱穴			
２２４	近世２	-147631.7	-37214.7	礎石跡 ?C			
２２５	近世２	-147628.5	-37212.0	礎石基礎	17C 後半		建物 1
２２６	近世２	-147636.2	-37207.8	柱穴？			
２２７	近世１	-147627.8	-37219.1	瓦だまり			
２２８	近世１	-147627.8	-37218.0	礎石基礎 ?A2orA3			
２２９	近世１	-147630.1	-37217.7	礎石跡 ?B2			
２３０	近世１	-147630.4	-37217.8	礎石跡 ?B2?			
２３１	近世１	-147631.0	-37217.6	礎石跡 ?B2?			
２３２	近世１	-147631.2	-37219.1	礎石跡 ?B2			
２３３	近世１	-147632.1	-37219.0	礎石跡 ?B2			
２３４	近世１	-147632.2	-37218.4	柱穴？			
２３５	近世１	-147633.5	-37217.6	礎石跡 ?B2			
２３６	近世１	-147635.9	-37218.5	柱穴？			
２３７	近世１	-147636.8	-37218.8	礎石跡 ?B1			
２３８	近世１	-147635.9	-37218.9	礎石跡 ?B1			
２３９	近世１	-147635.2	-37218.9	礎石跡 ?B2			
２４０	近世２	-147634.0 -147629.0	-37218.0 -37217.7	側溝石材抜き方	17C 後半	SD242 → SD241・SD240	SX200 に伴う道路側溝。
２４１	近世２	-147634.0 -147629.0	-37218.8 -37218.5	側溝石材抜き方	17C 後半	SD242 → SD241・SD240	SX200 に伴う道路側溝。
２４２	近世２	-147637.0 -147629.0	-37218.5 -37218.0	道路側溝	17C 後半	SD242 → SD241・SD240	SX200 に伴う道路側溝。
２４３	近世２	-147632.2	-37218.8	柱穴？			
２４４	近世２?	-147630.8	-37218.7	柱穴？			
２４５	近世２?	-147639.3	-37220.5	溝状遺構			
２４６	近世２	-147639.9	-37224.2	礎石跡 ?B2?			
２４７	近世２	-147631.5	-37218.5	柱穴			
２４８							欠番
２４９							欠番
２５０	近世１・２	-147651.5	-37223.6	廃棄土坑	19C 前半		
２５１	近世１・２	-147652.5	-37222.0	廃棄土坑（瓦だまり）	18C 後半		
２５２							セクションの観察から SP251 と同一。

検出遺構一覧

遺構番号	検出遺構面	位置 X	位置 Y	遺構の性格等	時期	遺構の先後関係	備考
２５３							抹消
２５４	近世１・２	-147652.2	-37223.8	不明			
２５５	近世１・２	-147654.0	-37217.0	井戸	18 世紀前半？		
２５６	近世１・２	-147651.2	-37221.9	不明			
２５７	近世１・２	-147645.3	-37223.7	瓦だまり（溝状遺構）			
２５８	近世１・２	-147645.7	-37222.6	不明			
２５９	近世１・２	-147646.3	-37221.6	不明			
２６０	近世１・２	-147645.6	-37218.2	不明			
２６１	近世１・２	-147646.0	-37219.0	不明			
２６２	近世１・２	-147653.9	-37212.0	不明			
２６３	（近世１・２）	-147653.1	-37211.3	便槽	明治 44 ～	女子師範学校便槽	昭和 16 ～ 17 年銘の十銭銀貨等出土
２６４	近世１・２	-147653.3	-37210.8	不明土坑			
２６５	近世１・２	-147652.3	-37211.4	柱穴？			
２６６	近世１・２	-147653.0	-37209.5	溝状遺構	18C 後半		
２６７	近世１・２	-147650.3	-37208.0	溝状遺構			
２６８	近世１・２	-147646.4	-37217.6	柱穴？			
２６９	近世１・２	-147646.1	-37217.6	柱穴？			
２７０	近世１・２	-147645.4	-37206.8	石列（掘方）	17C 後半		
		-147645.0	-37213.5				
２７１	近世１・２	-147653.2	-37218.5	柱穴（柱痕跡）		SE255 → SP271	掘方 (?) は SE255 埋土か ?SE255 に伴う柱か？
２７２	近世１・２	-147653.2	-37220.2	柱穴・杭跡		SE255 → SP272	
２７３							抹消
２７４	近世１・２	-147652.4	-37205.6	不明土坑		SP275 → SP274	
２７５	近世１・２	-147653.2	-37206.2	不明土坑	17C 後半？	SP275 → SP274	
２７６	近世１・２	-147652.5	-37204.5	柱穴？	19C 前半		
２７７	近世１・２	-147653.2	-37205.1	柱穴？			
２７８	近世１・２	-147653.3	-37202.8	柱穴？		SP279 → SP278	
２７９	近世１・２	-147653.1	-37203.1	柱穴？		SP279 → SP278	
２８０	近世１・２	-147653.0	-37201.2	柱穴？			
２８１	近世１・２	-147653.2	-37200.0	柱穴？			
２８２	近世１・２	-147645.0	-37206.0	柱穴？		SP289 → SP282	
２８３	近世１・２	-147645.0	-37204.0	廃棄土坑	18C 末～ 19C 初		スナメリ出土
２８４	近世１・２	-147645.0	-37200.0	廃棄土坑	19C 前半		
２８５	近世１・２	-147644.3	-37200.2	柱穴？			
２８６	近世１・２	-147644.0	-37201.2	杭跡？			
２８７	近世１・２	-147645.5	-37216.9	柱穴？			
２８８	近世１・２	-147652.2	-37203.7	柱穴？			
２８９	近世１・２	-147645.0	-37206.4	柱穴？		SP289 → SP282	
２９０	近世１・２	-147646.1	-37212.4	甕埋設	19C 前半		甕内にネコの骨
２９１	近世３？	-147650.0	-37217.5	廃棄土坑	17C 前半	SE292 → SP291 → SE255	西校舎基礎内から検出
２９２	近世３？	-147648.6	-37216.7	井戸	17C 前半	SE292 → SP291	西校舎基礎内から検出
２９３	近世１・２	-147645.7	-37223.0	造成土？			
２９４	近世１・２	-147649.0	-37203.6	不明土坑	19C 前半	SP313 → SP283	
２９５	近世１・２	-147642.0	-37222.8	不明		SP250･SP251 → SP295	
２９６	近世１・２	-147652.4	-37210.6	礎石？			
２９７	近世１・２	-147654.0	-37208.3	柱穴？			
２９８	近世１・２	-147651.0	-37210.4	不明			
２９９	近世１・２	-147649.0	-37213.0	柱穴	17C 後半？		柱穴列
３００	近世１・２	-147649.6	-37212.8	柱穴	17C 後半？		柱穴列
３０１	近世１・２	-147650.0	-37212.6	柱穴	17C 後半？		柱穴列
３０２	近世１・２	-147651.0	-37212.3	柱穴	17C 後半？		柱穴列
３０３	近世１・２	-147652.0	-37211.9	柱穴	17C 後半？		柱穴列
３０４	近世１・２	-147652.4	-37211.9	柱穴？			
３０５	近世１・２	-147652.9	-37211.5	柱穴	17C 後半？		柱穴列
３０６	近世１・２	-147653.4	-37211.5	柱穴？			
３０７	近世１・２	-147653.9	-37211.2	柱穴	17C 後半？		柱穴列
３０８	近世１・２	-147651.8	-37210.7	不明			
３０９	近世１・２	-147645.0	-37209.0	便槽？	18C 後半		底に桶とみられる木質。
３１０	近世１・２	-147644.7	-37207.7	柱穴？			
３１１	近世１・２	-147644.5	-37207.3	柱穴？			
３１２	近世１・２	-147644.0	-37208.2	柱穴？			
３１３	近世１・２	-147644.0	-37203.8	不明土坑		SP313 → SP283	
３１４	近世１・２	-147643.8	-37203.5	柱穴？			
３１５	近世１・２	-147645.6	-37214.3	柱穴	17C 後半？	柱穴列	
３１６	近世２	-147639.8	-37204.2	不明土坑		SP317 → SP171 → SP316	
３１７	近世２	-147639.0	-37205.4	礎石基礎 ?C?		SP317 → SP171 → SP316	
３１８	近世２	-147638.8	-37206.7	礎石基礎 A?		建物１？	
３１９	近世２	-147639.8	-37205.7	柱穴			
３２０	近世３	-147640.0	-37210.0	溝状遺構	17C 前半		
		-147651.6	-37210.0				
３２１	近世３	-147645.2	-37212.5	溝状遺構	17C 前半	SD321 → SD320（上層）	SD320 下層に合流？
		-147645.6	-37224.4				
３２２	近世３	-147646.4	-37214.4	溝状遺構	17C 前半	SD322 → SD321	
３２３	近世３	-147647.0	-37216.8	溝状遺構		SD323 → SD321	
３２４	近世３	-147647.0	-37217.5	溝状遺構	17C 前半	SD324 → SD321	
３２５	近世３	-147645.0	-37219.5	柱穴？		SD321 → SP325	
３２６	近世３	-147646.1	-37219.9	不明	17C 前半	SP326 → SD321	
３２７	近世３	-147646.6	-37220.6	不明		SP327 → SP328	
３２８	近世３	-147646.2	-37221.0	不明	17C 前半	SD321 → SP328	
３２９	近世３	-147646.2	-37221.7	不明		SD321･SP328 → SP329	
３３０	近世３	-147647.0	-37224.3	柱穴	17C 前半		
３３１	近世３	-147648.5	-37222.0	溝状遺構？			
３３２	近世３	-147650.5	-37221.0	溝状遺構	17C 前半		
		-147650.5	-37224.2				
３３３	近世１・２	-147655.4	-37224.5	井戸		SP334 → SE333	石組み井戸。大部分は調査区外
３３４	近世３	-147653.4	-37224.0	井戸？	17C 初頭？	SP334 → SE333	埋土上層に炉壁多量。
３３５	近世３	-147655.0	-37223.0	溝状遺構	17C 前半	SP334 に付属？	
３３６	近世３	-147652.3	-37202.1	柱穴	17C 前半		
３３７	近世３	-147653.2	-37199.9	柱穴	17C 前半		